

千葉東金道路（二期）埋蔵文化財調査報告書 3

－山武町小川崎台遺跡－

平成11年3月

日本道路公団

財団法人 千葉県文化財センター

千葉東金道路（二期）埋蔵文化財調査報告書 3

—山武町小川崎台遺跡—





3号墳出土人物埴輪



3号墳出土円筒・形象埴輪

序 文

財団法人千葉県文化財センターは、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立され、以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

この度、千葉県文化財センター調査報告第362集として、日本道路公団の千葉東金道路（二期）の開発事業に伴って実施した山武郡山武町小川崎台遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、古墳から埴輪が多数出土するなど、この地域の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。

この報告書が学術資料として、また埋蔵文化財の保護に対する理解を深めるための資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々を始めとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成11年3月31日

財団法人千葉県文化財センター
理 事 長 中 村 好 成

凡　　例

- 1 本書は、日本道路公団による千葉東金道路（二期）建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書の第3冊目である。
- 2 本書に収録した遺跡は、千葉県山武郡山武町戸田字小川崎台851に所在する小川崎台遺跡（遺跡コード405-004）である。
- 3 発掘調査から報告書作成に至る業務は、日本道路公団の委託を受け、財團法人千葉県文化財センターが実施した。
- 4 発掘調査及び整理作業の組織、担当者及び実施期間は、第1章に記載した。
- 5 本書の執筆は、技師 永塚俊司が第2章、第3章の石器、第7章1を担当し、その他は技師 黒沢 崇が担当した。
- 6 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁生涯学習部文化課、日本道路公団、山武町教育委員会ほか多くの方々から御指導、御協力を得た。また、特に埴輪については埴輪研究会の方々、中世陶磁器については国立歴史民俗博物館助教授小野正敏氏に御教示いただいた。
- 7 本書で使用した地形図は、下記のとおりである。
 - 第1図 国土地理院発行 1/50,000地形図「東金」(NI-54-19-11)
 - 第5図 国土地理院発行 1/25,000地形図「成東」(NI-54-19-11-1)
- 8 周辺航空写真は、京葉測量株式会社による昭和42年に撮影のものを使用した。
- 9 本書で使用した図面の方針は、すべて座標北である。

本文目次

第1章 はじめに	1
第1節 調査の概要	1
第2節 調査の方法	4
第3節 遺跡の位置と環境	7
第2章 旧石器時代	10
第1節 層位	10
第2節 石材名称と母岩分類について	10
第3節 石器集中地点	12
第3章 繩文時代	27
第1節 遺構	27
第2節 遺物	29
第4章 弥生時代	31
第1節 遺物	31
第5章 古墳時代	34
第1節 古墳の位置関係	34
第2節 1号墳	34
第3節 2号墳	44
第4節 3号墳	50
第5節 4号墳	138
第6節 竪穴住居跡	140
第6章 中・近世	143
第1節 遺構	143
第2節 遺物	148
第7章 まとめ	154
第1節 旧石器時代	154
第2節 繩文時代	154
第3節 弥生時代	154
第4節 古墳時代	155
第5節 中・近世	169
報告書抄録	卷末

挿図目次

第1図 東金道路二期路線図	1	第26図 1号墳主体部	42
第2図 遺跡周辺地形図	3	第27図 1号墳副葬品	43
第3図 グリッド設定図	4	第28図 2号墳平面図・断面図	44
第4図 遺構配置図	5	第29図 2号墳旧表土面平面図・投影図、 出土遺物	45
第5図 周辺の遺跡	8		
第6図 下層調査区と石器集中地点	11	第30図 2号墳1号主体部・副葬品	47
第7図 石器集中1 石器出土分布図 と出土石器	14	第31図 2号墳2号主体部・副葬品	49
第8図 石器集中2 石器出土分布図 と出土石器	15	第32図 2号墳3号主体部・墳丘外土坑	50
第9図 石器集中3 石器出土分布図 (器種別)と主要石器集合	16	第33図 3号墳平面図・断面図	51
第10図 石器集中3 石器出土分布図 (石材別)と主要母岩集合	17	第34図 3号墳	53
第11図 石器集中3 出土石器(1)	18	第35図 3号墳旧表土面平面図・投影図	54
第12図 石器集中3 出土石器(2)	19	第36図 3号墳出土土器	55
第13図 石器集中3 出土石器(3)	20	第37図 3号墳1号主体部・副葬品	57
第14図 石器集中4 石器出土分布図 (器種別)	21	第38図 3号墳2・3号主体部	58
第15図 石器集中4 出土石器	22	第39図 北側埴輪列出土状況	59
第16図 石器集中地点外 出土石器	23	第40図 3号墳グリッド分割図	61
第17図 跪穴	28	第41図 基部を含む円筒・朝顔形埴輪	
第18図 繩文時代 土器	29	第42図 出土位置図	62
第19図 繩文時代 石器	30	第43図 基部を含まない円筒・朝顔形埴輪	
第20図 弥生時代 土器	33	第44図 出土位置図	63
第21図 1号墳平面図・断面図	34	第45図 南側くびれ部埴輪列出土状況	64
第22図 1・2号墳	35	第46図 円筒埴輪(1)	65
第23図 1号墳旧表土面平面図・投影図	36	第47図 円筒埴輪(2)	66
第24図 1号墳出土遺物(1)	38	第48図 円筒埴輪(3)	67
第25図 1号墳出土遺物(2)	39	第49図 円筒埴輪(4)	68
		第50図 円筒埴輪(5)	69
		第51図 円筒埴輪(6)	70
		第52図 円筒埴輪(7)	71
		第53図 円筒埴輪(8)	72
		第54図 円筒埴輪(9)	73

第53図	円筒埴輪（10）	74	第86図	馬形埴輪B－2	121
第54図	円筒埴輪（11）	75	第87図	馬形埴輪C－1	122
第55図	円筒埴輪（12）	76	第88図	馬形埴輪C－2	123
第56図	円筒埴輪（13）	77	第89図	馬形埴輪破片	124
第57図	円筒埴輪（14）	78	第90図	馬形埴輪出土位置図	125
第58図	円筒埴輪（15）	79	第91図	鳥形埴輪1	127
第59図	円筒埴輪（16）	80	第92図	鳥形埴輪2	129
第60図	円筒埴輪（17）	81	第93図	鳥形埴輪3・4・5・6・7	131
第61図	円筒埴輪（18）	82	第94図	鳥形埴輪出土位置図	132
第62図	円筒埴輪（19）	83	第95図	家形埴輪出土位置図	133
第63図	円筒埴輪（20）	84	第96図	家形埴輪A－1	134
第64図	円筒埴輪（21）	85	第97図	家形埴輪A－2	135
第65図	円筒埴輪（22）	86	第98図	家形埴輪B－1	136
第66図	朝顔形埴輪（1）	87	第99図	家形埴輪B－2	137
第67図	朝顔形埴輪（2）	88	第100図	4号墳平面図・断面図	138
第68図	朝顔形埴輪（3）	89	第101図	4号墳	139
第69図	埴輪凡例	91	第102図	4号墳周溝内主体部	140
第70図	人物埴輪出土位置図	98	第103図	S I 01	140
第71図	人物埴輪1－1	100	第104図	南側斜面造構配置図	141
第72図	人物埴輪1－2	101	第105図	S B 01	143
第73図	人物埴輪2	102	第106図	S K	145
第74図	人物埴輪3	103	第107図	S D・S X（1）	146
第75図	人物埴輪4・5	105	第108図	S D・S X（2）	147
第76図	人物埴輪6・7	106	第109図	中・近世遺物	149
第77図	人物埴輪8・9	108	第110図	石製品	151
第78図	人物埴輪10・11・12	109	第111図	古銭	153
第79図	人物埴輪13・14	111	第112図	小川崎台1・2・3号墳の副葬品	157
第80図	人物埴輪破片（1）	113	第113図	3号墳復原図	161
第81図	人物埴輪破片（2）	115	第114図	埴輪の高さの比較	162
第82図	人物埴輪破片（3）	117	第115図	円筒埴輪の底径と1段高	164
第83図	馬形埴輪A－1	118	第116図	殿部田1号墳と	
第84図	馬形埴輪A－2	119		小川崎台3号墳の比較	167
第85図	馬形埴輪B－1	120			

表 目 次

第1表 石器集中1	石材と器種組成	24	第16表	円筒・朝顔形埴輪観察表(2)-2	95
第2表 石器集中2	石材と器種組成	24	第17表	円筒・朝顔形埴輪観察表(3)-1	96
第3表 石器集中3	石材と器種組成	24	第18表	円筒・朝顔形埴輪観察表(3)-2	97
第4表 石器集中4	石材と器種組成	24	第19表	人物埴輪観察表	112
第5表 石器集中1	石器観察表	25	第20表	人物埴輪破片帰属表	116
第6表 石器集中2	石器観察表	25	第21表	馬形埴輪破片帰属表	126
第7表 石器集中3	石器観察表	25	第22表	馬形埴輪観察表	126
第8表 石器集中4	石器観察表	25	第23表	鳥形埴輪観察表	130
第9表 石器集中地点外	石器観察表	25	第24表	家形埴輪観察表	137
第10表 繩文時代	石器観察表	29	第25表	石製品計測表	152
第11表	1号墳旧表土面出土土師器観察表	40	第26表	古銭計測表	152
第12表	2号墳1号主体部出土玉観察表	46	第27表	円筒埴輪分類表	165
第13表	円筒・朝顔形埴輪観察表(1)-1	92	第28表	殿部田1号墳・小川崎台3号墳出土	
第14表	円筒・朝顔形埴輪観察表(1)-2	93		円筒埴輪計測表	166
第15表	円筒・朝顔形埴輪観察表(2)-1	94			

図版目次

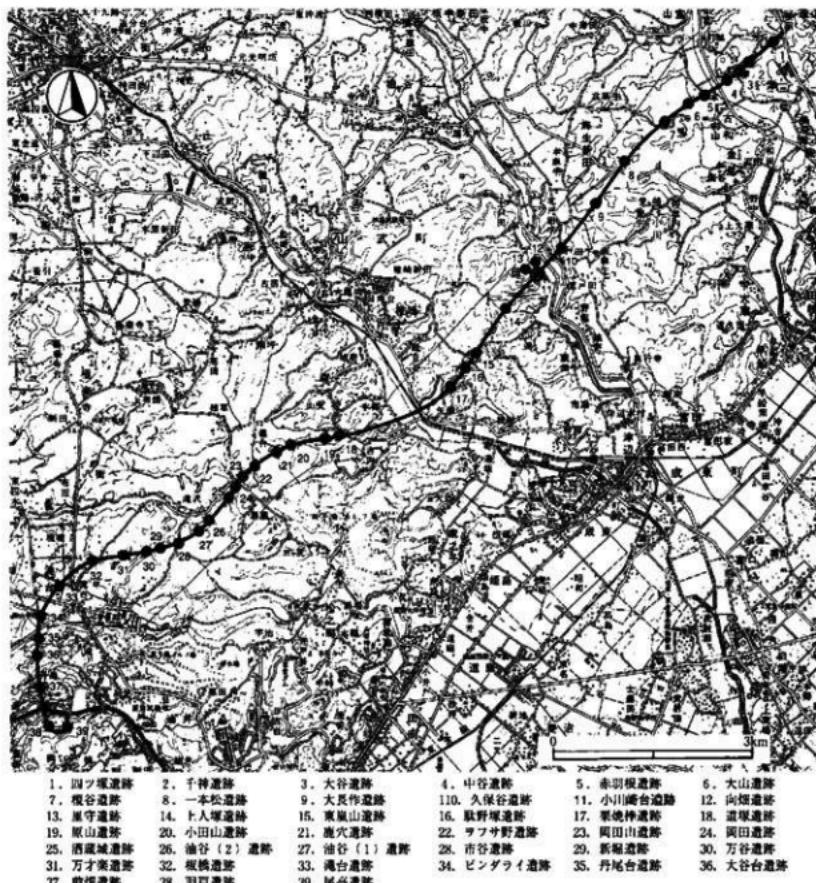
卷頭図版1	3号墳出土人物埴輪	土状況・1号主体部・2号主体部
卷頭図版2	3号墳出土円筒・形象埴輪	図版8 3号墳全景・セクション
図版1	周辺航空写真	図版9 3号墳後円部・くびれ部・埴輪出土状況・
図版2	遺跡遠景・調査区全景・調査区北地区	1号主体部・2号主体部・3号主体部
図版3	調査区南地区・台地整形部分	図版10 3号墳くびれ部埴輪出土状況・馬形埴輪出土状況・人物埴輪出土状況・家形埴輪出土状況・旧表土面焼土、炭化材分布状況
図版4	石器集中1・2・3・4	
図版5	1号墳・東西セクション・旧表土面遺物出土状況	図版11 4号墳・南北セクション・S K01・S K02・
図版6	1号墳主体部・掘り方・2号墳墳丘外土坑	S K03
図版7	2号墳南北セクション・旧表土面炭化物出	図版12 S K04・S K05・S K06・S K07・S K08・

S K09・S K10・S K11・S K12・S K13	図版32 円筒埴輪（8）
図版13 S K15・S K16・S K17・S K18・S K19・ S K20・S K21・S K22	図版33 円筒埴輪（9） 図版34 円筒埴輪（10）・朝顔形埴輪（1）
図版14 S I01・S D01・S D02・S D03・S D04・ S D05・S D06・S D07	図版35 朝顔形埴輪（2） 図版36 円筒埴輪各部分
図版15 旧石器（1）	図版37 人物埴輪（1）
図版16 旧石器（2）	図版38 人物埴輪（2）
図版17 旧石器（3）	図版39 人物埴輪（3）
図版18 繩文石器・繩文土器	図版40 人物埴輪（4）
図版19 弥生土器（1）	図版41 人物埴輪（5）
図版20 弥生土器（2）・玉類・須恵器	図版42 人物埴輪破片（1）
図版21 1号墳鉄器・2号墳鉄器	図版43 人物埴輪破片（2）
図版22 3号墳鉄器・石製品	図版44 人物埴輪破片（3）
図版23 土師器（1）	図版45 馬形埴輪A
図版24 土師器（2）	図版46 馬形埴輪B
図版25 円筒埴輪（1）	図版47 馬形埴輪C
図版26 円筒埴輪（2）	図版48 馬形埴輪破片
図版27 円筒埴輪（3）	図版49 鳥形埴輪（1）
図版28 円筒埴輪（4）	図版50 鳥形埴輪（2）・家形埴輪A
図版29 円筒埴輪（5）	図版51 家形埴輪B
図版30 円筒埴輪（6）	図版52 中・近世遺物（1）
図版31 円筒埴輪（7）	図版53 中・近世遺物（2）

第1章 はじめに

第1節 調査の概要（第1・2図）

日本道路公団は、東金市山田台まで開通していた千葉東金道路の延伸を計画し、松尾町谷津まで約16kmの千葉東金道路（二期）の建設を決定した。道路建設工事に当たり、区域内に所在する埋蔵文化財の有無と取扱いについて千葉県教育委員会に照会した結果、区域内には39か所の遺跡があることが判明した。その取扱いについては、事業計画の変更が困難なため、記録保存の措置を講ずることとなり、調査は財團法人千葉県文化財センターに委託された。



第1図 東金道路二期路線図

小川崎台遺跡の発掘調査は、平成5年7月から開始され、平成7年3月までに調査対象面積6,500m²の調査を終了した。調査の結果、旧石器時代の石器集中地点4か所、縄文時代の陥穴9基、古墳時代の竪穴住居跡1軒、古墳4基、中世の台地整形、土壘、溝、土坑等の遺構を検出することができた。特に前方後円墳である3号墳において遺存の良好な埴輪列を検出し、全国的に見ても貴重な資料を得ることができた。

翌、平成7年度から整理作業が開始され、平成10年度をもって報告書刊行の運びとなった。

発掘調査及び整理作業に係る各年度の組織、担当職員及び作業内容は、下記のとおりである。

平成5年度

期 間	平成5年7月1日～平成6年3月31日
組 織	調査研究部長 高木博彦、成田調査事務所長 矢戸三男 担当職員 副所長 豊田佳伸、主任技師 永沼律朗
内 容	発掘調査 確認調査上層48m ² 下層32m ²

平成6年度

期 間	平成6年4月1日～平成7年3月22日
組 織	調査研究部長 西山太郎、成田調査事務所長 矢戸三男 担当職員 主任技師 鈴木文雄、萩原恭一、平野雅一、矢本節朗
内 容	発掘調査 確認調査上層650m ² 下層260m ² 、本調査上層2,300m ² 下層460m ²

平成7年度

期 間	平成7年4月1日～平成8年3月31日
組 織	調査研究部長 西山太郎、成田調査事務所長 石田廣美 担当職員 主任技師 萩原恭一
内 容	整理作業 記録整理から実測の一部まで

平成8年度

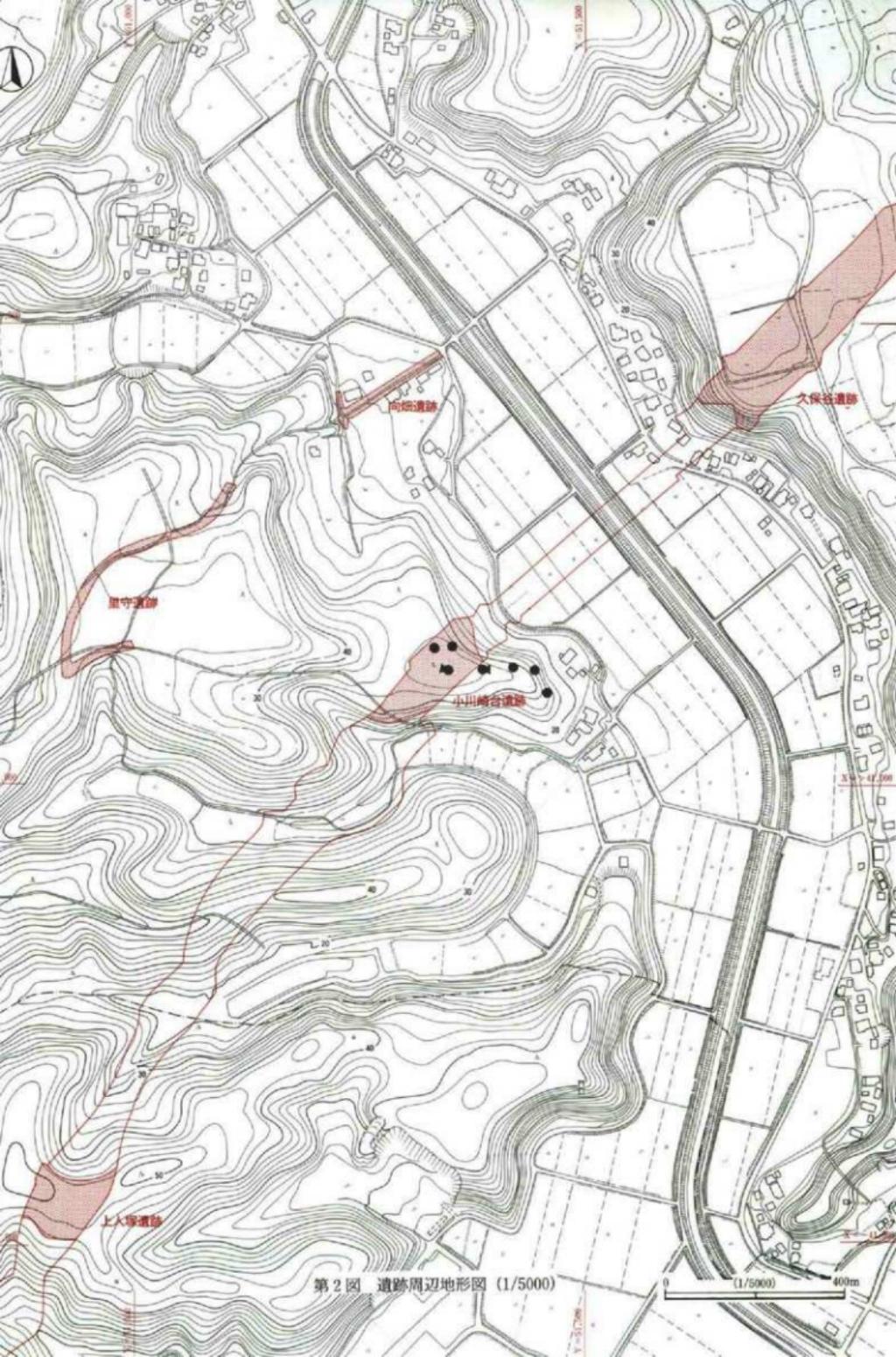
期 間	平成8年4月1日～平成9年3月31日
組 織	調査部長 西山太郎、東部調査事務所長 石田廣美 担当職員 主任技師 糸川道行
内 容	整理作業 実測の一部

平成9年度

期 間	平成9年4月1日～平成9年10月30日、平成10年1月5日～平成10年3月31日
組 織	調査部長 西山太郎、東部調査事務所長 石田廣美 担当職員 技師 黒沢 崇
内 容	整理作業 実測の一部から原稿の一部まで

平成10年度

期 間	平成10年4月1日～平成10年7月31日
組 織	調査部長 沼澤 豊 東部調査事務所長 三浦和信 担当職員 技師 黒沢 崇、永塚俊司
内 容	整理作業 原稿の一部から刊行まで



第2図 遺跡周辺地形図 (1/5000)

(1/5000)

400m

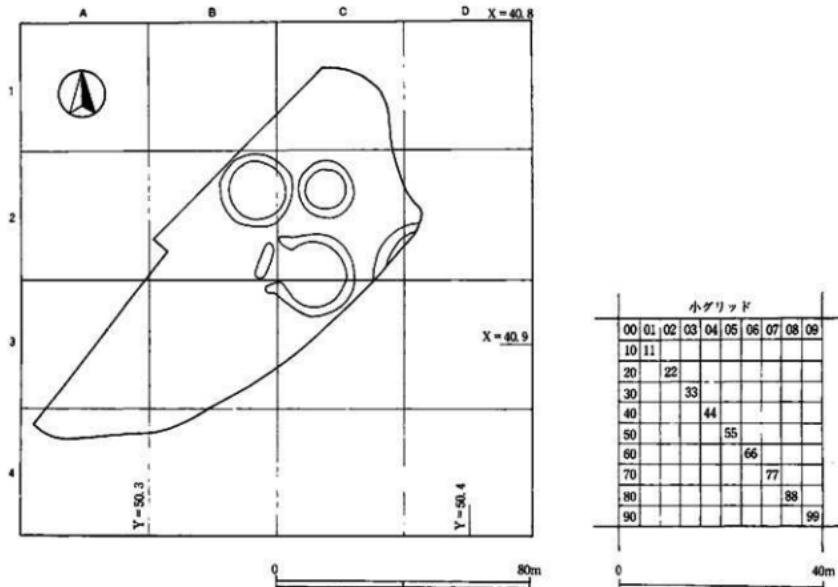
第2節 調査の方法（第3・4図）

調査対象範囲全域に、公共座標に合わせて東西南北に40m×40mの方眼網を設定し、大グリッドとした。大グリッドの呼称法は、北西に起点を置いて、北から南に1、2、3、……とし、西から東へA、B、C……として、これを組み合わせて使用した。大グリッド内には4m×4mに100分割の小グリッドを設定し、北西隅を起点に00、01、02……として南西隅を99とする。グリッド名はこれにより、大グリッドと小グリッドを組み合わせて、B8-34のように表示することにした。

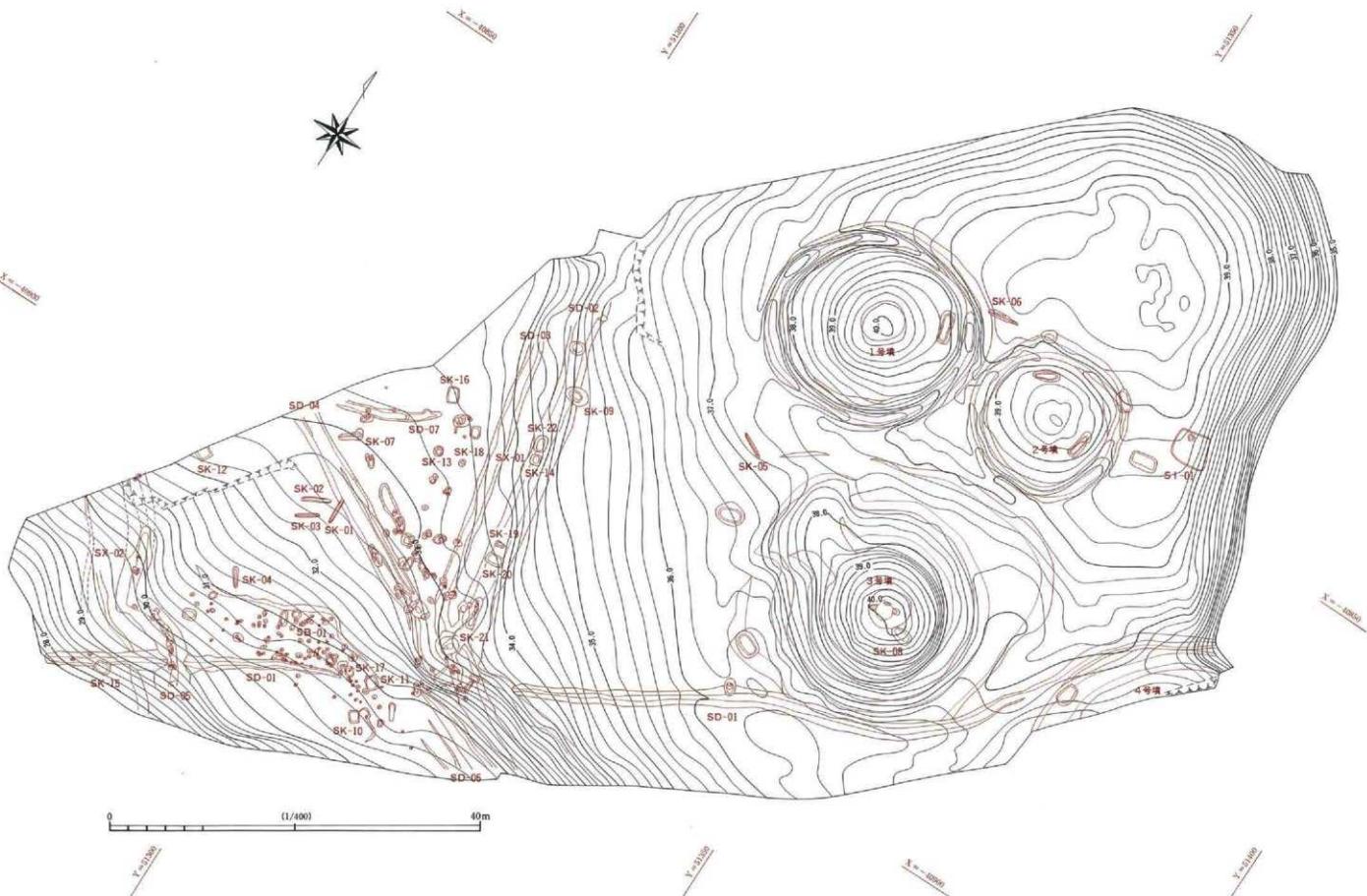
平成5年度には調査対象範囲内の古墳周辺の包蔵地の一次確認調査（調査対象面積の1%）と1号墳・2号墳・4号墳の周溝の本調査を行った。その結果、上層では溝状遺構が確認され、下層では石器が出土し、古墳以外にも遺構の存在が明らかとなった。

平成6年度には二次確認調査を行った。上層の確認調査では、調査対象面積の10%にトレーナーを設定し、南側斜面を中心にして遺構の分布を確認することができた。遺物は、弥生土器、埴輪、土師器、須恵器、陶磁器、古鏡が出土した。下層の確認調査は、調査区全域に均等に2m×2mのグリッドを調査対象面積の4%に設定して行った。その結果、5か所のグリッドから石器（フレイク）が17点出土した。

確認調査の結果をうけて上層は南側斜面を中心に2,300m²、下層は確認グリッドの周辺で遺物出土分布の広がりを確認することのできた4か所について本調査を行うことになった。



第3図 グリッド設定図



第4図 造構配置図

遺構記号として古墳と台地整形部を除く遺構に、遺構番号の頭に遺構の種別を示す記号を付した。S Iは竪穴住居跡、S Kは土坑、S Dは溝状遺構、S Bは掘立柱建物跡、S Xは土壘を示している。したがって、文中では S I 06、S K 04などのように表記している。

整理の段階で編集の都合上、土坑の調査時における遺構番号を次のように変更した。土壘には、調査時に遺構番号が付されていなかったため、S D 02と S D 03に位置する土壘を S X 01、S D 05の西に位置する土壘を S X 02と新たに遺構番号を付した。

調査番号	報告番号	調査番号	報告番号	調査番号	報告番号	調査番号	報告番号
S K 20	S K 01	S K 18	S K 07	S K 17	S K 13	S K 16	S K 18
S K 21	S K 02	S K 01	S K 08	S K 06	S K 14	S K 07	S K 19
S K 22	S K 03	S K 03	S K 09	S K 13	S K 15	S K 08	S K 20
S K 23	S K 04	S K 11	S K 10	S K 19	S K 16	S K 04	S K 21
S K 02	S K 05	S K 10	S K 11	S K 12	S K 17	S K 05	S K 22
S K 15	S K 06	S K 14	S K 12				

第3節 遺跡の位置と環境（第5図）

小川崎台遺跡は、千葉県山武郡山武町戸田字小川崎台851に所在する。境川西岸に位置し、同川の開析谷に突出する標高38m前後の小さな舌状台地上に広がっている。本遺跡には前方後円墳2基、円墳5基の古墳群が含まれている。

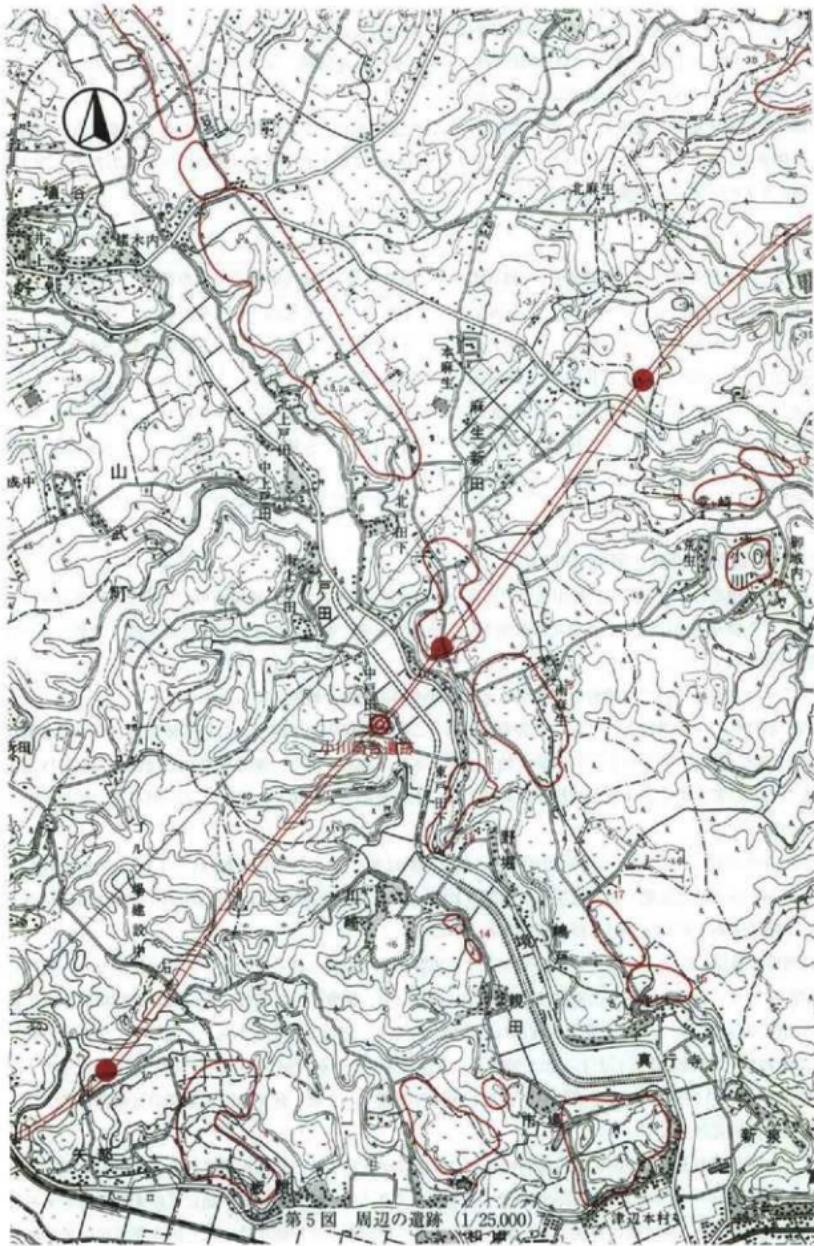
ここでは、境川流域で本遺跡に關係する主な時期の周辺遺跡を概観しておきたい。

旧石器時代の主な遺跡としては、千葉東金道路（二期）路線内の遺跡である栗焼棒遺跡（1）・久保谷遺跡（2）・一本松遺跡（3）において、石器集中地点が検出されている。特に、栗焼棒遺跡ではVII層下部～IX層上部を中心に石器の集中が4地点で検出されている。主な遺物として楔形石器、ナイフ形石器、彫刻刀形石器が出土している。

弥生時代の遺跡としては、この周辺で発掘された事例は多くない。板附古墳群（4）の1号墳の発掘に際し、墳丘下から弥生時代後期の竪穴住居跡が確認されている¹⁾。真行寺廃寺（15）の発掘では、金堂南基壇付近から弥生時代後期の竪穴住居跡2軒が確認されている²⁾。

古墳時代後期になると、境川を望む台地上に古墳群が多く造営される。特に、東岸にはかなりの数の古墳が群在する。北から、埴谷古墳群（5）、諸木内古墳群（6）、胡摩手台古墳群（7）、根崎古墳群（8）、麻生新田古墳群（9）がある。しかし、発掘調査された古墳は少なく、詳細は不明である。その中で、胡摩手台16号墳は、1994年に発掘調査が行われ、出土遺物から6世紀末～7世紀初頭に位置付けられている³⁾。また、胡摩手台9号墳と11号墳、埴谷古墳群中の2基と根崎古墳群中の2基、麻生新田古墳群の経塚古墳では、埴輪の樹立が確認されている。

本遺跡の南、作田川の北岸にも古墳時代後期の古墳群が存在する。和田古墳群（10）、市場古墳群（11）、板附古墳群（4）がそれである。板附古墳群は、谷を挟み大きく北と南に分かれ、北には終末期古墳である一辺60mの方墳の駄ノ塚古墳が存在する。駄ノ塚古墳は、1985年から1988年にかけて国立歴史民俗博物館に



第5図 周辺の遺跡 (1/25,000) / Fig. 5 Archaeological sites in the vicinity (1/25,000)

より発掘調査が行われ、7世紀初頭の年代が与えられている⁴⁾。また、南には大型の前方後円墳である不動塚古墳、西ノ台古墳が存在する。西ノ台古墳には、埴輪の樹立が確認されている。

千葉東金道路（二期）路線内の久保谷遺跡（2）、一本松遺跡（3）でも、古墳時代後期の円墳の発掘調査が行われている。木戸川西岸の台地先端に位置する大塚古墳群（12）は、円墳13基で構成され、径80mを越える大円墳である姫塚が存在する。

横穴群としては本遺跡の北東に金尾横穴群（13）、南東には、親田北・南横穴群（14）が存在する。金尾横穴群は台地傾斜面に位置し、13基の横穴で構成されている。

古墳時代以降も引き続き、真行寺廃寺、小川廃寺、嶋戸東遺跡など多くの遺跡が存在する。真行寺廃寺（15）は、発掘調査が行われ、基壇が検出されている。紀寺系の瓦が出土し、創建年代は、7世紀末と考えられている。小川廃寺（16）は、木戸川の支流をのぞむ台地上に位置し、瓦の出土が知られている。嶋戸東遺跡（17）は、1997年に発掘調査が行われ、掘立柱建物跡や基壇が検出されている。武射郡衙の可能性が強く、今後の調査により遺跡範囲も拡大すると考えられる⁵⁾。

中世の遺跡としては戸田城跡（18）、複郭式の台上館跡である小川館跡（19）、戦国時代末期の城で小規模ながらよく整備された丘陵式城郭の津辺城跡（20）などが挙げられる。

このように小川崎台遺跡周辺では各時代にわたり遺跡が存在するが、特に古墳時代後期から終末にかけての重要な遺跡が多いことが分かる。

注

- 1 平岡和夫・松井義郎 1975 『板附古墳群』 山武考古学研究所
- 2 沼沢 豊 1982 『成東町真行寺廃寺跡確認調査報告』 千葉県教育委員会
沼沢 豊 1983 『成東町真行寺廃寺跡研究調査概報』 財團法人 千葉県文化財センター
- 天野 努 1984 『成東町真行寺廃寺跡研究調査報告』 財團法人 千葉県文化財センター
- 谷川章雄 1985 『成東町真行寺廃寺跡発掘調査報告－鍛冶工房址の調査－』 成東町教育委員会
- 3 萩原恭一 1995 『山武町胡摩手台16号墳発掘調査報告書』 財團法人 千葉県文化財センター
- 4 白石太一郎 1996 『千葉県成東町駄ノ塚古墳発掘調査報告』 『国立歴史民俗博物館研究報告第65集』
- 5 小林信一 1998 『成東町嶋戸東遺跡発掘調査報告書』 千葉県教育委員会

第2章 旧石器時代

第1節 層位

立川ローム層の土層断面図は、各石器集中地点の本調査範囲の一方に対して記録してある。断面図作成方向は、石器集中2と石器集中3周辺の土層はほぼ水平堆積であるが、石器集中1と石器集中4周辺では、斜面堆積である。斜面堆積土層では、AT包含層であるVI層を観察することが困難で、ソフト化したIII層の直下にVII層又はIX層の堆積が見られる。第1黒色帯(V層)は本遺跡では識別できなかったため、便宜的に、III層と、AT包含層(VI層)の中間土層をIV～V層とした。

II b	層	茶褐色土 新期テフラ層
II c	層	黒褐色土
III	層	黄褐色土 ソフトローム
IV～V	層	暗黄褐色土 第1黒色帯に相当する。V層は識別できない。
VI	層	明黄褐色土 AT(姶良丹沢火山灰)包含層
VII	層	明黄褐色土 第2黒色帯上半部。VI層よりATの包含量は少なく、色調もやや暗い。
IX a～c	層	暗黄褐色土 第2黒色帯下半部。本遺跡では、石器集中4で間層(IXb層)を確認できるが、その他の地点では明確に分層できない。IXa層は径1mm～1.2mmの赤色、黒色スコリヤをやや多く含む。IXb層は、両層に比べやや明るい。IXc層は、もっとも暗色化が進んでおり、径0.5mm～1.0mmの赤色・黒色スコリヤを含む。
X	層	暗黄褐色土 IXc層よりもやや明るい。立川ローム最下層。
X I	層	灰色砂質粘土 武藏野ローム最上層。

第2節 石材名称と母岩分類について

石材名称については視覚的判断によっているが、同一石材名であっても全く異なる特徴をもつものが存在する。本報告では、安山岩と珪質頁岩については石材名の後にアルファベットを付し、以下のように分類を行った。両石材については近年、石材原産地の推定について多くの新知見がもたらされていることからも、石材分類をするに当たり以下のようない分類を試みた。

安山岩A・B……安山岩Aの風化剝離面は暗灰色を、新鮮な剝離面は黒色を呈する資料で、しばしば原裸面には爪形の裂痕が観察される。多くは拳大の円礫を素材として用いている。いわゆる黒色緻密質安山岩¹⁾・ガラス質黒色安山岩²⁾と称されているものである。現在までのところ、その産地には大洗海岸、久慈川・那珂川・利根川流域、箱根周辺、栃木県西部の武子川・姿川流域等が確認されている³⁾。安山岩Bの風化剝離面は明灰色を、新鮮な剝離面は黒色を呈する資料で、風化が著しく剝離面の縁の多くはつぶれてしまつて不明瞭となっている。いわゆるトロトロ石と称されているものである。

珪質頁岩A・B……珪質頁岩Aは、褐色から茶色を呈する資料で、日本海側の女川層に産すると思われる資料が含まれる。いわゆるチョコレート頁岩と称されているものである。珪質頁岩Bの原裸面は黄土色を、剝離面は青灰色～緑灰色を呈する。チャートに類似し、分類の困難な資料もある。この中には、嶺岡産の



第6図 下層調査区と石器集中地点

珪質頁岩も含まれているようである。

母岩分類については、接合資料を基本とし、同一母岩と判断される複数の資料について細分を行う。細分できた資料には石材名の後にアラビア数字を付した。アラビア数字を付していない資料は、単独母岩か、分類不能の資料である。明らかに単独母岩と考えられる資料については、備考欄に「単独母岩」と記した。

第3節 石器集中地点

旧石器時代の石器集中地点は小規模ながら4地点検出することができた（第6図、図版4）。

1 石器集中1（第7図、第1・5表、図版15）

やせ尾根上のトップから約4～5mほど下がった傾斜地形上に石器群は分布する（第7図）。調査区の南西端に当たる。傾斜に対して垂直方向の土層断面図からも地形の様相を把握できる。

出土層位は、IXa層～III層と大きな幅がある。調査時の所見によれば、本集中地点周辺ではローム層のソフト化がVI層付近にまで及んでおり、III層出土遺物の本来の帰属層準の判定は難しい。

出土石器は、ナイフ形石器1点、微細剝離痕のある剝片2点、剝片1点の合計4点である。そのうち1点（第7図3）は、A3-97グリッドの一括資料から抜き出したものであるが、集中地点内の資料と同一母岩であることから、本集中地点に帰属するものと判断した。

ナイフ形石器は縦長剝片を縦位に用い、左側縁と右側縁の一部に急角度調整が施されたもので、基部端は欠損している。石材は良質な珪質頁岩を用い、ここでは珪質頁岩A1と呼称した。

2 石器集中2（第8図、第2・6表、図版15）

石器集中1と同様に南に面した傾斜地に立地する（第8図）。

出土層位はVI層であるが、本地点周辺においてはローム層の膨軟化が著しいことから本来の産出層準の判定は困難である。

出土石器は、安山岩Aの尖頭器1点とチャートの剝片が1点の合計2点のみである。

尖頭器（第8図1）は、基部寄りに最大幅をもつ、片面調整の資料である。先端部は欠損している。最大幅より先端側の側縁の平面形態は内湾し、基部側は外湾する、という特徴的な形態を呈している。

3 石器集中3（第9～13図、第3・7表、図版15～17）

本石器集中は1号墳の周溝・2号墳の墳丘の直下に分布している（第10図）。分布範囲は南北6m、東西10mにやや散漫に広がる。ローム層の堆積は南北方向はほぼ平坦であったと推測されるが、東西方向は石器集中4に向かって東に緩く傾斜している。このため、垂直分布図では、より石器集中の顕著なC2-22とC2-23の境界付近でIX層に及んでいるように投影されているが、本来の出土層位はVI層～VII層である。

石材は珪質頁岩B、チャート、黒曜石が主体で、それに安山岩、砂岩、流紋岩が加わる。

母岩分類が可能なのは黒曜石1とチャート1・2のみであった。石器集中3から検出された黒曜石はすべて同一母岩である。全体的に灰色を呈し、黒いもやが入る。黒曜石1と呼称する。「チャート」と分類した石材は、珪質頁岩Bによく類似した資料であるが、通常のものと異なるためここではチャートと認識している。チャート1・2ともに節理が縦横に走り、決して質のよいものとはいえない。チャート1は濃緑色を呈し、チャート2は灰緑色を呈している。以上の3母岩には、本石器集中から出土した楔形石器がすべて含まれ、これらの母岩を使った両極剝離作業を目的的に行っていることがわかる。なお、チャート1は石器集中4にも分布が確認されている。

出土石器は、ナイフ形石器1点、楔形石器8点、楔形石器剝片3点、削器1点、搔器1点、微細剝離痕のある剝片5点、剝片15点、裸片1点、敲石1点の合計36点がある。楔形石器と剝片が主体で、両極からの加熱による剝片剝離作業を考えることができる。

第11図1は黒曜石製で、素材剝片の打面部分に主要剝離面側から調整を施した資料である。ここでは、調整部分を基部端に設定してナイフ形石器と分類した。楔形石器はすべて剝片素材と考えられ、加熱方向はほとんど一方向である。楔形石器同士の接合例（第11図接合資料1）は両極剝離によって分割された剝片をそれぞれ再び楔形石器として利用している状況を観察することができる。

敲石（第12図20）は砂岩製で、長軸両端を中心とした周縁と平坦面に敲打痕が顕著に観察される。

4 石器集中4（第14・15図、第4・8表、図版17）

石器集中4は、石器集中3の東に隣接し、東に面した傾斜地に石器分布は広がる（第14図）。傾斜地のために、ローム層の堆積は薄い。すぐ西側にある2号墳の周溝によって、本米の石器分布が損なわれている可能性が高い。

出土層位はVI層～VII層のみで石器集中3と同様である。

出土石器は、搔器1点、楔形石器剝片1点、微細剝離痕のある剝片1点、剝片3点の合計6点である。

石材は珪質頁岩B、珪質頁岩A、チャート1、チャートで構成される。チャート1は石器集中3のチャート1と同一母岩であり、同石器集中とは石材構成の点でも近似している。

5 単独出土石器（第16図、第9表、図版17）

上層出土石器で旧石器時代に所属すると考えられる資料は以下の5点である。2号墳関連遺物が2点（第16図1・2）と、4号墳関連遺物が3点（第16図3～5）である。前者は石器集中3・4に伴う可能性が高いが、後者は4号墳に壊された石器集中の存在を示唆する。

1は微細剝離痕のある剝片で、剝片の中央で縦位に分割されている。珪質頁岩B。

2は石英製の剝片で左側縁が折断されている。

3・4はメノウ製の剝片で両者は同一母岩と考えられる。

5はチャート製の微細剝離痕のある剝片で、一部に原裸面を残す。

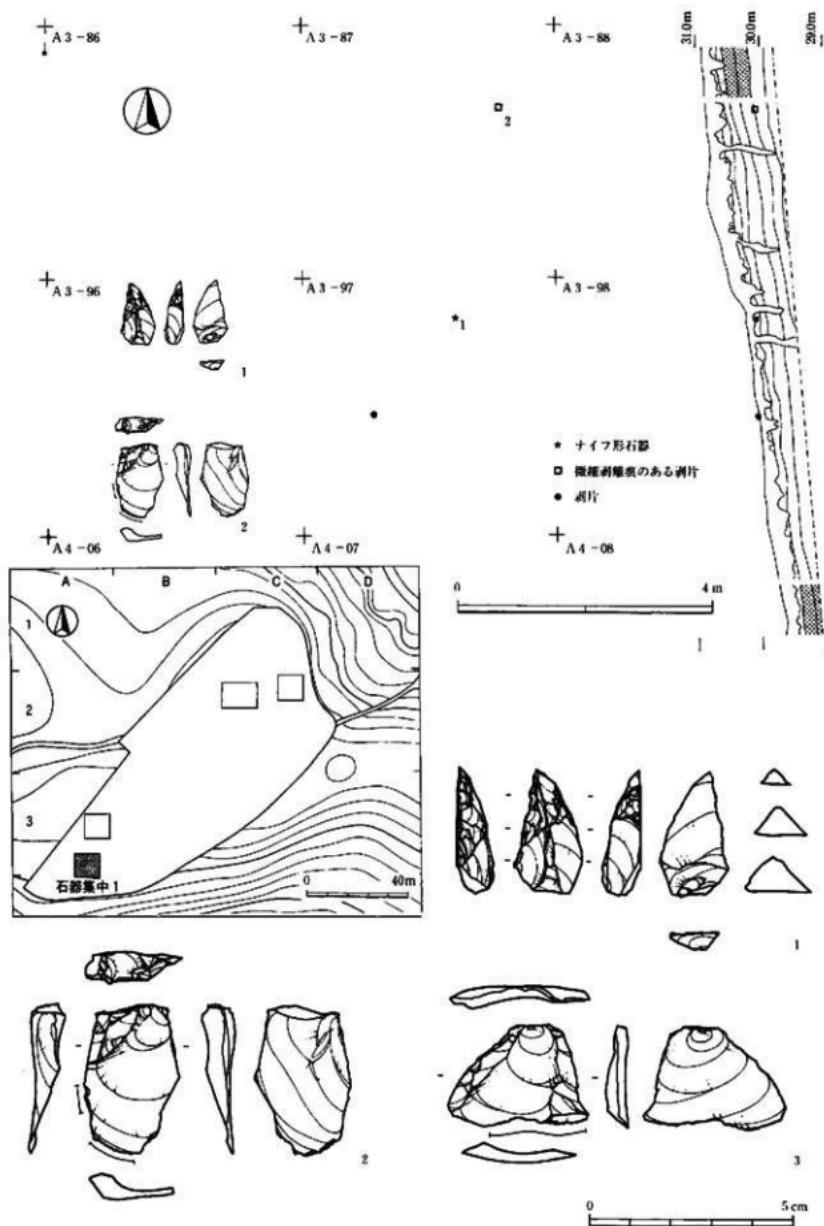
注1 田村 隆・澤野 弘他 1987 「千葉県文化財センター 研究紀要11」（財）千葉県文化財センター

2 山本 薫 1996 「中部・東海および関東地方の石器に利用される緻密黒色安山岩（ガラス質黒色安山岩）の特徴と石材産地」 『愛鷹・箱根山麓の旧石器時代編年』

3 A 柴田 徹・山本 薫・高松武次郎・石田守一 1998 「北大作遺跡（千葉県我孫子市）出土のガラス質黒色安山岩製石器の石材産地について」 日本国文化財学会第15回大会研究発表要旨

B 田村 隆 1998 「移行の論理」 『先史考古学論集7』

C 注1と同じ



第7図 石器集中1 石器出土分布図と出土石器

+ A3-47

+ A3-48

+ A3-49



+ A3-57

+ A3-58

+ A3-59

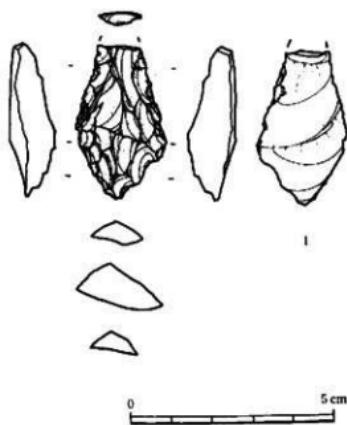
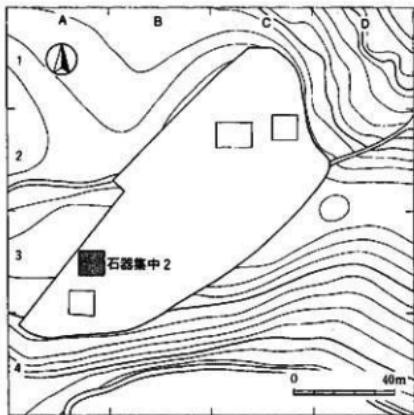
- 尖頭器
- 刃 片

+ A3-67

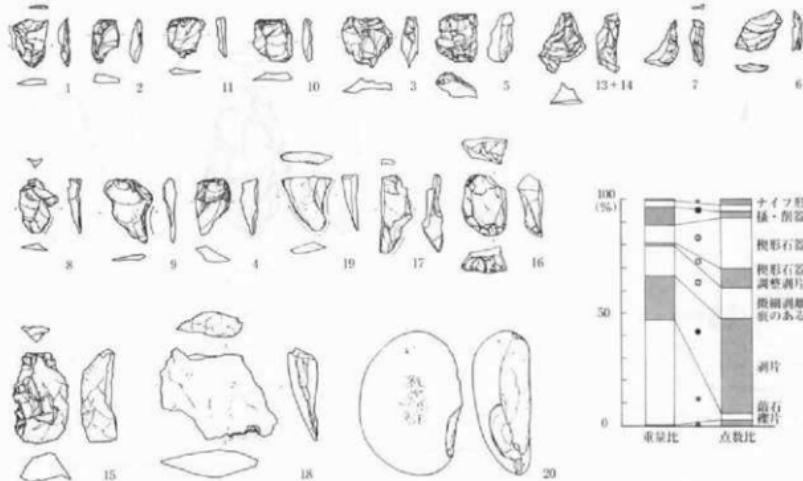
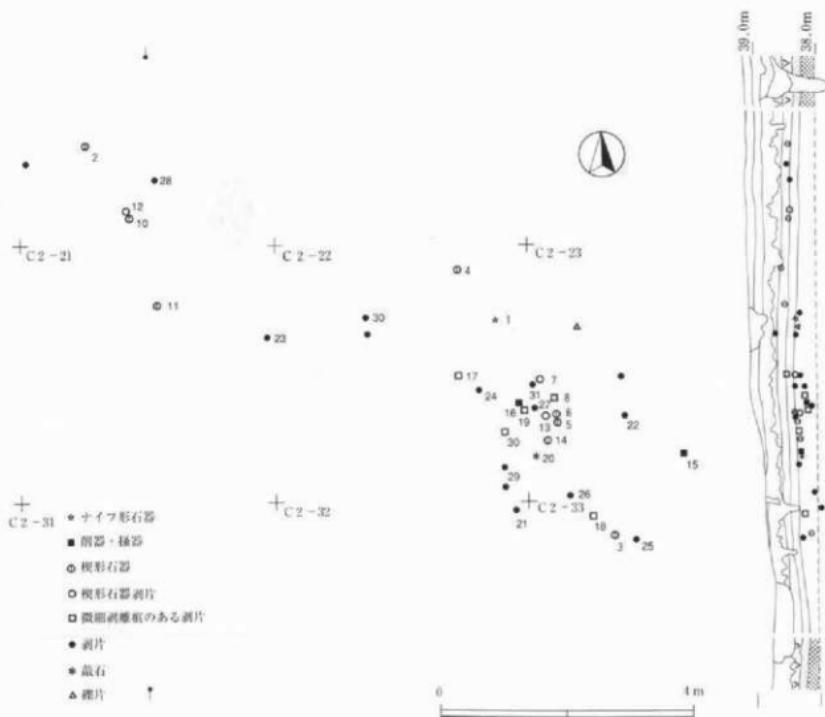
+ A3-68

+ A3-69

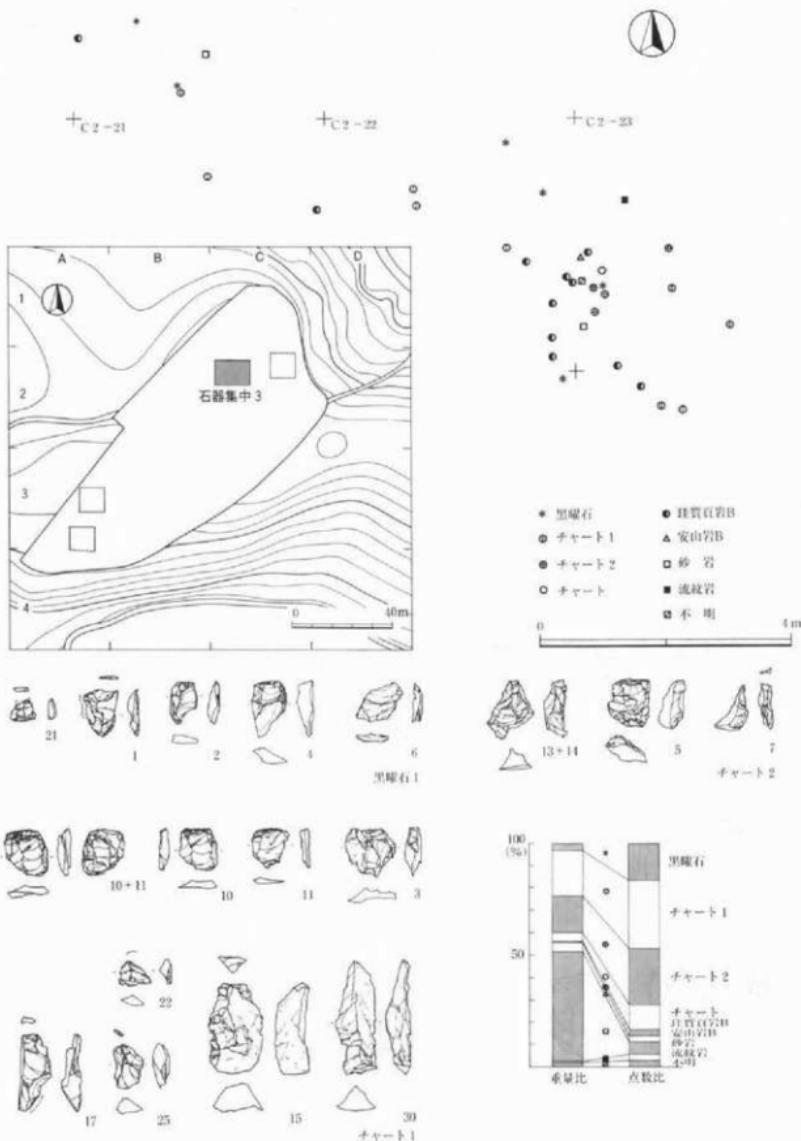
4 m



第8図 石器集中2 石器出土分布図と出土石器



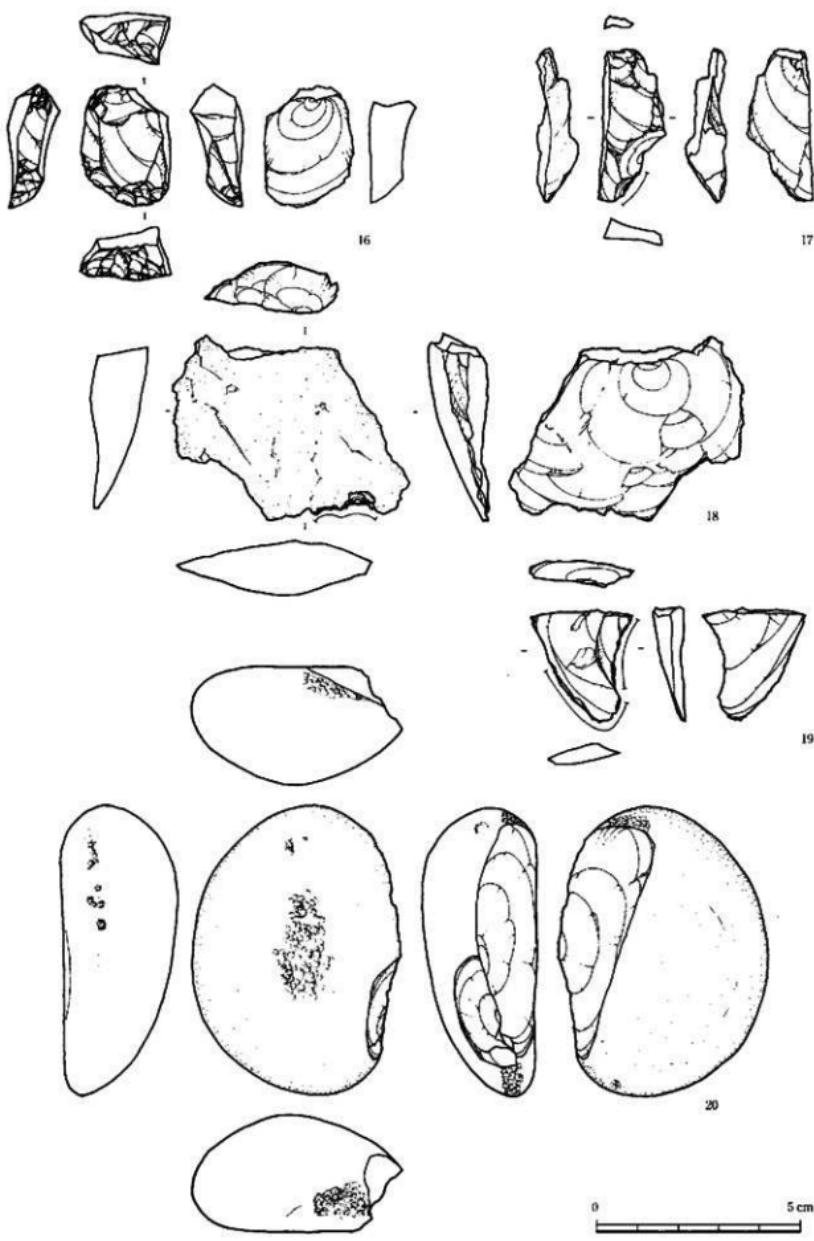
第9図 石器集中3 石器出土分布図(器種別)と主要石器集合



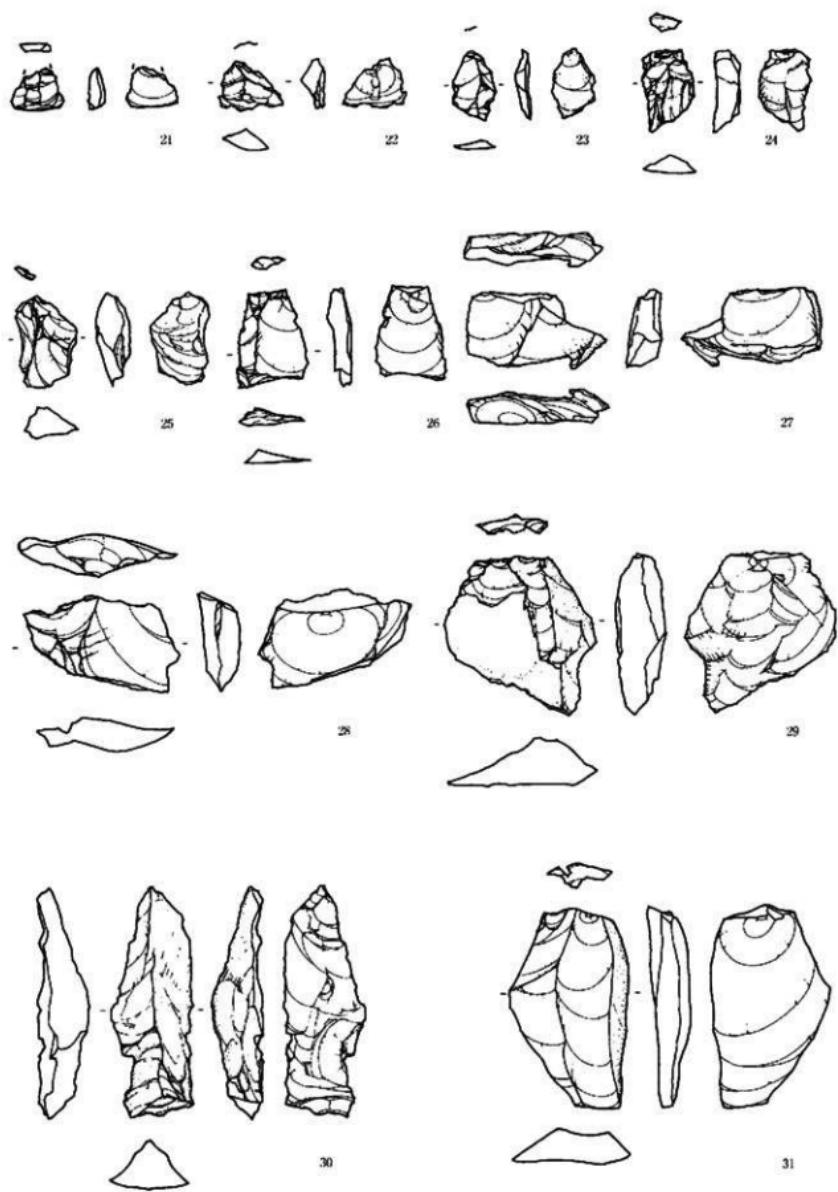
第10図 石器集中3 石器出土分布図(石材別)と主要母岩集合



第11図 石器集中3 出土石器(1)

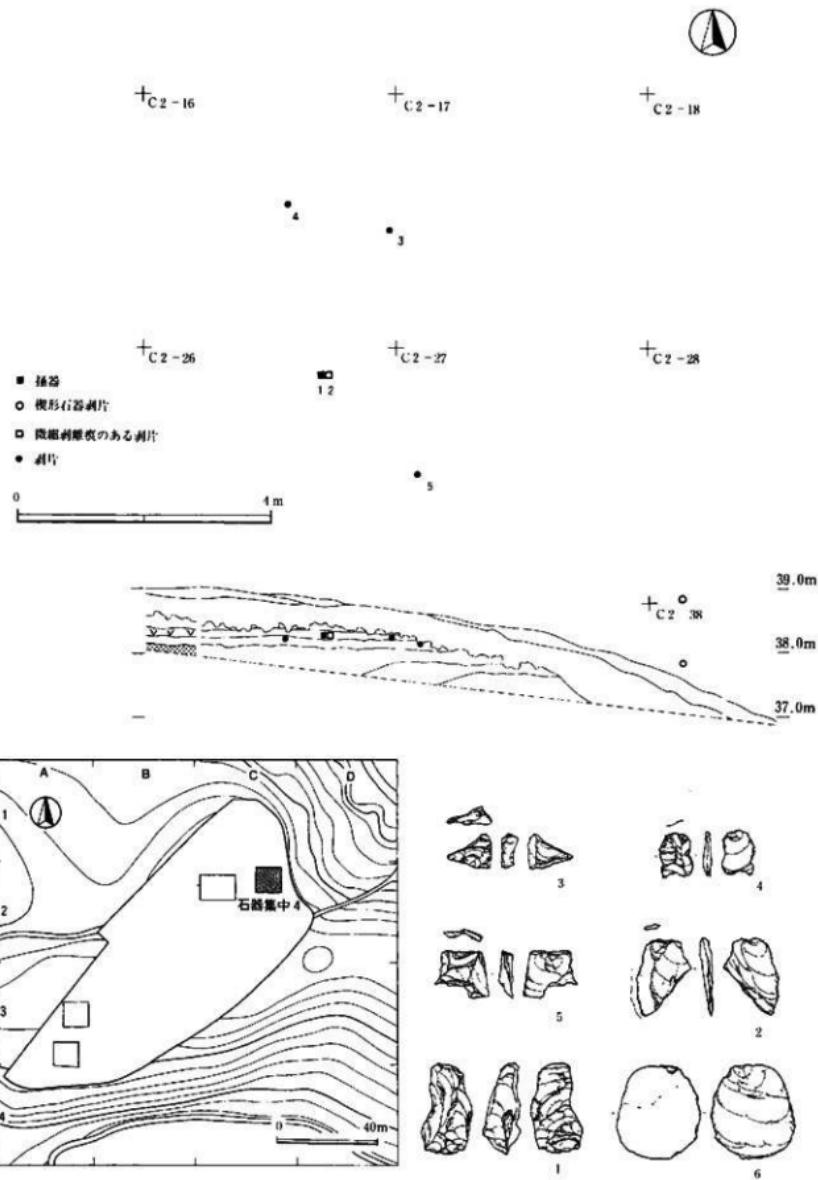


第12図 石器集中3 出土石器（2）

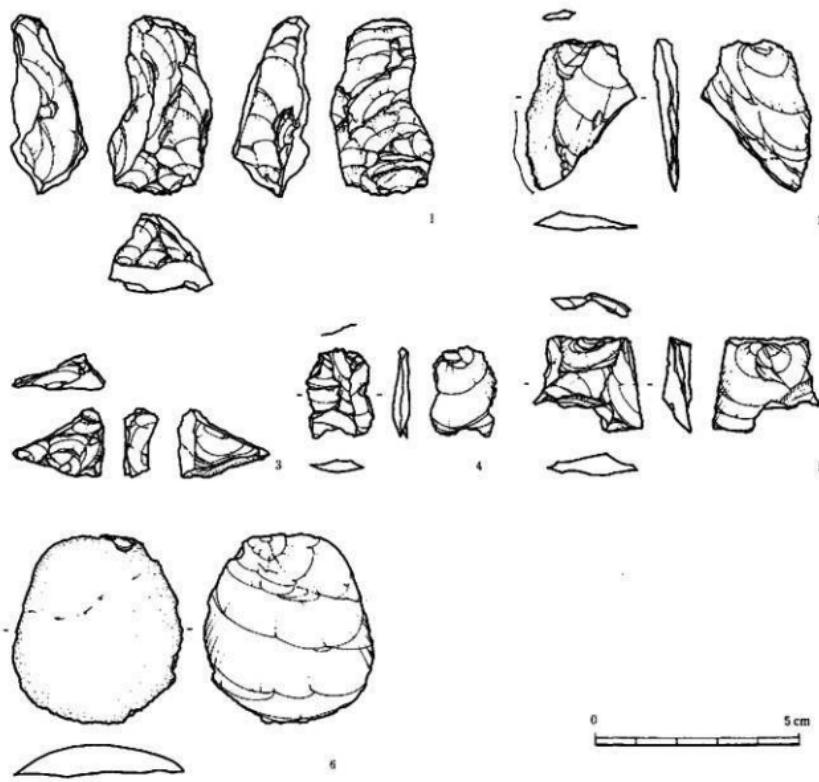


第13図 石器集中3 出土石器（3）

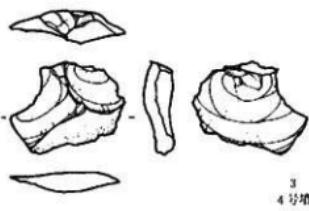
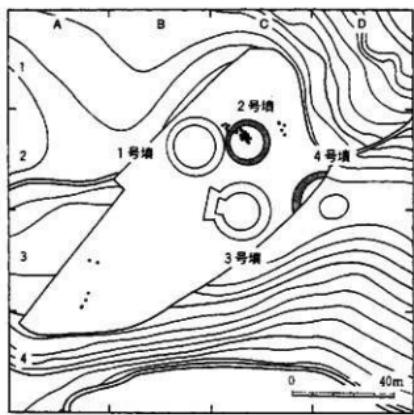




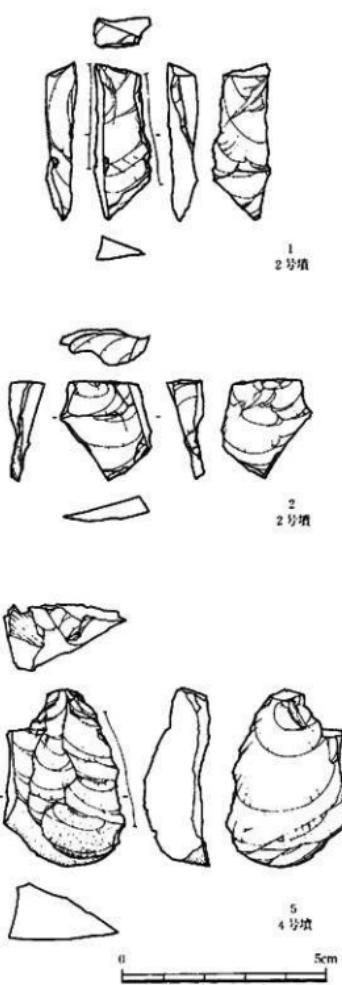
第14図 石器集中4 石器出土分布図（器種別）



第15图 石器集中4 出土石器



3
3号墳



5
4号墳

第16図 石器集中地点外 出土石器

第1表 石器集中1 石材と器種組成

	ナイフ形 石器	尖頭器	揚器	削器	楔形石器	楔形石器 剣	幾何刻絆 のある 剣片	制片	神片	燧石	礫・礫片	合計	%
現質貢岩A.1	1 3.32	1 0.00					2 6.21	1 0.46				4 9.99	100.00 100.00
合計(点数)	1 3.32	0 0.00	0 0.00	0 0.00	0 0.00	0 0.00	2 6.21	1 0.46	0 0.00	0 0.00	0 0.00	4 9.99	100.00 100.00
合計(重量)	25 33.23	0 0.00	0 0.00	0 0.00	0 0.00	50 62.16	25 4.66	0 0.00	0 0.00	0 0.00	100 100.00		
% (点数)													
% (重量)													

※グリッド一括の同一骨器を含む。

(上段:点数、下段:重量(g))

第2表 石器集中2 石材と器種組成

	ナイフ形 石器	尖頭器	揚器	削器	楔形石器	楔形石器 剣	幾何刻絆 のある 剣片	制片	神片	燧石	礫・礫片	合計	%
安山岩A		1 7.76										1 7.76	50.00 93.16
チャート							1 0.57					1 0.57	50.00 6.84
合計(点数)	0 0.63	1 7.76	0 0.00	0 0.00	0 0.00	0 0.00	0 0.00	1 0.57	0 0.06	0 0.00	0 0.00	2 8.33	100.00 100.00
合計(重量)	0 0.63	59 93.16	0 0.00	0 0.00	0 0.00	0 0.00	0 0.00	50 6.84	6 0.00	0 0.00	0 0.00	100 100.00	
% (点数)													
% (重量)													

(上段:点数、下段:重量(g))

第3表 石器集中3 石材と器種組成

	ナイフ形 石器	尖頭器	揚器	削器	楔形石器	楔形石器 剣	幾何刻絆 のある 剣片	制片	神片	燧石	礫・礫片	合計	%
高崎石I	1 1.73				3 6.39	1 0.86	1 0.47					6 9.45	16.67 3.17
現質貢岩B		1 8.72				1 1.47	3 豆.61	6 18.68				11 61.48	30.56 20.64
チャート1			1 23.50	3 7.09		1 4.02	4 12.93					9 48.23	25.00 16.19
チャート2				2 9.56	1 1.45		1 0.61					4 11.62	11.11 3.90
チャート						1 1.97						1 1.97	2.78 0.66
安山岩B							1 1.20					1 12.30	2.78 4.13
砂岩							1 8.06		1 137.90	1 145.96		2 145.96	5.56 48.99
流紋岩												1 1.37	2.78 0.46
不明							1 5.53					1 5.53	2.78 1.86
合計(点数)	1 1.73	6 0.00	1 8.72	1 23.50	8 23.64	3 3.78	5 38.60	15 58.58	6 0.00	1 137.90	1 137.90	36 137.90	100.00 100.00
合計(重量)	2.78 0.58	0.00 0.00	2.78 2.93	2.78 7.92	22.22 7.94	8.33 1.27	13.89 12.96	41.67 19.66	0.00 0.00	2.78 46.29	2.78 0.46	100.00 100.00	
% (点数)													
% (重量)													

(上段:点数、下段:重量(g))

第4表 石器集中4 石材と器種組成

	ナイフ形 石器	尖頭器	揚器	削器	楔形石器	楔形石器 剣	幾何刻絆 のある 剣片	制片	神片	燧石	礫・礫片	合計	%
現質貢岩B							1 3.91	2 4.41				3 8.32	50.00 17.45
現質貢岩A							1 1.79					1 1.79	16.67 3.75
チャート1			1 16.97									1 16.97	35.60
チャート						1 20.39						1 20.39	16.67 43.19
合計(点数)	0 0.00	0 0.00	1 16.97	0 0.00	0 0.00	1 20.39	1 3.91	3 6.29	0 0.00	0 0.00	6 0.00	36 47.67	100.00 100.00
合計(重量)	0.00 0.00	0.00 0.00	16.67 35.60	0.00 0.00	0.00 0.00	16.67 43.19	16.67 8.20	50.00 13.01	0.00 0.00	0.00 0.00	6.00 0.00	100.00 100.00	
% (点数)													
% (重量)													

(上段:点数、下段:重量(g))

観察表について

1. 掲図番号 実測図として掲載した遺物の通し番号。この番号は遺物の出土平面図と写真図版の番号に一致する。
実測図として報告できなかったものについては、取り上げ番号順に、以下に掲載した。
2. グリッド・遺物番号 出土したグリッドと遺物の取上げ番号（注記番号）。
3. 打面形状 Cは自然面、Sは節理面、Pは点状打面、Lは線状打面、Iは平坦打面、2以上は複剝離打面、空欄は欠損等による打面なし・計測不可を示す。
4. 背面構成 主要剝離面の剝離方向を基準として、背面を構成する剝離面の種類と数を示した。素材を大きく変形させたものは書かないが、素材の背面構成が窺われるものに関しては、観察される範囲で書く。
Cは自然面、Sは節理面、Hは頭部側、Tは尾部側、Rは背面を正面にして右方、Lは左方、Dは背面側、Vは腹面側（両者は作業面調整剝片、角柱状の剝片など90°に近い剝離角をもつ剝離面の場合）からの剝離面数を示す。
5. 調整部位・折面部位 主要剝離面の剝離方向を基準として、調整部位と折断部位の位置を示した。Hは頭部側、Tは尾部側、Rは背面を正面にして右側、Lは左側を示す。
6. 末端形状 Fは通常の末端（フェザーエンド）、Hはちょうつがい状（ヒンジフラクチャー）、Oはアーチ状（ウトラバッセ）を示す。
7. 母岩番号 石材の種類と、母岩分類については本文に記したとおりである。

第3章 繩文時代

第1節 造構（第17図、図版11・12）

今回の調査では、形態・規模・検出面から、縄文時代の陥穴と考えられる土坑を9基検出した。造構に確実に伴う遺物が出土しなかったため、時期を特定することはできなかった。

S K01 S D04の南に位置し、S K02・03と群在する。平面形は、南北に軸をもち、細長い橢円形を呈す。規模は、長軸2.8m、短軸0.4m、検出面からの深さ0.85mである。底面は、やや波打つ。覆土は、自然堆積と考えられ、ロームを主体とする。

S K02 S D04の南に位置し、S D03と平行している。平面形は、N-62°-Eに軸をもち、細長い橢円形を呈す。規模は、長軸3.1m、短軸0.45m、検出面からの深さ0.8mである。東端壁はオーバーハングする。底面は、ほぼ平らである。覆土は、自然堆積と考えられ、ロームを主体とする。

S K03 S D04の南に位置する。平面形は、N-55°-Eに軸をもち、細長い橢円形を呈す。規模は、長軸2.6m、短軸0.3m、検出面からの深さ0.6mである。底面は、やや波打つ。覆土は、自然堆積と考えられ、ロームを主体とする。

S K04 台地整形部分の北側に位置する。平面形は、N-35°-Wに軸をもち、細長い橢円形を呈す。規模は、長軸2.3m、短軸0.6m、検出面からの深さ1.1mである。壁面は、上方の開きが著しい。底面は、やや波打つ。覆土は、自然堆積と考えられ、ロームを主体とする。底面に近い層は、しまりが弱い。

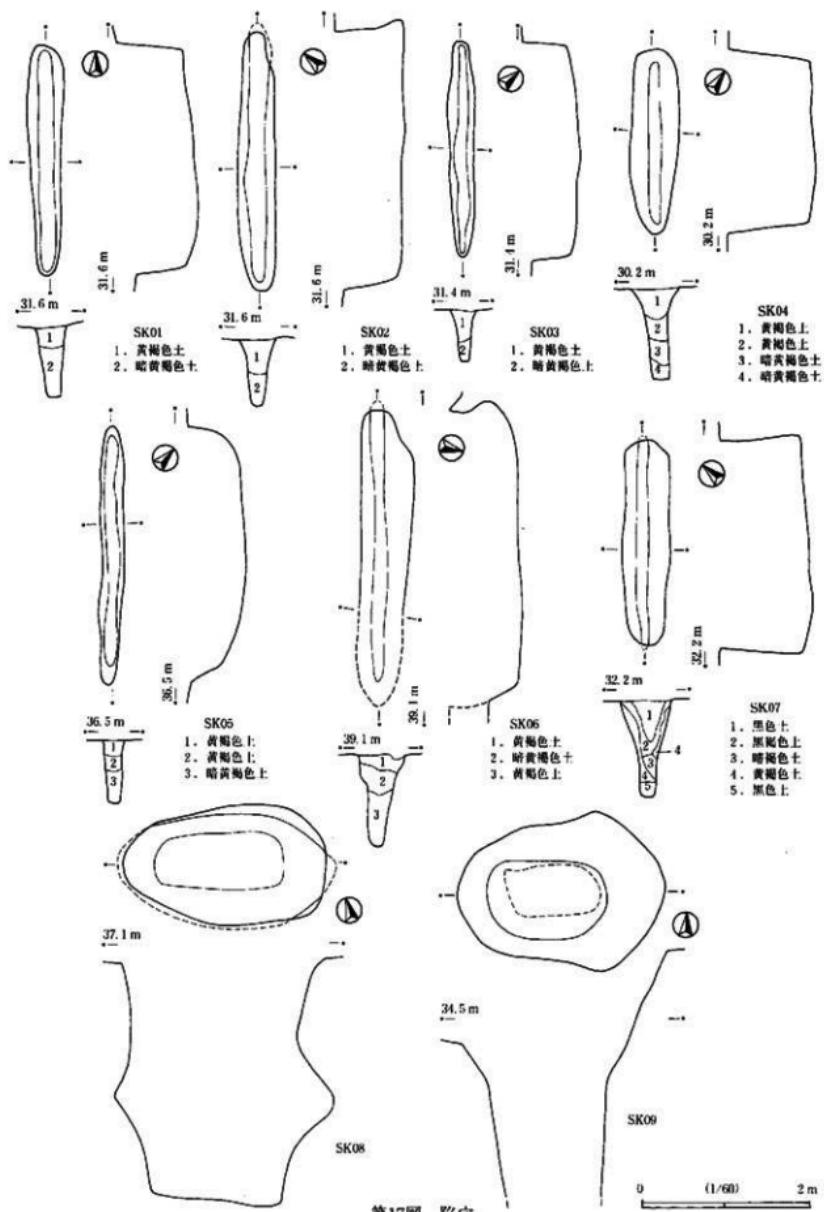
S K05 1号墳の南側に位置する。平面形は、N-61°-Wに軸をもち、細長い橢円形を呈す。規模は、長軸3.0m、短軸0.3m、検出面からの深さ0.8mである。底面は、なだらかである。覆土は、自然堆積と考えられ、ロームを主体とする。

S K06 1号墳の北東側に位置する。平面形は、N-78°-Wに軸をもち、細長い橢円形を呈す。規模は、長軸推定3.5m、短軸0.5m、検出面からの深さ1.1mである。東端壁はオーバーハングする。壁面中位に段差が見られる。底面は、ほぼ平らである。覆土は、自然堆積と考えられ、ロームを主体とする。

S K07 S D04の北側に位置する。平面形は、N-48°-Eに軸をもち、細長い橢円形を呈す。規模は、長軸2.4m、短軸0.6m、検出面からの深さ1.2mである。両端壁にかすかにオーバーハングが見られる。壁面中位に段差が見られ、上方に向かって開いている。底面は、ほぼ平らである。覆土は、やや複雑な堆積状況を呈し、上部が黒色土を主体とし、下部はロームを主体とする。

S K08 3号墳の後円部墳丘下に位置する。平面形は、ほぼ東西に軸をもち、橢円形を呈す。規模は、長軸2.4m、短軸1.4m、検出面からの深さ2.9mである。壁面中位がオーバーハングしている。底面は、ほぼ平らである。

S K09 S D 2の北側に一部かかる。平面形は、ほぼ東西に軸をもち、不整橢円形を呈す。規模は、長軸2.4m、短軸1.7m、検出面からの深さ2m以上である。壁面中位に段差をもつ。



第17図 跖穴

第2節 遺物

縄文時代の遺物としては土器片が3点と石鏃が9点、磨製石斧が1点出土した。しかし、いずれの遺物も遺構に伴っていない。

1 土器 (第18図、図版18)

1と2は、口縁部破片である。口縁端部に棒状浮文が貼付され、そこに押し引き文が施される。口縁内面に横位の沈線が1条、胴部外面には縄文が施される。色調はにぶい褐色で、焼成は良好である。

3は胴部破片である。棒状浮文が貼付され、そこに押し引き文が施される。1、2に比べ厚みがある。色調は黒褐色で焼成がやや甘い。

2 石器 (第19図、第10表、図版18)

縄文時代に属すると思われる石鏃は9点検出されている。そのうち5点が1号墳周辺に分布する。石鏃は抉りの深いもの(1・3)、通常のもの(2・5・7・8・9)、浅いか若しくは抉れていないもの(4・6)など基部形態は変化に富んでいる。石材は、黒曜石(第19図1・2・4)、珪質頁岩(3)、チャート(5～7)、安山岩(8・9)が用いられている。

なお、8は表裏両面と先端の一部には磨痕が見られる。装着に関係するのだろうか。

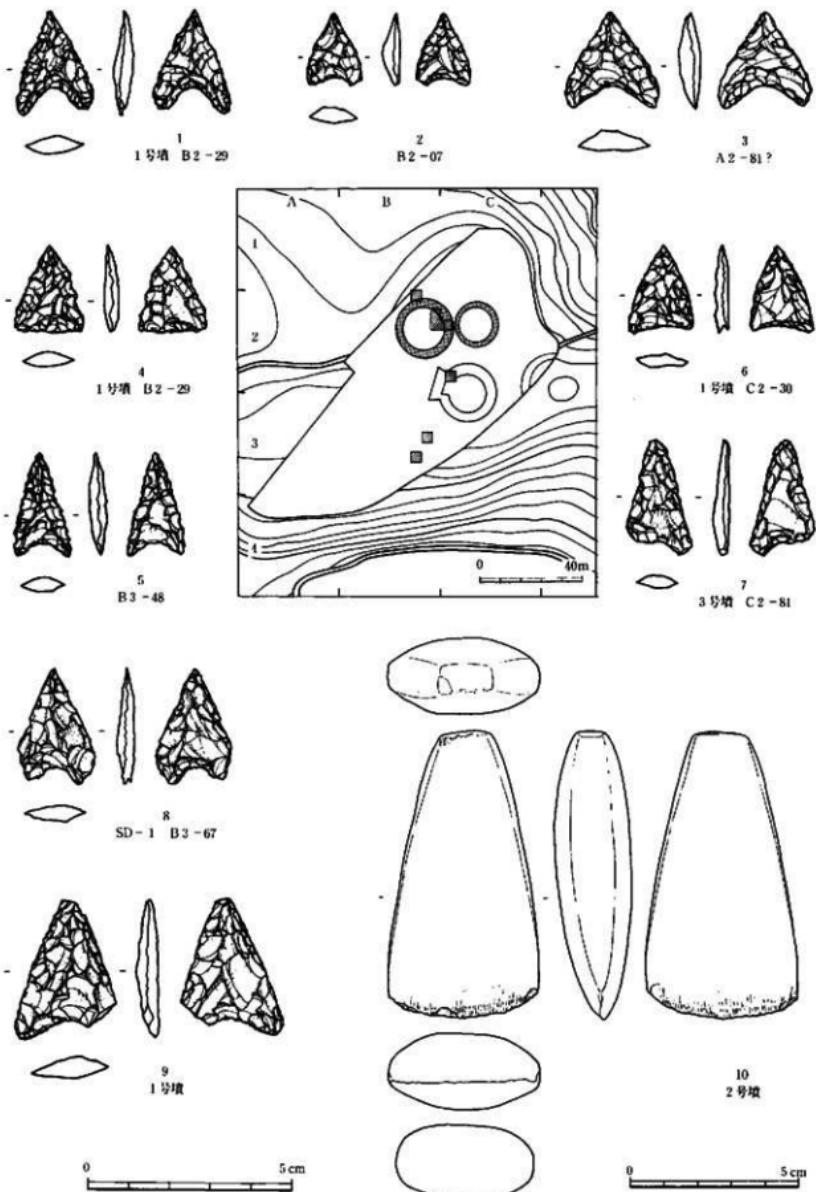
10は綠泥片岩製(?)の磨製石斧である。刃こぼれが激しく、刃部の垂直方向に明瞭な線状痕が観察される。研ぎ直す直前の段階と思われる。



第18図 縄文時代 上器 (S=1/3)

第10表 縄文時代 石器観察表

図版番号	遺構	グリッド	遺物No.	器種	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	先端角	石材	標高[m]	備考
1	1号墳	B2-29	371	石鏃	25.6	18.9	4.9	1.43	51	黒曜石	39.17	旧表上面
2		B2-07	1	石鏃	17.8	13.4	4.0	0.71	56	黒曜石		
3		A2 81?	6	石鏃	23.7	23.0	4.6	1.76	66	珪質頁岩		
4	1号墳	B2-39	361	石鏃	20.8	16.8	3.8	1.09	56	黒曜石	38.713	旧表上面
5		B2-48	1	石鏃	24.7	13.6	4.3	1.21	32	チャート		
6	1号墳	C2-30	360	石鏃	21.5	15.6	2.9	0.84	59	チャート	38.799	旧表上面
7	3号墳	C2-81	C2-3-8	石鏃	28.0	15.6	3.7	1.30	46	チャート		覆土上層
8	SD-1	B3-67	8	石鏃	27.5	18.8	4.2	1.70	50	安山岩	34.604	覆土上層
9	1号墳	B2orC2	51	石鏃	34.9	24.5	5.3	3.21	47	安山岩	38.317	周溝土表土
10	2号墳	C2	19	磨製石斧	85.5	45.7	21.9	137.20		綠泥片岩?	38.648	周溝薄土上層



第19図 繩文時代 石器

第4章 弥生時代

第1節 遺物（第20図、図版19・20）

弥生時代に関しては、確認調査時から土器片が出土し、本調査時に遺構の検出が期待されたが、結局遺物のみの出土にとどまった。すべて弥生時代後期の壺形土器片であると考えられる。

1は、底部から口縁まで復元できた唯一の個体である。C2-25グリッドからの出土である。器高16.9cm、口径16.3cm、頸部径11.9cm、最大胴部径14.0cm、底径6.3cmである。口縁は複合口縁で、端部に繩文が施される。頸部下部にはL Rの繩文を施し、Z字結節文で上下を区画する。胴部は、棒状工具に無筋繩文を巻き付けたもので回転押捺を交互にクロスさせるように実施している。底部には木葉压痕が観察される。色調は黒みを帯びた鈍い褐色で外面下部は赤みを帯びる。胎土には比較的多く白色粒子が含まれる。焼成は良好である。

2は、口縁から胴部上半にかけての破片で、2号墳からの出土である。現存長は、12.2cm、口径18.7cm、頸部径14.4cmである。口縁は複合口縁で端部には繩文が施される。口縁部と胴部に附加条繩文が施される。頸部は横位の3単位櫛歯による平行櫛描文を斜格子文の懸垂文で区画する。懸垂文は7条、平行櫛描文は12条である。内面は横方向のヘラミガキが施される。色調は黒みを帯びたにぶい褐色で外面がより暗い。胎土は緻密で、焼成も良好である。

3は口縁破片である。A3-93グリッドからの出土である。口縁は複合口縁で、外面及び端部に繩文が施される。内面の調整はヘラミガキ及びナデである。色調はにぶい黄褐色、外面に炭化物が付着し、胎土は緻密で、白色粒子をわずかに含む。焼成は良好である。

4は口縁破片である。A4-08グリッドからの出土である。口縁は複合口縁で端部に繩文が施される。口縁部下部には工具による刻み目がなされる。口縁上部と内面の調整はヨコナデである。色調はにぶい黄褐色、外面に炭化物が付着し、胎土は緻密で、やや砂粒が多い。焼成は良好である。

5は口縁破片である。B3-80グリッドからの出土である。口縁は複合口縁で、外面及び端部には繩文が施される。口縁部下部に工具による刻み目がなされる。内面の調整はヨコナデである。色調は口縁外面が黒色、その他はにぶい橙色を、胎土には白色粒子が少量含まれる。焼成は良好である。

6は口縁破片である。3号墳からの出土である。口縁は複合口縁で、端部には繩文が施される。口縁部下部に棒状工具による刺突列が施される。その他の外面調整は強いヨコナデである。内面はヨコナデである。色調はにぶい黄褐色で外面はやや暗い。胎土は緻密で、白色粒子、白色針状物質をわずかに含む。焼成は良好である。

7は口縁破片である。SD05からの出土である。口縁は複合口縁で下部と端部に爪による刻みが施される。内面調整はヘラミガキである。色調は暗褐色、胎土には白色粒子が少量含まれる。焼成は良好である。

8は口縁破片である。3号墳からの出土である。口縁は複合口縁で、端部には繩文が施される。口縁部下部に爪による刻みが施される。内面はヘラミガキ及びヨコナデで調整される。色調はにぶい黄褐色、内面がやや暗い。胎土には白色粒子がわずかに含まれる。焼成は良好である。

9は口縁破片である。B3-90グリッドからの出土である。口縁部下部に工具による刻み目が施される。内面の調整はヘラミガキである。色調はにぶい黄褐色であり、内面はやや赤みを帯びる。胎土は緻密で、焼

成は良好である。

10は口縁破片である。SD05からの出土である。単口縁である。4本単位の櫛歯で縦位に1条、横位に2条、櫛描文が施される。横位の櫛描文はゆるやかに波打つ。縦位の櫛描文も下部の方はかすかに波打つ。色調はにぶい黄褐色で、外面は赤みを帯びる。胎土には白色砂粒が含まれる。焼成は良好である。

11は胸部破片である。CI-82グリッドからの出土である。胸部にはLRの繩文が施されている。内面は横方向のヘラミガキで調整される。色調はにぶい黄褐色を呈し、外面には炭化物が付着している。胎土には白色粒子が少量含まれる。焼成は良好である。

12は、胸部破片である。A4-08グリッドからの出土である。最大胸部径16.4cmである。胸部にはLRの繩文が施される。内面はヘラミガキで、内面上部はヨコナデで調整される。色調はにぶい黄褐色で内面はやや暗い。外面上部には炭化物が付着する。胎土には白色粒子が少量含まれる。焼成は良好である。

13は胸部破片である。3号墳からの出土である。外面はLRの繩文とZ字結節文が2条施されている。内面はヘラミガキで調整される。色調は黒みを帯びた褐色である。胎土には白色粒子が少量含まれる。焼成は良好である。

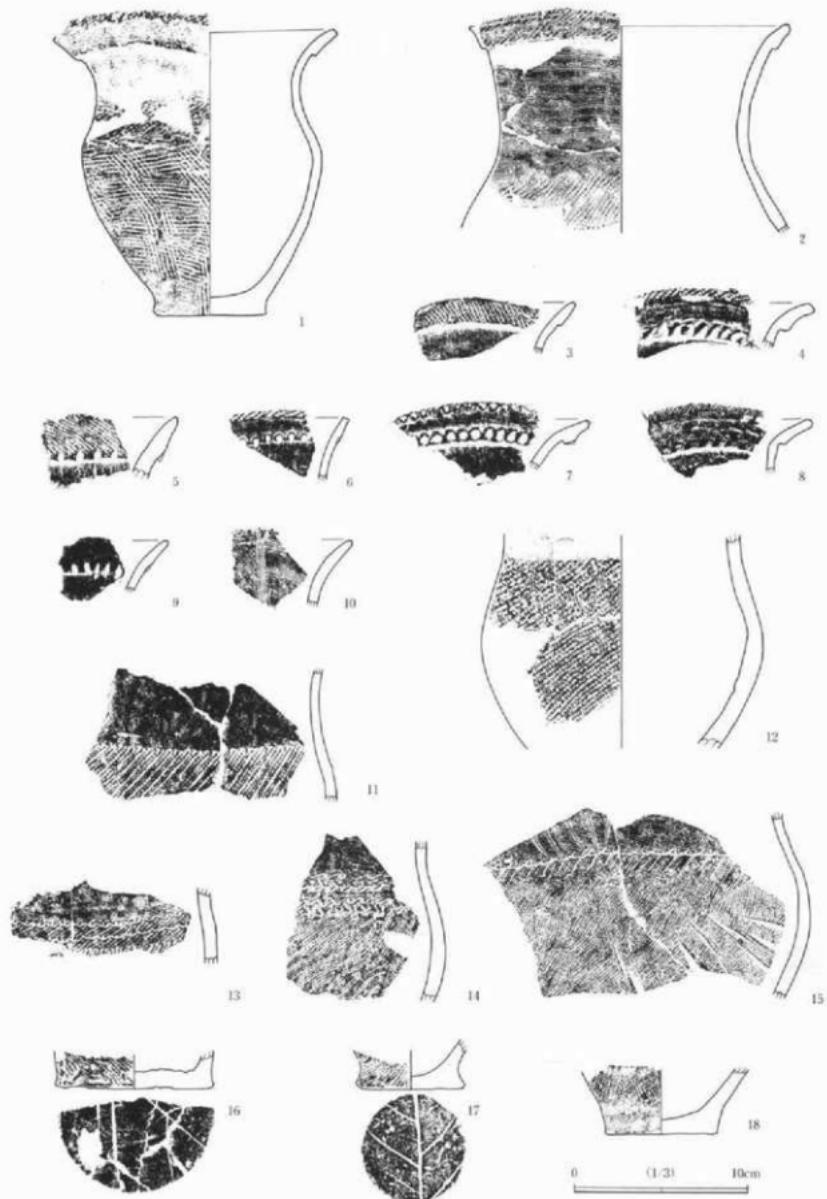
14は胸部破片である。3号墳からの出土である。外面は繩文を施した後、4条のS字結節文を施文する。内面はヘラミガキで調整される。色調はにぶい褐色を呈し、外面に炭化物が付着する。胎土には白色粒子が多く含まれ、粗い。焼成はやや甘い。

15は胸部破片である。3号墳からの出土である。LRの繩文が施され、上部はZ字結節文となっている。色調は外面がやや赤みを帯びた褐色で、内面がやや暗い褐色を呈す。外面上部には炭化物が付着する。胎土には白色粒子がわずかに含まれる。焼成は良好である。

16は底部破片である。B3-62グリッド・SD01からの出土である。底径9.2cmである。附加条繩文1種(RL)が施される。底面には木葉圧痕が観察される。色調は明るい黄褐色である。胎土には微量の白色粒子が含まれる。焼成はやや甘い。

17は底部破片である。3号墳からの出土である。底径6.4cmである。外面はLRの繩文が施される。内面調整はナデ及びヘラミガキである。底面には木葉圧痕が観察される。色調は外面がやや赤みを帯びた褐色で、内面がやや暗い褐色を呈す。胎土には白色粒子、白色針状物質がわずかに含まれる。焼成は良好である。

18は、底部破片である。3号墳からの出土である。底径6.4cmである。外面は附加条1種(LR)が施される。内面はナデが施されるが、はがれが著しい。色調は外面が赤みを帯びた褐色、内面がやや暗くにぶい褐色を呈す。胎土には白色粒子が少量、白色針状物質が微量含まれる。焼成はやや甘い。



第20図 弥生時代 土器

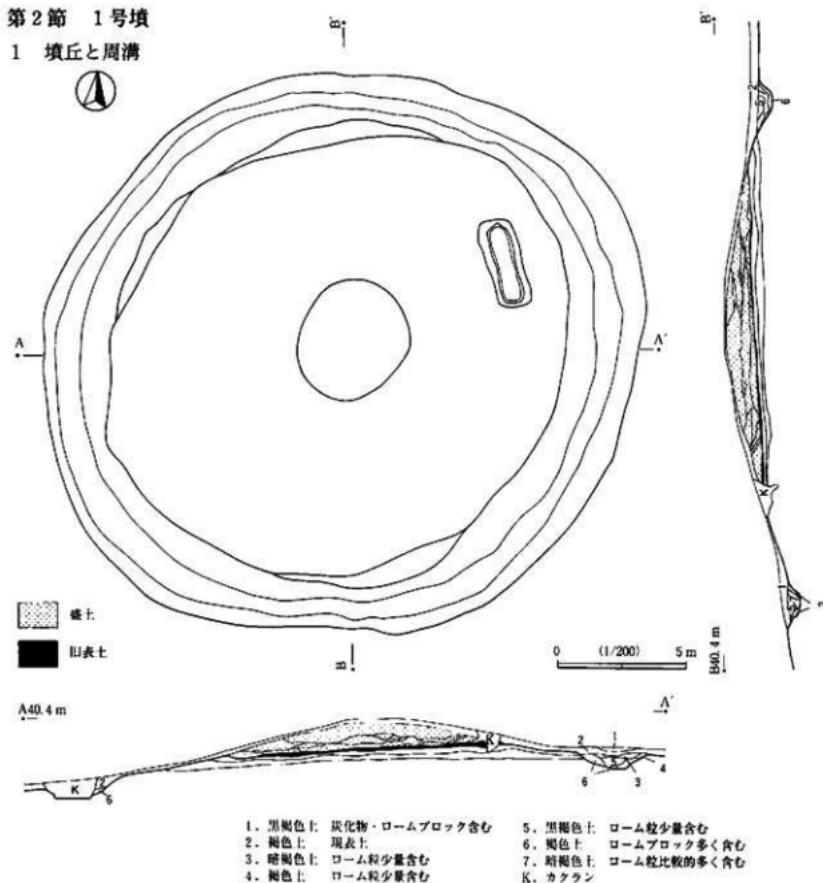
第5章 古墳時代

第1節 古墳の位置関係

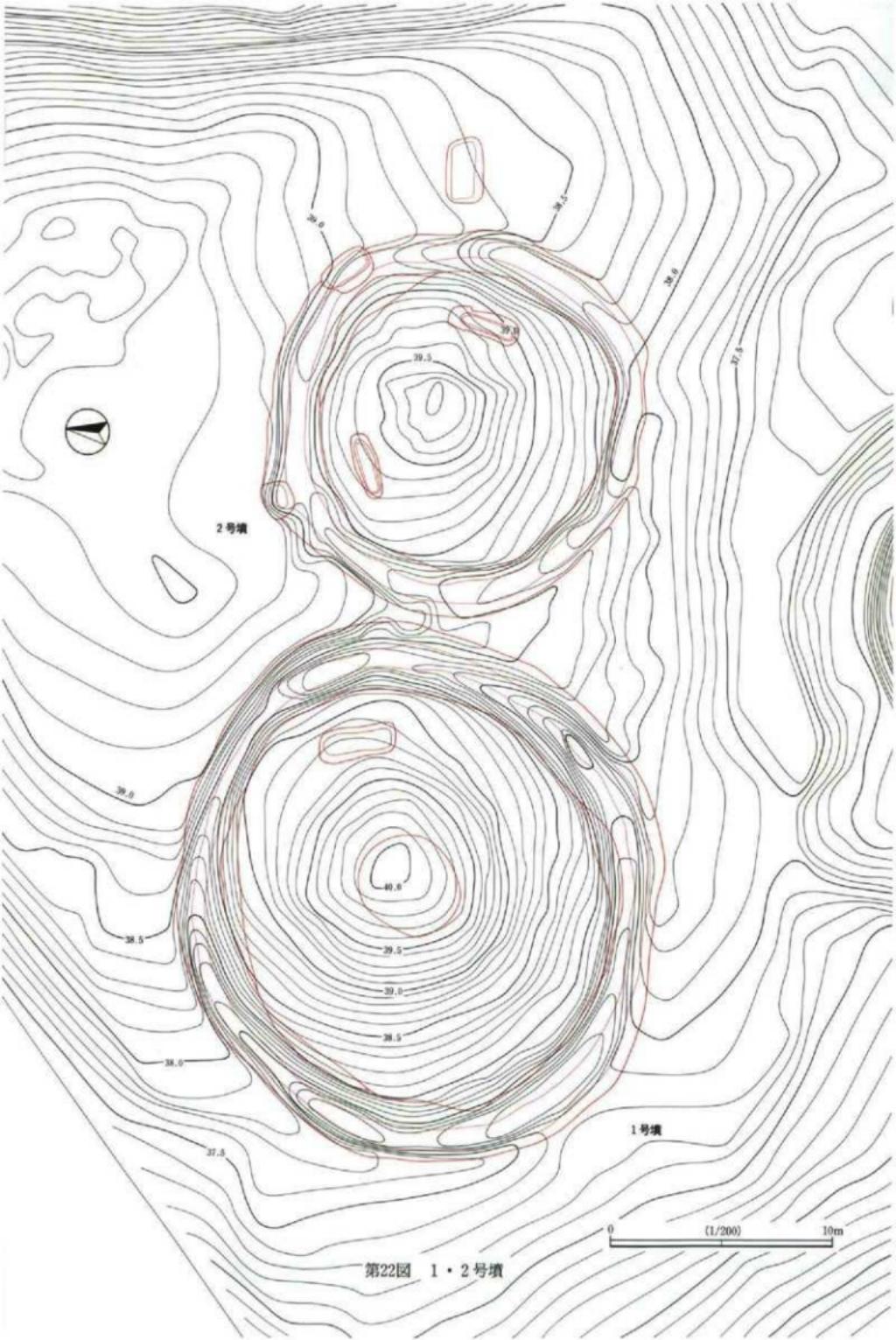
小川崎台古墳群は東西に延びる台地の尾根に沿って展開し、7基の古墳で構成される。調査を行ったのは、台地のほぼ平坦部にある1号墳から4号墳の4基である。西から1号墳、その東に周溝が接するように2号墳が位置する。3号墳は前方部を西に向けて2号墳の南に位置し、4号墳は3号墳のすぐ東に位置する。

第2節 1号墳

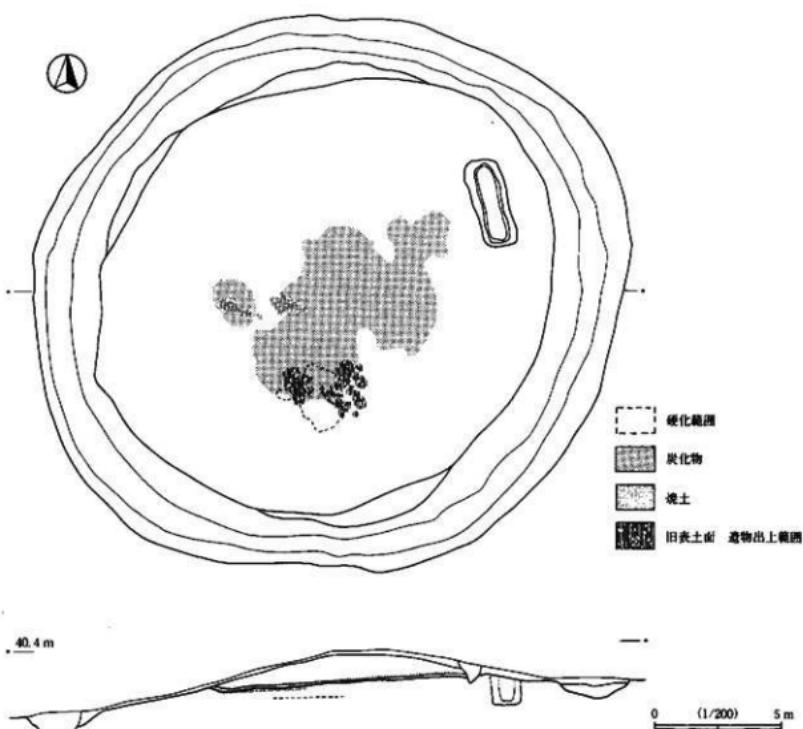
1 墳丘と周溝



第21図 1号墳平面図・断面図



第22図 1・2号墳



第23図 1号墳旧表土面平面図・投影図

墳丘（第21～23図、図版5）

1号墳は、墳丘径17m～19mの東西にやや広い円墳である。周溝をふくめると、径22m～24m、盛土の高さは、旧表土上面から1.1m（現表土層を含む）である。墳頂に若干平坦な部分が径4.5mで存在する。墳丘中心から北東側の墳裾寄りに主体部を有する。

断面を見てみると、旧表土層がほぼ水平に堆積しているが墳裾の部分にはないのがわかる。つまり、墳丘盛土をする際に、周溝部分のみの掘削だけでなく、墳裾部分の地山の掘削も行っている。一番深い周溝側で約0.8mの地山掘削が行われている。盛土は、大まかにローム粒子を含む暗褐色土とロームブロックを含む暗褐色土に2つに分けられる。盛土上部に前者、下部に後者の土を主体的に用いている。周溝外の旧表土中心の土を盛土上部に、墳裾から周溝に当たる部分の旧表土以下のロームを盛土下部に用いたことが考えられる。

盛土下の旧表土面から焼土・炭化物・遺物が出土している。墳丘中央一面に炭化物が広がり、炭化物よりやや低いレベルで焼土が所々分布している。遺物は土師器の杯で、破碎され、集中して出土した。古墳築造開始とあまり時を隔てずに何らかの火を用いた行為のあったことが想定される。古墳築造前の祭祀の様相を具体的に知ることのできる貴重な例と考えられる。II b層上面の高さに位置する硬化面は古墳が築造される前の住居の床と考えられるが壁などを確認することはできなかった。

周溝（第21図）

断面形状はややなだらかな皿状を呈し、深さは周溝外の現表土面から約0.5m、幅は平均2.6mである。覆土は、レンズ状に堆積し、自然堆積が考えられる。東の周溝断面図にある攪乱は、後世の炭窯の可能性があるが、焼土・炭化物の出土量はあまり多くない。

出土遺物（第24・25図、第11表、図版20・23・24）

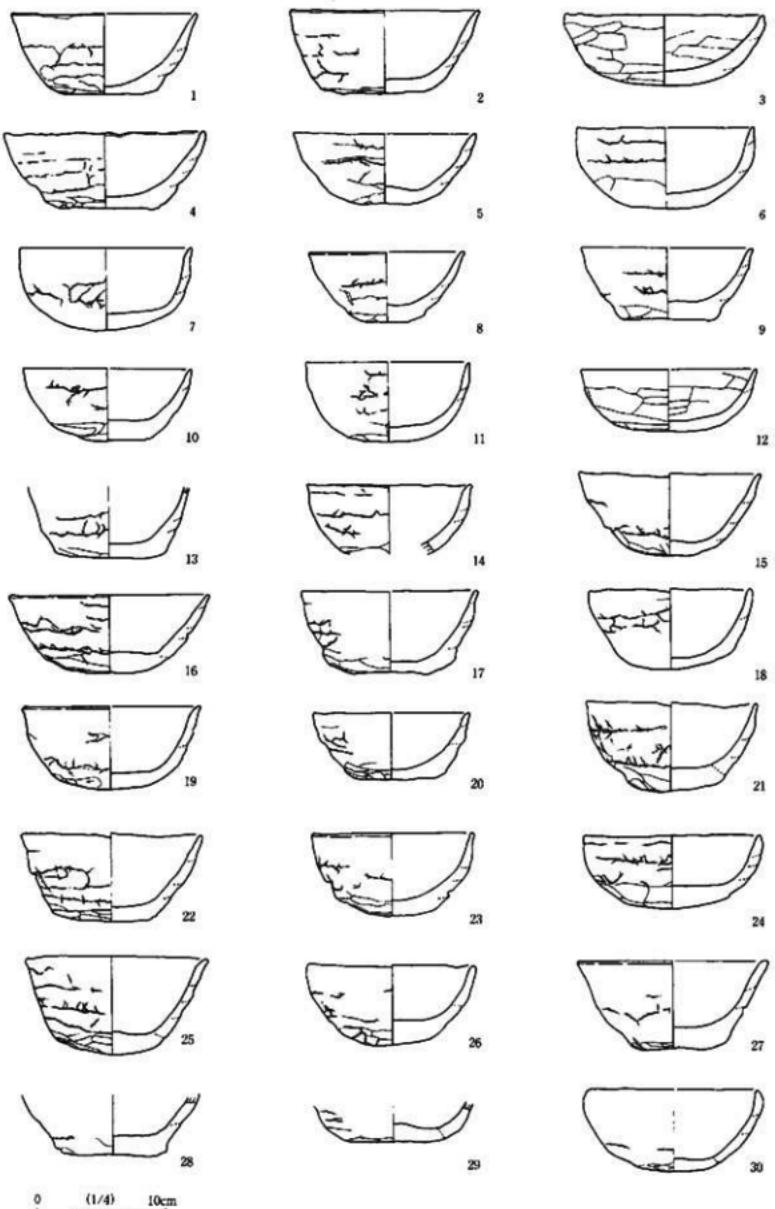
遺物は、ほとんどが旧表土面から出土している。

1～51は、土師器杯である。一般的に見られる杯とは、形態、調整が若干異なり、古墳築造に伴う何らかの行為用に製作されたものと考えられる。特徴としては、内面が、外面に比べ丁寧にナデを施され、粘土紐の接合痕は確認できない。口縁にはヨコナデ、底部付近にはヘラケズリが施される。胎土は、各種砂粒を少量含み、精緻である。色調は、やや赤みを帯びた褐色を呈し、胎土自体が赤みを帯びている。36～38、45は部分的に赤彩が施されている。平均口径10cm、器高5cm前後の法量である。底部は平底を意識しているものと丸底を意識しているものの両方が存在する。焼成はほとんどのものが良好である。1～33は外面に粘土紐の接合痕を明瞭に残す。口縁が内湾して立ち上がるものと外反するものの2種類存在する。34～51は口縁下に稜をもち、外面の調整が非常に雑である。

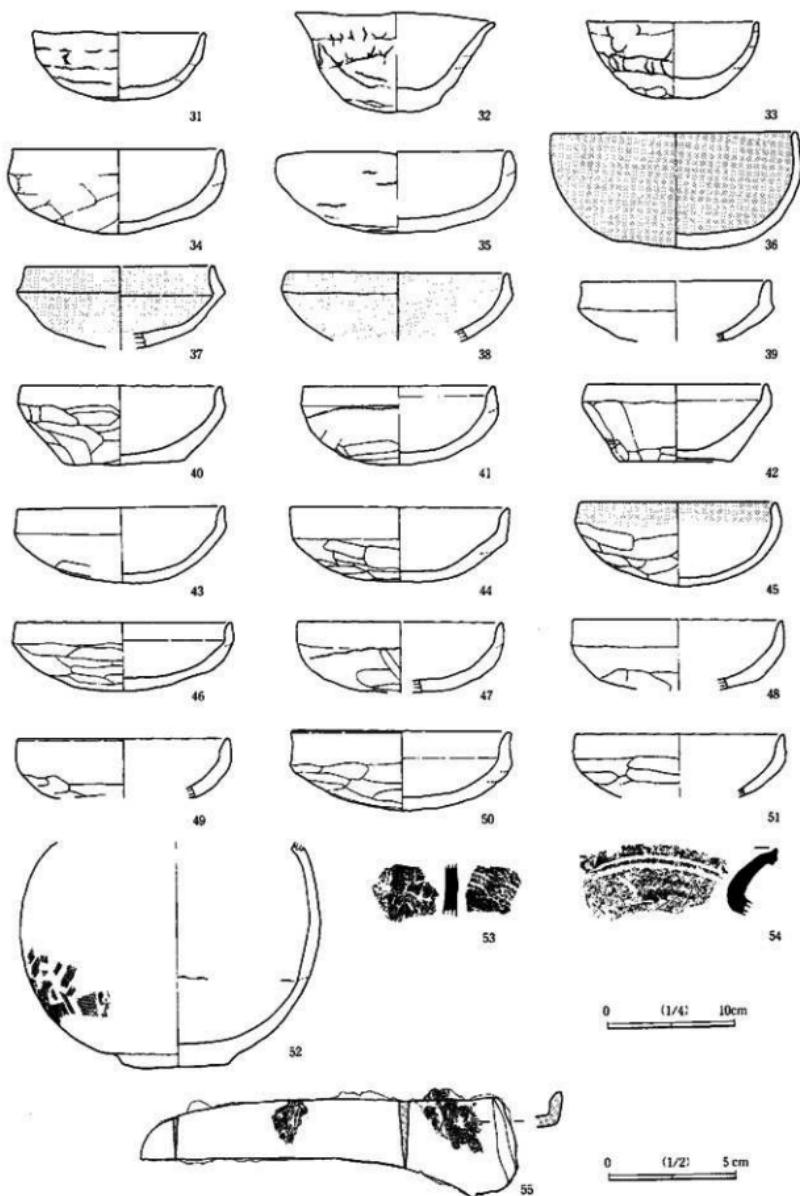
52は、土師器の壺の胴部以下の部分である。旧表土層からの出土である。胴部が球形を呈し、底部は平底を作り出している。外面は、ハケ目を施した後、ナデ及びヘラミガキが施される。内面はナデが施される。外面には炭化物が付着している。胎土は精緻で、焼成は良好である。

53と54は、須恵器破片である。表土中からの出土である。53は、壺胴部の一部と考えられる。外面にタタキ痕、内面に当て具痕が見られる。厚さは1cmである。色調は灰色で、焼成はやや不良である。胎土に白色砂粒を多く含む。54は、壺口縁の一部である。内面は、丁寧にヘラミガキが施される。厚さは8mmである。色調は、外面が黒灰色、内面がセピア色で、焼成は良好である。胎土に白色砂粒を多く含む。

55は、鉄製の鎌である。旧表土面からの出土である。柄を装着する端部を折り曲げている。一部木質が付着している。重量は、52.5gである。



第24図 1号墳出土遺物 (1)



第25図 1号墳出土遺物（2）

第11表 1号墳旧表土面出土土器観察表

番号	深度(cm)			土質	焼成	色調	透視度 (%)	調査		備考
	口径	側面	底面					外観	内面	
1	10.8	-	4.2	4.7	白色砂粒少量	良好	にぶい赤褐色	60	ナデ・底部周辺ケズリ	ナデ
2	11.2	-	4.9	4.9	白色砂粒少量	良好	にぶい赤褐色	60	ナデ・底部周辺ケズリ	ナデ
3	11.6	11.6	5	4.2	焼締	良好	にぶい褐色	90	ケズリ	ヘラナデ 強い模・異技術
4	11.8	-	5.5	4.5	焼締	良好	にぶい赤褐色	95	ナデ・底部周辺ケズリ	ナデ ユビおさえ
5	10.8	-	2.5	4.2	焼締	良好	にぶい褐色	50	ナデ・底部周辺ケズリ	ナデ 口縁赤形?
6	10.4	-	4.3	4.9	白色砂粒少量	良好	にぶい赤褐色	90	ナデ・底部周辺ケズリ	ナデ 丸底
7	10	-	4.3	4.7	焼締	良好	墨褐色	70	ナデ・底部周辺ケズリ	ナデ 丸底
8	9.2	-	2.6	4	白色砂粒少量	良好	にぶい赤褐色	35	ナデ・底部全体ケズリ	ナデ
9	10	-	5.4	4.1	焼締	良好	にぶい赤褐色	60	ナデ・底部周辺ケズリ	ナデ
10	9.8	-	3.4	4.2	白色砂粒少量	良好	にぶい赤褐色	60	ナデ・底部全体ケズリ	ナデ 丸底
11	9.6	-	3.1	4.6	白色砂粒少量	良好	にぶい赤褐色	50	ナデ・底部全体ケズリ	ナデ
12	10.2	-	4.8	3.6	白色砂粒少量	良好	にぶい赤褐色	50	ケズリ	ケズリ 捜合模なし
13	-	-	6.4	(4.1)	白色砂粒少量	良好	にぶい褐色	50	ナデ・底部全体ケズリ	ナデ
14	9.8	-	-	(4.0)	白色砂粒少量	良好	にぶい赤褐色	50	ナデ・底部周辺ケズリ	ナデ
15	10.6	-	4.6	4.8	焼締	良好	にぶい赤褐色	70	ナデ・底部全体ケズリ	ナデ 強い模
16	11.6	-	5	4.5	焼締	良好	にぶい赤褐色	70	ナデ・底部周辺ケズリ	ナデ
17	10.3	-	4.4	4.7	白色砂粒少量	良好	にぶい褐色・黒褐色	30	ナデ・底部全体ケズリ	ナデ
18	9.6	-	3.9	4.6	焼締	良好	にぶい赤褐色	50	ナデ・底部周辺ケズリ	ナデ
19	10.3	-	5.3	4.8	焼締	良好	にぶい赤褐色	60	ナデ・底部全体ケズリ	ナデ 強い模
20	9.3	-	4.5	3.9	焼締	良好	にぶい赤褐色	50	ナデ・底部周辺ケズリ	ナデ
21	10	-	5.1	5.2	白色砂粒少量	良好	にぶい赤褐色	95	ナデ・底部全体ケズリ	ナデ 丸底
22	10.5	-	5.7	5.1	焼締	良好	にぶい赤褐色	90	ナデ・底部周辺ケズリ	ナデ 強い模
23	9.6	-	4	4.8	白色砂粒少量	良好	にぶい赤褐色	70	ナデ・底部全体ケズリ	ナデ 丸底
24	10.4	-	5.5	4.2	白色砂粒少量	良好	にぶい赤褐色	90	ナデ・底部全体ケズリ	ナデ 丸底
25	10.6	-	4.5	5.7	焼締	良好	にぶい褐色	70	ナデ・底部全体ケズリ	ナデ 強い模・丸底
26	9.9	-	3.8	4.6	白色砂粒少量	良好	墨褐色	70	ナデ・底部全体ケズリ	ナデ 丸底
27	11.2	-	3.8	5	焼締	良好	にぶい赤褐色	50	ナデ・底部全体ケズリ	ナデ
28	-	-	5.6	(3.5)	焼締	良好	にぶい赤褐色	30	ナデ・底部全体ケズリ	ナデ
29	-	-	4.6	(2.4)	白色砂粒少量	良好	にぶい赤褐色	30	ナデ・底部全体ケズリ	ナデ
30	10.1	-	4.1	4.8	焼締	良好	にぶい褐色	50	ナデ・底部全体ケズリ	ナデ
31	10.2	-	5	4.1	白色砂粒少量	良好	にぶい赤褐色	25	ナデ・底部全体ケズリ	ナデ 強い模・丸底
32	11.6	-	5.8	5.9	白色砂粒少量	良好	にぶい赤褐色	95	ナデ・底部全体ケズリ	ナデ 丸底
33	10.1	-	3.3	4.5	焼締	良好	にぶい赤褐色	100	ナデ・底部全体ケズリ	ナデ 丸底
34	12.8	13	3	5	小石少量	良好	にぶい褐色	85	強いケズリ	ヘラナデ 丸底・異技術
35	13.6	14.1	3.9	4.8	焼締	良好	にぶい褐色・黒褐色	60	強いケズリ	ナデ 強い模
36	14.5	-	7.1	6.7	焼締	良好	赤褐色(赤彩)	60	ナデ	ナデ 構状・捲合模なし
37	11.2	12.2	-	(4.7)	焼締	良好	赤褐色(赤彩)	40	ナデ	ナデ 明確な後・捲合模なし
38	13.2	13.6	-	(4.0)	焼締	良好	赤褐色(赤彩)	20	ナデ	ナデ 強い模・捲合模なし
44	13	-	-	4.4	小石少量	良好	にぶい褐色	95	強いケズリ	ナデ 丸底・異技術
40	11.6	12.1	7.7	4.5	小石少量	良好	にぶい褐色	95	強いケズリ	丁寧ナデ 明確な後・捲合模なし
41	11.4	11.6	2.6	4.6	小石少量	良好	にぶい褐色	100	強いケズリ	ナデ 丸底
45	11.8	12.2	-	5	小石少量	良好	にぶい褐色・口縁赤形	80	強いケズリ	ナデ 強い模・丸底・捲合模なし
46	12.7	13	-	4	小石少量	良好	にぶい褐色・黒褐色	80	強いケズリ	ナデ・ミガキ 強い模・丸底・捲合模なし
47	12.2	-	-	4.1	小石少量	良好	にぶい褐色	40	強いケズリ	ナデ・ミガキ
43	12.2	12.4	-	4.5	焼締	良好	にぶい褐色	50	ナデ	ナデ 強い模・丁寧
48	12.4	12.6	-	(4.2)	小石少量	良好	にぶい褐色	30	ナデ・底部周辺ケズリ	ナデ 強い模
39	11.2	11.6	-	(3.5)	小石少量	良好	にぶい赤褐色	20	ナデ	ナデ 明確な模
49	12.6	-	-	(3.5)	小石少量	良好	にぶい褐色	30	ケズリ	ヘラナデ 強い模・捲合模なし
51	12.4	12.6	-	(3.6)	小石少量	良好	にぶい褐色	30	ケズリ	ナデ 捲合模なし
42	10.8	11.1	6.6	4.5	白色砂粒少量	良好	にぶい褐色・黒褐色	90	ケズリ	ナデ・ミガキ 明確な模
50	13	13.2	-	4.6	白色砂粒少量	やや不良	にぶい褐色	80	ケズリ	ナデ 明確な後・捲合模なし

2 主体部と副葬品

主体部（第26図、図版6）

粘土充填の木棺直葬であったと考えられる。主軸は、ほぼ南北である。直刀の切先を遺体の脚の方向と同じと考えるならば、北枕を想定することができる。黄白色粘土の量はあまり多くなく、比較的高い位置で所々ブロックとして出土している。特に、長軸の端部付近に多く用いられている。掘り方の規模は縦3.4m、横1.4m、深さ確認面から0.5mである。木棺の規模は縦3.1m、横0.8mである。木棺部分の覆土は、ロームブロックを含む暗黄褐色土が主体である。

副葬品（第27図、図版21）

木棺の南半分に集中して出土し、浮いたものは少ない。遺存していたものはすべて鉄器である。1のみ直刀で、2～16は鉄鎌である。

1は、ほぼ完形の直刀である。全長63.4cm、刃部52.7cm、茎部10.7cmである。茎に把の痕跡である木質が付着している。茎の断面は、刃側がやや細い台形を呈す。目釘孔は、目では確認できないが、X線では、明瞭に径5mmの孔が確認できた。鐔・鍔は、良好に残存し、身との間に木質が存在する。鐔断面は、刃側がやや尖り気味の梢円形を呈す。鍔の断面は梢円形を呈す。関は、両関で鍔の先端と同位置である。刃部中央に木質が薄くびつたり付着しており、鞘の一部と考えられる。重量は、339gである。

2は、3点の鉄鎌が銹着している。2-1は、五角形式の鉄鎌の茎尻を欠損したものである。茎には、少量の木質が残存し、断面は、横にやや広い長方形を呈する。棘状突起は、側面のみに突出するが、形状は錆のため不明である。範被の断面は、茎部に比べ扁平な長方形を呈す。範被長は、鎌身の約半分の2.1cmである。鎌身長は、4.2cmである。鎌身断面は、錆ぶくれのため断定はできないが薄い両丸造である。2-2は、片刃箭式の鉄鎌の茎尻を欠損したものである。茎には、木質が良好に残存し、その上端に口巻の痕跡がある。茎断面は、端部に近づくほど小さくなる正方形を呈す。棘状突起は、側面のみに突出する。範被長は、8.6cmで鎌身の約3.7倍である。鎌身の断面は片刃造である。2-3は、2-2と同型式であり、茎を欠損する。6と同一個体の可能性がある。

3は2点の鉄鎌が銹着している。3-1は、片刃箭式の鉄鎌である。茎を欠損する。鎌身は、弱い片闊の片刃箭で、断面は片刃造である。3-2は、長三角形式の鉄鎌である。茎を欠損する。鎌身断面は、両丸造である。逆刺の切り方は直線的で比較的深い。8と同一個体の可能性がある。

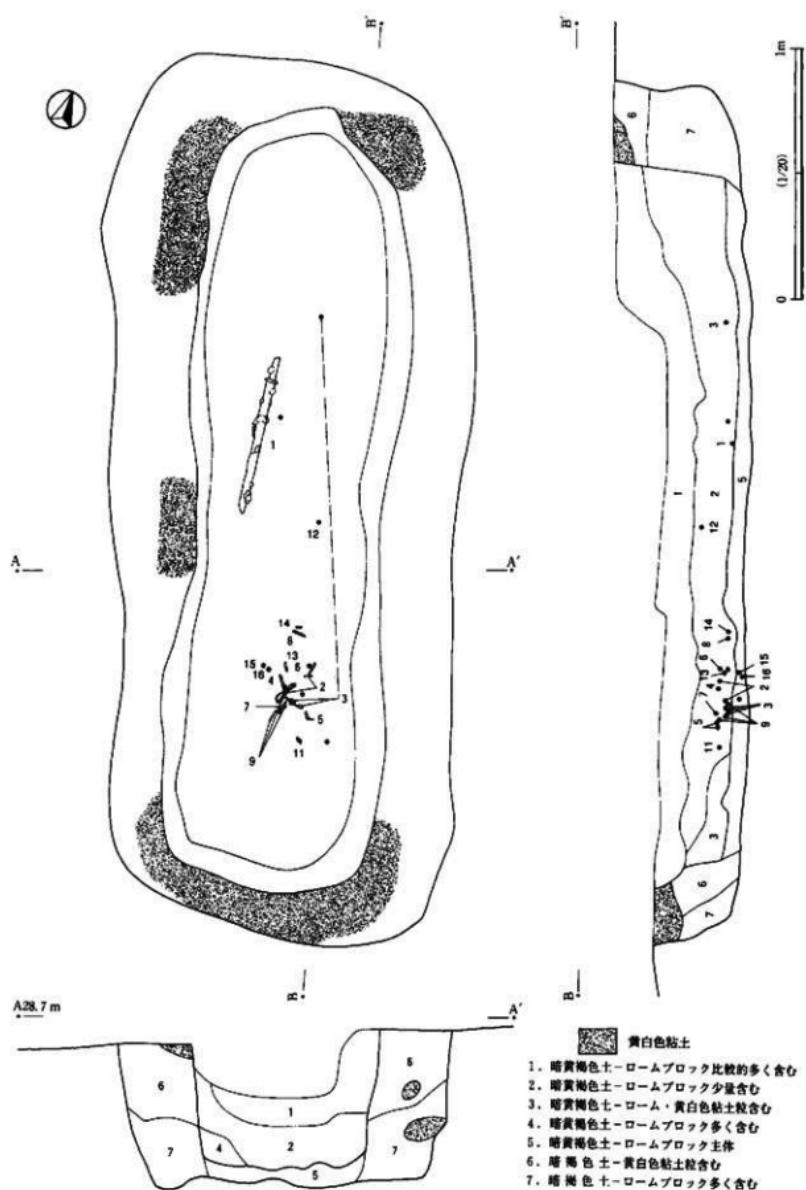
4は、片刃箭式の鉄鎌である。茎を欠損する。身闊がないため範被と鎌身との境がはっきりしない。鎌身断面は片刃造である。錆のためかもしれないが、平面形が刃のない側も若干膨らんでいる。7と同一個体の可能性がある。

5は、長三角形式の鉄鎌である。茎を欠損する。鎌身断面は両丸造である。しかし下面のふくらみが小さいので片丸造であった可能性もある。逆刺の切り方は直線的で比較的深い。3-2と同型式である。

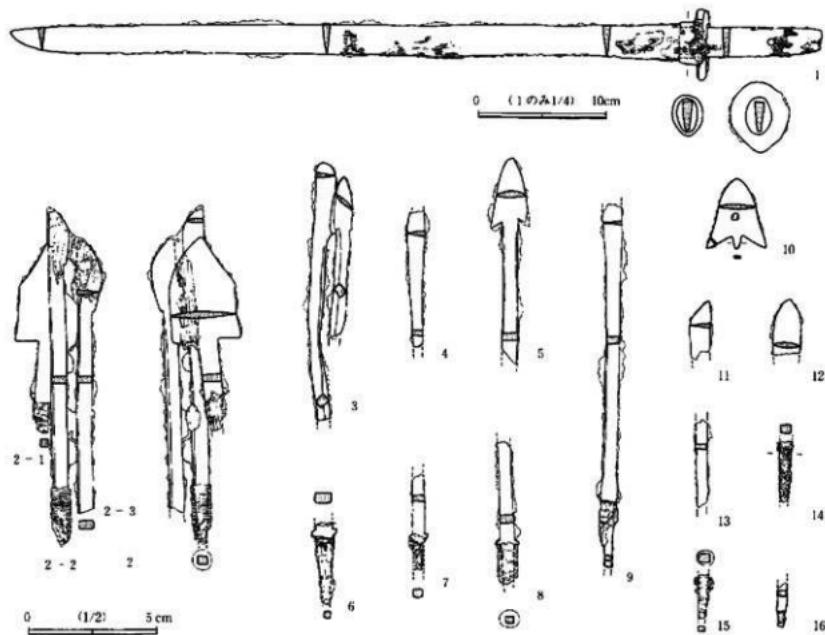
6は、鉄鎌の茎部である。良好に木質が残存する。木質の断面形は、ほぼ円形である。茎断面は、端部にいくほど小さくなる正方形である。棘状突起は、側面のみ突出する。2-3と同一個体の可能性がある。

7・8は、鉄鎌の範被から茎付近である。茎部分に木質が残存する。棘状突起は、側面のみ突出する。7は4と同一個体、8は、3-2と同一個体の可能性がある。

9は、片刃箭式の鉄鎌である。鎌身・茎の端部以外が残存する。茎の範被に近い部分で木質部が良好に残存する。木質の上に口巻の痕跡を残す。棘状突起は、全面に突出する。範被長は、10cmである。鎌身は



第26図 1号墳主体部



第27図 1号墳副葬品

無闇で、断面は片刃造である。

10は、長三角形式の鐵鎌である。鎌身中央に孔をもつ。茎は短く、先端は尖っている。断面は両丸造というよりは、薄いので平造であった可能性が高い。

11は、片刃式の鐵鎌である。鎌身のみの残存である。断面は、片刃造である。

12は、鎌身先端のみの残存なので断定はできないが、鑿箭式であろう。断面は、両丸造である。

13は、鐵鎌の莖被部分である。断面は横広の長方形を呈す。

14～16は、鐵鎌の莖部である。14は斜めに紐状のものを巻き付けている様子が明瞭である。15は、木質が良好に残存し、その上に横方向に口巻の痕跡があることから、莖被に近い部分が想定できる。16は、莖尻に近い部分と考えられる。

第3節 2号墳

1 墳丘と周溝

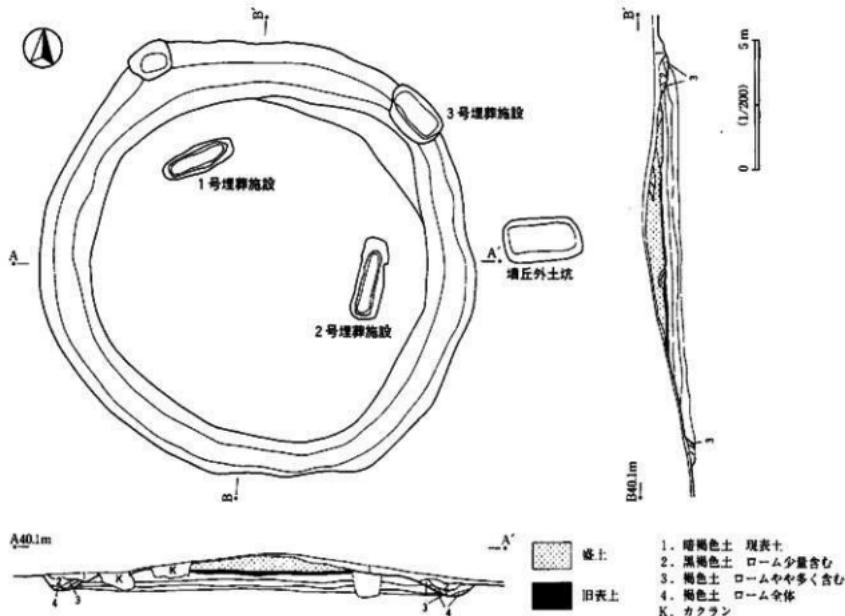
墳丘（第22・28・29図、図版7）

2号墳は、1号墳より一回り小さい墳丘径13mの円墳である。周溝をふくめると径17m、盛土の高さは旧表土上面から0.7m（現表土層を含む）である。墳頂平坦部ではなく、なだらかに傾斜している。2号墳に伴うと考えられる主体部は、4基検出された。中心から北西と東に寄った墳裾に2基、北東の周溝内に1基、墳丘外に1基存在する。

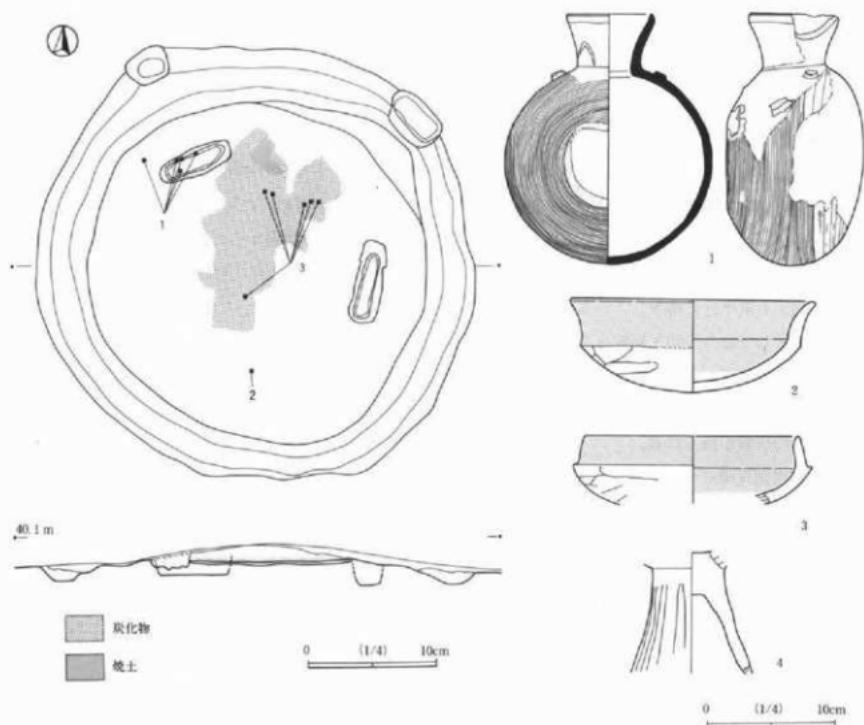
断面を見ると、1号墳と同様に、墳裾の部分から外側の地山を削り、墳丘を盛土している。一番深い周溝側で約0.4mの地山掘削が行われている。大部分がロームを多く含む暗褐色土である。部分的に見られる黒褐色土は、旧表土を中心とする盛土であると考えられる。また、旧表土層と同じレベルに堆積している焼土粒・炭化材を多く含む暗褐色土は、盛土をする前に旧表土面上で何らかの行為をした痕跡と考えられる。そのことは、平面的にも確認することができ、遺物も出土している。

周溝（第28図）

形状は、ややなだらかな皿状を呈し、深さは、周溝外現表土面から0.4m～0.7m、幅は平均2mである。覆土は、自然堆積と考えられる。第3層は、堆積状況から墳丘盛土が流れ込んだものと考えられる。



第28図 2号墳平面図・断面図



第29図 2号墳旧表土面平面図・投影図、出土遺物

出土遺物（第29図、図版20・24）

1は、須恵器提瓶である。旧表土面と同レベルの出土であるが、位置を考えると、1号主体部内であつた可能性が高い。色調は灰色であり、肩部には白い自然釉が付着する。焼成は良好である。肩部の吊り手はボタン状に退化している。頸部にはヘラ記号が見られる。体部の調整は、半分にカキ目、残り半分は回転ヘラケズリである。

2は、土師器の杯である。旧表土面からの出土である。胴部に明確な稜をもち、口縁は外反する。内外面とも一部に赤彩が施される。口縁はヨコナデ、体部外面はヘラケズリ後にナデとヘラミガキが所々施されるが、ヘラケズリによる砂粒の移動痕がかすかに残存する。内面調整はナデである。胎土には白色砂粒が含まれる。焼成は良好である。

3は、土師器の杯である。旧表土面からの出土である。胴部に明確な稜をもち、口縁は内傾する。内外面とも赤彩が施される。口縁はヨコナデで調整される。外面調整はヘラケズリ後にナデとヘラミガキが所々施されるが、ヘラケズリによる砂粒の移動痕がかすかに残る。内面調整はナデである。胎土には各種砂粒が含まれる。焼成は良好である。

4は、土師器の高杯の脚部の一部である。周溝覆土中層からの出土である。外面調整は、縦方向のヘラミガキである。杯部内面は、ヘラミガキで黒色処理を施している。脚部内面はヘラケズリ・ナデ、裾付近はヨコナデが施される。外面は赤彩されている。胎土には各種砂粒が含まれる。焼成は良好である。

2 主体部と副葬品

1号主体部（第30図、第12表、図版7・20・21）

墳丘盛土を掘り下げる際、IIb層上面で確認することができた。粘土充填の木棺直葬墓であると考えられる。明確な掘込み開始面は、不明であるため、盛土をする前に埋葬が行われた可能性も残されるが恐らく盛土後の埋葬であろう。掘り方の規模は、縦2.8m、横1.1m、深さは確認面から0.3mである。木棺の規模は、縦2.4m、横0.7mである。主軸はほぼ東西である。灰白色粘土は、東側に比較的多く充填されている。遺物の出土も東半分に集中している。

副葬品としては、玉類と錫製耳環と鉄器が出土した。

1～4は勾玉である。1は、緑色凝灰岩製で、丁寧な研磨が施されている。2～4はメノウ製で、孔周辺には穿孔時にできた割れが見られる。5～8は琥珀製の糸玉である。9は蛇紋岩（？）製の丸玉であり、全体に丁寧な研磨が施される。

10は、錫製耳環の一部である。遺存が悪く、ものとの形状が良く分からない。断面は、円形を呈す。

11は、柳葉式の鉄鎌である。鎌身の切先を欠損する。一部木質が残存する。木製の根拠みに当たると考えられる。木質下に断面の薄い茎があり、端部が欠損している。鎌身やや下部中央に径2mmの小孔がある。鎌身断面は、両丸造である。逆刺の切り方は、直線的でやや浅い。

12は、盤筋式の鉄鎌の鎌身部分である。身闊の部分はなだらかであり、闊無として扱って問題はないと考えられる。断面は、確實に片丸造である。

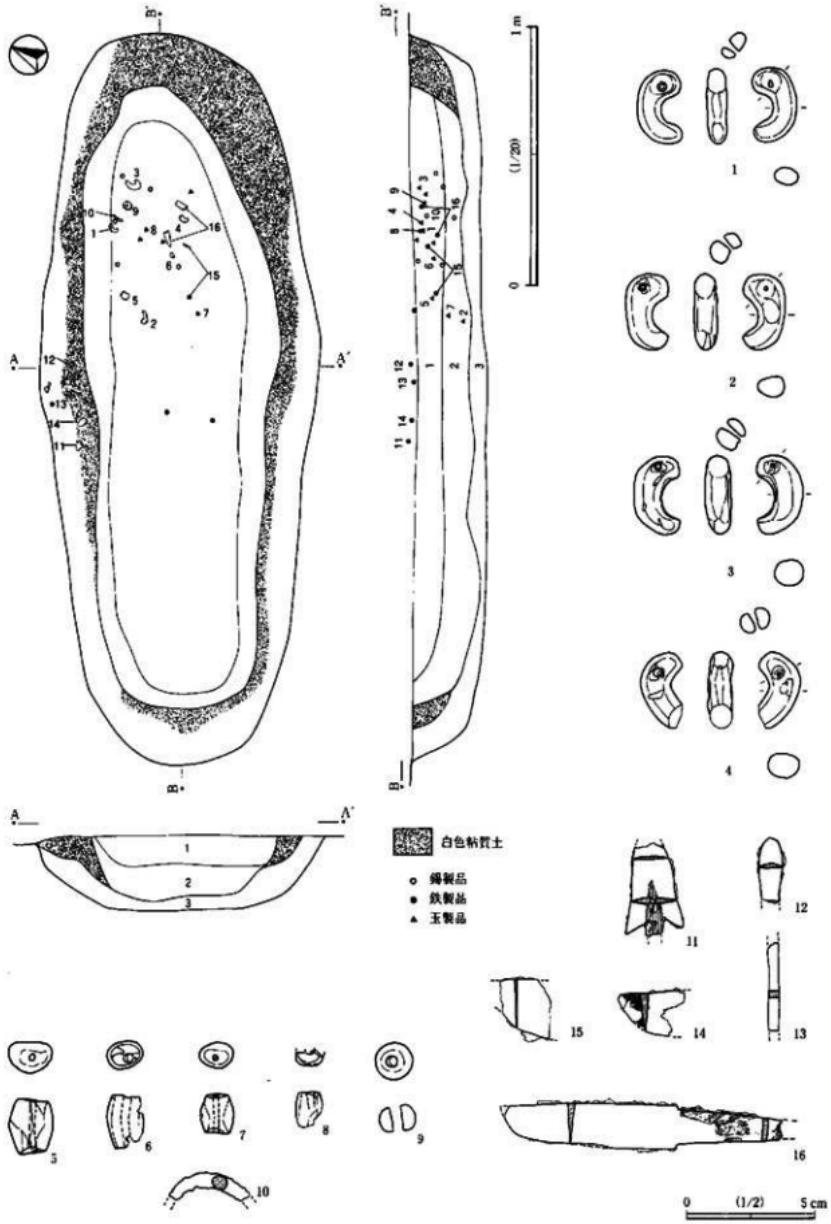
13は、鉄鎌の笠被の一部と考えられる。断面は、横に広い長方形を呈す。

14・15は、鉄製の刀子の切先部分である。14の背の厚みはあまりない。15は、切先に木質が残存するが、木目方向は一定しないため、鞘ではないと考えられる。

16は、鉄製刀子である。茎尻と切先の一部が欠損する。茎部に木質が付着し、把の残存と考えられる。断面は、長方形を呈す。闊は、背闊、刃闊ともにしっかりしているが、背闊が一部欠けている。

第12表 2号墳1号主体部出土玉観察表

番号	種類	材質	全長(mm)	幅(mm)	厚み(mm)	孔径(mm)	重量(g)	穿孔
1	勾玉	緑色凝灰岩	29	17	7.5	2~3.5	4.6	片面穿孔
2	勾玉	メノウ	29	16.5	9	1.5~2.5	5.6	片面穿孔
3	勾玉	メノウ	30	18	10	1~2.5	6.8	片面穿孔
4	勾玉	メノウ	29	16.5	9.5	1.5~2.5	5.4	片面穿孔
番号	種類	材質	全長(mm)	最大幅(mm)	最小幅(mm)	厚み(mm)	孔径(mm)	重量(g)
5	糸玉	琥珀	22	17	10.5	11.5	2	2.5
6	糸玉	琥珀	21	14	—	10.5	3	1.5
7	糸玉	琥珀	15.5	13	8.5	10	2	1.1
8	糸玉	琥珀	—	—	—	—	—	0.5
番号	種類	材質	全長(mm)	最大幅(mm)	最小幅(mm)	厚み(mm)	孔径(mm)	重量(g)
9	丸玉	蛇紋岩？	10	14.5	9	3.5	3.25	片面穿孔？



第30図 2号墳1号主体部・副葬品

2号主体部（第31図、図版7・21）

粘土充填の木棺直葬墓である。こちらの掘り込み開始面も1号主体部と同様に不明である。掘り方の規模は、縦3.1m、横1.0m、深さは確認面から0.3mである。木棺の規模は、縦2.5m、横0.5mである。主軸は、ほぼ南北である。粘土が棺の東側に多く充填されている。副葬品は、鉄器のみで、棺の中央付近から出土している。

1は、ほぼ完形の直刀である。全長39.3cm、刃部31.8cm、茎部7.5cmである。茎に木質が少量残存する。把の一部であろう。目釘孔は確認できない。茎断面は、長方形を呈す。鐔・鍔の残存は見られない。16が鍔の一部である可能性がある。鍔で明確ではないが、背闊、刃闊を有する。

2は、鑿箭式の鐵鎌である。鎌身の一部と茎尻を欠損する。茎には、良好に木質が残存し、断面は、ほぼ正方形を呈す。棘状突起は、側面には確実に突出する。上下面にもかすかに突出しているように見えるが、鎌の影響によるものかもしれないため断定はできない。鎧被断面は、横に広い長方形を呈する。茎闊付近でやや幅広になる。鎧被長は、鎌身の2.5倍以上で8.5cmである。鎌身は、なだらかな両闊で、断面は確実に片丸造である。

3は、鑿箭式の鐵鎌である。鎌身の一部と茎尻を欠損する。茎には、比較的良好に木質が残存し、断面は、ほぼ正方形を呈す。棘状突起は、各面に突出する。鎧被長は、鎌身の3倍以上で8.2cmである。鎌身は、ややゆるやかな両闊で、断面は片丸造であるが、やや薄い。

4は、鑿箭式の鐵鎌である。鎌身と鎧被の一部が残存する。身闊は、なだらかであり闊無と考えられる。鎌身断面は、片丸造と考えられるが鎌がひどく、断定はできない。

5は、鑿箭式の鐵鎌の鎌身と考えられる。断面は、片丸造である。繊維質のものが一部付着している。

6は、五角形式又は鑿箭式の鐵鎌の鎌身である。角が張るので五角形式とするべきかもしれない。断面は、片丸造である。繊維質のものが付着している。胡籠の一部である可能性も考えられる。

7～10は、鐵鎌の鎧被の一部と考えられる。断面は、横広の長方形である。

11～14は、鐵鎌の鎧被から茎の部分である。11は茎に、木質が良好に残存し、口巻も明瞭に確認できる。棘状突起は、側面にのみ突出する。鎧被断面は、横広の長方形を呈すが、剥離が著しく、本来の形状を残す部分は、わずかである。12は茎に木質が少量残存する。棘状突起は、全面に突出する。13の棘状突起は、側面のみに突出する。14は、茎に互い違いに巻き付けた口巻の痕跡がある。断面は、ほぼ正方形である。棘状突起は、側面にのみ突出する。鎧被断面は、茎断面に比べ幅広になっている。

15は、鐵鎌の口巻に当たる部分と考えられる。断面は、円形である。

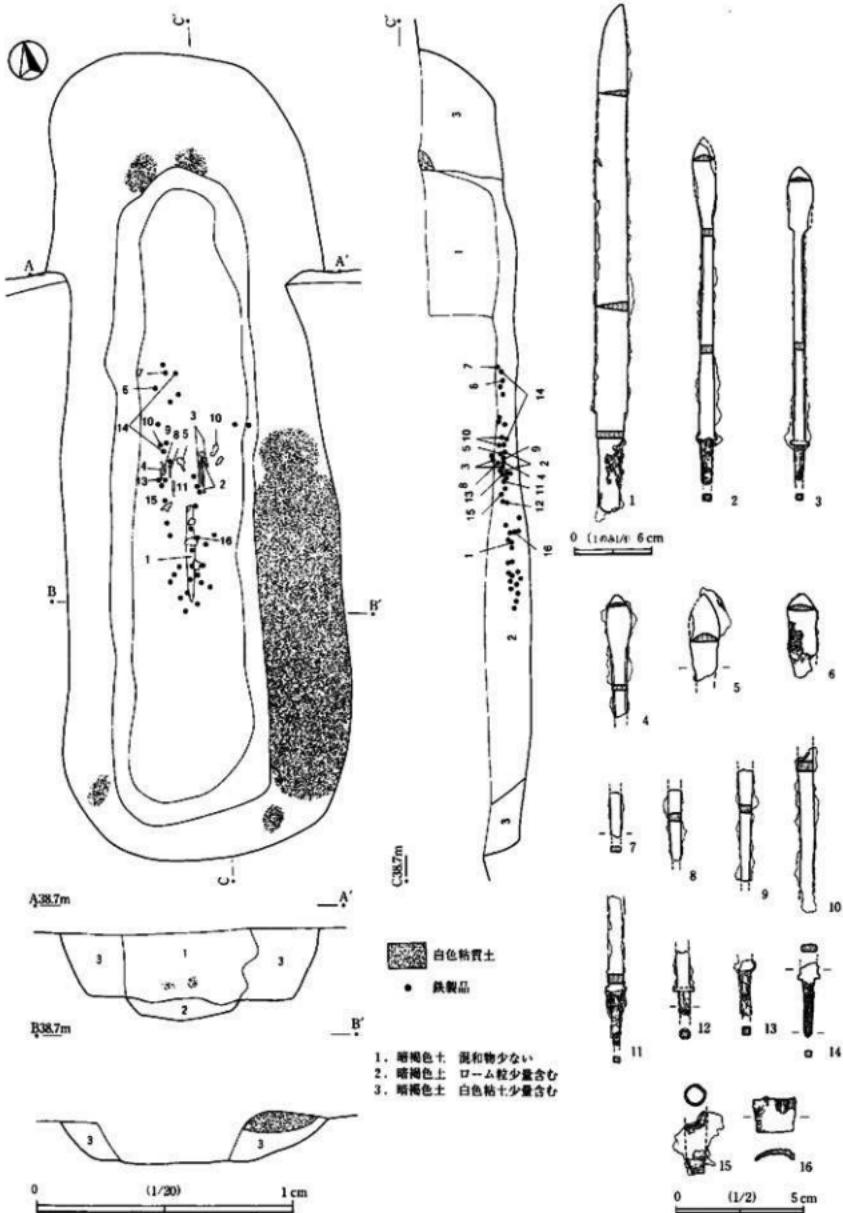
16は、1の直刀の鍔の破片と考えられる。外内面に少量の木質が付着している。

3号主体部（第32図、図版6）

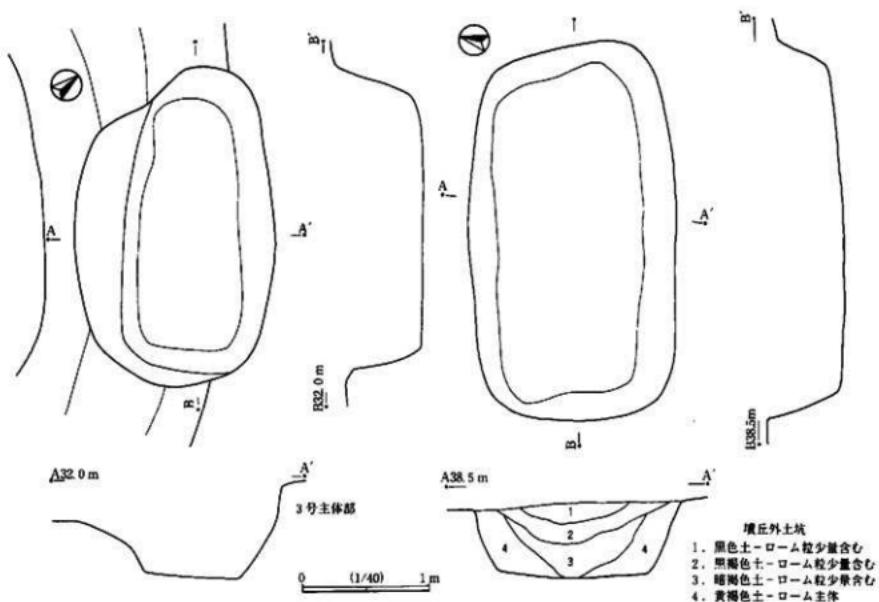
周溝の外壁に沿って掘り込まれた土坑である。規模は縦2.5m、横1.2m、深さは、周溝外現表土面から0.8mである。副葬品は検出されなかったが、周溝に沿って位置している点と方形のしっかりした掘り方を有する点から2号墳に伴う施設と考えられる。

墳丘外土坑（第32図、図版6）

2号墳周溝東1.4mに位置する。主軸をほぼ東西にし、縦3.0m、横1.6m、深さは確認面から0.6mである。底面は、凹凸がなくほぼ水平である。覆土は、レンズ状堆積である。遺物は出土しなかった。2号墳に近接している点と形態が3号主体部と同様であるため、2号墳の墳丘外主体部の可能性がある。



第31図 2号墳2号主体部・副葬品



第32図 2号墳 3号主体部・墳丘外土坑

第4節 3号墳

1 墳丘と周溝

墳丘 (第33~35図、図版8・9)

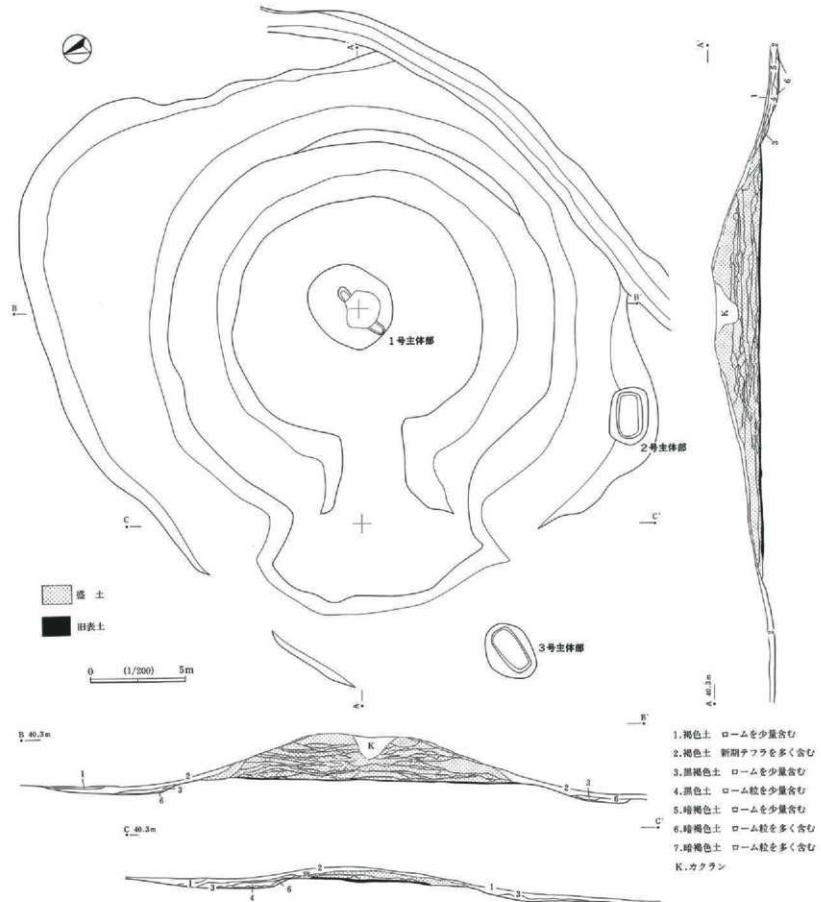
規模は墳丘主軸長24.5m、後円部墳丘径21.0m、くびれ部幅9.0m、前方部前端幅11.0m、後円部墳頂部分径4.0mの前方後円墳である。墳丘は、二段築成で、後円部墳頂での墳丘高は、旧表土面から2.5m（現表土層を含む）である。前方部は、後円部に比べて極端に低く、前方部平坦面の高さは、旧表土面から0.7m（現表土層を含む）である。前方部は、弧を描くように短く張り出している。

墳丘中位のテラス状になっている部分からは埴輪列が検出された。しかし、墳丘南側のテラス相当部分は、他の部分に比べて平坦の度合いが弱く、崩れてしまっているため原位置を留めた埴輪列を検出することはできなかった。ただし、この付近にも、墳丘裾部分では、埴輪片が大量に出土していることから後世の搅乱によって埴輪列が消失した可能性のほうが強いと考えられる。

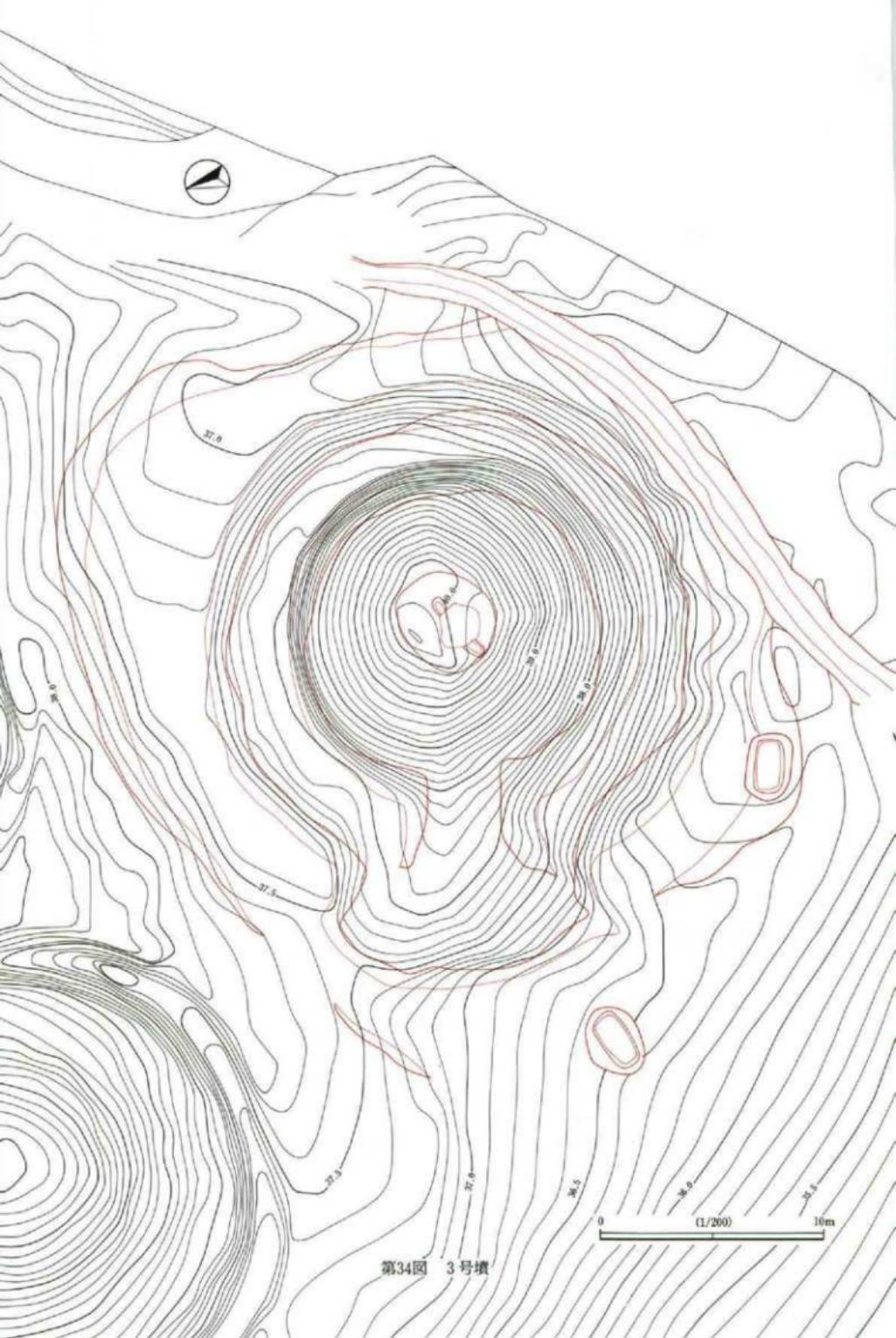
旧表土面では、1・2号墳と同様に炭化材・焼土の分布が見られ、墳丘築造前のなんらかの行為を想定することができる。後円部の中心からやや南西に板状炭化材が出土している（第35図、図版10）。また、盛土内にも一部に炭化物・焼土層の堆積を確認することができた。

周溝 (第33図)

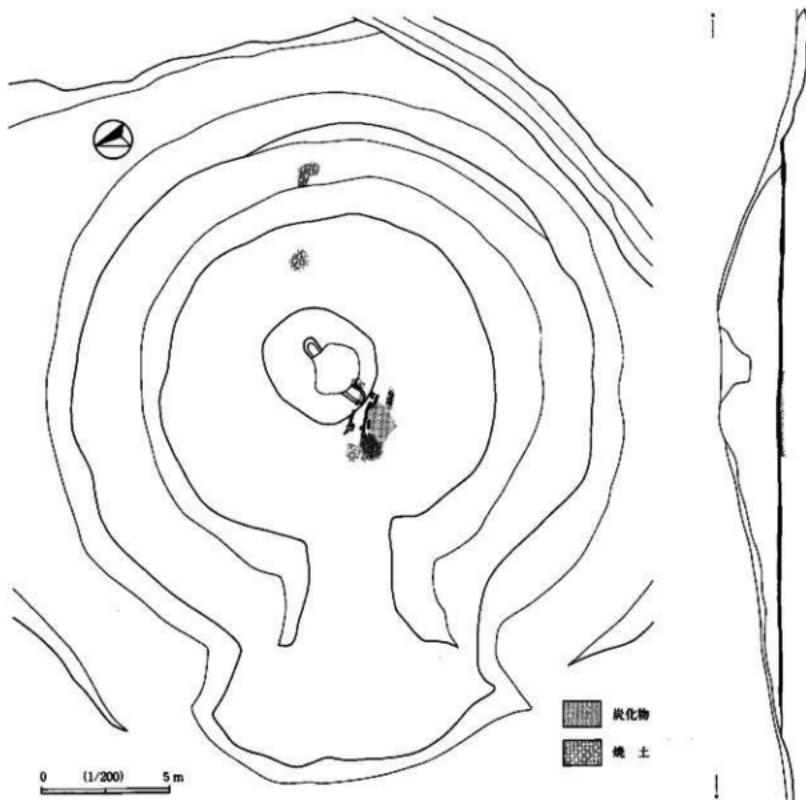
墳丘周辺の周溝と考えられる部分の掘込みは、明瞭でなく、浅くだらだらと低くなった部分があり、それを周溝と認定した。後円部側は、ほぼ円形に取り巻くが、前方部側では、ほとんど立上がりを確認する



第33図 3号墳平面図・断面図



第34図 3号墳



第35図 3号墳旧表土表面平面図・投影図

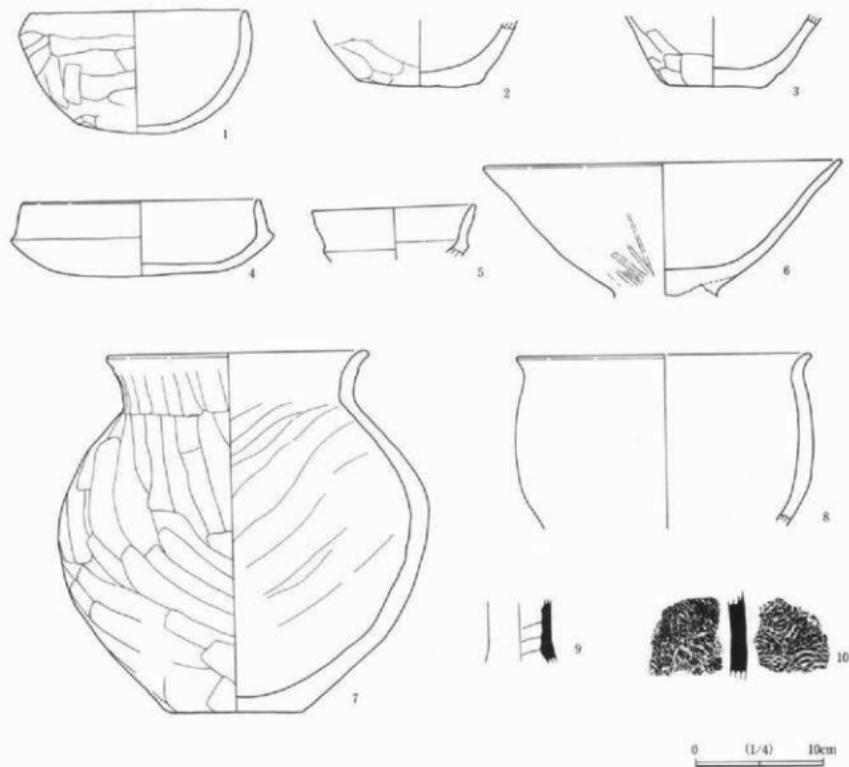
ことができなかった。後円部北側の周溝の規模は、幅7.0m、深さ0.4m（現表土層を含む）である。覆土は浅く、明確な堆積状況は確認することはできない。

出土遺物（第36図、図版20・24）

1は、土師器の椀である。旧表土層中から出土した。1/4が残存する。口縁部がやや内湾する。口縁部下に明瞭な稜が作られる。外面調整は難なヘラケズリ、底面もヘラケズリによって丸底に仕上げている。内面調整は強いナデ、口縁部はヨコナデが施される。色調は、全体にやや黒みを帯びたにぶい黄褐色である。胎土には、白色砂粒を多く含む。

2は、土師器甕の底部である。旧表土層からの出土である。外面調整はヘラケズリ、底面もヘラケズリによって平らにしている。内面調整は剥落気味であるがヘラケズリ及びナデが見られる。色調は、外面はにぶい赤褐色であり、内面は黒褐色である。胎土には白色砂粒を多く含む。焼成はやや不良である。

3は、土師器甕の底部である。旧表土層からの出土である。内外面の調整はともにヘラケズリ、底面もヘラケズリによって平らにしている。色調はにぶい褐色であり、内外面に一部黒斑が見られる。胎土には、



第36図 3号墳出土土器

白色砂粒を多く含み、1mm～2mm程度の小石も目立つ。

4は土師器の杯である。2号主体部の覆土中層からの出土である。外面口縁部はヨコナデ、体部はヘラケズリ、内面はヘラミガキで調整されている。外面の口縁部と内面は黒色がまだらに見られ、漆処理されていたと考えられる。胎土には白色砂粒を少量含む。焼成は良好である。

5は、土師器の杯である。旧表土層から出土した。口縁部1/3が残存する。口縁部下に明瞭な棱がある。口縁部はヨコナデが施される。色調は黒褐色である。胎土には白色砂粒を多く含む。焼成は良好である。

6は、土師器の高杯杯部である。盛土内からの出土である。杯部のほぼ1/3が残存する。口縁端部が、わずかに外反する。外面調整は、ヘラケズリ後丁寧なナデが行われ、一部ヘラミガキが見られる。内面調整はナデ、口縁部はヨコナデが施される。内外面ともに赤彩されている。胎土には各種砂粒を多く含む。焼成は良好である。

7は、土師器の壺である。旧表土層から出土した。口縁部1/4とそこにつながる胴部上半を欠損する。外面調整はヘラケズリで、方向は胴部下半が上から下へ、胴部上半が下から上へと施している。内面調整は

は、強いヘラナデ、口縁部はヨコナデが施される。底部は、平底でヘラケズリ調整が行われている。色調は、赤みを帯びた褐色で所々黒斑が見られる。胎土には、各種砂粒を多く含み、特に白色砂粒が目立つ。

8は、土師器の壺である。旧表土層から出土した。口縁部1/4とそこにつながる胴部上半を残存する。口縁下のくびれが弱く、だらっと胴部へつづいている。外面調整は、ヘラケズリ後ナデが所々行われている。方向は、一定しない。内面調整はナデ、口縁部は胴部のナデの後にヨコナデが施される。色調は外面がにぶい褐色で、内面が黒色である。胎土には、白色砂粒を多く含み、1mm～2mm程度の小石を微量含む。焼成は普通である。

9は、須恵器の長頸壺頸部である。外面には自然釉がかかり、内面には削り痕が明瞭に残る。色調は、灰色である。胎土には黑色微粒子を含む。焼成は良好である。東海産の可能性がある。

10は、須恵器の壺胴部6cm四方の破片である。外面叩き目、内面に当て具痕を残す。色調は、灰色である。胎土には、各種砂粒を少量含む。焼成は良好であるが、外面は、剝落気味である。

2 主体部と副葬品

3号墳に伴うと考えられる主体部は、墳頂部に1基と周溝内に2基検出されている。副葬品は、墳頂の1号主体部からのみ出土した。

1号主体部（第37図、図版9・20・22）

中央が破壊されているため形状の詳細は不明である。盗掘されたためと考えられる。盗掘坑下面中央に樹根があり、炭化している。推定規模は長軸3.2m、短軸0.5m、深さは確認面から0.25mである。覆土に粘土のブロックと粒子を含むことから粘土充填の木棺直葬であったと考えられる。搅乱のため、規模は掘り方のみが確認でき、木棺の規模を確認することはできなかった。

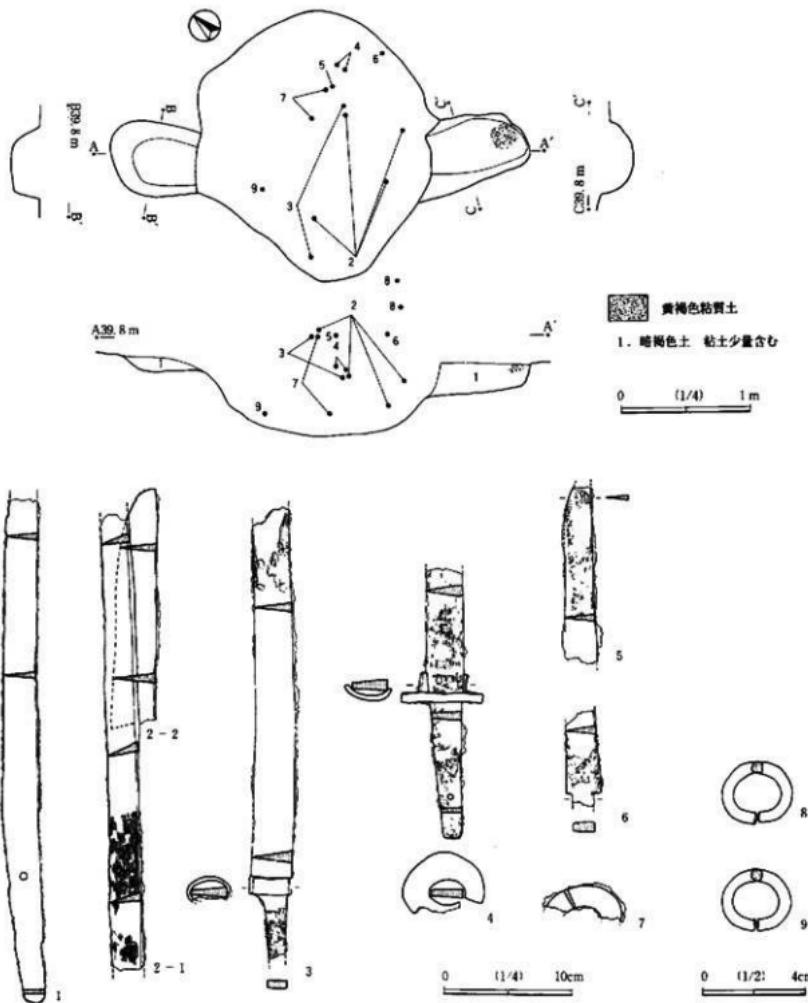
1号主体部の副葬品として鉄刀と銅製の耳環が出土した。すべて搅乱穴内からの出土で、原位置を留めるものはない。

1は、墳頂で表採された直刀である。切先をわずかに欠損する。茎には、かすかに木質が残存する。茎断面は、長方形である。径5mmの目釘孔が存在する。背側に開のような段差があるが、刃側には確認することはできない。鐸・鍔は、痕跡すら存在しない。刃部よりも茎部のほうにやや反りが見られる。

2は、直刀が2点鈎着している。切先の向きを同じにし、同じ部位が鈎着していることから並べて副葬していたことが分かる。2-1は、切先と茎部分を欠損する。先端は、切先に近い部分であると考えられ、長さから推定すると4が同一個体である可能性がある。茎に近い部分に木質の残存が見られ、恐らく、鞘の一部であろうと考えられる。2-2は、直刀の先端部分である。実測面の裏面には木質が少量付着している。3と同一個体の可能性がある。

3は、切先と茎尻を欠損する。2-2と同一個体である可能性がある。茎には、木質が残存する。茎断面は、長方形である。茎尻に向かってだんだん細くなっていく。鐸は残っていない。鍔は、半分ほど残存している。鍔と身との間に木質が存在する。関は、両関で位置は鍔の先端の部分と一致する。刃部には、一定方向の木質が残存し、鞘の可能性を考えられる。

4は、直刀の鐸付近である。茎には、木質が残存する。茎断面は、刃側がやや細い台形を呈す。茎尻に近い位置に径4mmの目釘孔が穿たれる。鐸が3分の2、鍔が半分残存する。それぞれ身との間に木質が存在する。関は、両関で位置は鍔の先端の部分と一致する。刃部にも木質が付着し、鞘の可能性を考えられる。2-1と同一個体である可能性がある。



第37図 3号墳1号主体部・副葬品

5は、直刀の刃部の一部である。良好に木質を残存する。切先の端部を欠く。6と同一個体の可能性がある。

6は、直刀の関付近である。茎部分は、ほとんど残存しないが、断面は、ほぼ長方形であることが分かる。関は、背・刃関とも明瞭で、深く直角に切り込まれている。刃部には、良好に木質が残存する。木質

の残存状況、刃幅などを考えると5が同一個体であることが分かる。

7は、鐸の一部である。断面は、身に近い部分のほうが若干薄い。本来、6に伴っていたものと考えられる。

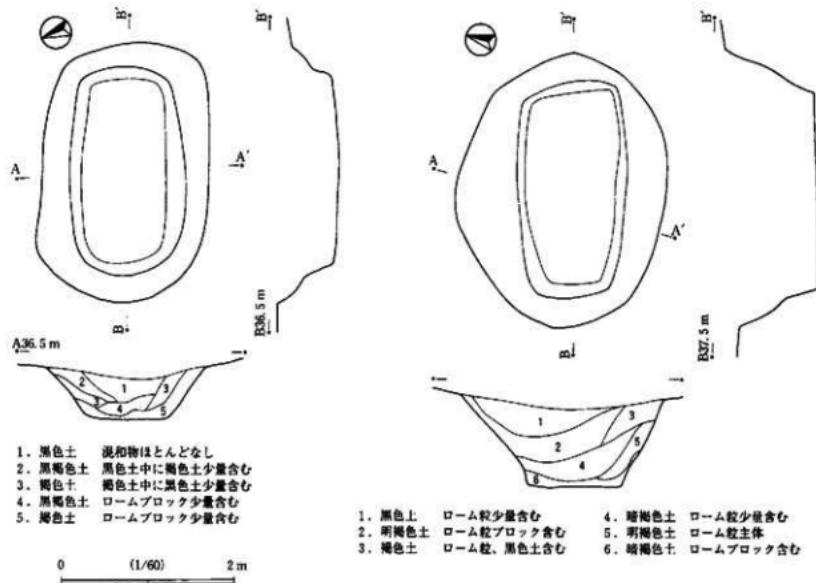
8・9は、銅製の耳環である。断面は円形を呈す。重量は、8が8.8g、9が7.8gである。

2号主体部（第38図、図版9）

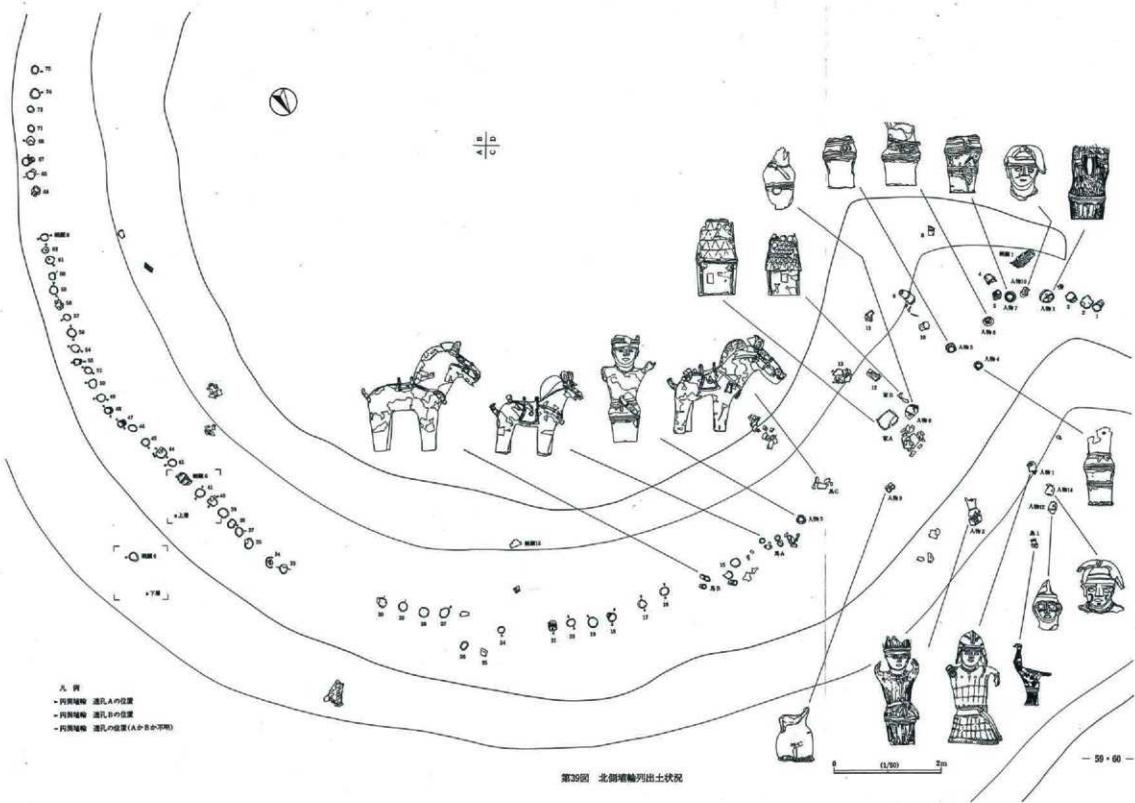
くびれ部南側の周溝外壁に沿って位置する土坑である。掘り方も方形でしっかりしている点から3号墳に伴う主体部であると認定した。主軸をほぼ東西にし、長軸2.4m、短軸1.3mである。深さは、確認面から0.6mである。木棺直葬と考えられる。覆土に粘土などは見られなかった。副葬品は出土しなかった。覆土中層から土器部器（第36図4）が出土しているが、主体部に直接伴うものかどうかは断定できない。

3号主体部（第38図、図版9）

前方部前端側の周溝ははっきりしないが、この土坑も周溝に沿って位置していると考えられ、しっかりした方形の掘り方を有していることから、3号墳に伴う主体部と認定した。主軸をほぼ東西にし、長軸2.5m、短軸1.3mである。深さは、確認面から0.9mである。木棺直葬と考えられる。覆土には粘土などは見られなかった。副葬品は出土しなかった。



第38図 3号墳2・3号主体部



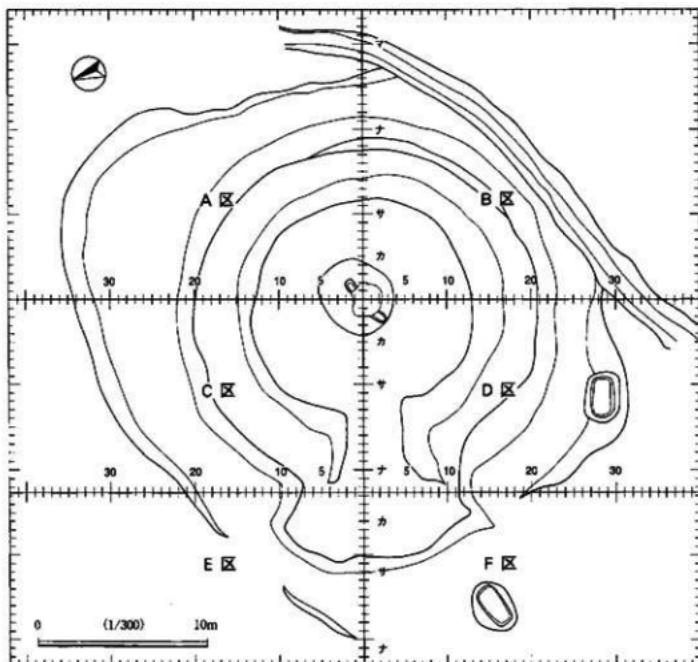
3 墳輪

出土状況（第39～43図、図版10）

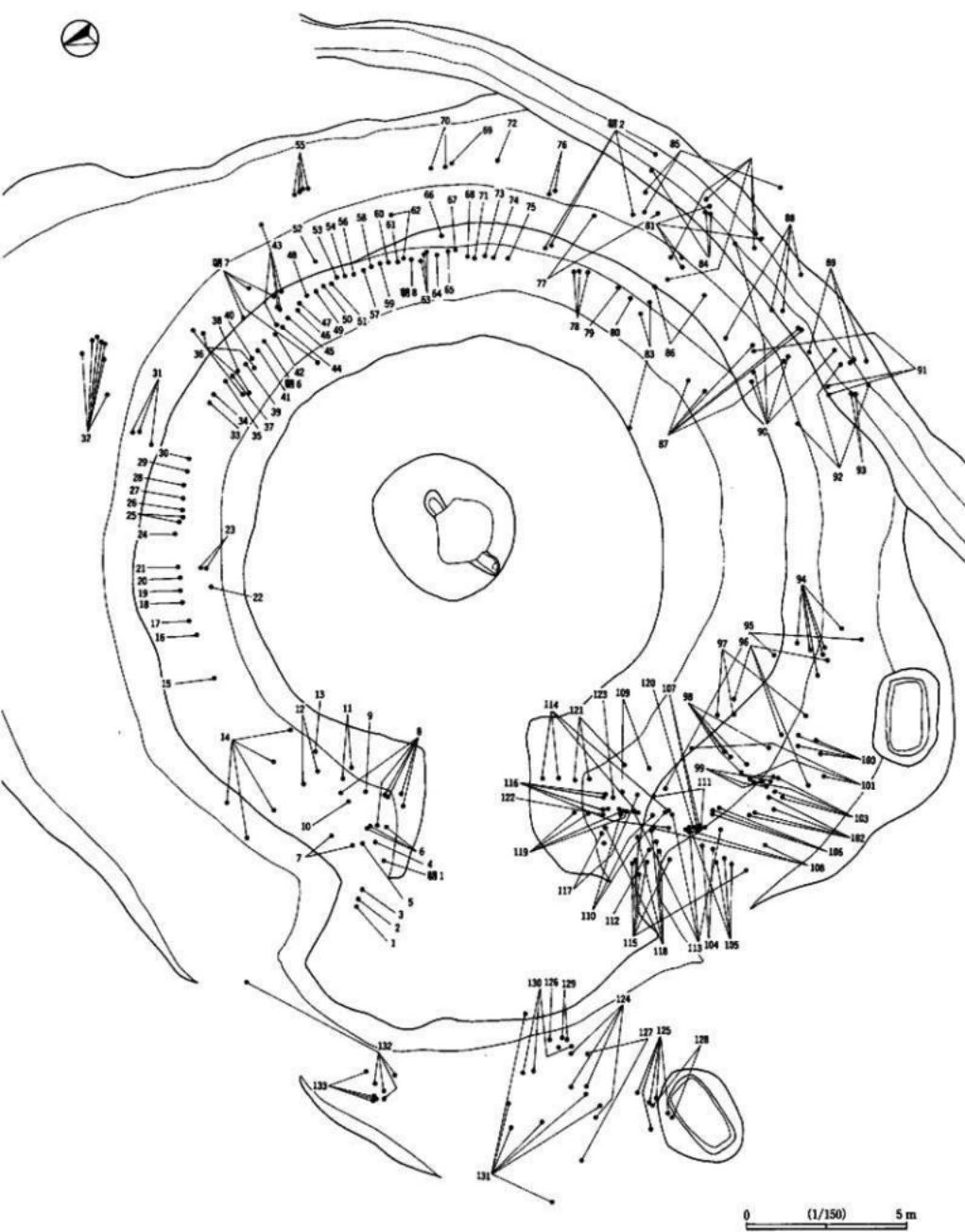
埴輪片は総量775.16kgと多量に出土した。そのため、3号墳を50cmのグリッドに区画し、原位置を留めていない細かい埴輪片に関しては、この単位で一括で取り上げることにして発掘を進めた。古墳をまず、A, B, C, D, E, Fの6区に分割し、墳丘主軸にアイウエオ～、直交する軸に1, 2, 3～と50cmごとに番号を付け、取り上げる際にこれら3つを組み合わせることによりグリッド番号とした。たとえば、「A区コ10」といった表記になる。

埴輪は、墳丘のテラス状になった部分から比較的良好に埴輪列となって出土した。特に墳丘北側で原位置を留めているものが多い。反面、墳丘南側はほとんど原位置を留めるものはなく、くびれ部に数個体が確認できただけである。しかし、基部を含む埴輪片の出土分布を見ると、墳丘全体から出土しており、埴輪列は全周していたと考えられる。

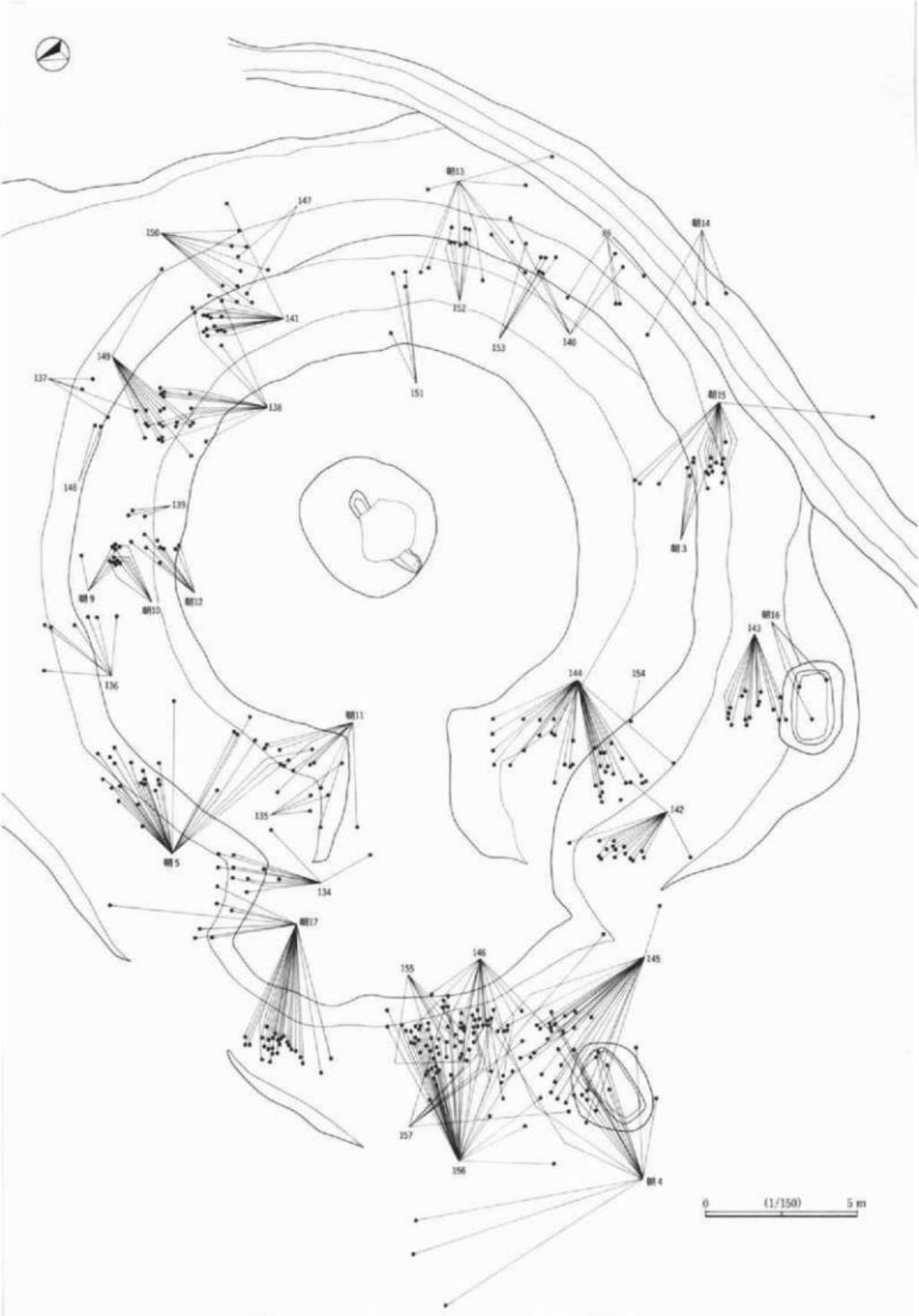
埴輪列の組成はほとんどが2条3段の円筒埴輪である。その中に混じるように3条4段の円筒埴輪や朝顔形の円筒埴輪が樹立されていたことが明らかになった。原位置で出土した円筒埴輪は、透孔が墳丘側と周溝の外側に向くように樹立されたものがほとんどであり、意識的に行われていたものと考えられる。



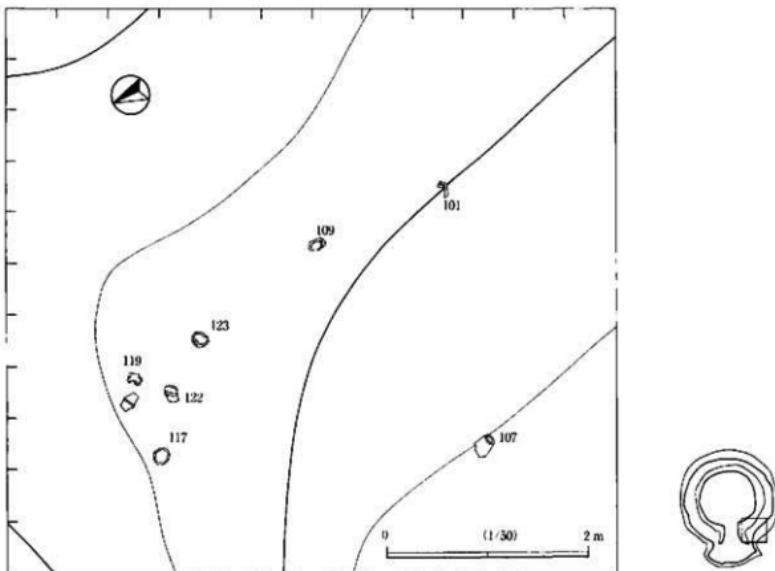
第40図 3号墳グリッド分割図



第41図 基部を含む円筒・朝顔形埴輪出土位置図



第42図 基部を含まない円筒・朝顔形埴輪出土位置図



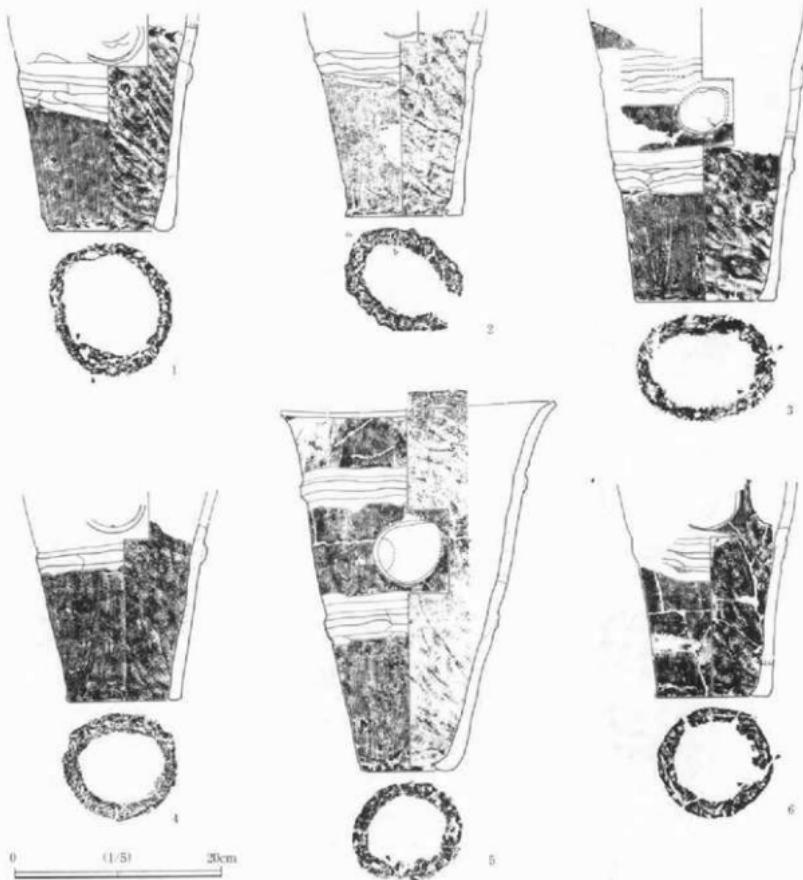
第43図 南側くびれ部埴輪列出土状況

形象埴輪は、北側くびれ部から集中的に出土しており、樹立位置が特定されていたことを確認することができた。人物埴輪・家形埴輪は周溝外側に正面を向けて、馬形埴輪は体側面を向けて樹立されていた。鳥形埴輪の向きは不明である。人物埴輪1・4・5・7・9は原位置を留めて出土した。馬形埴輪は、3体出土し、馬Aと馬Bは、原位置を留めていた。馬Cは、原位置こそ不明であるが、基部出土位置を考慮すると、3体並んで配置されていたと考えられる。家形埴輪は、2棟とも原位置で出土した。それぞれ、わずかに30cmほど離れた位置に並べて配置されていた。鳥形埴輪は、全容を捉えられるものは2体のみである。基部が細いため原位置で出土したものはないが分布はほぼ集中しており、くびれ部やや前方部寄りに樹立されていた可能性が高い。

円筒埴輪（第44～65図、図版25～34・36）

円筒埴輪は、実測可能個体が157本である。しかし、基部から口縁部にかけて復元実測を行えたものは22本で全体の7%と少なく、ほとんどが基部を含む下半分のみの個体である。実測個体間の直接の接合関係は認められなかったが、同一個体を含む可能性は否めないため、実際樹立していた個体数とは厳密には一致しないと考えられる。

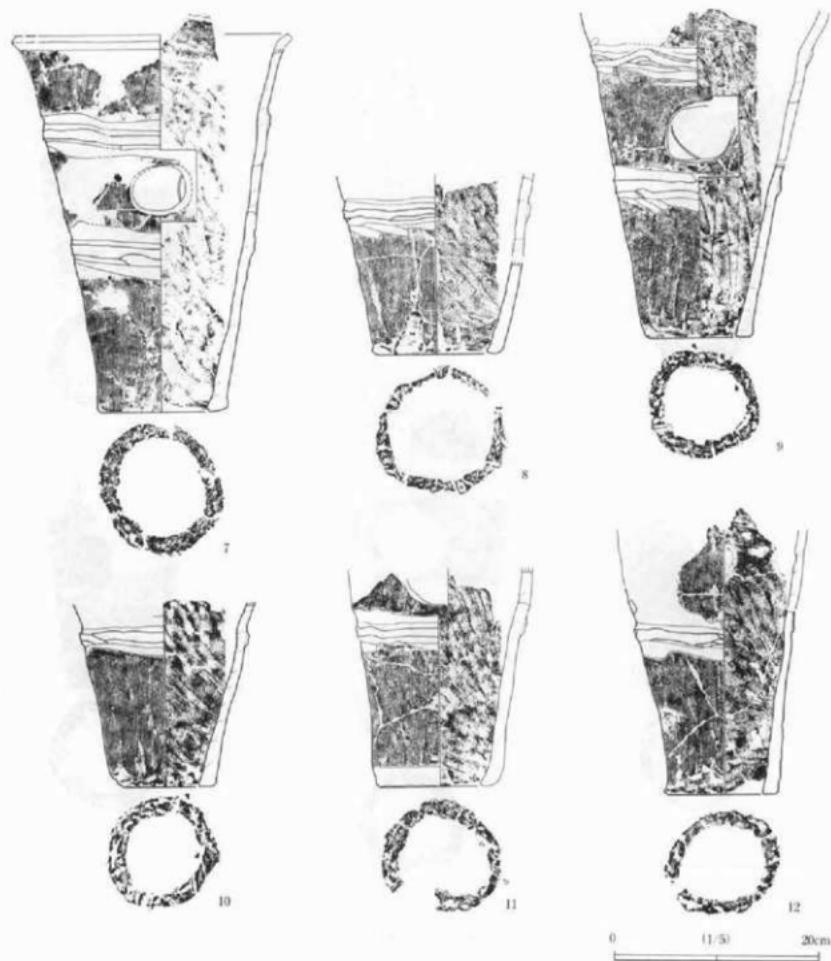
基本形は2条3段であり平均器高36.4cm、底部径10.7cm、口縁部径27.3cmである。3条4段と考えられる円筒埴輪は、断定できないものも含めて10本を数える。平均器高は38.7cm、底部径12.1cm、口径31.5cmである。



第44図 円筒埴輪（1）

成形方法 成形方法はほとんど共通である。基部成形の粘土紐は、巻き上げる粘土紐（約2cm）と同様の太さが考えられ、いわゆる粘土帯（太い粘土紐）でしっかりと基部を作っていない。基部内面は、ナデで丁寧に基部上部との接合痕跡が消されているため、基部のみで完結していたものか、基部から続きたる粘土紐で1段目以降を成形していったものは断定できない。基部の接合方法は、本体を倒立させて見て「の」の字と「逆の」の字接合がある。接合の判明したものは、86本である。「の」の字接合が可能性のあるものも含めて18本、「逆の」の字接合が69本である。実測図の基底面の拓本に、接合位置が確実に分かることには黒塗りの三角マークを、可能性のあるものには白抜きの三角マークを示した。

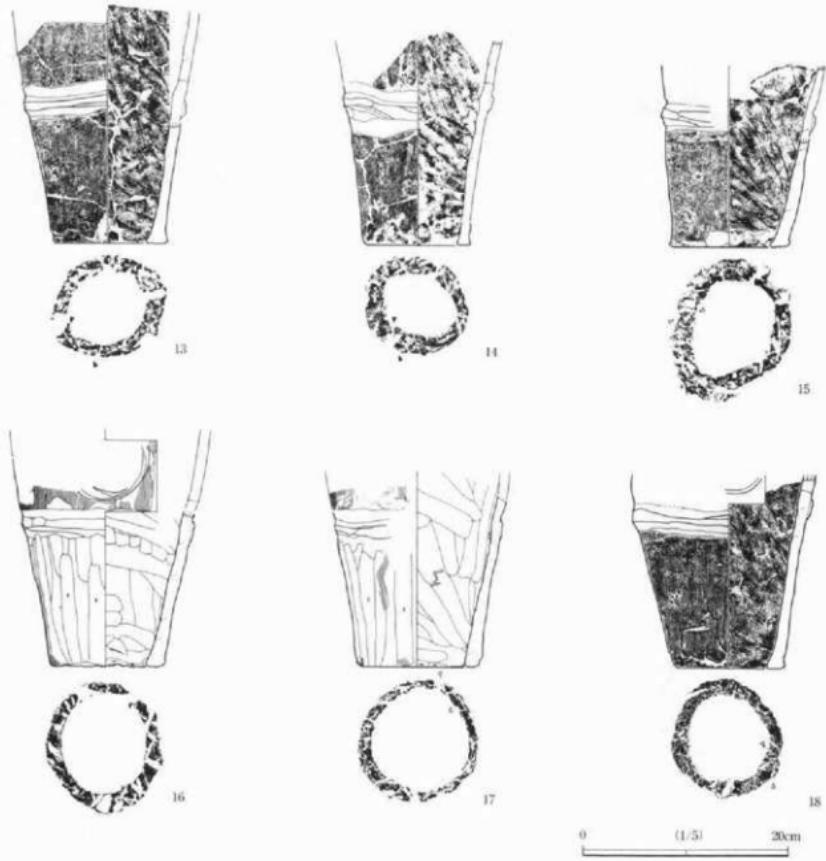
基部から上の成形は、内面観察によると明らかに粘土紐接合痕が斜めに上がっているものがあり、巻上



第45図 円筒埴輪（2）

げによるものと考えられる。しかし、ほぼ水平に接合痕跡が認められるものがあり、輪積みで成形したもののがあった可能性がある。すべてが粘土紐巻上げであったかどうかは、断定できない。上から見て、反時計回りに巻き上げている個体が多い。

基部から口縁部まで一気に成形したかどうかは、検証が困難であった。内面観察によると突帯の高さでユビナデの一単位がたどれるものがあり、1段ずつ画期を設け、乾燥期間にあてて成形していくた可能性がある。

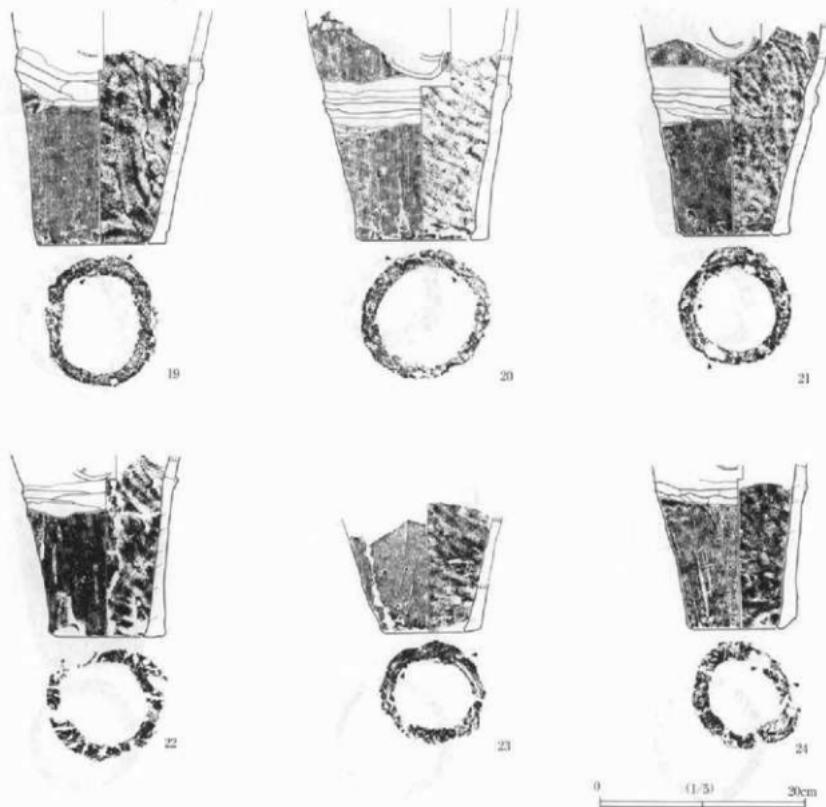


第46図 円筒埴輪（3）

外面調整 外面は、1次タテハケのみである。第2段や第3段にその後ナメハケを施し一見タテハケとのコンビネーションで鋸歯文に見える個体も存在する。これは、普通円筒埴輪のみに言えることではなく、朝顔形埴輪でも見られる。また、一部の円筒埴輪には縦方向にヘラケズリを施したものがある。

内面調整 内面は、ユビナデが基本的に斜めに行われている。角度も縱に近いものからほぼ横方向のものもある。ナデであるため胎土内の砂粒の動きはほとんど見られないが、一部強めのナデにより下から上方向の砂粒の移動の看取できた個体があったため、基本的にユビナデ方向は下から上方向と考えて良いと思われる。丁寧に行われているものもあれば、雑なものも存在する。

突帯 比較的高いものはなく、全体的に退化傾向にあると言える。断面は、基本的にややくずれた台形を呈する。しかし、三角形のものや棱のないひげたとした形のものまで様々である。1個体内においても



第47図 円筒埴輪（4）

一貫してしっかりした稜を有する突帯が貼付されるものもあれば、上下にゆれるもの、所々高さのないもの、一周以上するものまであり一定していない。

透孔　すべて円形を呈する。第2段に対で2孔穿孔される。3条4段の円筒埴輪には、第3段に第2段と90度ずれた位置に穿孔されるものがある。穿孔の底部からの高さは、平均16.7cm、大きさは横6.0cm、縦5.7cmである。穿孔方向は外面から見て右まわり、左まわりの2とおりがある。穿孔面を観察すると2面あるものがほとんどであり、2回転で穿孔を終えていたことが分かる。工具で穿孔後、ナデを施しているものがある。穿孔の仕方にも精粗があり、穿孔によりはみ出した粘土の量に差が見られる。穿孔の時期は、突帯のナデつけをきくものが多いことから突帯貼付け後であることが分かる。

底部　基本的に外面がタテハケ、内面がナデである。一部のものには自重のため底部の潰れが著しかったためか粘土のふくらみを削り取った痕跡が認められる。接地面が平らのものはほとんどなく、粒状や線

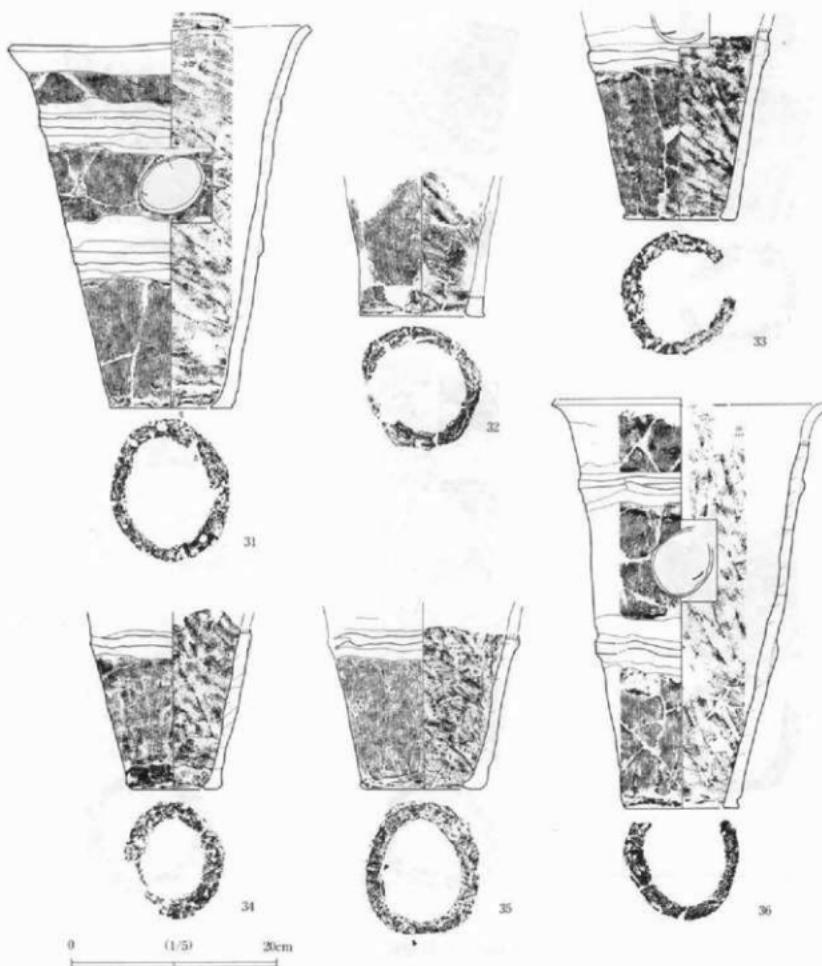


第48図 円筒埴輪（5）

状にへこみが多い。このことは、製作の際に下に平らな板などを敷いていなかったことを示し、わらなどの繊維質のものを敷いていた可能性が強い。

口縁部 口縁部の残存の良好な個体は少なく、口径の判明するもので31本である。口縁端部には内外面ともにヨコナデが施される。内面には、ヨコナデの前に雜なヨコハケが施されている。ヨコハケの施されている幅は個体によって様々である。ヨコハケの下部は、ユビナデによってナデ消されている部分があり、ヨコハケは、ユビナデの前に行われていたことが分かる。

焼成 焼成は窯によるものと考えられる。ほとんどが、良好な焼上がりであり赤みを帯びた褐色を呈す。一部、灰褐色で須恵質のものや、火の回りが悪く黒斑状に部分的に黒色を呈するものも見られる。



第49図 円筒埴輪（6）

その他 成田市公津原埴輪生産遺跡¹⁾の埴輪と同様、胎土中に炭化纖維を含む破片が、本古墳出土の埴輪片にも含まれていることが判明した。破片の断面観察によって抜き出したところ、かなりの点数を数えることができた。公津原の例では、成形時の粘土紐の輪積み接合痕に沿って確認されているが、本古墳では、そのような状況ではなく、不規則に散見できる。大きさも統一性が無いため、恐らく混和材として纖維を混ぜたものと考えられるが、今後の類例の増加をまって判断するべきであろう。

個々の特徴 基本的に上に記したような成形、調整方法が行われているが、一部違った手法が見られる。



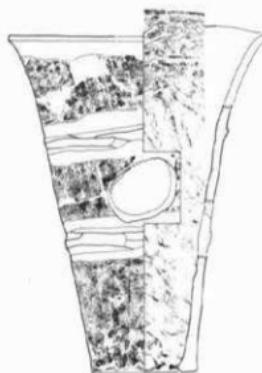
37



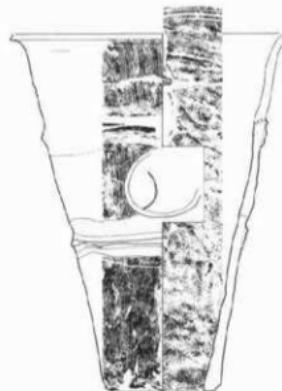
38



39



40



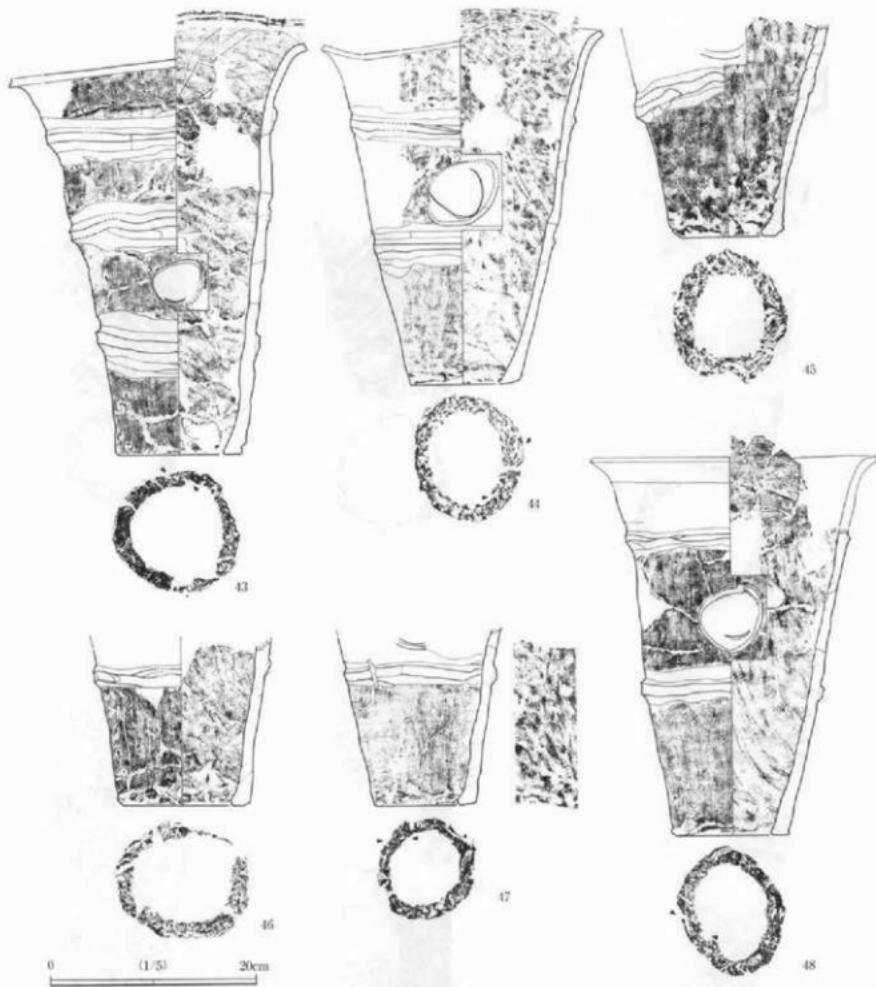
41



42

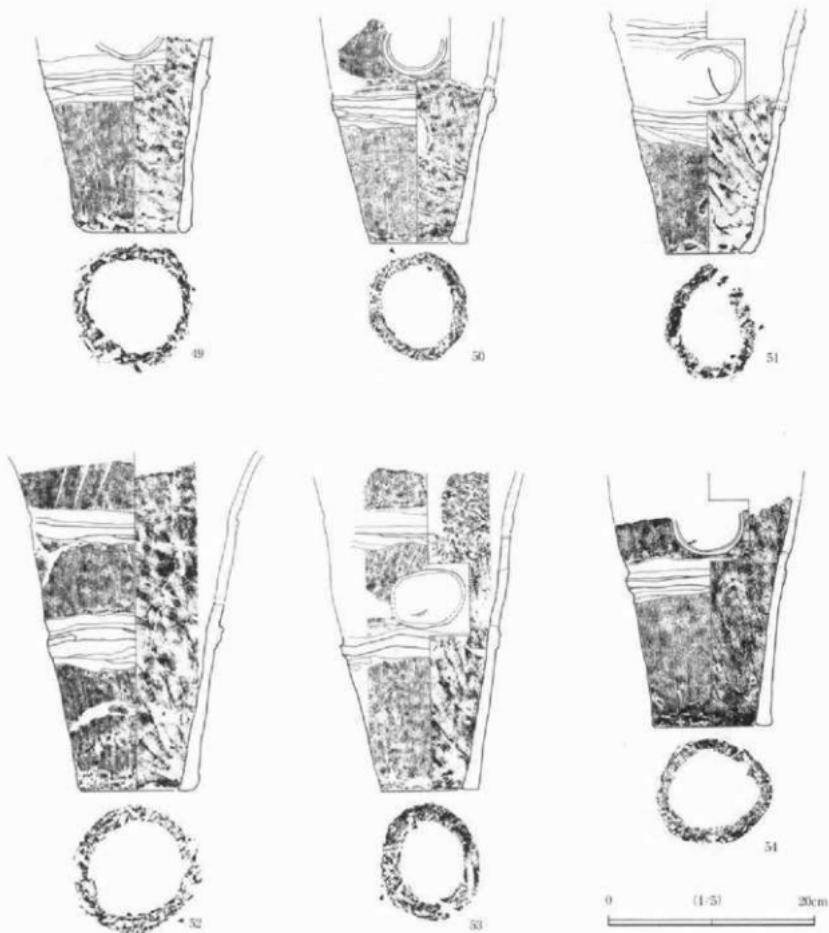
0 (1/5) 20cm

第50図 円筒埴輪 (7)



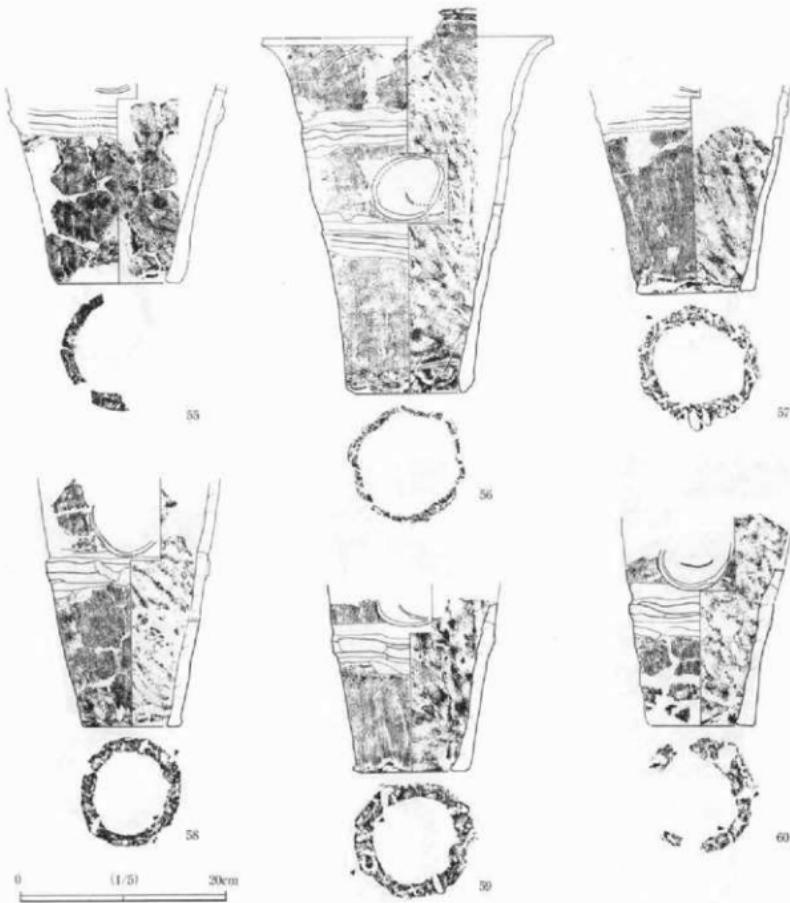
第51図 円筒埴輪(8)

8・21は底部内面にヨコナデ後、横方向のヘラケズリが施される。11・65の底部外面はタテハケ後、横方向にヘラケズリが施される。16・17・61には、外面調整として第1段にタテハケを施した後、上から下方に向にヘラケズリがなされている。突帯を削っている部分もあるため、ヘラケズリの時期は、突帯貼付け後と考えることができる。また、底部内面にもナデ後、横方向のヘラケズリが施されている。17の内面には、「Σ」字に線刻が見られる。24・26は外面タテハケ後、工具による縦方向ナデが施される。38・49・56・57・85の底部は、平らでなくユビでつまんだようになっている。41は底部内面につぶれて膨らんだ部分を削り



第52図 円筒埴輪（9）

とった痕が見られる。また、内面調整が第1段は横方向のユビナデ、第2段が斜め方向のユビナデとなり、小工程を示したものとなっている。44はハケ原体が他のものと違い、まだはっきりとハケ目があらわれないものを使用している。46は外面タテハケ後、工具でハケ目をほとんど消しており、所々キズがついている。47の外面はヘラ先で線刻される。55の内面はナデによる凹凸が少なく、ユビではなく工具を用いた可能性が高い。57は全体的に器壁が薄く、他の円筒埴輪に比べ一回り大きい。67は基部径は小さいが第一突帯から急激に広がる。68は器壁が薄く、堅く焼きしまっている。72の外面にはタテハケ後、刺突痕がある。76は全体的に膨らみが小さく、真っ直ぐに立ち上がる。77・86・94の内面調整は直線的であるため、ユビ



第53図 円筒埴輪 (10)

ではなく、工具を用いたナデの可能性がある。78は底部接地面に圧痕が顕著に見られる。80は外面タテハケ後、工具でナデを行っている。83は外面の特に第1段下半にヘラキズが多い。85はタテハケ後、丁寧に上から下方向のヘラケズリを行っている。90は他の円筒埴輪と明らかに器形が異なり、底部から直線的に立ち上がる。器壁も薄い。底部は、一部つまんだように薄い部分がある。94は第1突帯部分に、透孔とは別に直線的に穿孔されたところがある。96・116の基部は上部の重みのため、異様に内側に膨らんでいる。99の外面はタテハケ後、上から下方向にヘラケズリを行っている。時期は突帯貼付け後である。底部内面にも横方向のヘラケズリが施される。101は底部外面に横方向の深い抉りが所々ある。107・113の内面は下



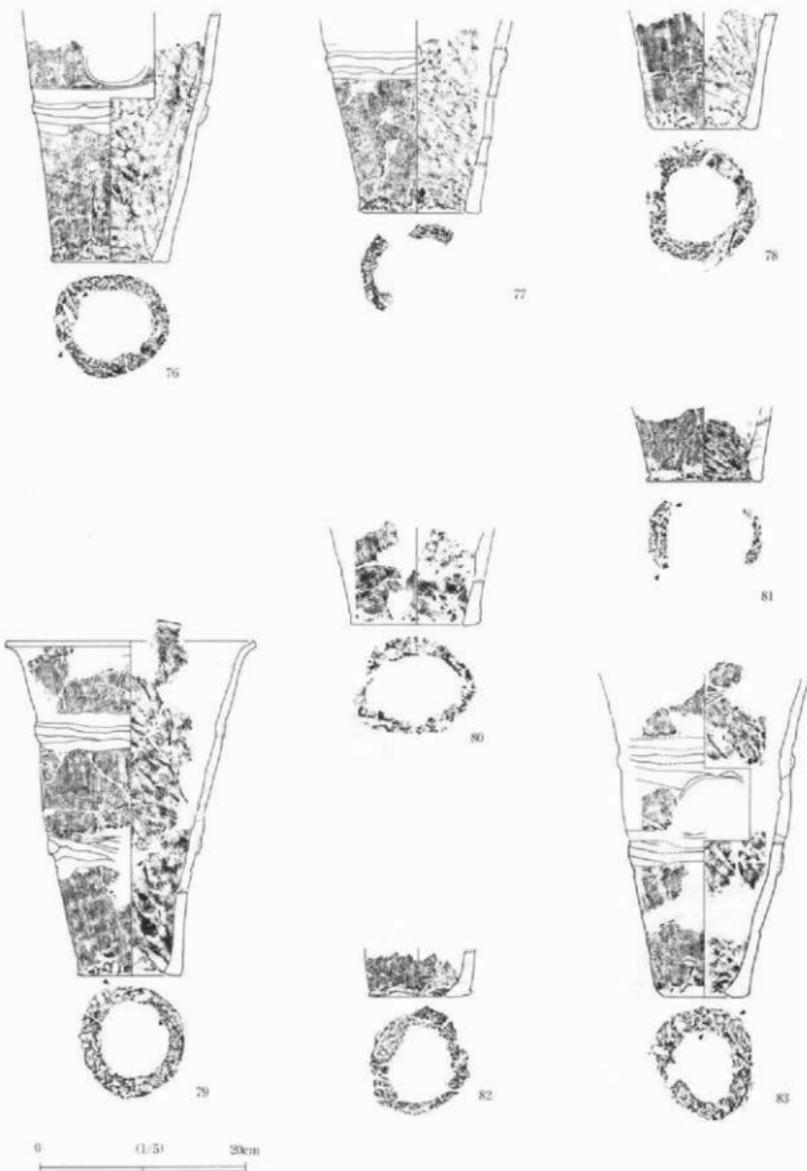
第54図 円筒埴輪 (11)

部が工具でナデ、その他がユビナデである。109は外面タテハケ後、上から下方向にヘラケズリを行う。しかし、他のヘラケズリと違い、タテハケを完全に消してしまおうという意識は見られない。底部内面も1cm幅で横方向のヘラケズリを行う。119は器壁が厚く、重量がある。129の外面にはほんの一端であるがヘラミガキ状の調整痕が見られる。140は他に比べ極めて精緻な作りで堅く焼きしまっている。143は器壁薄く、非常に軽い。145は最上段が外反せず、直線的である。150は最上段が狭く、径も大きいことから3条4段の円筒埴輪と考えられる。152は第2段の開きが小さい。154にはヘラ先による沈線が見られる。

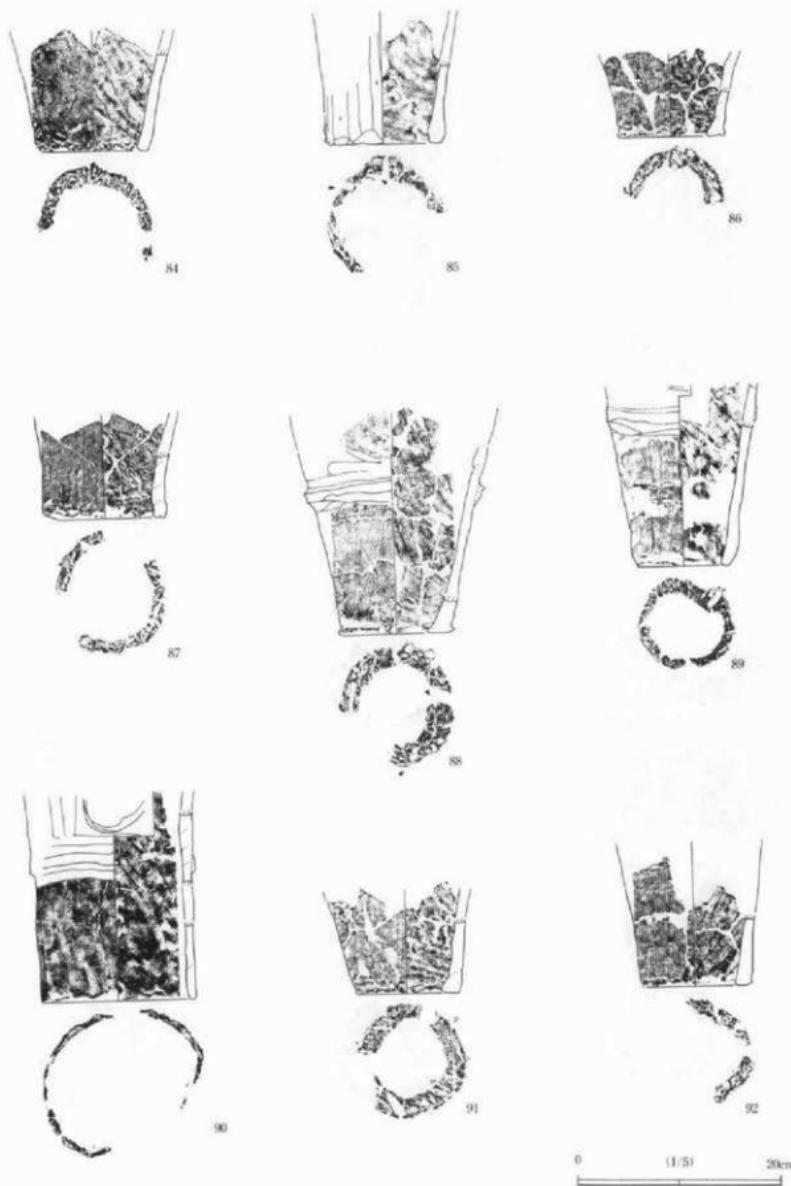
朝顔形埴輪 (第66~68図、図版34・35)



第55図 円筒埴輪 (12)



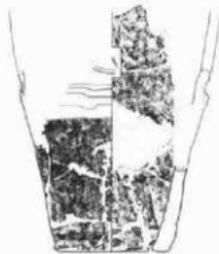
第56図 円筒埴輪 (13)



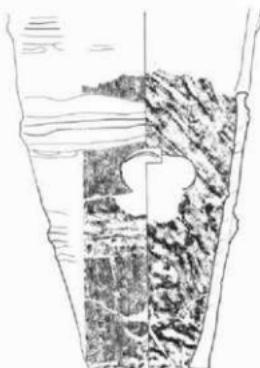
第57図 円筒埴輪 (14)



93



94



95



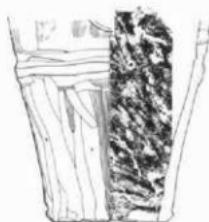
96



97



98



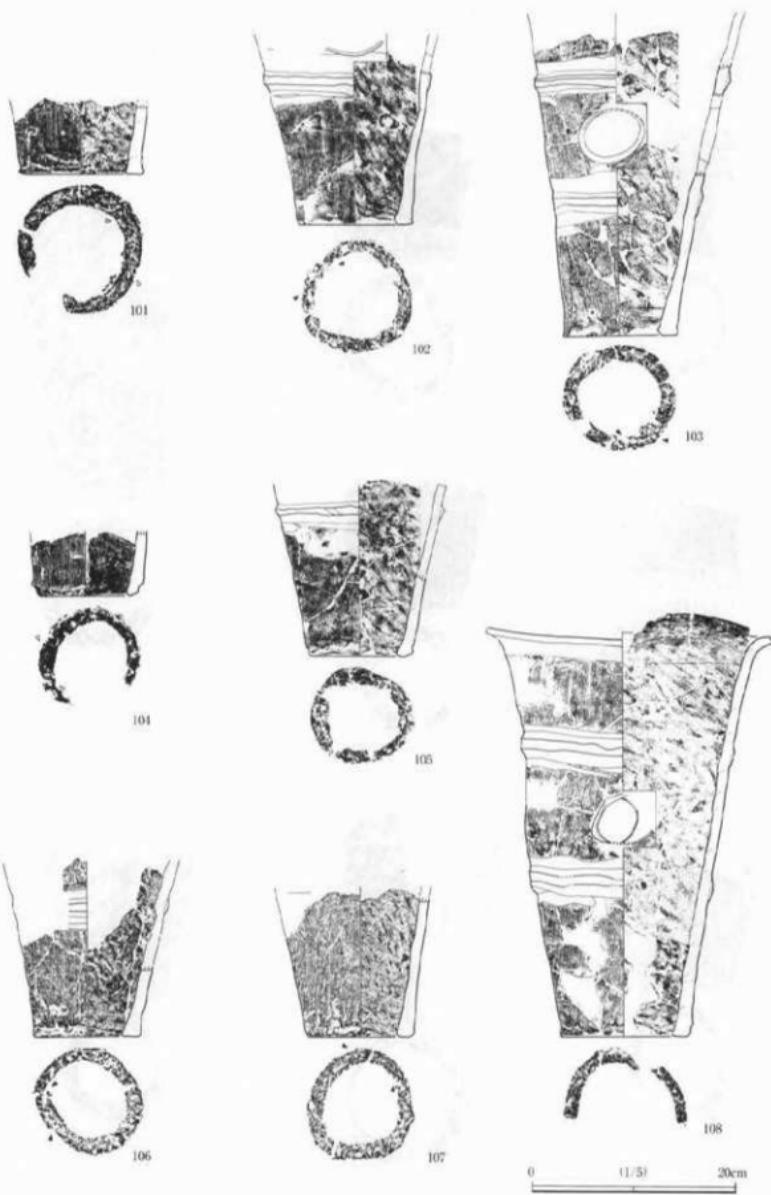
99



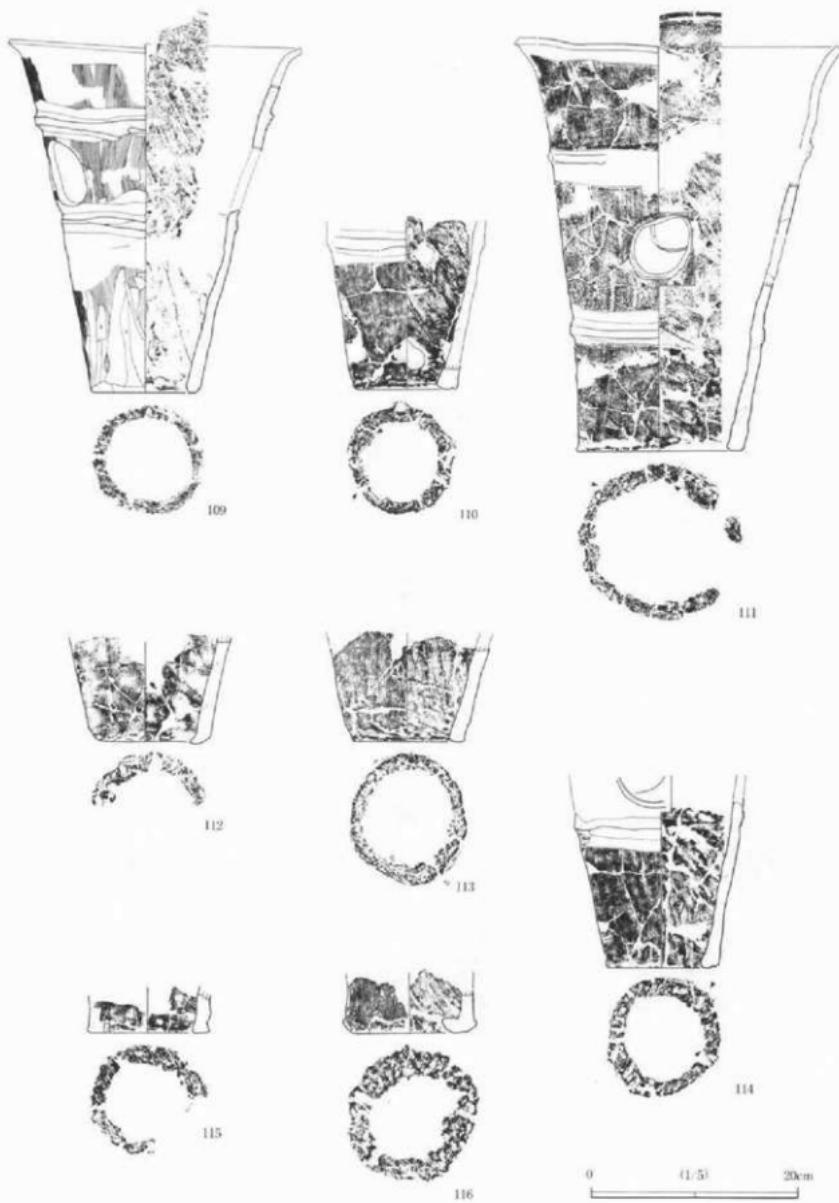
100

0 (1/5) 20cm

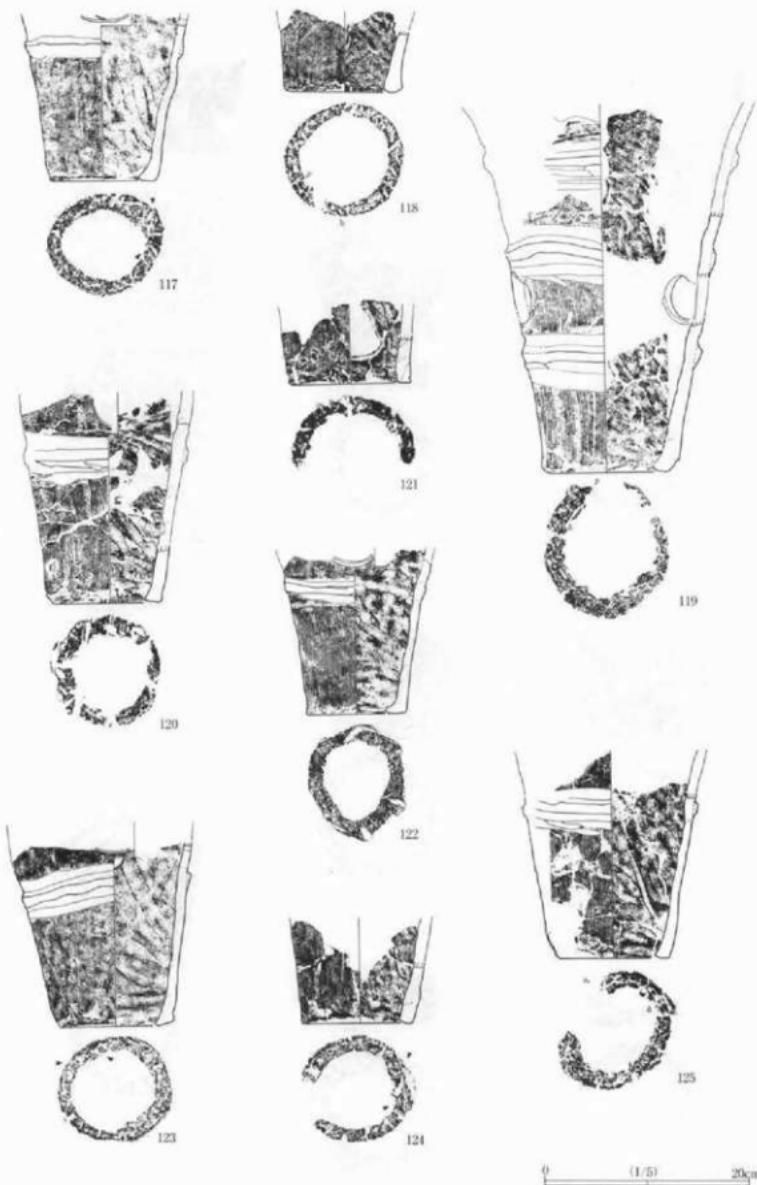
第58図 円筒埴輪 (15)



第59図 円筒埴輪 (16)



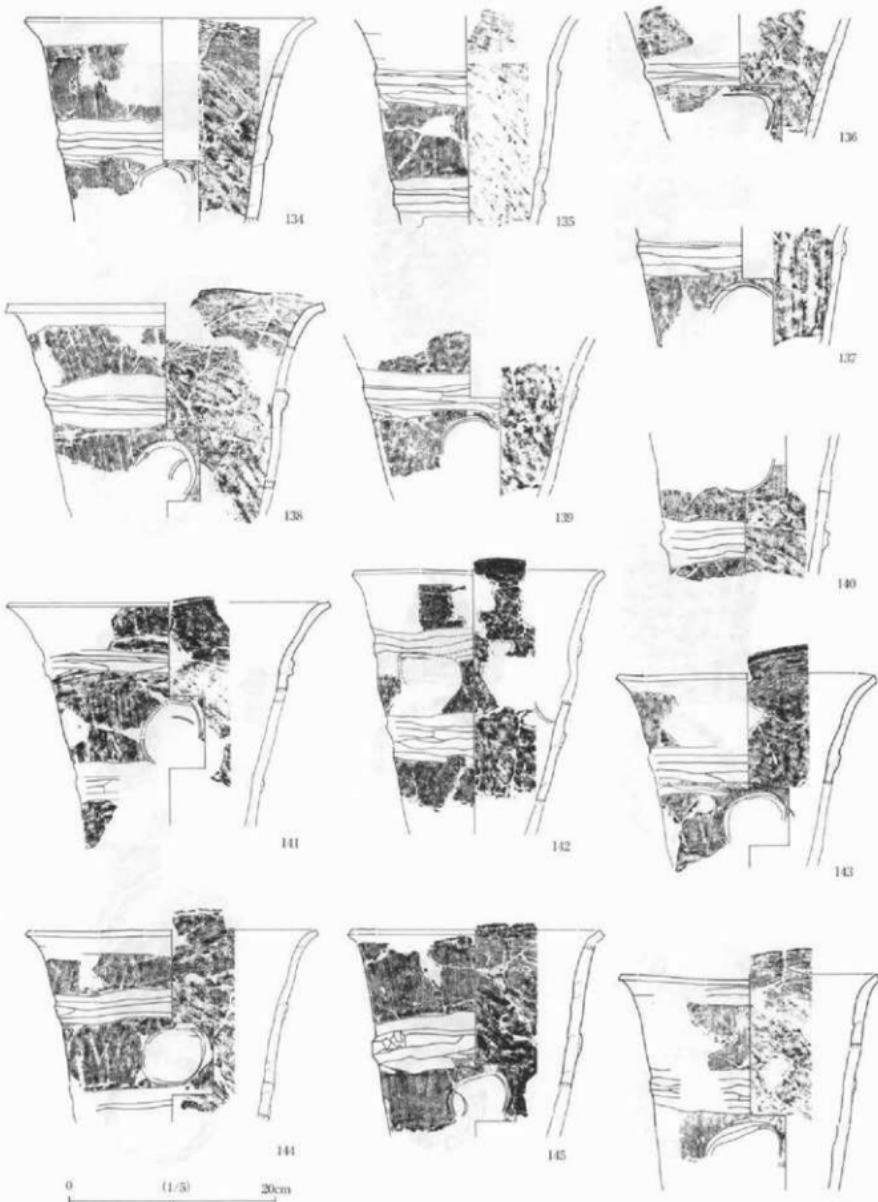
第60図 円筒埴輪 (17)



第61図 円筒埴輪 (18)



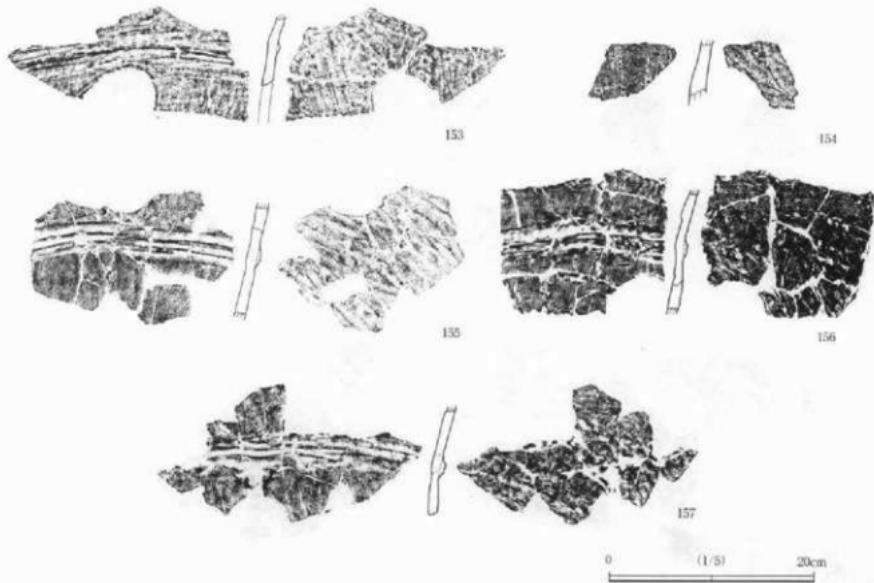
第62図 円筒埴輪 (19)



第63図 円筒埴輪 (20)



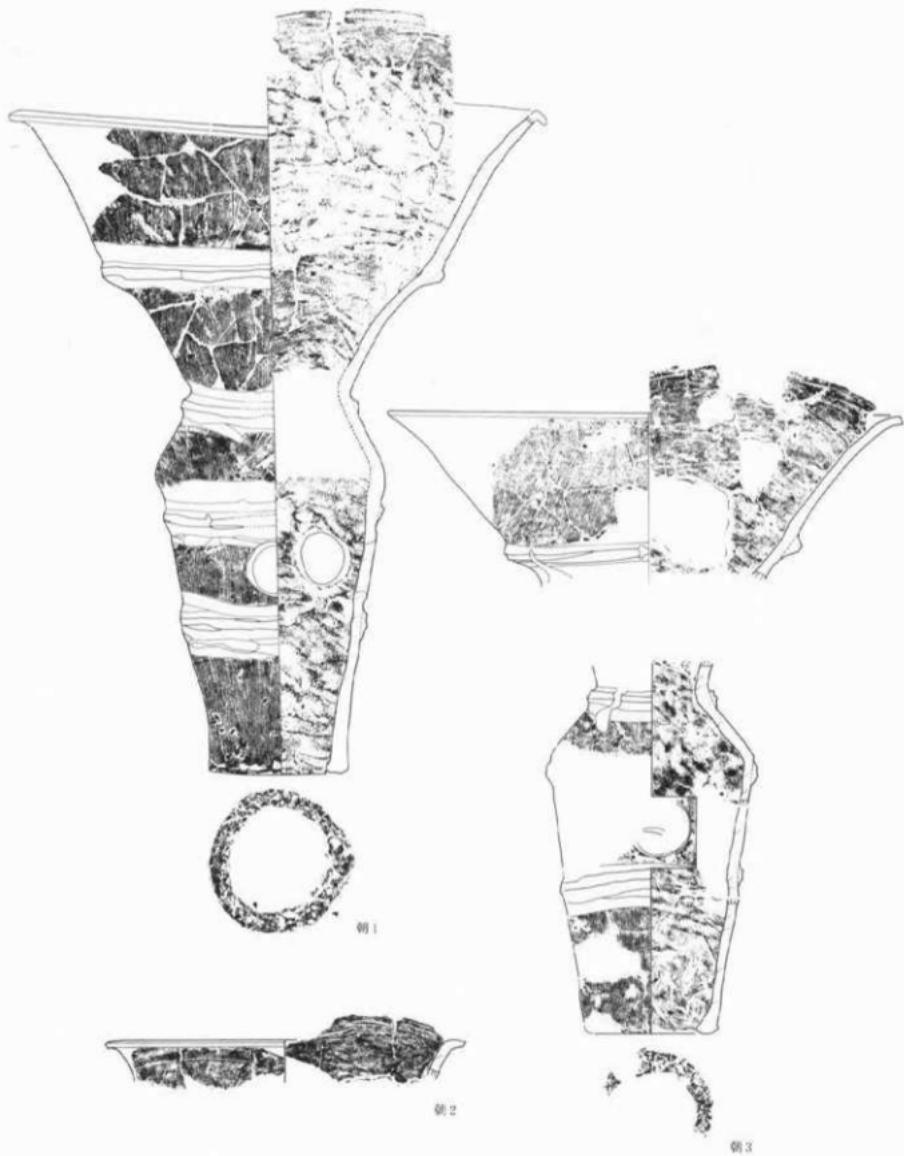
第64図 円筒埴輪 (21)



第65図 円筒埴輪 (22)

朝顔形埴輪の実測個体数は、17本である。1・2段のみの残存では、朝顔形埴輪と断定できず、円筒埴輪として考へている個体があるので本来はもっと多かった可能性が考えられる。17本は、すべて別個体であることが判明しているので、最低17本が墳丘に樹立されていたことが分かる。朝顔形埴輪の成形・整形技法は、円筒埴輪とほぼ同様である。完全に全体を復元できるものは、朝1の1本のみであるため、朝1の形態・成形技法を朝顔形埴輪の典型として取り扱うことにしたい。器形は4条5段であり、3条突帯の部分がくびれに相当する。器高は、63.5cmである。透孔は円形で、第2段に一对穿孔される。内面は、円筒埴輪と同様に斜めユビナデが施されるが、第4段に複数ヨコハケが施されるのが円筒埴輪との明確な相違点である。外面は基本的に縦ハケが施される。3・4・5段目には斜めハケが施される。また、口縁端部は、円筒埴輪に比べ広く大きく外反るのが特徴である。第1段・第2段はしっかりと作りで内面のナデも丁寧である。このことは、はじめから器高が高くなる朝顔形を成形することを意識していたことを示すものと言えよう。内面の観察によると朝顔部分は粘土紐が平行に積まれていることから、巻上げではなく、輪積みであったことが分かる。朝顔部は径が非常に大きくなるため、物理的に1本ずつ積み上げていかざるを得ないのであろう。

埴輪観察表 凡例 (第69図、第13~18表)



第66图 朝顔形埴輪 (1)



图4

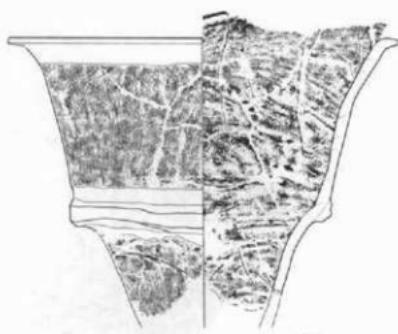


图5

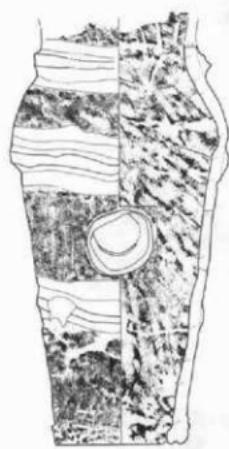


图6



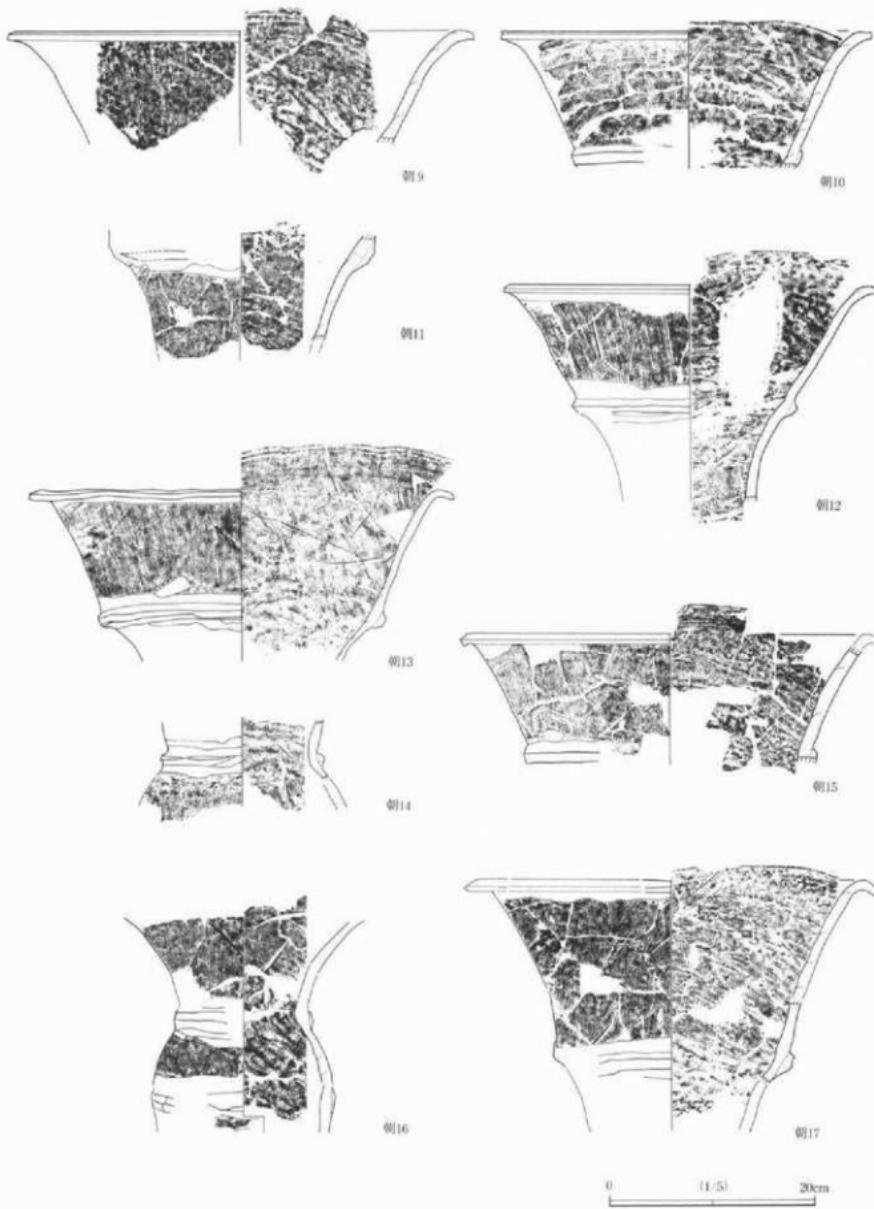
图7



图8

0 (1/5) 20cm

第67图 朝顔形埴輪（2）

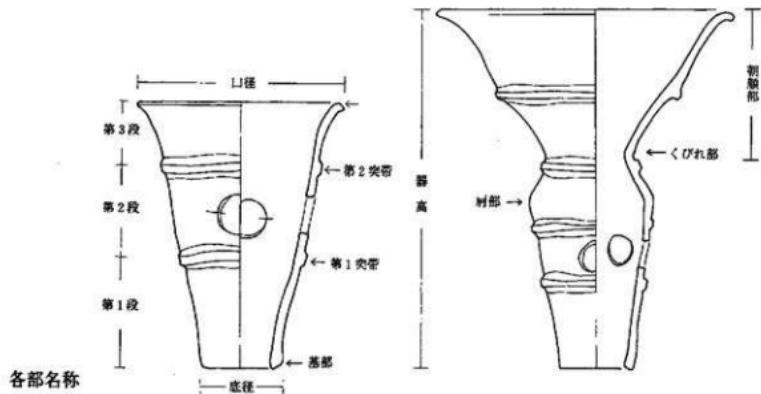


第68図 朝顔形埴輪（3）

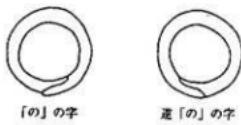
- 1, 観察は、法量・透孔・突帯・ハケ目・色調・胎土・底部接合の項目で行っている。その他気が付いた点に関しては、備考欄に記載するとともに、本文で補足説明を行っている。
- 2, 法量などの単位はすべてcmである。遺存度の高い部分を測定したため、必ずしも実測図から得られる値とは一致しない。また、器高の項目で＜＞があるものは完形に復元実測を行うことができなかつたため、現存長を示している。
- 3, 器壁の厚さは原則として各段の中心付近を測定している。
- 4, 透孔の穿孔方向は、胎土中の砂粒の移動痕跡を目安として推定した。外面から見て、時計回りをR、反時計回りをLと表示し、かすかな痕跡や穿孔後のナデによって方向の断定できないものには、?を付している。
- 5, 透孔A, Bは第2段、C, Dは第3段に位置するものである。Aは実測図正面にした透孔を意味する。
- 6, 透孔の高さは、底面から透孔の下端までを測定している。縦、横の長さは、完全に分からぬまでも推定できるものに関しては記入している。
- 7, 突帯は、突帯間を測定した。幅、高さ、断面形態に関しては図のとおりである。断面形態が台形、M形の中には、上部が下部より高くなる例、逆の例があり、前者をa形、後者をb形と細分した。安定度は、相対的なものであって稜・ナデ付けがしっかりし、上下のプレが少なく、断面形が一定しているもの「高」とし、相対的に判断し表示している。
- 8, ハケ目の本数は、2cm幅で測定している。
- 9, 色調は、大まかに5つに分けられる。1個体に対し、2種類の色調が見られるものがあり煩雑さをさけるため、赤褐色をA、やや赤みのある褐色をB、にぼい橙をC、橙をD、灰褐色をE、暗褐色をFと表示した。それぞれの色調でやや暗いものに関してはアルファベットの前に暗を付けている。
- 10, 胎土は、専門家による岩石学的分析を行っていないため、肉眼観察によって確認することのできた各種砂粒の量を相対的に示した。その中で特徴的に見られる径2mm以上の中石が目立つものをa、白色砂粒が目立つものをb、赤色スコリアが見られるものをcと表示している。
- 11, 底部接合は、埴輪本体を倒立させてみた場合の接合の仕方を図のように「の」、逆「の」の字接合とに分類している。

注1 塩輪の胎土中に見られる炭化纖維について神野 信氏により指摘されている。

神野 信 1994「公津原埴輪生産遺跡」 「研究紀要15」 財團法人 千葉県文化財センター



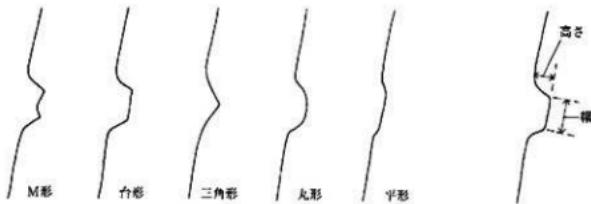
各部名称



「の」の字

逆「の」の字

突帯形名称



第69図 墓輪凡例

第13表 円筒・朝顔形埴輪観察表(1)-1

番号	基高	口径	底径	器壁厚					透孔										
				第1	第2	第3	第4	第5	A	B	C	D	高さ	横	縦	高さ	横	縦	
1	(21.2)	-	11.4	1.0	1.0	-	-	-	? 16.2	-	18.4	-	-	-	-	-	-	-	-
2	(20.0)	-	10.5	1.0	-	-	-	-	R? 17.4	-	18.3	-	-	-	-	-	-	-	-
3	(28.6)	-	13.5	0.9	0.9	0.8	-	-	R? 16.1	5.1	4.5	14.9	5.3	-	-	-	-	-	-
4	(20.0)	-	11.1	0.9	-	-	-	-	? 16.3	-	16.5	-	-	-	-	-	-	-	-
5	34.4	27.3	10.8	1.0	1.0	1.1	-	-	? 17.8	6.8	6.2	19.2	5.5	-	-	-	-	-	-
6	(20.6)	-	10.8	1.1	1.0	-	-	-	? 16.1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
7	36.9	27.4	12.4	1.0	0.9	0.8	-	-	? 19.1	6.0	4.9	18.7	4.7	5.4	-	-	-	-	-
8	(17.3)	-	12.5	1.0	-	-	-	-	R? 16.5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
9	(31.8)	-	10.5	1.0	0.8	1.0	-	-	R 17.0	6.8	6.0	17.1	-	-	-	-	-	-	-
10	(17.8)	-	9.8	0.9	-	-	-	-	R 17.4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
11	(21.0)	-	11.8	1.2	-	-	-	-	R 17.4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
12	(25.6)	-	10.3	1.0	0.8	-	-	-	R 17.5	-	17.6	-	-	-	-	-	-	-	-
13	(23.0)	-	10.3	0.9	0.9	-	-	-	R 15.4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
14	(20.0)	-	9.6	1.0	0.9	-	-	-	R 15.7	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
15	(17.8)	-	11.5	1.1	0.7	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
16	(18.3)	-	11.1	1.1	1.0	-	-	-	R? 16.1	-	15.8	-	-	-	-	-	-	-	-
17	(19.0)	-	11.4	1.1	0.9	-	-	-	R 15.1	-	16.1	-	-	-	-	-	-	-	-
18	(18.8)	-	10.9	1.0	-	-	-	-	? 17.0	-	-	16.5	-	-	-	-	-	-	-
19	(22.8)	-	12.5	1.2	1.0	-	-	-	R? 18.4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
20	(22.7)	-	13.0	1.2	1.0	-	-	-	? 15.8	-	17.4	-	-	-	-	-	-	-	-
21	(20.8)	-	11.1	1.1	0.8	-	-	-	R? 17.1	-	18.5	-	-	-	-	-	-	-	-
22	(17.5)	-	11.5	1.0	-	-	-	-	? 15.4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
23	(11.0)	-	9.8	0.8	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
24	(15.9)	-	10.6	1.1	-	-	-	-	? 15.5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
25	(21.5)	-	12.9	1.3	0.9	-	-	-	L 17.5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
26	(18.9)	-	11.4	1.0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
27	(19.0)	-	10.3	0.9	-	-	-	-	? 17.1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
28	(14.12)	-	14.1	0.9	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
29	37.7	27.6	11.5	1.1	0.9	0.8	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
30	(33.0)	-	12.4	1.2	1.2	-	-	-	? 17.8	8.0	6.8	18.9	-	-	-	-	-	-	-
31	37.6	29.7	11.3	1.3	0.9	0.9	-	-	L? 18.9	6.2	5.5	19.7	6.9	6.7	-	-	-	-	-
32	(13.6)	-	12.0	1.1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
33	(20.4)	-	11.2	1.1	-	-	-	-	? 17.4	-	-	17.7	-	-	-	-	-	-	-
34	(17.3)	-	9.4	1.2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
35	(18.0)	-	12.4	0.9	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
36	39.7	26.9	11.0	1.2	1.0	1.0	-	-	? 20.5	6.0	6.5	-	-	-	-	-	-	-	-
37	40.9	32.2	13.7	1.4	0.8	0.9	1.0	-	R 10.9	4.8	-	10.0	4.9	-	-	-	-	-	-
38	(20.3)	-	11.0	1.0	1.1	-	-	-	L 16.5	-	-	15.3	-	-	-	-	-	-	-
39	(21.2)	-	10.7	1.1	1.0	-	-	-	? 15.9	-	-	15.5	-	-	-	-	-	-	-
40	33.8	25.4	9.8	1.0	0.9	0.8	-	-	L 14.8	6.6	5.9	14.9	6.8	6.3	-	-	-	-	-
41	34.8	28.0	10.1	1.0	1.0	0.8	-	-	R 17.0	-	-	16.9	-	-	-	-	-	-	-
42	(25.5)	-	9.9	1.0	0.9	-	-	-	? 14.9	-	-	16.0	-	-	-	-	-	-	-
43	40.6	29.1	12.0	1.2	1.2	1.1	0.8	-	L 14.4	4.9	4.3	14.8	-	-	23.6	6.4	6.0	25.2	5.8
44	35.0	28.0	10.8	1.0	0.7	0.7	-	-	R 15.5	6.8	6.3	16.2	4.5	-	-	-	-	-	-
45	(20.5)	-	9.3	0.9	0.9	-	-	-	? 17.7	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
46	(16.3)	-	11.8	1.0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
47	(17.2)	-	8.5	1.2	-	-	-	-	R 15.3	-	-	14.9	-	-	-	-	-	-	-
48	36.4	28.3	11.6	1.1	0.8	0.8	-	-	? 17.6	6.3	6.2	18.9	-	-	-	-	-	-	-
49	(19.2)	-	10.0	0.8	-	-	-	-	? 16.7	-	-	16.8	-	-	-	-	-	-	-
50	(22.0)	-	9.5	1.0	0.9	0.9	-	-	R 16.3	6.3	-	16.0	-	-	-	-	-	-	-
51	(29.0)	-	8.7	1.0	0.8	-	-	-	R 14.6	-	5.7	14.5	-	-	-	-	-	-	-
52	(32.8)	-	10.3	1.1	0.9	0.8	-	-	R 16.8	-	-	17.2	-	-	-	-	-	-	-
53	(30.8)	-	9.6	1.1	1.0	0.8	-	-	R 15.9	7.2	5.6	17.0	-	-	-	-	-	-	-
54	(24.7)	-	11.0	1.0	0.8	-	-	-	L 16.6	6.9	-	17.4	-	-	-	-	-	-	-
55	(19.5)	-	12.0	1.0	-	-	-	-	R 18.6	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
56	35.0	28.8	10.8	0.8	0.9	0.9	-	-	R 15.9	6.9	6.3	17.1	-	-	-	-	-	-	-
57	(20.0)	-	10.4	0.7	-	-	-	-	L? 19.6	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
58	(24.0)	-	9.2	1.1	1.0	-	-	-	R 16.5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

第14表 円筒・朝顔形埴輪観察表 (1) - 2

番号	実測					幅	高さ	形状	安定度	ハケメ	色調	地土	底部接合	備考
	実測物の長さ 底~1	1~2	2~3	3~4	4~5									
1	15.0	-	-	-	-	0.8	0.4	M形	中	14	B	少	「逆の」	
2	15.5	-	-	-	-	0.8	0.3	台a形	中	15	E	多b	「逆の」?	
3	12.8	9.1	-	-	-	0.9	0.5	M形	中	14	C	少b	「逆の」	
4	13.9	-	-	-	-	1.0	0.5	台形	中	16	B	中c	?	
5	14.4	12.2	7.2	-	-	0.8	0.5	台形	やや高	16	B	少ac	「の」	
6	14.8	-	-	-	-	0.6	0.3	台形	?	14	C	少b	「逆の」	
7	16.3	11.9	8.7	-	-	0.9	0.4	台形	やや高	14	B	少	?	
8	14.0	-	-	-	-	1.0	0.3	Ma形	中	15	C E	中	?	底部内面ヘラケズリ
9	15.3	12.3	-	-	-	1.0	0.3	台形	低	14	C	中b	「逆の」	
10	15.0	-	-	-	-	0.9	0.3	台形	やや高	13	C D	中ac	「逆の」	
11	15.4	-	-	-	-	0.8	0.3	台形	中	15	C	中abc	「の」	底部外面ヘラケズリ
12	14.9	-	-	-	-	0.9	0.4	二角~台形	やや低	15	C	少	?	
13	13.8	-	-	-	-	1.0	0.3	M形	やや高	14	C	多	「逆の」	
14	13.9	-	-	-	-	1.0	0.4	M形	やや低	14	C	中c	「逆の」	
15	13.5	-	-	-	-	0.8	0.4	台形	中	14	C E	中bc	「逆の」	
16	13.8	-	-	-	-	0.8	0.3	台形	やや高	14	B C	多b	「逆の」?	内外面ヘラケズリ
17	13.7	-	-	-	-	0.8	0.3	台形	やや高	14	B C	多a	「逆の」	内外面ヘラケズリ
18	15.2	-	-	-	-	1.3	0.5	M形	やや高	13	B C	中b	「の」	
19	18.5	-	-	-	-	1.0	0.2	M形	やや高	14	B E	中abc	「の」	
20	13.6	-	-	-	-	1.0	0.4	M形	高	14	C E	多ab	「逆の」	
21	13.9	-	-	-	-	1.1	0.3	台形	やや高	14	A C	多	「逆の」	底部内面ヘラケズリ
22	13.9	-	-	-	-	0.8	0.4	台a形	中	15	C	少	?	
23	-	-	-	-	-	-	-	-	-	15	B	中c	「の」	
24	14.4	-	-	-	-	1.2	0.3	低形	低	14	B C	中b	「の」	外面ヘラナデ
25	15.4	-	-	-	-	1.0	0.3	台形	中	14	C E	中c	「の」	
26	-	-	-	-	-	-	-	-	-	13	C	多	「逆の」	黒斑状、外側ヘラナデ
27	16.5	-	-	-	-	1.0	0.4	台形	高	15	C	やや多ac	?	
28	-	-	-	-	-	-	-	-	-	14	E	やや多b	-	
29	15.7	14.0	7.6	-	-	0.9	0.4	台形	中	14	B	中	「逆の」	
30	16.1	12.1	-	-	-	1.1	0.3	台形	中	15	B C	中b	「逆の」	黒斑?
31	15.3	13.1	7.2	-	-	1.0	0.3	台形	高	14	B	中	「逆の」	
32	-	-	-	-	-	-	-	-	-	13	C	中	-	
33	16.3	-	-	-	-	1.2	0.3	台形	中	14	C E	やや多	-	
34	14.8	-	-	-	-	1.0	0.2	台形	中	14	C	中	-	
35	14.2	-	-	-	-	0.8	0.4	台形	中	14	C R	やや多b	「逆の」	
36	16.1	15.7	7.8	-	-	0.7	0.5	台形	高	15	B	やや多	-	
37	7.5	10.5	11.2	11.7	-	1.0	0.5	台形	中	15	B E	多b	「逆の」	3条4段
38	15.1	-	-	-	-	1.0	0.3	台形	低	18	C	中	-	底面ユビツマミ
39	15.0	-	-	-	-	1.0	0.3	台形	低	13	C	やや多c	「の」?	
40	12.9	9.5	10.4	-	-	0.8	0.4	台形	やや低	20	E	やや多abc	「逆の」	
41	14.8	10.0	-	-	-	1.0	0.4	三角~M形	やや高	13	C	やや多	「逆の」	底部内面ヘラケズリ
42	14.9	7.3	-	-	-	1.1	0.3	三角~台形	低	15	D	やや少	-	
43	12.0	9.6	9.6	5.6	-	1.0	0.6	Ma形	やや高	13	C E	中	「逆の」	3条4段
44	13.6	12.4	8.6	-	-	0.8	0.4	三角~台形	中	16	D	中	「逆の」	
45	13.2	-	-	-	-	0.7	丸形	低	19	A	中	-	黒紙?	
46	12.9	-	-	-	-	丸形	低	13	D	中	-	外側ナデ		
47	13.1	-	-	-	-	1.0	0.3	台形	低	15	C	やや多b	「逆の」	外面線剥
48	14.8	14.1	7.5	-	-	0.9	0.5	M形	やや高	16	D	中	「の」	
49	15.2	-	-	-	-	0.9	0.4	三角~台形	低	15	C	やや多	-	底面ユビツマミ
50	13.8	-	-	-	-	0.9	0.3	台形	高	13	E	中a	「逆の」	
51	14.1	8.6	-	-	-	1.0	0.3	台形	やや低	14	E	中b	「逆の」	
52	14.7	10.3	-	-	-	1.0	0.5	M形	中	14	C	中ac	「逆の」	
53	14.3	11.7	-	-	-	0.9	0.5	台形	中	14	C E	やや多	「逆の」	
54	13.9	-	-	-	-	0.8	0.4	台形	中	14	E	中	-	
55	16.8	-	-	-	-	0.9	0.3	台形	中	19	E	中	-	内面ヘラナデ
56	15.6	10.0	9.4	-	-	0.9	0.5	台形	中	14	E	中	-	
57	17.5	-	-	-	-	0.7	0.3	台形	中	14	B	中	「逆の」	
58	15.8	-	-	-	-	1.0	0.5	M形	中	14	C D	やや多bc	「逆の」	

第15表 円筒・朝顔形埴輪観察表 (2)-1

番号	器高	口径	底径	器壁厚	透孔							
					穿孔					A		
					第1	第2	第3	第4	第5	高さ	横	縦
59	<18.3>	-	-	10.3	1.1	-	-	-	-	14.2	-	14.7
60	(20.2)	-	-	10.2	1.2	-	-	-	-	L	13.1	7.0
61	37.2	30.1	-	11.7	1.0	0.8	0.8	-	-	R	16.3	7.8
62	(29.0)	-	-	9.8	1.2	1.0	-	-	-	? 16.9	-	15.3
63	34.1	26.0	-	11.0	1.1	1.0	0.9	-	-	R	16.1	6.9
64	(14.6)	-	-	11.2	1.2	-	-	-	-	-	-	-
65	(23.2)	-	-	9.3	1.0	1.1	-	-	-	R	14.1	-
66	(26.2)	-	-	10.7	1.1	0.9	-	-	-	R	15.9	-
67	(20.8)	-	-	10.3	1.2	0.9	-	-	-	? 15.9	-	-
68	(19.0)	-	-	9.5	0.9	-	-	-	-	? 17.8	-	-
69	36.5	27.4	-	11.3	1.2	1.1	0.8	-	-	? 18.3	7.5	5.6
70	(8.4)	-	-	10.3	1.3	-	-	-	-	-	-	-
71	(15.5)	-	-	10.5	0.9	-	-	-	-	-	-	-
72	(4.5)	-	-	1.2	-	-	-	-	-	-	-	-
73	(31.8)	-	-	9.4	1.1	1.0	-	-	-	-	-	-
74	(19.0)	-	-	12.7	0.9	-	-	-	-	R	17.3	-
75	(25.7)	-	-	10.2	0.9	-	-	-	-	? 15.5	-	-
76	(24.7)	-	-	11.0	1.1	1.0	-	-	-	? 17.3	-	-
77	(18.8)	-	-	11.3	0.8	-	-	-	-	? 17.6	-	-
78	(11.7)	-	-	9.7	0.9	-	-	-	-	-	-	-
79	32.2	24.4	-	9.5	1.1	0.8	0.6	-	-	R	-	-
80	(9.4)	-	-	11.8	0.9	-	-	-	-	-	-	-
81	(7.3)	-	-	11.1	1.4	-	-	-	-	-	-	-
82	(4.7)	-	-	8.8	1.0	-	-	-	-	-	-	-
83	(31.0)	-	-	7.8	1.0	1.1	1.0	-	-	R	15.3	6.7
84	(12.0)	-	-	10.0	1.0	-	-	-	-	-	-	-
85	(13.2)	-	-	10.8	0.9	-	-	-	-	-	-	-
86	(8.4)	-	-	10.2	0.8	-	-	-	-	-	-	-
87	(10.3)	-	-	10.5	1.1	-	-	-	-	-	-	-
88	(21.7)	-	-	10.4	0.9	-	-	-	-	? 18.0	-	-
89	(17.5)	-	-	8.9	0.9	-	-	-	-	? 17.0	-	-
90	(20.3)	-	-	14.8	0.7	-	-	-	-	R	16.5	-
91	(10.0)	-	-	9.8	1.2	-	-	-	-	-	-	-
92	(14.0)	-	-	10.2	0.9	-	-	-	-	-	-	-
93	(20.7)	-	-	8.2	1.4	-	-	-	-	R	14.8	-
94	(23.5)	-	-	12.1	1.1	1.0	-	-	-	? 17.7	-	-
95	(34.5)	-	-	11.2	1.1	1.0	0.9	-	-	L	14.5	5.1
96	(8.2)	-	-	12.2	1.0	-	-	-	-	-	6.5	-
97	(13.0)	-	-	9.3	0.9	-	-	-	-	-	-	-
98	(14.8)	-	-	9.5	1.0	-	-	-	-	-	-	-
99	(19.8)	-	-	10.8	1.0	-	-	-	-	? 18.4	-	-
100	(17.5)	-	-	9.8	1.1	-	-	-	-	-	-	-
101	(7.4)	-	-	11.2	1.1	-	-	-	-	-	-	-
102	(18.8)	-	-	10.8	0.9	-	-	-	-	R?	16.6	-
103	(32.0)	-	-	11.0	1.1	1.2	0.8	-	-	R?	17.1	6.6
104	(6.3)	-	-	9.0	1.1	-	-	-	-	-	-	-
105	(16.6)	-	-	9.4	1.0	-	-	-	-	? 16.3	-	-
106	(17.1)	-	-	10.2	1.1	-	-	-	-	-	-	-
107	(14.5)	-	-	10.4	1.0	-	-	-	-	-	-	-
108	39.8	28.4	-	12.1	1.3	1.0	1.0	-	-	L?	18.6	6.0
109	36.6	28.3	-	10.6	1.0	0.9	0.9	-	-	R	18.1	6.1
110	(16.3)	-	-	9.7	1.0	-	-	-	-	-	-	-
111	39.3	31.7	-	15.8	0.8	1.0	1.3	-	-	R	16.6	5.8
112	(10.0)	-	-	10.5	1.2	-	-	-	-	-	5.9	19.5
113	(10.5)	-	-	10.4	1.2	-	-	-	-	-	5.0	5.0
114	(18.5)	-	-	9.7	1.0	-	-	-	-	? 15.5	-	16.5
115	(4.5)	-	-	10.8	1.4	-	-	-	-	-	-	-
116	(5.8)	-	-	11.5	1.2	-	-	-	-	-	-	-

第16表 円筒・朝顔形埴輪観察表(2)-2

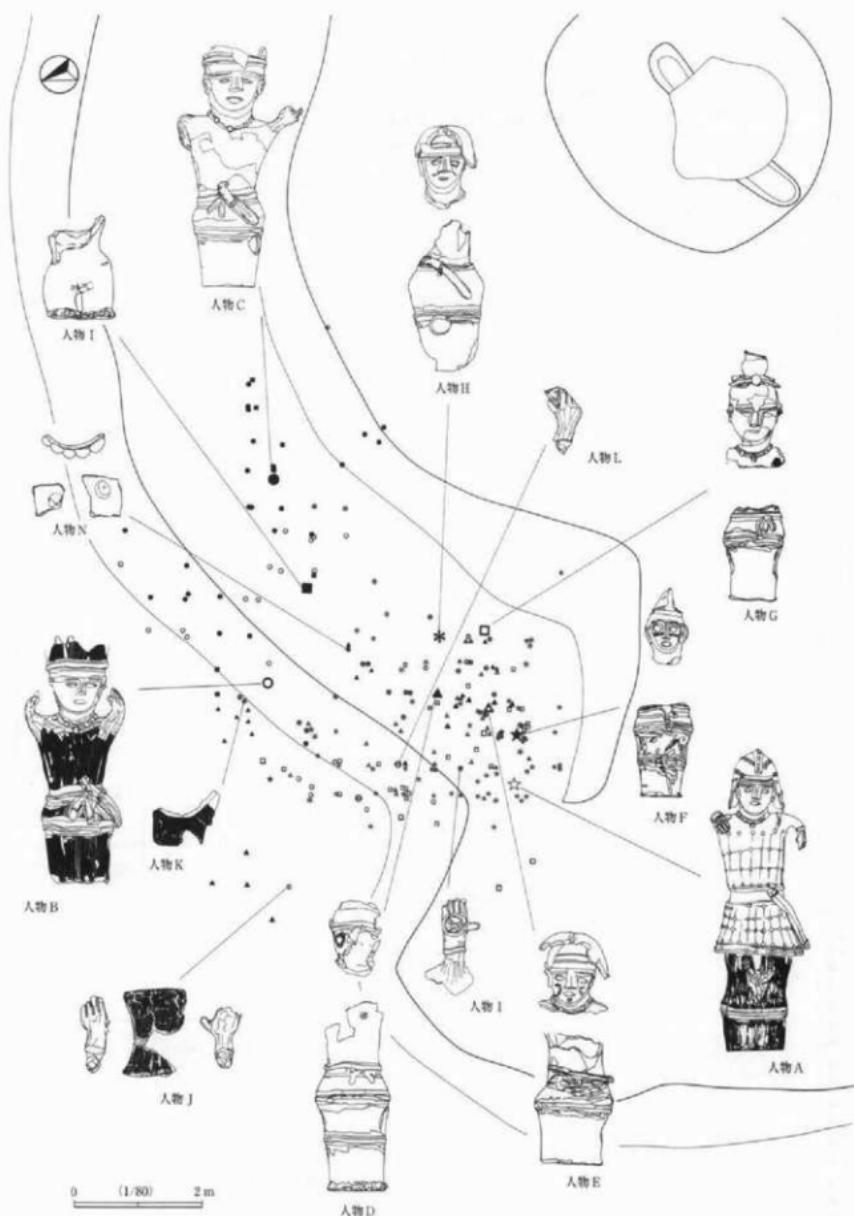
番号	実測							ハケメ	色調	胎土	底部接合	備考					
	実基面の長さ																
	底~1	1~2	2~3	3~4	4~5	幅	高さ										
59	13.0	-	-	-	-	1.1	0.3	丸形	やや低	13	F	中 「逆の」					
60	11.8	-	-	-	-	1.0	0.5	台形	やや低	14	暗A	中abc 「逆の」					
61	13.9	11.9	12.1	-	-	0.9	0.3	台形	中	15	E	やや多a 「の」?					
62	15.2	11.7	-	-	-	1.0	0.5	M形	やや高	14	暗A	中 「逆の」?					
63	15.1	10.4	8.6	-	-	1.0	0.5	台形	低	14	F	中b 「逆の」					
64	-	-	-	-	-	-	-	-	-	14	C	中 「逆の」					
65	11.9	10.5	-	-	-	0.9	0.4	台形	中	14	暗A	中 - 底部外側ヘラケズリ					
66	15.9	7.9	-	-	-	-	0.3	丸形	低	17	B	中 「の」 底部外側ヘラケズリ					
67	14.8	-	-	-	-	1.2	0.5	M形	中	13	C D	やや多 「の」					
68	16.4	-	-	-	-	なし	0.4	三角形	中	14	C E	中b 「逆の」					
69	15.2	12.5	8.8	-	-	1.2	0.2	台形	やや高	13	C	中 「逆の」					
70	-	-	-	-	-	-	-	-	-	13	F	中 「逆の」					
71	15.1	-	-	-	-	1.0	0.2	台形	低	15	C E	やや多b 「逆の」					
72	-	-	-	-	-	-	-	-	-	12	C	中 - 内面ヘラナデ					
73	14.5	14.0	-	-	-	1.0	0.4	台形~丸形	中	14	C E	中 「逆の」					
74	14.0	-	-	-	-	0.7	0.4	台形	やや高	16	C E	やや多b 「逆の」					
75	13.4	-	-	-	-	1.2	0.4	台形	やや低	14	C	中 「の」					
76	15.2	-	-	-	-	0.8	0.4	台形	中	13	E	中ac 「逆の」					
77	15.0	-	-	-	-	1.0	0.4	台形	やや高	14	C E	中 - 内面ヘラナデ					
78	-	-	-	-	-	-	-	-	-	14	E	やや多b 「逆の」					
79	13.0	11.1	8.1	-	-	0.9	0.3	台形	中	14	E	中 「逆の」					
80	-	-	-	-	-	-	-	-	-	15	E	中 - 外側ヘラナデ					
81	-	-	-	-	-	-	-	-	-	14	C	中 「逆の」					
82	-	-	-	-	-	-	-	-	-	14	B	中 -					
83	14.4	7.9	-	-	-	0.7	0.3	台形	低	15	E	中b 「の」					
84	-	-	-	-	-	-	-	-	-	14	B	中 -					
85	-	-	-	-	-	-	-	-	-	?削9	E	中c 「逆の」 底ツマミ、外側ケズリ					
86	-	-	-	-	-	-	-	-	-	14	D	中 - 内面ヘラナデ					
87	-	-	-	-	-	-	-	-	-	14	C E	やや多b - 内面ヘラナデ					
88	13.9	-	-	-	-	1.1	0.7	M形	やや高	14	E	やや多b 「の」					
89	15.3	-	-	-	-	1.0	0.4	台形	中	15	F	中a -					
90	12.6	-	-	-	-	1.0	0.4	台形	やや高	17	C	中 直立立ち上がり					
91	-	-	-	-	-	-	-	-	-	14	E	やや多b 「逆の」?					
92	-	-	-	-	-	-	-	-	-	14	D E	中c -					
93	15.0	-	-	-	-	なし	なし	低形	低	14	B	やや少 -					
94	15.7	-	-	-	-	0.8	0.5	台形	やや高	12	B	中 「の」 3条4段、内側ヘラナデ					
95	13.4	11.1	-	-	-	0.8	0.5	M形	やや高	14	D	中 - 3条4段					
96	-	-	-	-	-	-	-	-	-	15	R	中 -					
97	-	-	-	-	-	-	-	-	-	15	E	中 「逆の」					
98	13.6	-	-	-	-	0.9	0.4	M形	中	15	E	中 「逆の」					
99	14.8	-	-	-	-	1.0	0.4	台形	中	13	C E	中 「の」 外側ヘラケズリ					
100	15.3	-	-	-	-	1.0	0.4	M形	高	14	B C	やや少 「逆の」 黒斑状					
101	-	-	-	-	-	-	-	-	-	14	C	中 「の」					
102	14.8	-	-	-	-	0.9	0.4	台形	中	14	B	やや少 「逆の」					
103	13.5	12.1	-	-	-	0.9	0.4	M形	やや高	15	F	中 「逆の」					
104	-	-	-	-	-	-	-	-	-	15	C D	中 「逆の」?					
105	14.1	-	-	-	-	0.8	0.4	台形	中	14	F	中 -					
106	13.0	-	-	-	-	0.8	0.2	台形	中	15	C E	中c 「逆の」					
107	-	-	-	-	-	-	-	-	-	14	C	中 「逆の」 内面ヘラナデ					
108	16.0	12.9	10.9	-	-	0.8	0.4	台形	中	15	C D	中 黒斑状					
109	16.8	10.1	7.7	-	-	0.9	0.4	二角~台形	やや低	16	E	中 外側ヘラケズリ					
110	14.7	-	-	-	-	1.1	0.3	台形	中	14	C D	中 「逆の」					
111	12.2	14.4	13.6	-	-	0.8	0.4	台形	中や高	20	E	やや多b 「逆の」					
112	-	-	-	-	-	-	-	-	-	14	暗A	中b -					
113	-	-	-	-	-	-	-	-	-	15	B	中 「逆の」? 内面ヘラナデ					
114	13.4	-	-	-	-	なし	0.4	三角形	やや低	19	E	中 「逆の」					
115	-	-	-	-	-	-	-	-	-	14	C	中 -					
116	-	-	-	-	-	-	-	-	-	14	C	中b -					

第17表 円筒・朝顔形埴輪観察表 (3) - 1

番号	體高	口径	底径	器盤厚					透乳									
				第1	第2	第3	第4	第5	A	B	C	D	高さ	横	縦	高さ	横	縦
117	《16.5》	-	9.8	0.9	-	-	-	-	R 15.7	-	-	-	15.5	-	-	-	-	-
118	《6.4》	-	10.5	0.9	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
119	《36.0》	-	12.2	1.5	1.0	1.0	-	-	R 13.5	6.0	5.4	14.4	5.6	5.4	-	-	-	-
120	《20.5》	-	10.1	0.7	-	-	-	-	L 17.2	-	-	-	-	-	-	-	-	-
121	《7.7》	-	11.6	1.1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
122	《16.0》	-	10.9	0.8	-	-	-	-	R 14.2	-	-	13.9	-	-	-	-	-	-
123	《19.8》	-	10.9	0.7	-	-	-	-	R 16.9	-	-	14.6	-	-	-	-	-	-
124	《10.2》	-	10.4	1.0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
125	《20.0》	-	10.6	0.8	0.9	-	-	-	L 16.8	-	-	-	-	-	-	-	-	-
126	35.3	28.9	11.1	1.3	0.9	1.1	1.2	-	L ? 15.5	5.4	4.7	11.4	4.8	4.4	23.4	5.4	4.1	-
127	《18.8》	-	10.1	1.2	-	-	-	-	? 16.8	-	-	-	-	-	-	-	-	-
128	36.3	24.6	12.4	1.1	1.1	0.8	-	-	? 17.4	6.1	5.1	-	5.5	-	-	-	-	-
129	《19.5》	-	11.7	1.1	0.9	-	-	-	L 15.1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
130	《10.9》	-	12.4	1.2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
131	38.5	25.0	10.7	1.5	1.2	0.9	-	-	R 19.0	5.8	7.3	18.8	-	-	18.3	-	-	-
132	《9.1》	-	9.7	0.9	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
133	《8.0》	-	9.2	1.1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
134	《20.1》	28.3	-	-	1.2	1.0	-	-	R	-	-	-	-	-	-	-	-	-
135	《20.6》	-	-	-	0.8	0.9	-	-	R ?	-	5.5	5.4	-	-	-	-	-	-
136	《12.7》	-	-	-	1.0	0.9	-	-	R	-	-	-	-	-	-	-	-	-
137	《11.7》	-	-	-	0.8	-	-	-	R	-	-	-	-	-	-	-	-	-
138	《20.4》	31.5	-	-	-	0.9	0.9	-	R	-	-	-	-	-	-	-	-	-
139	《16.0》	-	-	-	-	0.9	-	-	R	-	-	-	-	-	-	-	-	-
140	《14.6》	-	-	-	-	1.0	-	-	? -	-	-	-	-	-	-	-	-	-
141	《21.6》	32.0	-	-	-	-	1.0	0.7	? -	-	-	-	-	-	-	-	-	-
142	《25.8》	25.0	-	-	0.8	1.0	0.8	-	L ? -	-	6.3	-	-	-	-	-	-	-
143	《18.5》	25.9	-	-	0.8	0.8	-	-	? -	-	6.0	-	-	-	-	-	-	-
144	《18.7》	28.4	-	-	0.8	0.6	-	-	? -	-	6.0	5.3	-	-	-	-	-	-
145	《20.0》	25.4	-	-	-	1.1	1.2	-	? -	-	5.5	-	5.0	-	-	-	-	-
146	《20.8》	25.7	-	-	-	1.0	0.8	-	R	-	-	-	-	-	-	-	-	-
147	《11.5》	-	-	-	0.9	-	-	-	L	-	-	-	-	-	-	-	-	-
148	《25.0》	-	-	-	1.0	1.0	0.8	-	R	-	-	-	-	-	-	-	-	-
149	《19.3》	-	-	-	1.0	1.2	-	-	? -	-	5.3	-	-	-	-	-	-	-
150	《12.5》	34.8	-	-	-	1.0	0.9	-	? -	-	-	-	-	-	-	-	-	-
151	《12.2》	-	-	-	-	0.8	0.7	-	? -	-	-	-	-	-	-	-	-	-
152	《9.7》	-	-	-	-	-	0.9	-	? -	-	-	-	-	-	-	-	-	-
153	《7.0》	-	-	-	0.9	-	-	-	R	-	-	-	-	-	-	-	-	-
154	《6.4》	-	-	-	1.3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
155	《11.3》	-	-	-	0.9	1.0	-	-	? -	-	-	-	-	-	-	-	-	-
156	《12.0》	-	-	-	-	1.1	1.0	-	? -	-	-	-	-	-	-	-	-	-
157	《9.5》	-	-	-	-	0.8	-	-	? -	-	-	-	-	-	-	-	-	-
明1	66.5	53.0	12.8	1.4	1.1	1.2	1.0	1.3	R 18.1	5.5	6.0	19.1	5.4	6.5	-	-	-	-
明2	《35.7》	-	11.5	0.9	0.9	1.1	-	-	? 17.0	6.8	6.0	15.6	5.0	3.8	-	-	-	-
明3	《3.7》	35.6	-	-	-	-	-	0.9	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
明4	《29.7》	38.6	-	-	-	-	-	0.9	1.1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
明5	《28.2》	38.5	-	-	-	-	-	1.0	1.2	-	-	-	-	-	-	-	-	-
明6	《41.3》	-	12.5	1.2	1.1	1.2	-	-	R 16.4	6.4	6.1	18.5	6.0	-	-	-	-	-
明7	《39.0》	-	10.4	1.2	1.4	1.2	1.2	-	R ? 14.4	6.5	5.9	-	-	-	-	-	-	-
明8	《33.4》	-	8.8	1.2	1.1	1.0	-	-	? 15.3	5.7	6.0	16.0	-	-	-	-	-	-
明9	《11.2》	46.0	-	-	-	-	-	1.1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
明10	《13.4》	36.6	-	-	-	-	-	1.2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
明11	《15.1》	-	-	-	-	-	-	1.2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
明12	《20.7》	36.8	-	-	-	-	-	0.9	0.8	-	-	-	-	-	-	-	-	-
明13	《16.6》	41.4	-	-	-	-	-	0.8	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
明14	《9.9》	-	-	-	-	-	-	0.9	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
明15	《12.1》	-	-	-	-	-	-	1.2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
明16	《20.5》	-	-	-	-	-	-	0.9	1.1	-	? -	-	-	-	-	-	-	-
明17	《24.3》	40.3	-	-	-	-	-	1.1	1.0	-	-	-	-	-	-	-	-	-

第18表 円筒・朝顔形埴輪観察表（3）-2

番号	実器の長さ					幅	高さ	形態	安定度	ハケメ	色調	釉土	底部接合	備考	
	底～1	1～2	2～3	3～4	4～5										
117	13.4	-	-	-	-	1.0	0.5	三角・台形	やや低	19	C D	中	「逆の」		
118	-	-	-	-	-	-	-	-	-	15	C	中	「逆の」?		
119	12.6	9.9	9.2	-	-	1.0	0.5	台形	中	14	B	中	「の」	3条4段	
120	14.6	-	-	-	-	0.9	0.3	台形	やや低	15	F	やや多	-		
121	-	-	-	-	-	-	-	-	-	14	C D	中c	-		
122	12.8	-	-	-	-	なし	0.3	三角形	やや低	14	C	中	「逆の」		
123	12.6	-	-	-	-	0.9	0.4	台形	やや高	14	B	中b	「逆の」		
124	-	-	-	-	-	-	-	-	-	14	C D	やや多b	「逆の」		
125	14.7	-	-	-	-	0.9	0.4	台形	やや高	15	B	中	「逆の」		
126	13.8	8.9	7.2	-	-	0.8	0.4	台形	中	14	C D	中	-	3条4段	
127	14.6	-	-	-	-	1.0	0.4	台形	中	14	C	中	「の」		
128	15.0	10.7	9.0	-	-	1.0	0.4	M形	高	15	D E	中	「逆の」		
129	13.8	-	-	-	-	0.8	0.3	台形	中	14	B C	やや多b	「逆の」	外面ヘルミガキ?	
130	-	-	-	-	-	-	-	-	-	14	B	やや多	「逆の」		
131	16.0	12.8	9.7	-	-	0.9	0.3	台形	中	15	C E	中	「逆の」		
132	-	-	-	-	-	-	-	-	-	14	C	中	「逆の」		
133	-	-	-	-	-	-	-	-	-	15	C	中	「逆の」		
134	-	12.0	-	-	-	0.7	0.4	台形	やや高	14	A	中	-		
135	-	11.5	-	-	-	1.0	0.4	M形	中	14	C	中	-		
136	-	-	-	-	-	0.6	0.4	台形	中	19	E	中b	-		
137	-	-	-	-	-	0.8	0.4	台形	中	14	C	中	-		
138	-	9.1	-	-	-	0.9	0.4	台形	やや高	15	B	中	-	3条4段?	
139	-	-	-	-	-	0.9	0.3	M形	やや高	16	C	中	-		
140	-	-	-	-	-	1.0	0.5	M形	高	14	C	中	-		
141	-	11.3	6.0	-	-	0.8	0.5	台形	やや高	18	C	中	-	3条4段	
142	-	7.9	7.3	-	-	1.0	0.3	台形	やや低	15	E	中b	-		
143	-	8.1	-	-	-	1.0	0.4	台形	中	14	C	中	-		
144	-	10.4	8.3	-	-	1.0	0.4	台形	やや高	15	C E	中	-		
145	-	-	10.9	-	-	0.8	0.4	台形	中	15	C D	中	-		
146	-	-	10.4	-	-	0.9	0.3	台形	低	16	C	中	-		
147	-	-	-	-	-	0.8	0.4	台形	中	15	C E	中b	-		
148	-	11.6	-	-	-	0.7	0.4	台形	中	14	B	中	-		
149	-	-	9.0	-	-	1.0	0.5	台a形	やや高	14	B	中a	-		
150	-	-	6.8	-	-	0.9	0.5	台形	中	15	E	中b	-	3条4段?	
151	-	-	-	-	-	0.6	0.4	台a形	中	17	C D	中c	-		
152	-	-	-	-	-	1.0	0.4	台形	やや高	14	B	やや多	-		
153	-	-	-	-	-	なし	なし	三角形	やや低	14	C D	中	-		
154	-	-	-	-	-	-	-	-	-	14	C D	中	外面研削		
155	-	-	-	-	-	1.0	0.3	台形	中	15	B F	中bc	-		
156	-	-	-	-	-	0.8	0.3	台形	中	14	A	中	-	3条4段?	
157	-	-	-	-	-	0.9	0.4	M形	中	15	B	中	-		
朝1	15.3	10.1	10.8	12.8	15.8	0.9	0.3	台形	やや高	14	B F	中b	「逆の」		
朝2	14.5	11.2	7.2	-	13.7	1.0	0.4	台形	やや高	14	E	多b	-		
朝3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	17	B	中	-		
朝4	-	-	-	-	-	16.6	1.0	0.5	台形	高	14	B	やや多	-	
朝5	-	-	-	-	-	16.5	1.2	0.5	台形	中	15	B	中	-	
朝6	14.4	14.1	9.5	-	-	1.0	0.4	丸形	中やや高	14	B	中b	「逆の」		
朝7	13.0	12.1	7.0	-	-	1.0	0.4	台形	やや高	14	B	中b	「中」		
朝8	12.3	10.8	8.0	-	-	1.1	0.4	台形	中	14	C E	中b	-		
朝9	-	-	-	-	-	-	-	-	-	19	F	中b	-		
朝10	-	-	-	-	-	12.0	1.2	0.4	台形	中	19	C E	中	-	
朝11	-	-	-	-	-	1.3	0.8	台形	やや低	14	F	中	-		
朝12	-	-	-	-	-	11.6	0.7	0.6	台形	やや高	15	C	中	-	
朝13	-	-	-	-	-	12.4	0.8	0.5	台形	高	14	B	中	-	
朝14	-	-	-	-	-	なし	0.7	三角形	中	15	B	少	-		
朝15	-	-	-	-	-	11.4	0.9	0.6	台形	中	19	B	中	-	
朝16	-	-	6.8	-	-	1.1	0.6	M形	やや高	13	D	中c	-		
朝17	-	-	-	-	-	16.2	1.0	0.6	M形	中	13	B	中	-	



第70図 人物埴輪出土位置図

人物埴輪（第70～79図、第19表、図版37～41）

人物1 脚まで表現した武人埴輪である。所々欠損するが全体を復元することができた。人物埴輪の中で一番手の込んだ作りである。脚部と体部は接合可能であるが、体部の重量があるため、接合強度の関係で、接合を行うことを断念した。

基部から粘土紐によって成形を行う。脚が2つに分かれる部分と再び1つになる接点に、一本の粘土紐を、前面と背面にブリッジ状に渡して補強している。脚は、右足が先に、その後左足が作られている。このことは、左足の内股には、右足が邪魔をしてハケ目を施すことができず、ナデのみ行われていることから明らかである。体部から頭部も、引き続き粘土紐の積上げにより成形される。腕・大刀は、ソケット状の差し込み式である。耳の貼付位置には事前に軽く貫通するほどの孔が穿たれ、耳本体の裏面に突起を作り、差し込んでいる。背と挂甲の下部は、後からの貼り付けである。挂甲下部は、内面のハケ目が背面にのみ施されることと両側面に接合痕と見られるひび割れが縱方向に見られることから、前面と背面とで2分して製作し、本体に付ける際に接合したものと考えられる。

脚部は二つに分かれるが、つま先の表現はなく、前後の区別なくほぼ対称である。全体にタテハケが施される。挂甲は、小札を縦長の格子状の沈線で表現され、交点には円形の粘土（径12mm、厚さ1mm）が貼付されている。背面には挂甲の表現は見られない。挂甲下部の沈線と裾のナデ部分に赤彩が施される。肩には挂甲を吊る紐の表現がある。大刀は、他の人物埴輪に比べ長く（長さ25cm、幅2.5cm）、鐸の表現の他に体に装着するための紐の表現が先端の方に見られる。首飾りは、正面に勾玉、他は丸玉を等間隔に配置している。首飾りと挂甲の間の胸元の部分には、ヨコハケが施され、赤彩されている。手には、手甲が表現される。右腕を前に出し動きのある表現である。顔は、目、口が切り抜き、鼻、眉、耳は粘土貼付けで表現されている。耳には、耳環が下部に付けられている。背は、眉庇付のもので頂部が、大きく盛り上がっている。その両脇に粘土紐を2本ずつ貼付し、その上に円形粘土を貼り付けている。背の耳にかかる部分にも円形粘土を貼付する。

人物2 冠をかぶり両手を挙げる人物埴輪である。所々欠損するが全体像は復元できる。

基部から粘土紐の積上げで成形している。腕・大刀は、ソケット状の差込式である。円筒埴輪と同様にタテハケを施した後に突帯を付け、透孔を穿孔している。透孔は円形で、第1段に對で穿孔される。

人物1と違い脚は表現されず、円筒のままである。大刀は、把がまっすぐでなく、意識的にやや曲げて表現されている。鐸の表現は、細い粘土紐の貼付けによって行っている。突帯は2条で、第2突帯は衣服の腰紐も兼ねる。腰紐の結び目から垂れるように2本の紐先の表現がある。首飾りの中央には勾玉があり、他は丸玉が等間隔に並んでいる。掲げた手には何かが剥がれた跡ではなく、両手を挙げることで何かを表現していたことが分かる。顔は、目、口を切り抜き、鼻、眉、耳は粘土貼付けで表現されている。耳の下部には、耳環が付けられている。冠の内面上端付近には、ヨコハケが施される。

人物3 冠をかぶり、右手を後ろにまわす人物埴輪である。

基部から粘土紐の積上げで成形している。腕・大刀は、ソケット状の差込式である。耳を付ける位置に小さな孔が開いているため、人物1と同様に耳は差込式であることが分かる。円筒埴輪と同様にタテハケを施した後に突帯を付け、透孔を穿孔している。透孔は、円形で第1段に對で穿孔される。

大刀は、把がまっすぐでなく、意識的にやや曲げて表現されている。鐸の表現は、作り出しだある。把と鞘の部分は、別作りである。突帯は2条で第2突帯が、衣服の腰紐も兼ねる。腰紐の結び目から垂れる



第71图 人物埴輪 1-1

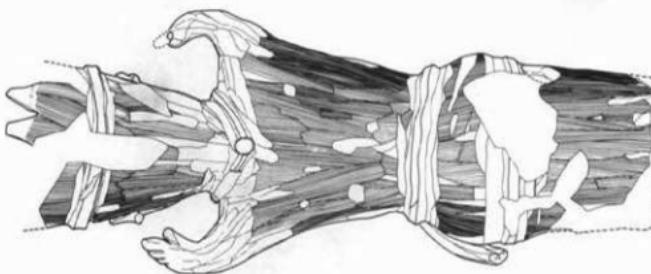
0 (1/5) 20cm



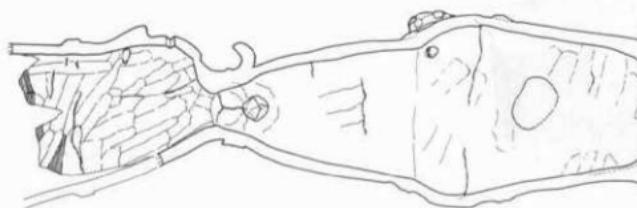
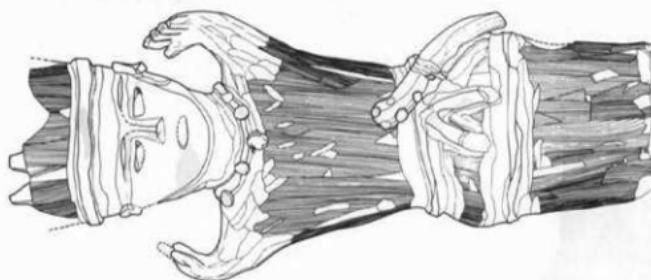
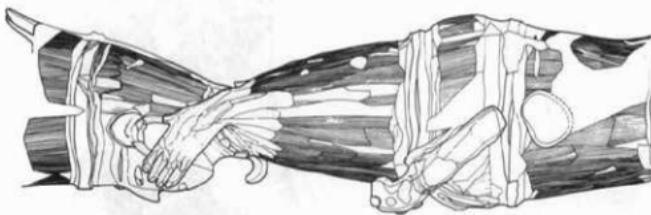
第72図 人物埴輪 1 - 2

0 1/5 20cm

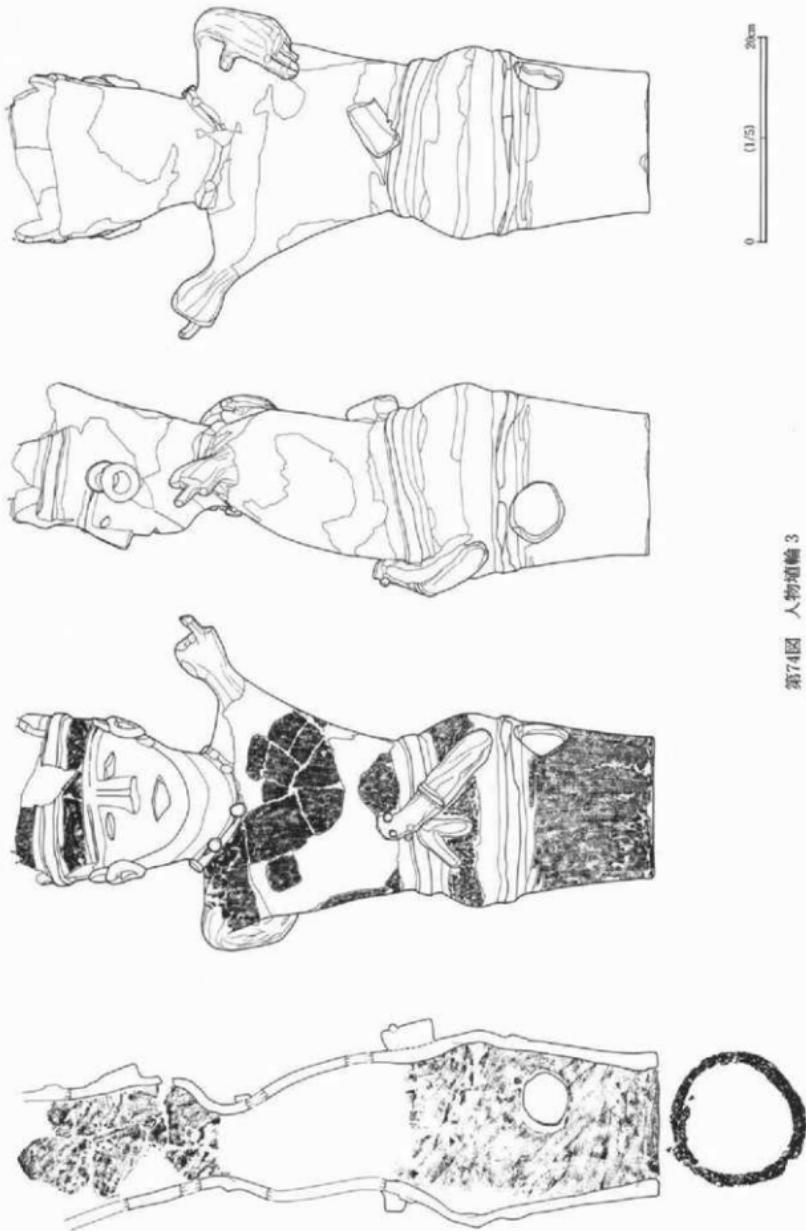
第73图 人物埴輪2



0 (1/5) 20cm



第74図 人物埴輪 3



ように2本の紐先の表現がある。首筋りはすべて丸玉であり、等間隔に並んでいる。後ろに回した右手の先の腰のあたりに、完形ではないが方形の物体が貼付されている。右腰にあることから胡簾の表現である可能性があり、腕の動作と考え合わせると矢を抜こうとする様子を表しているのかもしれない。後ろに回している右手は指の配置から手の平側を外側にしていることが分かる。顔は、目、口を切抜き、鼻、眉、耳は粘土貼付けで表現されている。耳の下には、耳糸が付けられている。冠の内面上端付近には、ヨコハケが施される。顔と腕以外には、ハケ目が施されたままである。人物2とほぼ同じであるが、こちらには冠と眉の間にハケ目がある点だけが違う。

人物4 女性の人物埴輪の基部から胸部である。

粘土紐の積上げにより成形を行っている。内面を見ると、第2突帯と第3突帯の角度の変換線で粘土紐同士の接合痕が明瞭になっているので、製作時における画期（乾燥期間）を表していると考えられる。タテハケを施した後に突帯を付け、透孔を穿孔している。透孔は円形で、第2段に對で穿孔される。

突帯は3条で、第3突帯は衣服の腰紐も兼ねる。腰紐で結び目から垂れ下がる2本の紐の表現は、他のものと違い粘土を貼付せず、赤彩のみの表現で済ませている。肩口の部分にも赤彩が施されている。腰紐部の赤彩は、正面だけに施される。左乳房のみ残存し、粘土貼付けによって表現している。大刀の表現はない。

人物5 人物埴輪の基部である。

粘土紐の積上げにより成形を行っている。内面を見ると第1突帯まで一気に積み上げた可能性がある。第2突帯での角度の変換線で粘土紐同士の接合痕が明瞭になっている。タテハケを施した後に突帯を付け、透孔を穿孔している。透孔は円形で、第1段に對で穿孔される。左側面に位置する透孔は、縦長である。これは、円筒埴輪を含めて極めてまれな形状である。また、第1段に透孔が穿孔されるため、基底面から第1突帯までが長い。

突帯は2条あり、第2突帯は、衣服の腰紐も兼ねる。腰紐の結び目から垂れる2本の紐は、正面やや左寄りに位置し、粘土紐の貼付けで表現される。先端は、欠損している。腰紐は正面のみ赤彩が施される。

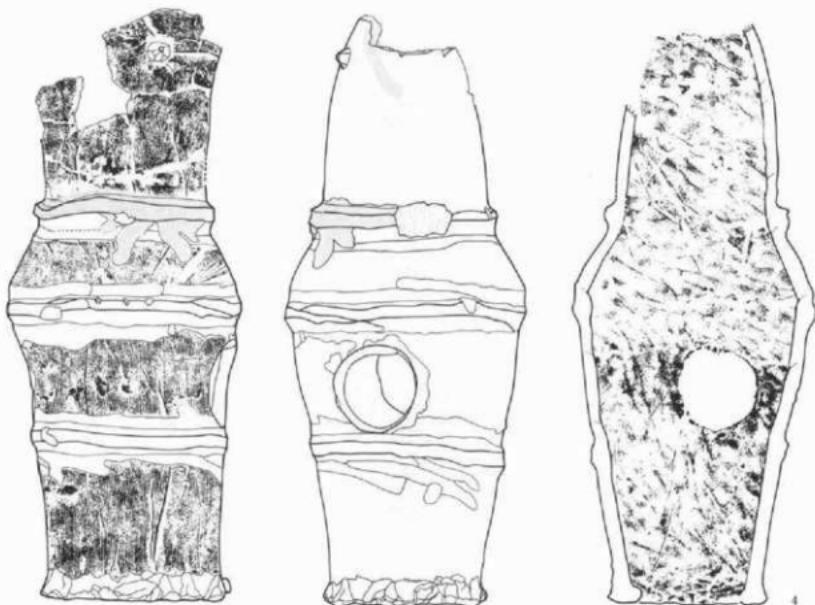
人物6 大刀を装着する人物埴輪の基部と胸部の一部である。全体的にしっかりととした作りである。

粘土紐の積上げにより成形を行っている。内面を見ると、突帯の位置に関係なく、角度の変換線で粘土紐同士の接合痕が明瞭になっている。タテハケを施した後に突帯を付け、円形の透孔を穿孔している。透孔は円形で、第1段に對で穿孔される。透孔が突帯を完全に切っている。このことは、透孔の基底面からの高さを意識したことであろうと考えられる。大刀は、第2突帯に径1.3cmの小孔を開け、大刀本体に突起を作り出し、差し込んで接合している。

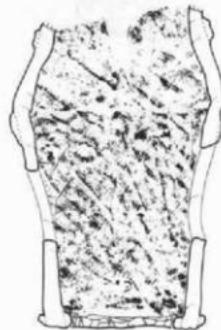
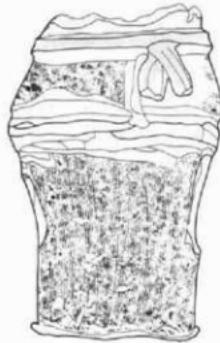
大刀は、透孔の位置から判断して左腰に装着される。把部は、やや屈曲し、円形粘土粒（径0.8cm）が6点貼付される。鐔は、大刀を本体に接合した後、細い粘土紐を貼付して表現される。鞘部のみ赤彩が行われる。突帯は2条で、第2突帯は衣服の腰紐も兼ねる。第2突帯直下の内傾した外面には、縦方向ではなく、ナナメハケが施される。胸部は、タテハケ後上部のみナナメハケが施される。

人物7 人物埴輪の基部である。

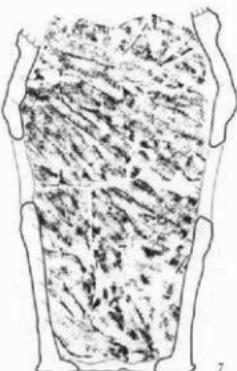
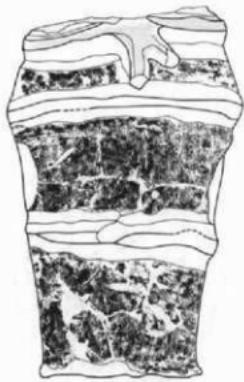
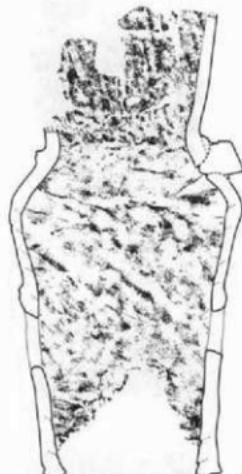
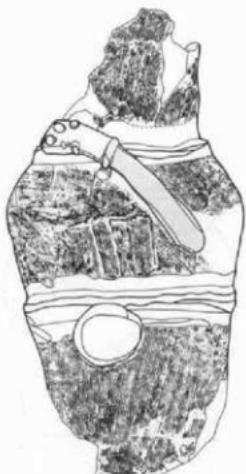
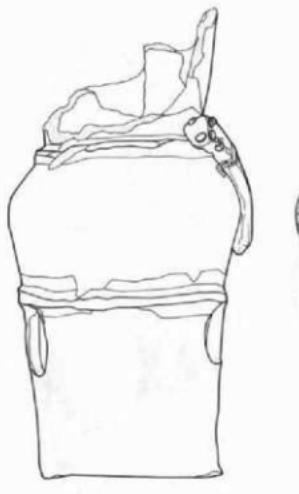
粘土紐の積上げにより成形を行っている。内面を見ると第2突帯まで一気に積み上げた可能性がある。第3突帯の角度の変換線で粘土紐同士の接合痕が明瞭になっている。タテハケを施した後に突帯を付け、透孔を穿孔している。透孔は円形で、第2段に對で穿孔される。



0 (1/4) 20cm



第75図 人物埴輪 4・5



0 (1/4) 20cm

第76図 人物埴輪 6・7

突帯は3条で、第3突帯は、衣服の腰紐も兼ねる。腰紐の結び目から垂れ下がる2本の紐は、正面やや左寄りに位置し、粘土紐の貼付けで表現される。先端は欠損している。腰紐は正面のみ赤彩が施される。外面は、意識的ではないと思われるが一部雑なナデが施される。

人物8 琴を弾く人物埴輪の基部から胴部である。

突帯まで粘土紐を積み上げ、突帯を貼付し、その後脚をのせる台部を成形する。台部は、粘土紐3本ないし4本を、側面から側面に横に伝わせて成形する。その後、再び粘土紐を積み上げて胴部を成形する。脚を付け足した後に琴本体をのせている。突帯は1条で、透孔は円形で、第1段に穿孔される。

脚は、右脚先が左脚先より内側に入る。脚の指先は、残存しないが、4本指で表現されている。琴本体はほぼ長方形で、縦7.0cm、横16.0cmであり、わずかに長辺の中央がへこんでいる。5弦を線刻で表している。弦孔は見られない。弦は平行に張られ、頭部（奏者の右手側）端にまでのびずに途中で終わっている。琴板中央に円形粘土粒（径1.0cm、厚0.4cm）で琴柱が表現されているが、弦と弦との間に位置している。尾端（奏者の左手側）は、各弦につき一つのかすかな突起が見られる。人物埴輪片44が琴の撥と考えられる。琴本体の上面と側面には、赤彩が施されている。また上面には、横方向にハケ目が施されるが、下面是ナデ調整である。上半身は前傾している。

人物9 脚が表現された人物埴輪の脚部から胴部の一部である。全体的に小さく、表現方法も他の人物埴輪に比べ異質である。

片足ずつ粘土紐で積み上げている。

つま先は、意識的かどうかは不明であるが、特に右脚には、表現しようとして指で押した痕跡が認められる。脚は全体的に太く、右脚はやや膨らみ気味である。腹部が膨らみをもつことから妊婦を表している可能性がある。外面にはハケは施されず、すべてナデ調整である。

人物10 男性の人物埴輪の頭部である。

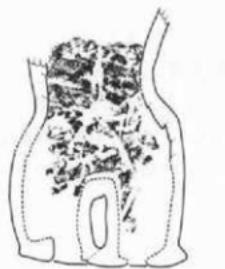
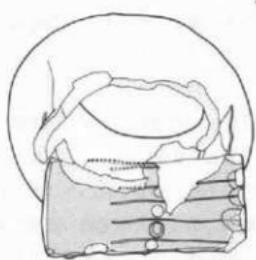
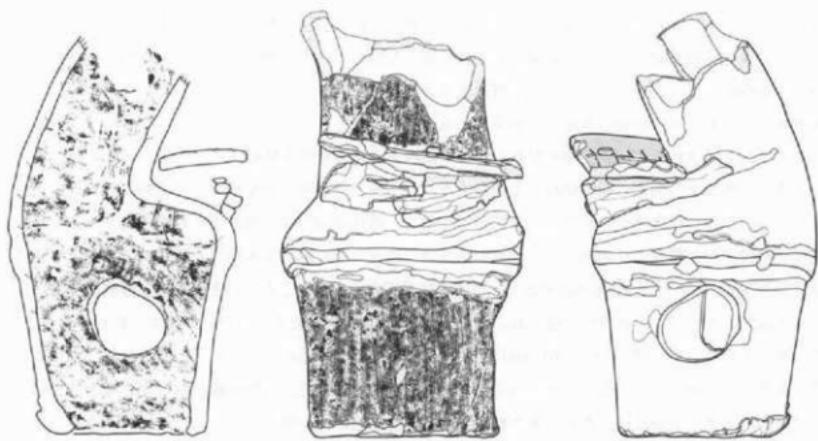
粘土紐の積上げによる成形である。本体の頭頂部は、密閉せず、径6.5cm円形に開いている。顔の表現を終えてから、頭髪をのせて接合している。頭髪は、板状に成形したものと頭の形に合わせて指で折り曲げた痕跡がある。耳貼付位置にあらかじめ小孔を開けてある。

首飾りは、背の部分のみ残存する。首飾り紐がY字状を呈するが他の例を考慮するとただ単に粘土紐が余ったためと考えられる。円形粘土粒（径1.0cm、厚0.4cm）を等間隔に配置し、玉を表現している。耳は、円形に表現され、下部に耳環を付ける。鼻、眉、おでこの鉢巻き状のものは、すべて粘土貼付けである。口、目は、切り抜いて表現している。頭頂部と顔面は、ハケ目後丁寧なナデが施される。後頭部は、ハケ目のみである。頭髪は、内面が一定方向のハケ目で、外面は、各方向のハケ目である。髪の分け目は、強いユビナデで表現する。毛先はそれぞれ2方向に分かれ、ややはね上がっている。

人物11 人物埴輪の頭部破片である。残存が悪い。

粘土紐の積上げによる成形である。眉の上に耳の円形粘土がのっているため、眉が先に作られたことが分かる。耳貼付位置にあらかじめかすかに貫通する小孔を開け、耳をその位置に貼り付けるようにしている。

首飾りには、円形粘土粒（径1.3cm、厚0.4cm）を貼付している。耳は、円形に表現され、下部に耳環を付けていた痕跡を残す。目は、切り抜いて表現している。ハケ目は、見られない。顔面には、赤彩が施される。赤彩されている部分には、ひっかき傷のように細かい線が認められる。

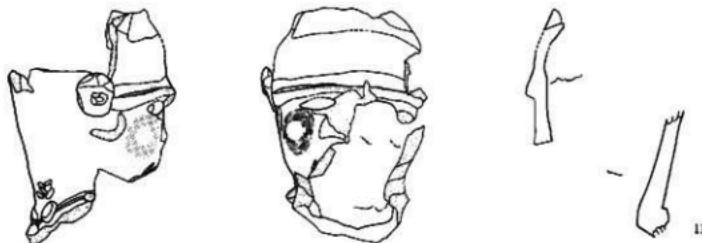


0 (1/4) 20cm

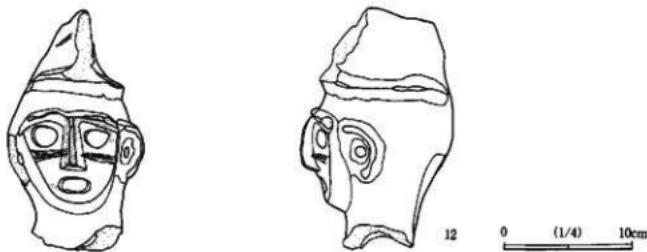
第77図 人物埴輪 8・9



10



11



12

0 (1/4) 10cm

第78図 人物埴輪10・11・12

人物12 帽子をかぶった人物埴輪頭部である。表現の仕方が他の人物埴輪に比べ明らかに異なっている。
粘土紐積上げにより頭頂部まで閉塞する。顔面は、厚さ1cmの板状粘土を貼り付け、厚みをもたせて表情を作っている。

鼻、眉、耳たぶは、粘土貼付けである。耳たぶを貼り付けてから耳孔をしっかりと開けている。口、目は切り抜きで、目は丸みを帯び、口は比較的大きく開けて表現している。帽子の縁は、断面三角の粘土紐を付けるが、全周はしない。顔面には赤彩が施される。赤彩されている部分には、ひっかき傷のように細かい線が認められる。

人物13 壺を頭にのせた女性の人物埴輪である。

粘土紐の積上げによる成形である。本体の頭頂部は密閉せず、径5.5cm円形に開放している。顔の表現を終えてから、頭髪をのせて接合している。頭髪は、板状に成形し、両面にハケ目を施したものの中をくりぬき、その上に粘土紐積上げにより壺を作り出している。壺の完成後に島田髷をまとめる紐を貼付する。壺と頭部本体の接合には雑に多くの粘土が装着されている。耳貼付位置にあらかじめかすかに貫通する小孔を開け、耳をそこに貼り付けるようにしている。

首飾りは、円形粘土粒（径1.3cm、厚0.5cm）を等間隔に貼付している。正面中央は、勾玉を配置している。耳は、円形に表現され、下部に耳環を付ける。鼻、眉、耳は、すべて粘土貼付けである。鼻には鼻孔は表現されない。口、目は、切り抜いて表現している。外面は、丁寧なナデによってハケ目をほどんどナデ消している。後頭部には、ハケ目がわずかに残っている。島田髷は、やや四隅の突出した方形を呈す。正面中央には、かんざしの表現がある。顔面には、赤彩が施される。赤彩されている部分には、ひっかき傷のように細かい線が認められる。

人物14 男性の人物埴輪の頭部である。

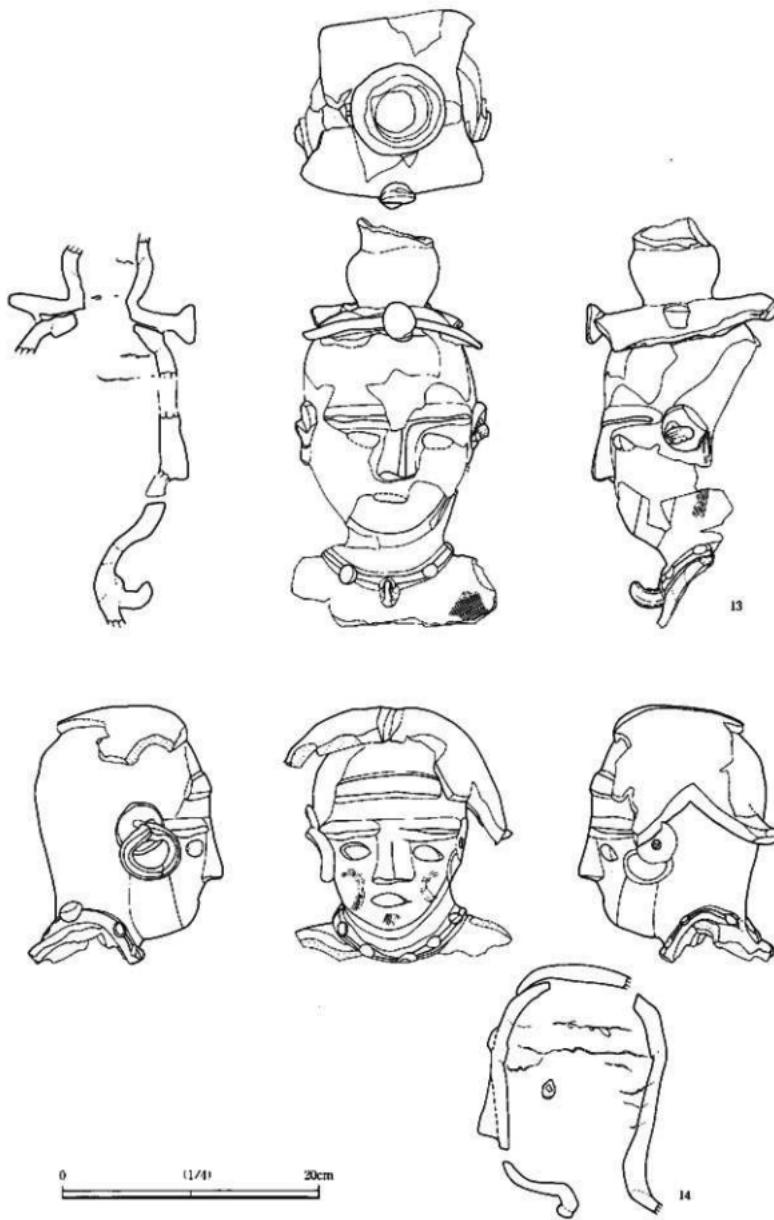
粘土紐の積上げによる成形である。本体の頭頂部は、密閉せず、径6.0cm円形に開放している。顔の表現を終えてから、頭髪をのせて接合している。頭髪は、板状に成形したものを頭の形に合わせて指で折り曲げたものである。耳は、貼付位置にあらかじめかすかに貫通する小孔が開いているため、差込式であったと考えられる。

首飾りには、円形粘土粒（径1.8cm、厚0.7cm）を等間隔に貼付している。正面中央は、残存しないが粘土貼付け位置が他に比べ下に位置するため、勾玉であった可能性が強い。耳は、円形に表現され、下部に耳環を付ける。鼻、眉、おでこの鉢巻状のものは、すべて粘土貼付けである。鼻には鼻孔は表現されない。口、目は、切り抜いて表現している。左目がやや垂れている。顔面と耳より下の後頭部には、ハケ目後丁寧なナデが施される。頭髪は、内面が一定方向のハケ目で、外面は、各方向のハケ目である。髪の分け目は、強いユビナデで表現する。毛先は、それぞれ2方向に分かれ、やはね上がっている。顔面には、赤彩が施される。赤彩されている部分には、ひっかき傷のように細かい線が認められる。

人物埴輪破片（第80～82図、図版42～44）

人物15から人物26は人物埴輪の手腕部分である。肩部と腕部の接合がソケット状の差込式であるため、ほとんどが本体から離れて出土した。基本形として腕が短く、手の平をややつぶして平らにし、指は後付けで五本丁寧に長さを変えて表現している。

人物15 手甲を有する肩から腕部分である。左手である。手甲は、粘土紐の貼付によって表現され、赤彩が施される。外面調整は、丁寧なナデである。肩と腕の開き具合から手を下に向けていたとは、考え難



第79図 人物埴輪13・14

第19表 人物埴輪観察表

番号	器高	底径	透孔						実容		ハケメ	色調	胎土	底部接合	備考					
			A			B			形態	安定度										
			穿孔	高さ	横	穿孔	高さ	横												
1	99.5	18.5	?	6.6	5.7	4.5	6.8	6.2	5.4	M形	高	14	B	中	透の					
2	64.5	14.0	?	7.4	5.1	?	6.1	4.1	3.8	台形	やや高	14	B	中	透の					
3	(63.0)	13.0	L?	8.0	5.2	4.8	8.3	6.5	5.4	台形	やや高	14~15	B	やや多	透の					
4	(46.4)	15.2	?	13.6	6.4	6.0	13.2	6.0	6.7	台形	中	14~15	E	中b	の?					
5	(26.0)	13.6	?	6.8	6.4	5.6	6.8	5.7	7.7	台形	やや高	13~14	E	中b	の?					
6	(36.8)	-	R	8.4	5.5	4.3	9.5	6.0	5.4	M形	やや低	14~15	B	中b	?					
7	(28.0)	14.4	?	13.2	6.6	6.0	12.0	5.7	5.0	台形	やや低	13~14	C	中b	?					
8	(33.6)	15.6	R?	6.4	5.4	5.3	6.0	5.6	5.7	丸形	中	14	C	中	透の					
9	(20.4)	9.2	?	-	-	-	-	-	-	-	-	-	ナデ	B	中b	-				
10	(20.4)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	14	C	中	-				
11	(18.0)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	ナデ	E	中b	-				
12	(18.0)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	ナデ	C	中b	-				
13	(32.0)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	19	F	中	-				
14	(20.0)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	19	C	中	-				

く、手を前気味に出していた可能性がある。接合部分、胎土、色調の不一致から少なくとも顔が復元できなものの中には、同一個体のものはない。

人物16 手甲を有し、腕全体が内側に曲がっている。左手である。手甲には、人物15と違って、粘土紐交点に扁平な円形粘土粒が貼付されている。手甲には、赤彩が施される。外面の調整は、丁寧なナデである。

人物17 手甲を有し、腕全体が内側に曲がっている。左手である。手甲には、人物15と違って、粘土紐交点に扁平な円形粘土粒が貼付されている。外面の調整は、やや雑である。

人物18 やや内側に曲がっている。左手である。親指は内側に曲がっていて何らかの動作を表すと思われるが、他の指が残存せず判然としない。手の平側は、丁寧なナデが施されるが甲側は、ハケ目が残っている。色調・胎土とともに、肩接合部分からの長さがない点と指が長い点、手の甲側の指の付け根が潰れ気味である点から人物20とセットであったと考えられる。

人物19 右手である。指先が潰れており、内側には、剥がれた痕跡のようなものがある。全体がやや内側に曲がっている。小指のみ残存している。

人物20 右手である。人物18とセットである可能性が高い。

人物21 左手である。親指と中指を欠損する。腕は、ほぼ真っ直ぐに伸びている。19と21は、手首の親指よりの部分がくびれるため同一個体である可能性がある。

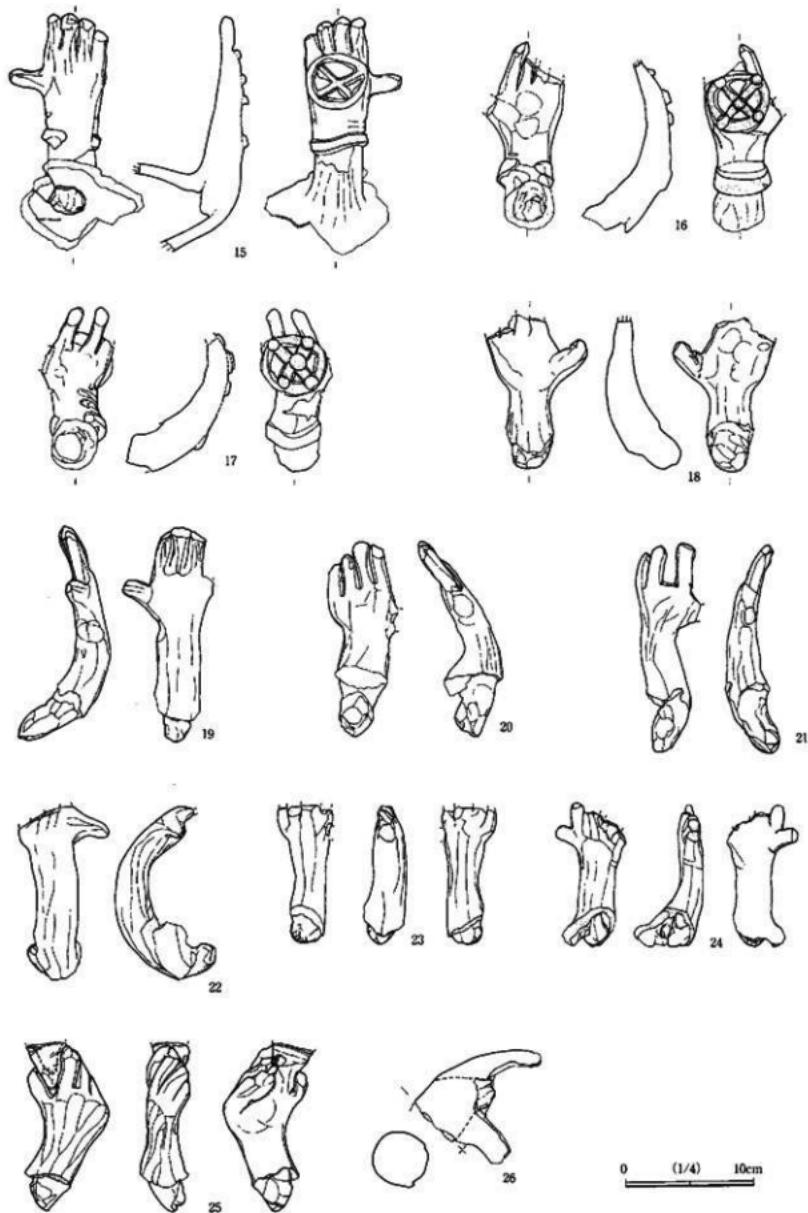
人物22 腕が細く長い。比較的強く屈曲するため、人物3のように手を後ろに回していた可能性が強い。そうなると右手を表現することになる。親指のみ残存する。

人物23・24 確実に同一個体と考えられる。腕は細く、短い。23が右手、24が左手を表している。指先はほとんど欠損する。

人物25 右手である。手に中空のものを握っている。断面はほぼ円形で、元が細く、先端がややくびれて広がるところで欠損している。角杯を表現したものである可能性がある。

人物26 肩接合の部分である。右肩として実測を行ったが左肩の可能性もある。実測背面にハケ目がかすかに確認できる。

人物27 女性の頭髪部分である。島田髻を表現している。髪をまとめる紐の左右側面は、輪を描く。紐上面には赤彩が施されている。正面中央には、かんざしを表していた円形粘土粒の刺離痕が見られる。内



第80図 人物埴輪破片 (1)

外面ともにハケ目、端部には丁寧なナデが施される。頭部本体との接合は正面、背面から粘土を充填して行われている。正面の下部はおでこ上部に当たるため赤彩の痕跡がある。形状、色調、胎土から人物11と同一個体の可能性が高い。

人物28 女性の頭髪部分である。島田齧を表現している。髪をまとめる紐が剥がれた痕跡が見られる。正面中央には、かんざしを表す円形粘土粒が貼付される。内外面ともにハケ目、端部には丁寧なナデが施される。人物11とは別に同様の女性の埴輪が存在していたことが分かる。

人物29 女性の頭髪部分破片である。島田齧を表現している。内外面ともにハケ目、端部には丁寧なナデが施される。人物28と同一と考えられるが、若干厚みが異なるようである。

人物30 男性の振り分け髪の一部と考えられる。下端は、ほぼ直角になる。他の髪の表現は、毛先がはね上がっているのに対し違いが見られる。頭頂は、円形に空間があり何かを戴せていたようである。人物31・32も同様の形状であり、同一個体破片の可能性があるが、そうなると若干ゆがみが生じる。外面は、2方向のハケ目、内面は無調整である。頭頂部に当たる部分には、指で強く押し付けた痕があり、赤彩されている。

人物31 男性の振り分け髪の一部と考えられる。下端は、ほぼ直角になる。外面は2方向のハケ目、内面は無調整である。頭頂部に当たる部分には、指で強く押し付けた痕がある。

人物32 男性の振り分け髪の一部と考えられる。下端は、ほぼ直角になる。後頭部に当たる部分が、少しはみだしている。外面は、2方向のハケ目、内面は無調整である。頭頂部に当たる部分には、指で強く押し付けた痕があり、赤彩されている。

人物33 男性の振り分け髪の先端である。端部がややはね上がる。外面はナデ、内面はハケ目が残存している。人物14と同一と考えられるが接合面はない。

人物34 男性の振り分け髪の先端である。先端がややはね上がり、指でつまんだ痕跡がある。外面はナデ、内面はハケ目が残存している。人物10と同一と考えられるが接合面はない。

人物35 男性の振り分け髪の先端である。先端がややはね上がり、指でつまんだ痕跡がある。外面は、ハケ目を施した後ナデ、内面はハケ目が残存している。人物10と同一と考えられるが接合面はない。

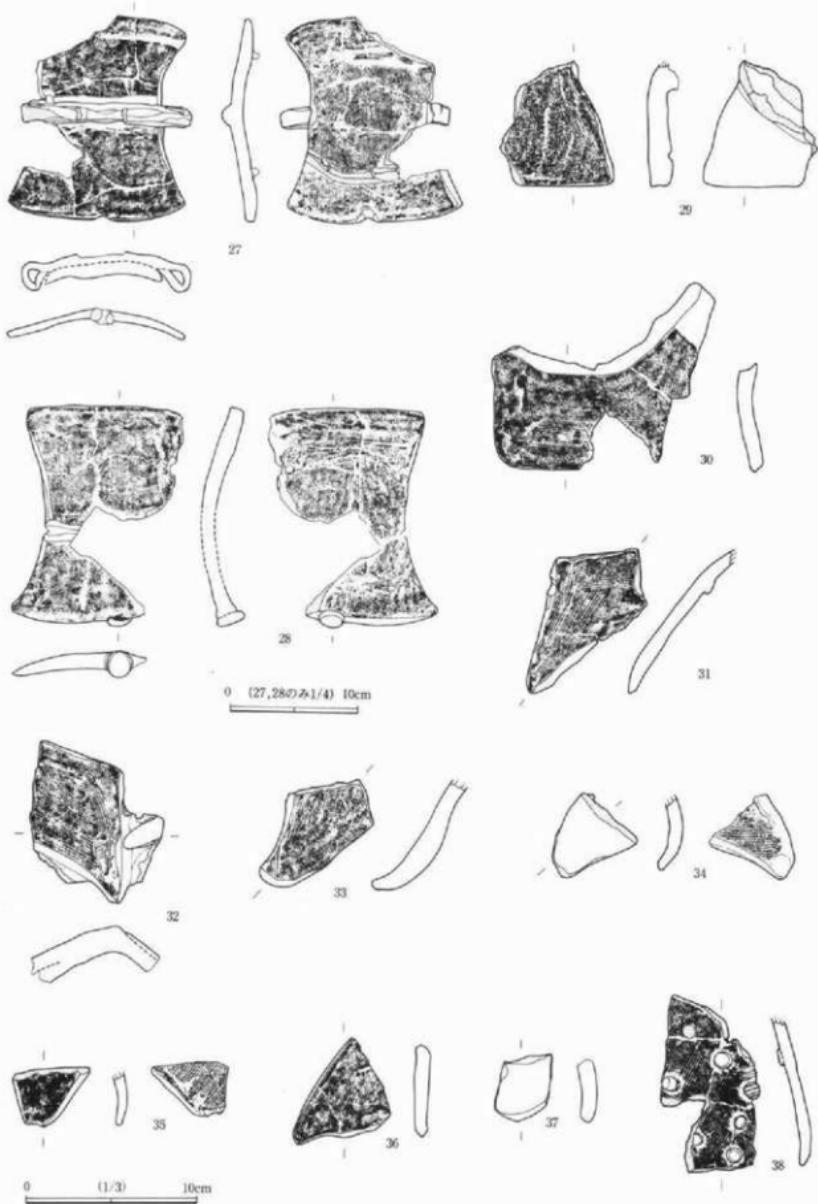
人物36 男性の振り分け髪の先端である。先端のはね上がりは、ほとんど見られない。内外面ともにナデであり、ハケ目は見られない。縁には丁寧なナデが行われる。人物14と同一の可能性があるが断定できない。

人物37 形状は、男性の振り分け髪の先端であるが、人物10・14ともに質感が異なるため他にもう一体の男性埴輪の存在が考えられる。先端がややはね上がる。外面は、ナデであり、内面にハケ目の痕跡が残存する。

人物38 人物1の甲冑の一部である。外面はハケ後端部にナデを行った後に、円形粘土粒を貼付している。

人物39 首飾り部分である。玉はつぶれた円ではなく、球状に膨らみがあり、密に配置している。正面中心の貼付け痕は、他に比べて位置するため勾玉が表現されていた可能性が強い。外面は、丁寧なナデ、内面は、ユビナデが施される。

人物40 人物11の首飾り部分の可能性がある。人物39と同部分のためどちらか一方が人物11と同一個体ということになり、もう一体の人物埴輪の存在が考えられる。円形粘土粒の配置を考えるとこちらの方が



第81図 人物埴輪破片 (2)

可能性が高い。人物11・39・40は、色調・胎土ともよく似ている。

人物41 人物13の首飾りの背面に当たる部分である。粘土紐の交点に円形粘土粒が貼付される。

人物42 人物埴輪首飾りの正面中央に貼付されていた勾玉である。赤彩されていた痕跡が残る。

人物43 首飾りの一部である。他の首飾りが円形粘土粒を貼付するのに比べ大きさの違う橢円形の粘土粒を密に配置する。女性埴輪の破片だとすると、人物57・58の乳房が色調・胎土から同一個体と考えられる。玉には、赤彩が施される。

人物44 形状から琴弾き（人物8）のもつ髪であると考えられる。色調が異なるため別の埴輪の違う部位の可能性も残されるが、撥に相当する形状を有するのは、この1点のみである。作りは、粗雑である。

人物45 粘土紐が二本巻き付いた形状を呈する。何を表現したものかは不明である。色調・胎土を重視するならば、人物11が同一個体である可能性が高い。馬形埴輪の破片とすると、馬Cの色調・胎土が近い。

人物46 どの部位かは不明である。端部は丁寧にナデが施され、外面は赤彩されている。

人物47～55 人物埴輪の耳環を表現した粘土紐の破片である。51～54が人物2、55が人物10、47・49が人物13、48・50が人物11と同一個体である可能性が高い。

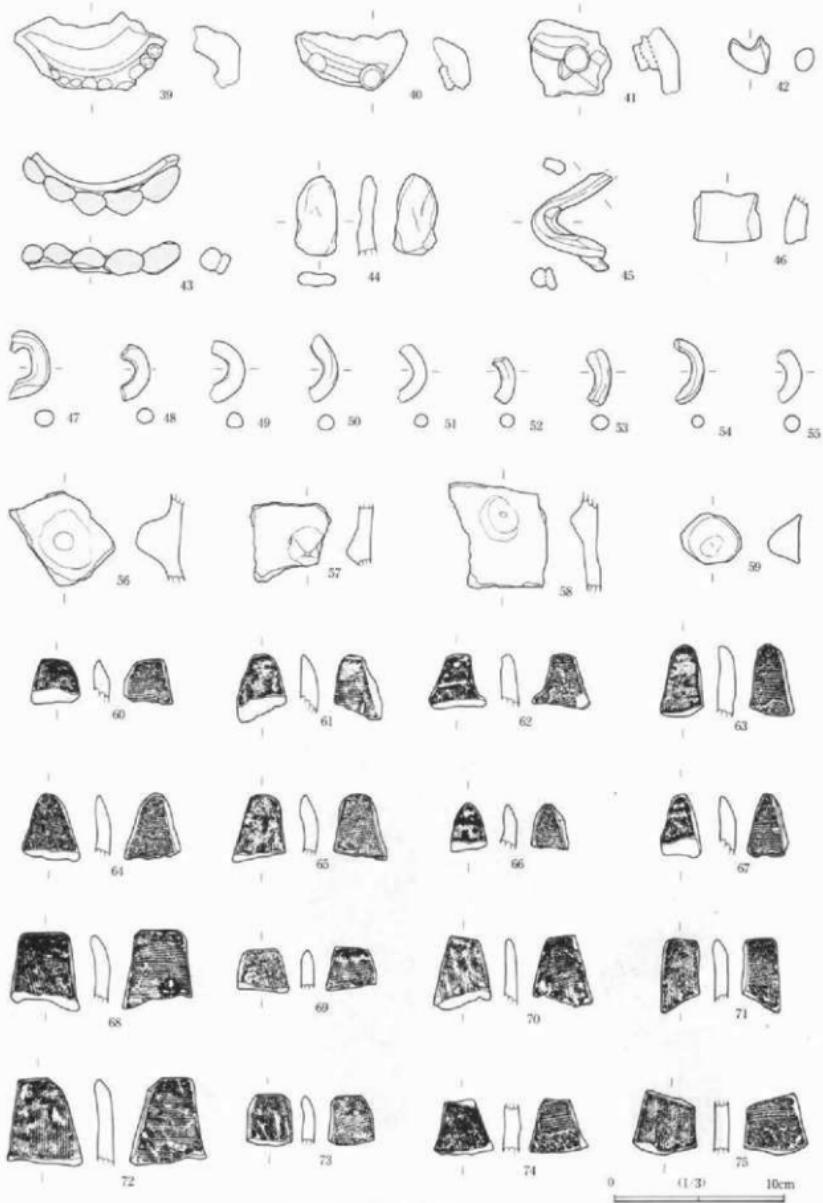
人物56～59 人物埴輪の乳房部分の破片である。57・58が同一、56・59が同一である可能性がある。したがって乳房からは、女性埴輪は人物4を含めて、少なくとも3体はあったことが推測される。乳房の表現は、本体に粘土を貼付することによってなされている。57・58には、赤彩が施されている。

人物60～75 人物埴輪の冠の上端に当たる部分である。外面はタテハケ、内面はヨコハケが施されている。人物2・3の冠である。色調・胎土は、共に似ているため断定はできないが、60～67が人物3、68～75が人物2の一部と考えられる。形状が逆三角形に近いものが人物3、台形を呈するものが人物2である。ヘラ状工具で切り取ることによって成形している。上端内面を切り取り、面を作っているものがある。かすかに内外面に赤彩の痕跡が残る。

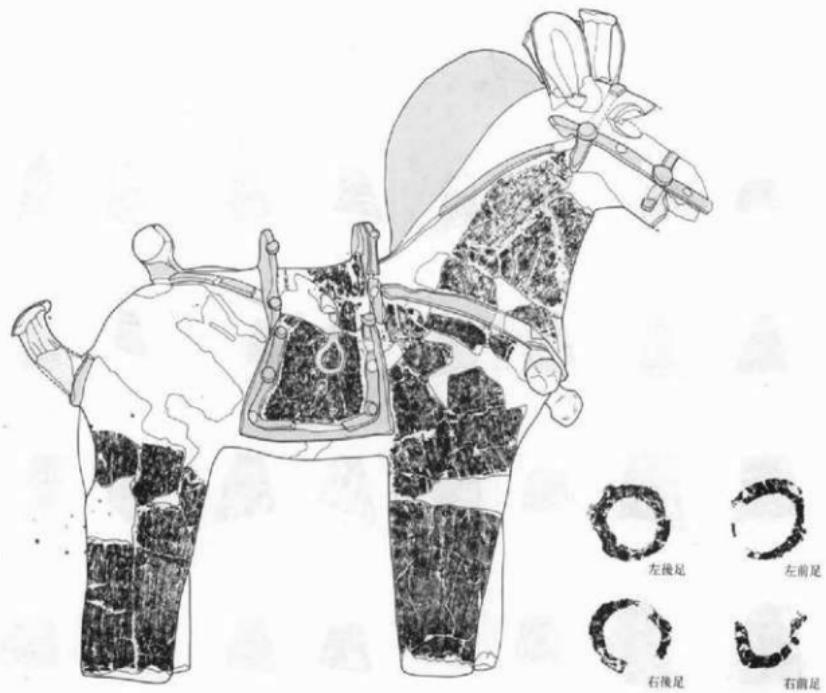
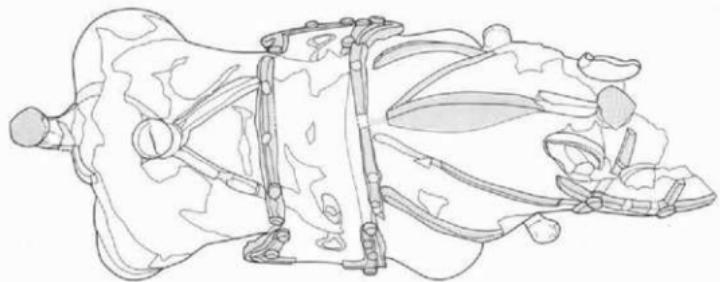
人物埴輪の破片は、馬形埴輪片に比べて帰属の難しいものが多い。基本的に形状から判断し、色調・胎土を参考に帰属を識別すると、少なくとも人物A～Nの14体が存在することが明らかになった（第20表）。

第20表 人物埴輪破片帰属表

番号	本体（頭部）	脚部	手腕	髪	その他	性別
人物A	1			38		男
人物B	2			68～75	51～54?	男
人物C	3			60～67		男
人物D	11	4	19・21	27	40・42・45・48・50?	女
人物E	14	8	17	33・36・37	44	男
人物F	12	7				男女
人物G	13	5	22		41・47・49・56・59?	女
人物H	10	6	16・26	34・35	55?	男
人物I		9	23・24			女?
人物J			18・20	28・29	39	女
人物K				30・31・32		男
人物L			25			?
人物M			15			男
人物N					43・57・58	女



第82図 人物埴輪破片 (3)



第83図 馬形埴輪A-1

馬形埴輪（第83～88・90図、第22表、図版45～47）

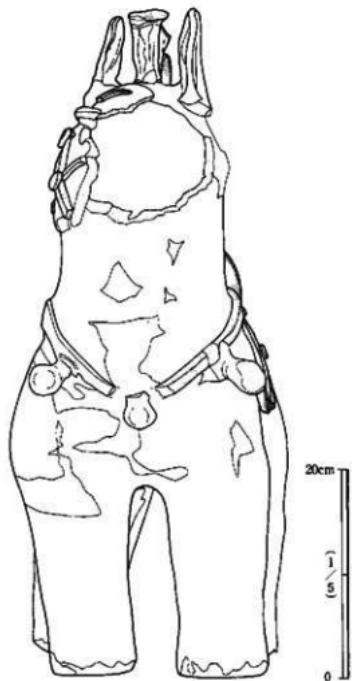
馬A 馬形3体の中で一番小型の埴輪である。顎の大部分を欠損する。

馬の成形方法は、どの個体も内面に明瞭な粘土紐の接合痕が存在しないため類推の部分が多い。基部（脚部）はそれぞれ粘土紐を積み上げることで成形している。基部接合は不明であるが、成形後に自重のため生じた膨らみをヘラケズリした痕跡を残す。その後、4本の脚とも、尻尾の付け根の高さまで粘土紐積上げを行っている。それから上部は、体側からもう一方の体側までブリッジ状に粘土紐をわたし、顎の方向へと進んでいく。顎から上は、粘土紐の積上げで頭部まで成形を行っている。頭部は、筒状に別作りしたものから取り付けた可能性もある。馬本体に付く馬具は、すべて成形後の貼付けである。尻尾は、接合部分が欠損しているため不明だが、他の馬の例からみて、差込式で接合されていたと考えられる。

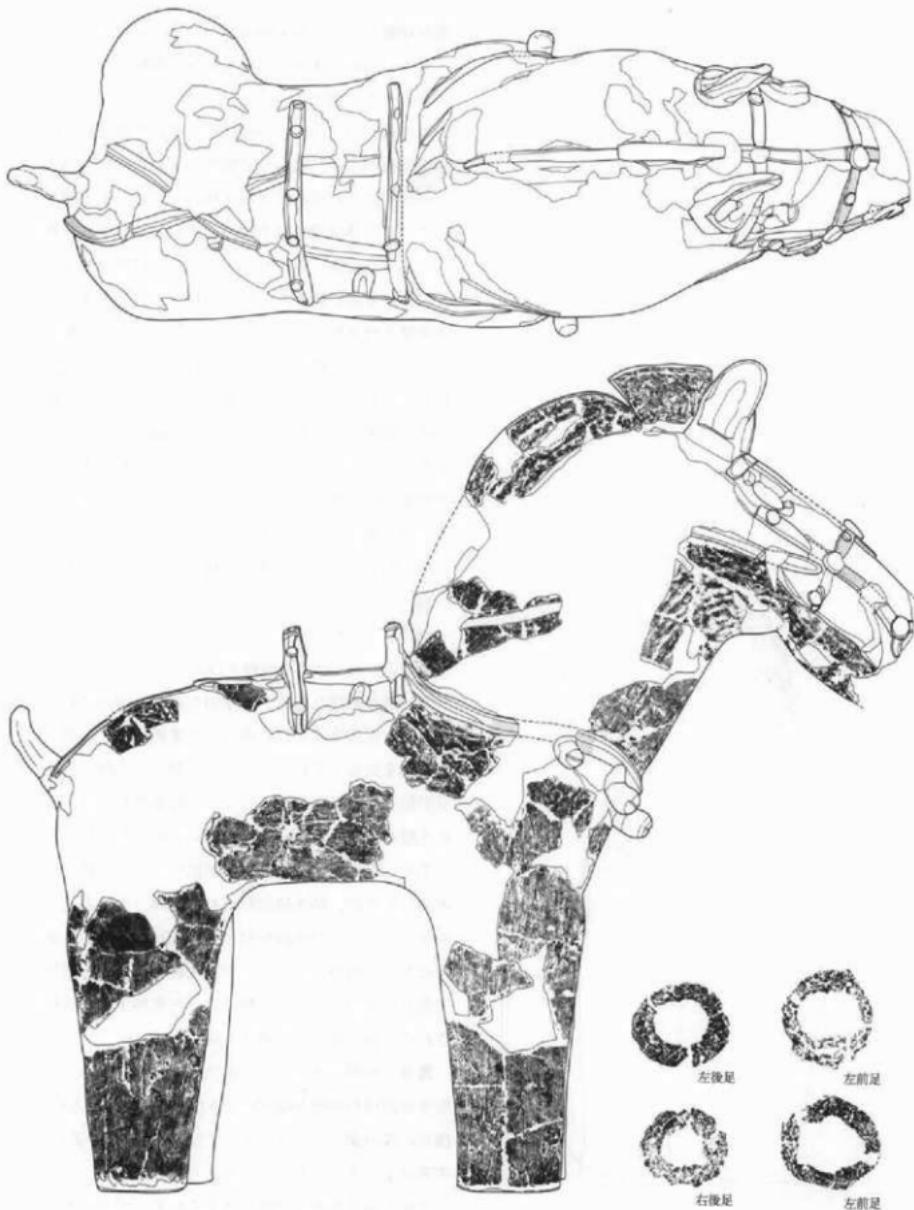
全体にハケ目が施されるが、脚部以外は、ナデ及び磨滅のためハケ目の痕跡をほとんど残していない。尻部に透孔が穿たれる。尻尾の先端は、扁平で円形である。尻繋交点には、直立した馬鈴があり、鈴の切れ目を沈線で表現している。尻繋には、他に飾金具が貼付されていた痕跡はない。鞍部覆輪には円形粘土粒が貼付される。障泥の縁には粘土紐がわたしてあり、その上に円形粘土粒が貼付される。鎧は、輪鎧であるが、粘土紐が剥がれて痕跡のみである。胸繋には、3つの馬鈴を付けるが切れ目の沈線の表現はない。頭頂には、たてがみを縛った角状と扇状の飾りの表現がある。面繋には、円形粘土粒が貼付される。後ろ脚はやや開き気味である。

馬B 馬形3体の中で一番大型の埴輪である。正面実測図はやや頭を傾げたような形になっているが、復元の際の歪みによって生じてしまったものであり、本来はまっすぐであったと考えられる。

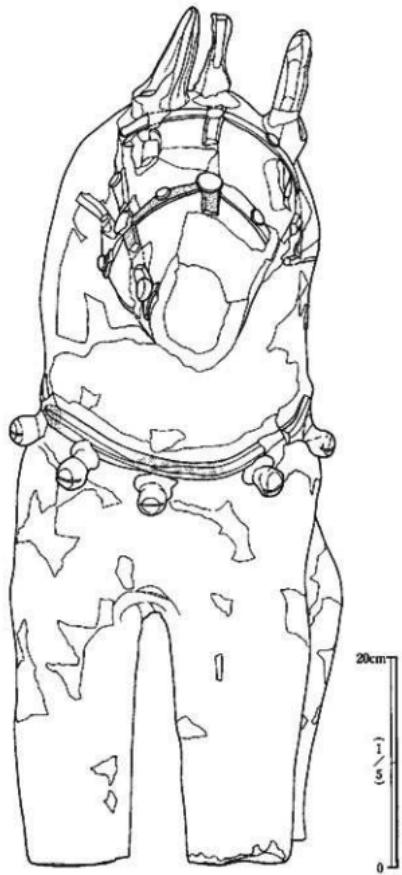
成形方法は馬Aと同様と考えられる。尻尾は、差込式に接合されている。



第84図 馬形埴輪A - 2



第85図 馬形埴輪B-1



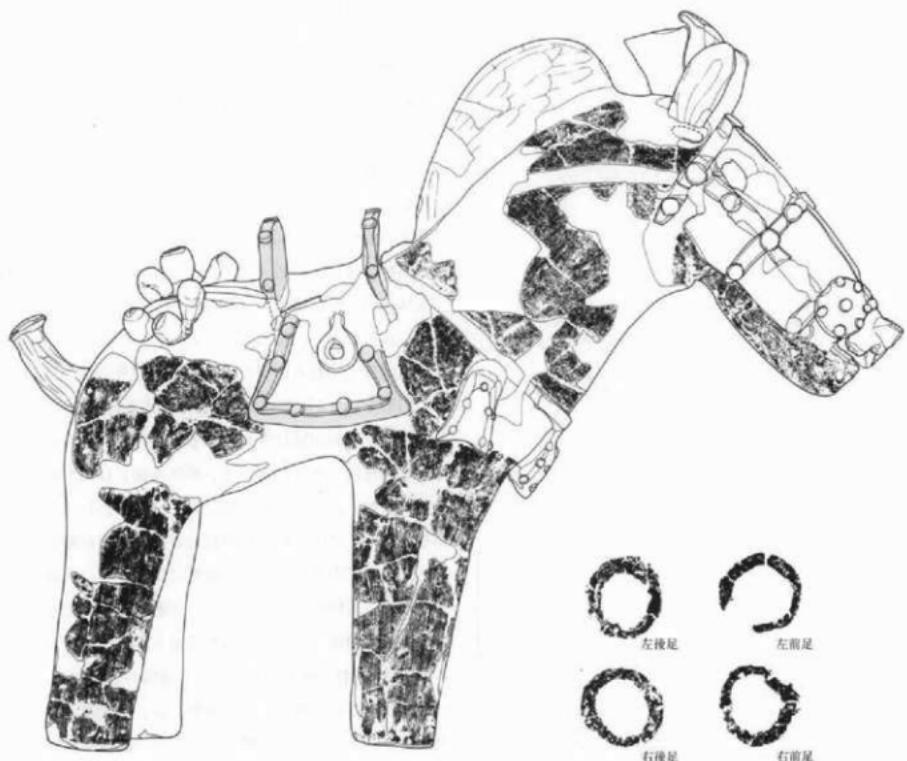
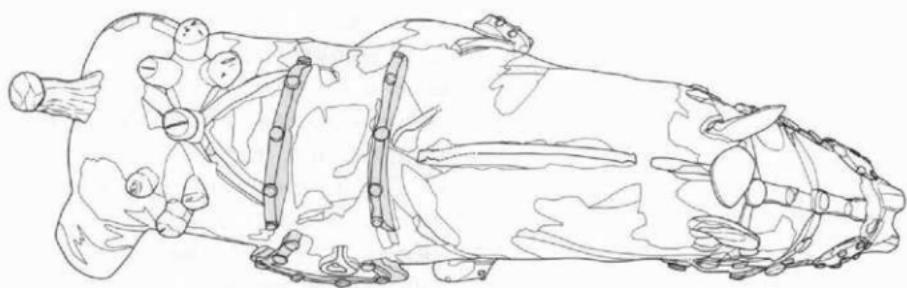
第86図 馬形埴輪B-2

全体にハケ目が施され、特にナデ消しなど行われず、ほとんど全身に残存している。尻尾直下に本体の大きさの割に小さな透孔が穿たれる。尻尾の先端は、馬Aと異なり扁平でなく、やや先端が細くなる。脚部は、腿の辺りが膨らみを有す。尻繋には、飾金具が貼付されていた痕跡がある。鞍部覆輪には円形粘土粒が貼付される。居木部には、前後の方向に平行して2本の粘土紐が貼付される。障泥と鎧は、欠損している。破片の馬9が同一個体と考えられるので輪鎧であったことが分かる。胸繋には、5つの馬鈴が付けられ、深い沈線で切れ目を表現している。頭頂には、たて髪を結んだ扇状の飾り表現がある。扇状の外面には、ハケ目が各方向に施される。角状の結び飾りは欠損していて接合痕跡のみ残されている。面繋には、円形粘土粒が貼付され、繩の交差する位置にはその倍の大きさの円形粘土粒が貼付される。口の先は、欠損しているがかすかに素環の鏡板の一部が確認できる。

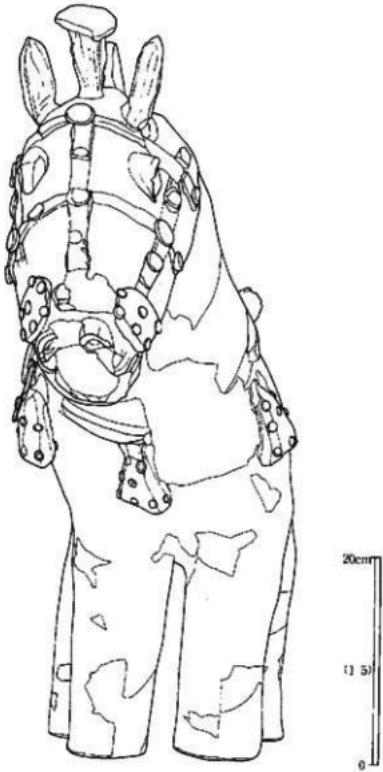
馬C 馬形3体の中で一番残りのよい埴輪である。

馬Aの成形方法と同様と考えられる。尻尾は、差込式に接合されている。

全体にハケ目が施され、脚部以外は、ほとんどナデ消しが行われ、一部にかすかに残存するのみである。尻尾直下に透孔が穿たれる。尻尾の先端は、扁平で円形を呈す。尻繋には、中心に1点馬鈴が立ち、その両脇に環鈴が貼付されている。鈴の切れ込みはそれぞれ沈線で表現している。鞍部覆輪には円形粘土粒が貼付される。障泥の縁には粘土紐がわたしてあり、その上に円形粘土粒が貼付される。鎧は輪鎧で、粘土紐で表現している。胸繋には、3つの馬鐸を付ける。馬鐸は中実に作られ、下縁は弧状に切りこまれる。頭頂には、他の馬形埴輪と同様にたてがみの角状、扇状の飾り表現がある。扇状の外面には、ハケ目が各方向に施される。面繋には、等間隔に円形粘土粒が貼付される。唇には、円形の鏡板が表現され、小さな円形粘土粒で装飾している。口側面を、ヘラで切って口を表現し、正面は、ヘラケズリを行



第87図 馬形埴輪C-1



第88図 馬形埴輪C-2

い整えている。

馬形埴輪破片 (第89図、第21表、図版48)

馬1 馬左頬側の面繫と手綱が連結する部分である。粘土紐上に円形粘土粒が貼付されている。粘土紐の交点にはやや大きめの円形粘土粒が貼付される。馬の頭部は円筒で中空に作られるが、顔側面下部は粘土板を貼り足していたことが分かる。

馬2 馬左頬側の面繫の部分である。面繫を粘土紐で表し、その上に円形粘土粒を貼付する。

馬3 馬Aと同一個体とみられる、馬左頬側やや上の面繫の部分である。内面には粘土紐接合痕が見られ、断面を観察して見ても上に粘土板を被せた様子はない。このことから、馬Aに関しては、頭部を円筒に作った後、口字状に顔上面全体に粘土板を被せるのではなく、顔側面下部に、粘土板を貼り足していたことが分かる。

馬4 障泥の縁の部分である。粘土紐と円形粘土粒を貼付している。内面にある粘土は、本体との間を埋める役割をしていたものと考えられる。

馬5 左頬の面繫の表現である粘土紐が剥落したものと考えられる。円形粘土粒の大きさから、交点部と考えられる。

馬6 障泥の下端右コーナー部分である。粘土紐と円形粘土粒が貼付されている。内面は雑なナデが施される。

馬7 障泥の下端左コーナー部分である。粘土紐が貼付されている。円形粘土粒が剥がれた痕が見られる。

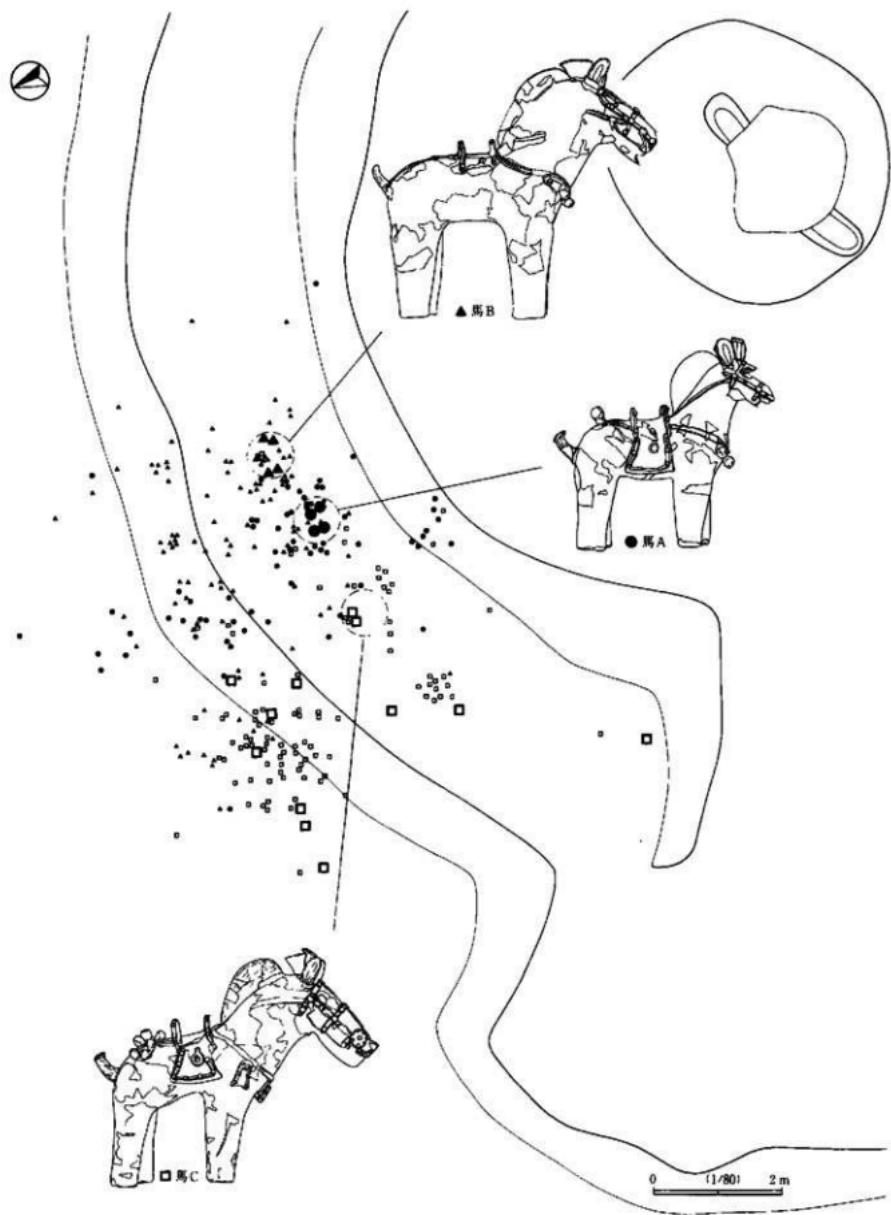
馬8 恐らく右目付近の面繫の一部と考えられる。粘土紐が貼付されている。円形粘土粒が剥がれた痕が見られる。

馬9 障泥部分である。縁に粘土紐と円形粘土粒が貼付される。その後に輪轂が粘土紐で表現されている。外側はハケ目後ナデ、内面は雑なユビナデが施される。

馬10 色調と形状から馬Bの鏡板と考えたが、馬Bにはかすかに素環の鏡板の痕跡が見られるため、



第89図 馬形埴輪破片



第90図 馬形埴輪出土位置図

確實には同一個体と断定できない。別に、右手を後ろに回す人物3の腰に下げているものの上部に当たる可能性もある。外面は丁寧なナデが施される。

馬11 まぶたの膨らみを表現したものである。馬Aには、右目が残存するため左目に当たる。

馬12~18 すべて馬鈴で本体からとれたものである。鈴の切れ目を、沈線で表現している。尻翼に下がっていたものと考えられ、組合せは馬Bと同様に左右に3つずつ、中心に1つと考えられる。数量も合致する。

馬19~26 馬具の飾りを表す円形粘土粒である。小さいものに関しては人物埴輪破片の可能性もある。

馬形埴輪の破片は色調の差が明白であり、以下のように帰属を識別することが可能である。

第21表 馬形埴輪破片帰属表

番号	破片番号
馬A	2・3・11・19・20
馬B	1・4~10・12~18・21~24
馬C	25・26

10は人物3の可能性がある

第22表 馬形埴輪観察表

番号	器高	底盤				透孔(底盤)			ハケメ	色調	胎土	底部接合				備考
		右前	左前	右後	左後	穿孔	横	縦				右前	左前	右後	左後	
A	65.0	7.5	7.6	8.0	7.5	?	3.5	3.0	14	B	少	?	?	?	?	
B	81.0	8.5	8.5	7.5	7.5	?	3.3	3.3	14	B・E	中b	?	達の	達の	?	
C	71.5	7.5	7.5	7.0	7.6	?	-	-	13~14	F	中	達の	?	?	?	

鳥形埴輪（第91~94図、第23表、図版49・50）

鳥1 ときかはあるが、鳥2に比べて頭が長い水鳥形の埴輪である。胴部から尾羽の一部を欠く。

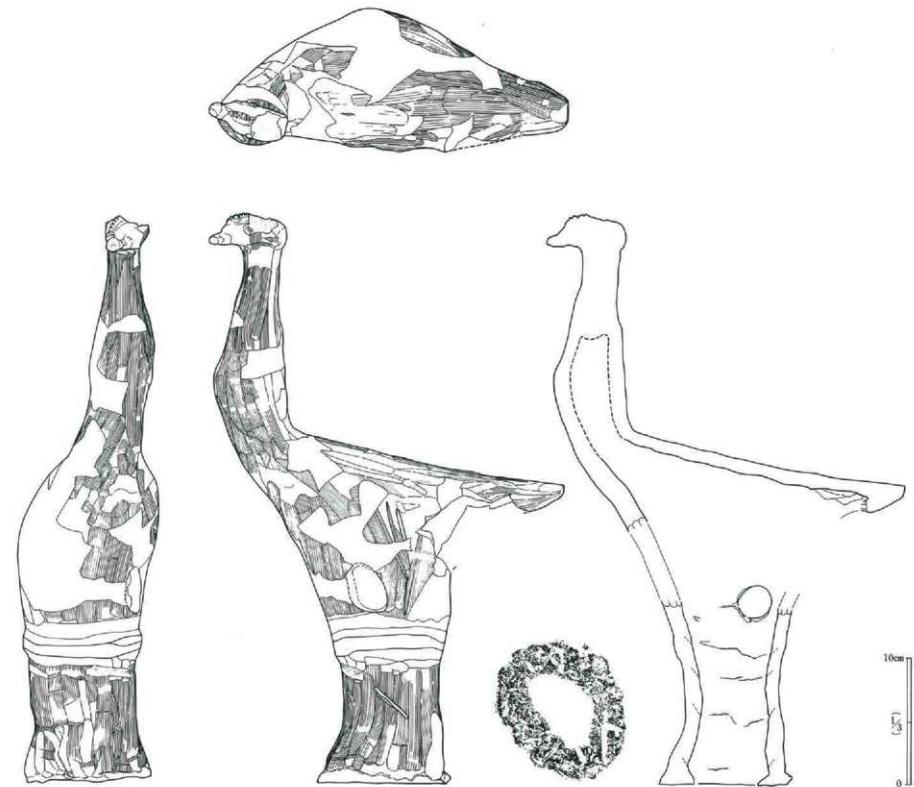
基部から粘土紐の積み上げによって成形される。背の高さまで積み上げた後、背を密閉する。尾部側から粘土板を体側から一方の体側にかけて3枚並べ、頭方向へと持ち送って密閉している。頭付け根から上は、再び粘土紐積み上げにより中空を作り、別作りで中実に作った頭部をソケット状に差し込んでいる。意図的かどうかは分からぬが、本体を正面からみると軸が傾いて成形されている。透孔は突堤より上に位置する。

全体にハケ目が施される。左側面の羽に当たる部分に、貼付していた粘土板が剥がれた痕があり、縦方向の沈線が3本見られるので、羽が表現されていた可能性がある。頭は雑で、恐らく粘土塊から指で作り出して表現したものと思われる。ときか部分はヘラ状工具で刻みをいれて表現している。目は、刺突で表現され、貫通はしない。

鳥2 ときかをもつ鶴形の埴輪である。背の部分以外ほとんど残存する。

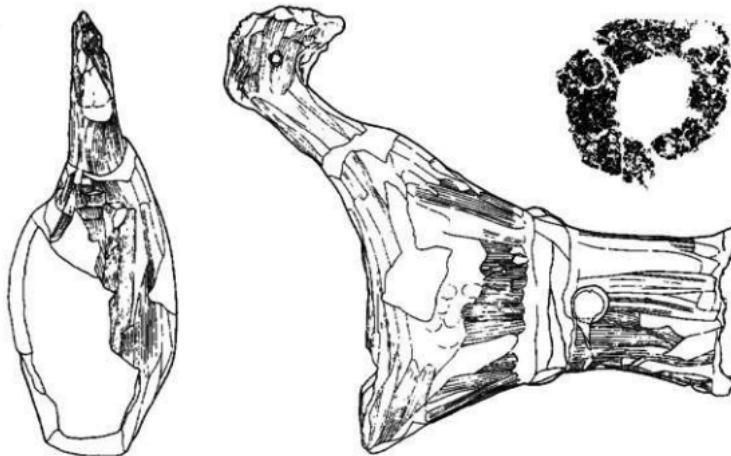
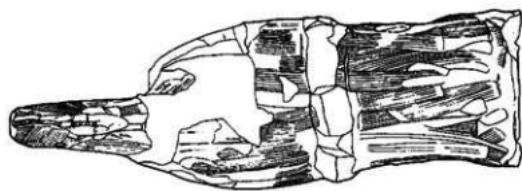
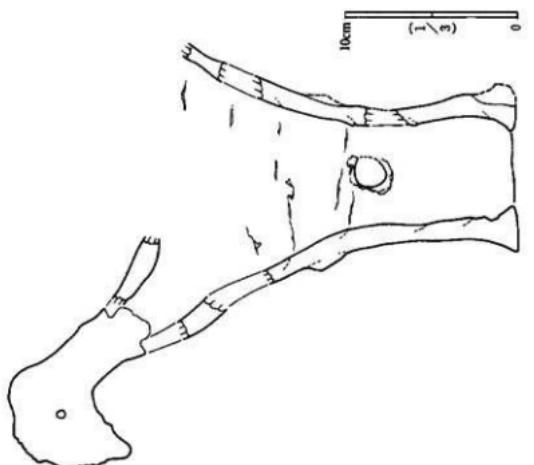
基部から粘土紐を積み上げて成形している。背の部分は、欠損しているため分からぬが、恐らく鳥1と同様の密閉式であろう。頭部途中まで粘土紐で中空を作り、別に中実の頭部をソケット状に差し込んでいる。透孔は突堤より下に位置する。

全体にハケ目が施され、所々に深い筋が見られるが意図的ではないようである。側面の羽に当たる部分は、ハケ目がナデ消され平滑になっている。羽を表す何かが貼付されていた可能性がある。ときか部分は



第91図 鳥形埴輪 (1)

第92圖 鳥形埴輪 2



指でつまんで粘土を引き出し、ヘラ状工具で刻みを入れて表現している。喉の部分も意図的に指でつまんでいる。目は、両面から貫通している。口は欠損していたが、最終的に接合することができた（写真図版は未接合の状態のままである）。くちばしはヘラで切れ目を入れている。

鳥3 烏形埴輪の基部と頸部である。背の高さまで粘土紐積上げで成形している。背は、鳥1・2と同じく2cm～3cm幅の粘土板を持ち送り、頸の方向へ向かって付け足して成形する。透孔は、突帯の上に位置する。全面ハケ目が施される。

鳥4 烏形埴輪の頭部である。形状は、鳥2に近く鳥を模したものと考えられる。中実に作り、ソケット状にし頸部と接合できるようにしている。全面にハケ目を施す。顔の部分のハケ目は各方向に施される。くちばしはやや開き気味で、ヘラで切り込んでいる。とさかも同様である。目は左目から貫通させている。

鳥5 烏形埴輪の頸部である。大きく2つに分けられる。上部と下部は、別作りで乾燥期間を経て両方をつなげるために、上からまた粘土をあてがって接合している。内面は粘土紐痕が明瞭に確認できる。全面にハケ目が施されるが、所々消えている。

鳥6 径が細いため円筒埴輪ではなく、烏形埴輪の基部の一部と考えられるが断定はできない。出土位置から鳥7と同一個体の可能性が強い。2cm幅の粘土紐積上げによって成形される。

鳥7 烏形埴輪の尾部である。鳥1と同じ成形方法で幅2cmから3cmの粘土板を3枚横に並べ、尾部から頸に向かって持ち送っている。全面にハケ目が施される。

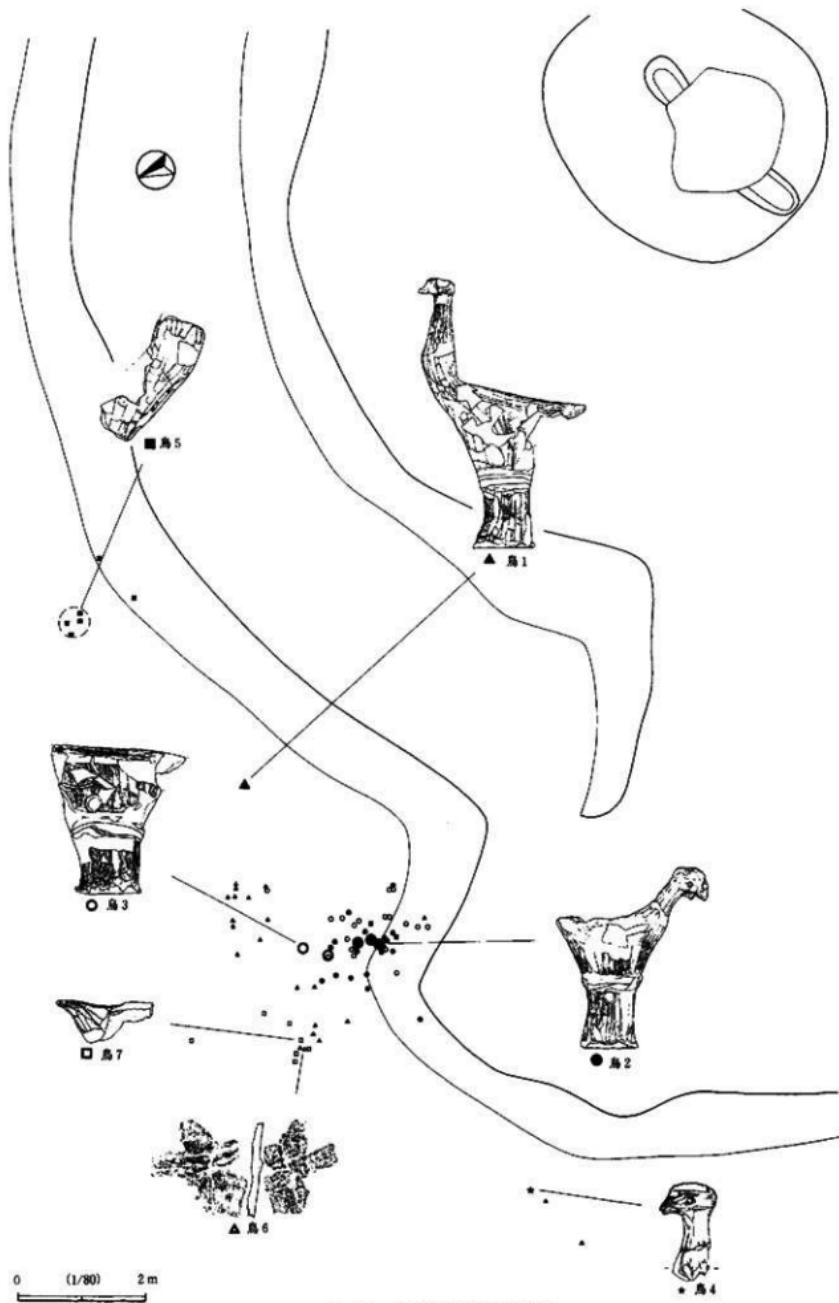
以上の烏形埴輪に関して、色調や胎土・部位・出土位置を考慮すると、同一個体は鳥6と7だけである。なお、当古墳から他に烏形埴輪が1体出土していると伝えられている。そのため、計7体の烏形埴輪が墳丘に樹立されていたと考えられる。

第23表 烏形埴輪観察表

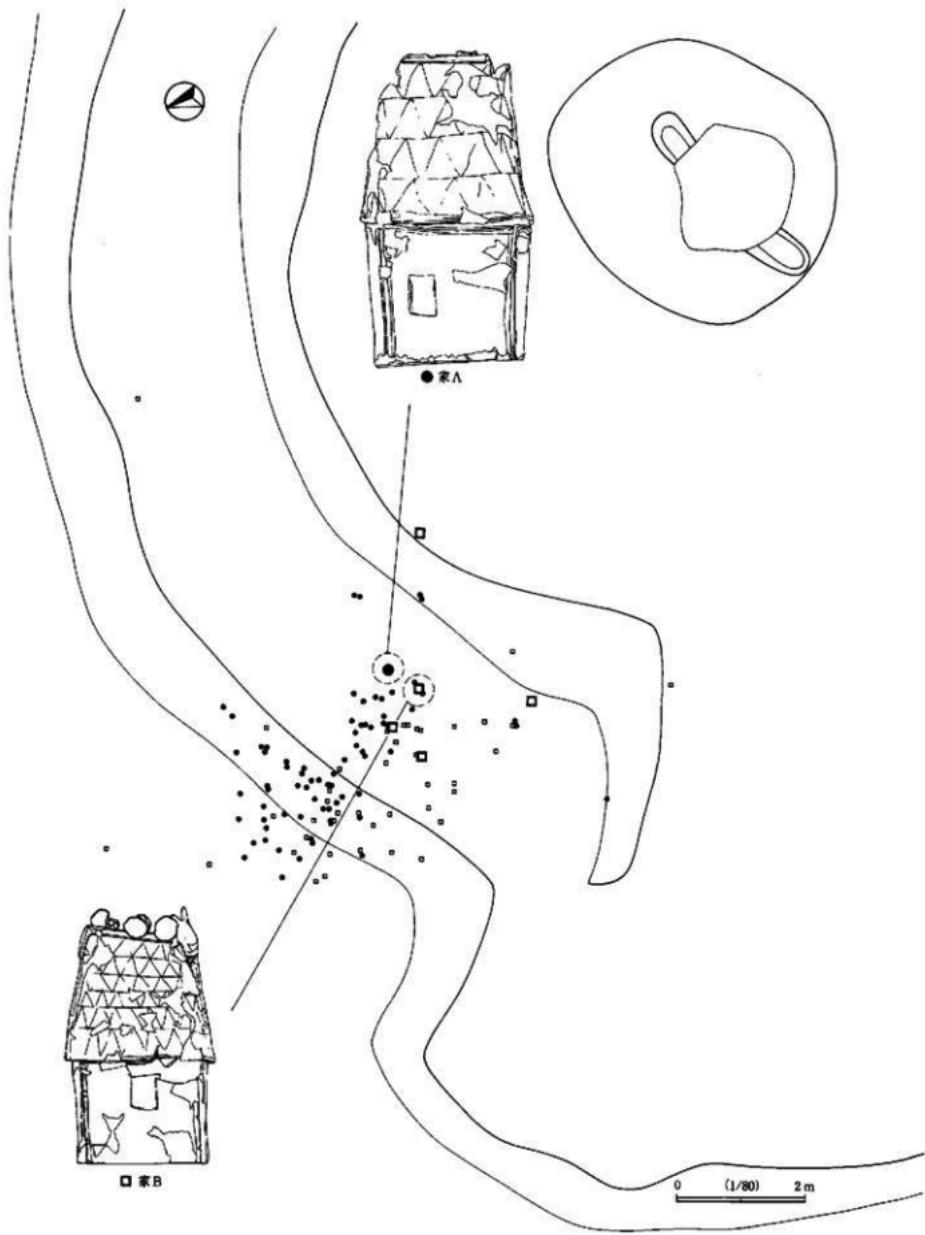
番号	器高	底径	透孔						突帯		ハケメ	色調	胎土	底部接合	備考					
			A			B			形成	安定度										
			穿孔	高さ	横	縦	高さ	横	縦											
1	45.0	11.4	L	12.9	3.0	2.7	13.5	3.4	3.9	丸形	やや低	18	E	中bc	?					
2	30.0	9.6	L	7.5	2.0	2.0	6.9	2.0	2.1	三角	やや低	17～18	C	中	逆の					
3	(21.3)	10.5	?	11.4	2.4	2.1	11.0	2.0	2.4	台形	中	19	E	中b	?					
4	(11.4)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	19	B	多c	—					
5	(15.0)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	19	B	中	—					
6	13.5	—	—	—	—	—	—	—	—	台形	やや低	18～19	B	少	—					
7	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	19～20	B	少	—					



第93圖 烏形埴輪 3・4・5・6・7



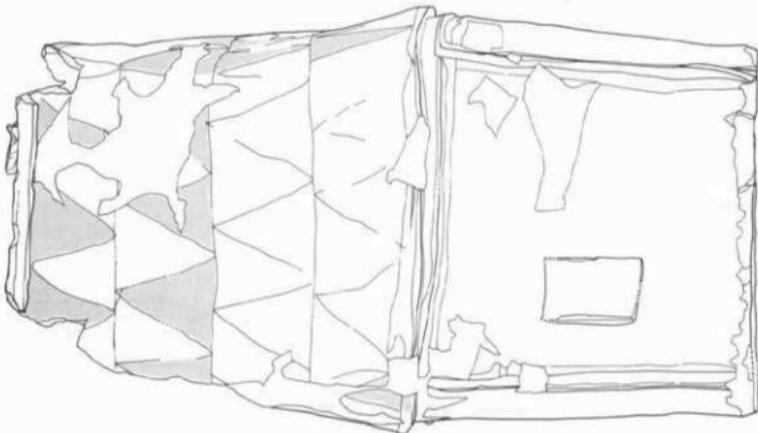
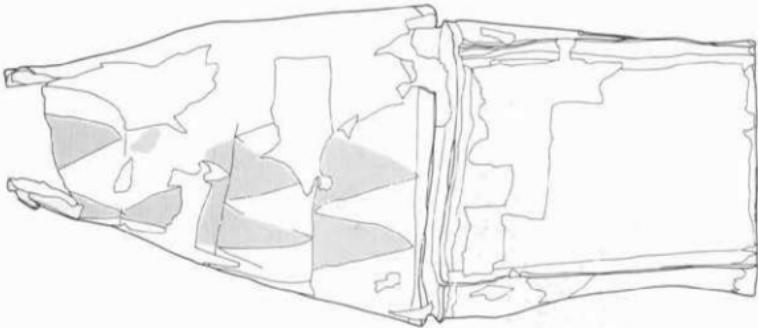
第94図 鳥形埴輪出土位置図



第95図 家形埴輪出土位置図

第96図 家形埴輪 A-1

20cm
(1:5)

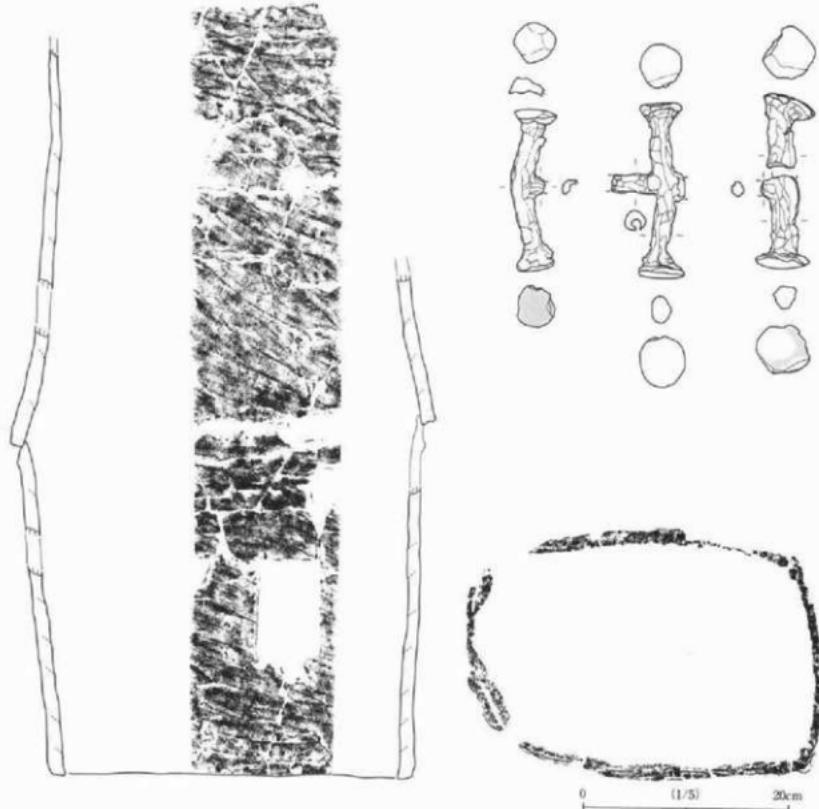


家形埴輪（第95～99図、第24表、図版50・51）

家A 寄棟式の家形埴輪である。屋根の一部を欠く。

基部は、一続きの一本の粘土紐ではなく、ほぼ各辺の長さの粘土紐を結合して成形する。その後、粘土紐を積み上げて成形している。壁部を成形した後、屋根の成形を壁にわずかに重なるようにして始めて、粘土紐を積み上げて成形する。屋根上端部には、重ねて粘土紐が貼付されている。堅魚木は、雑な作りで、家Bに比べると華奢である。3つをそれぞれ単独に成形した後、中心を通る粘土棒で連結している。その粘土棒は中空であり、製作時には芯に木を用いていたと考えられる。

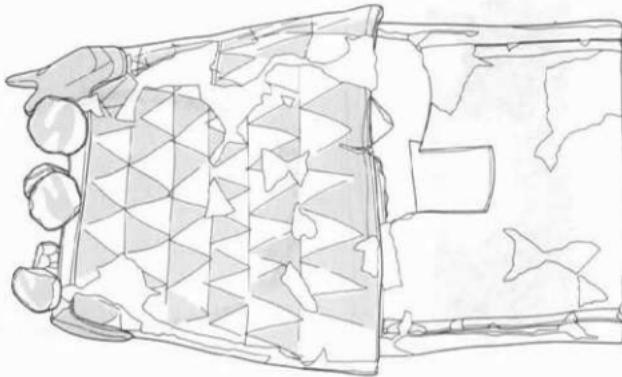
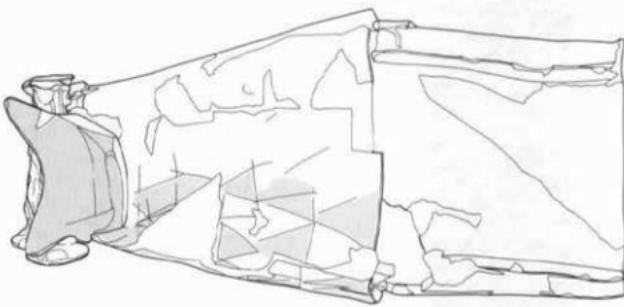
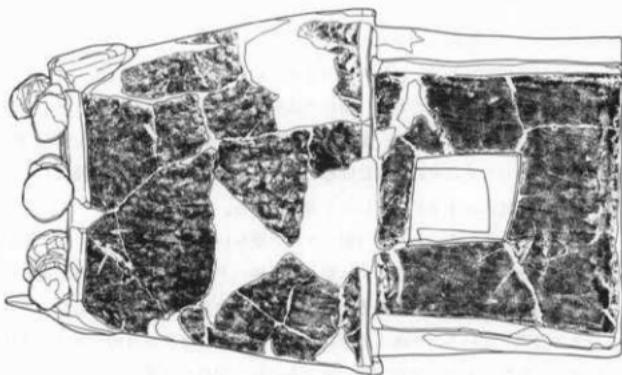
全体に縦方向のハケ目が施される。粗いハケ目（粗ハケ）と細かいハケ目（細ハケ）の2種類のハケ原体が用いられている。粗ハケは、屋根部と壁部の広い部分に、細ハケは壁部の狭い部分に施される。細ハケは粗ハケの後に二次的に用いられている。屋根正面には、連続三角文が沈線で表現され、交互に赤彩が施される。窓は切り抜きで表現している。正面の窓は長方形、背面窓はほぼ正方形を呈す。隅柱表現の縦突帯が4本存在し、断面は三角形である。屋根下端に膨らみの弱い突帯が全周する。



第97図 家形埴輪A-2

0 (1/5) 20cm

第98圖 家形埴輪B-1



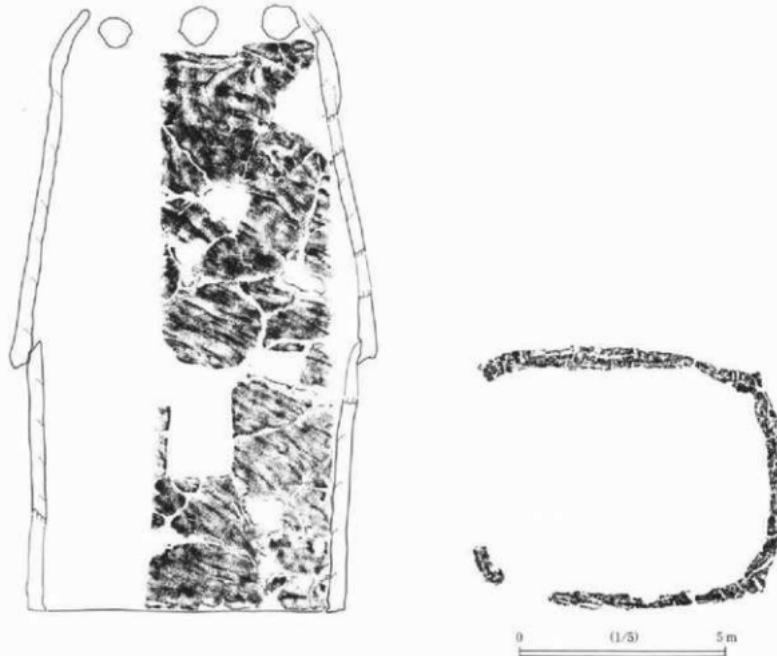
家B 寄棟式の家形埴輪である。

家Aと同様の粘土紐横上げによる成形である。大型の埴輪にもかかわらず、基部の粘土紐幅は太くない。堅魚木を載せていた部分は、かすかにへこみがあるので、強力に接合していた痕跡は見当たらない。屋根上端部には、重ねて粘土紐が貼付されている。堅魚木は、それぞれ3～4本の細い粘土棒をまとめて成形されている。3本の堅魚木は、単独で屋根に接合されており、家Aのように連結されていない。

全体に縱方向のハケ目が施される。一部斜め方向も見られるが、意識的ではない。ハケ原体は、家Aと同様に2種類使われている。粗ハケは、壁部分に、細ハケは屋根の部分に施される。細ハケは粗ハケの後に二次的に用いられている。屋根正面には、連続三角文が沈線で表現され、家Aよりも三角文が小さい。三角文には、交互に赤彩がなされる。壁の両面に窓が切り抜きで表現されている。窓の部分を取り取る際に、あらかじめヘラ先で窓の輪郭を描いていた痕跡がある。窓は長方形を呈している。隅柱表現の縦突帯が4本存在し、断面は三角形である。堅魚木の外面の円形部分には赤彩がなされる。

第24表 家形埴輪観察表

報告	器高	底径		窓				縦突帯		ハケメ	色調	釉土	備考
		長軸	短軸	正面		背面		形態	安定度				
				横	縦	横	縦						
A	74.0	35.0	24.0	6.1	9.2	8.0	9.0	三角	やや高	15・20	B	中b	
B	60.5	31.5	25.0	6.1	8.0	8.4	10.3	三角	やや高	14・20	C	中	



第99図 家形埴輪B-2

第5節 4号墳

1 墓丘と周溝

墳丘（第100・101図、図版11）

4号墳は、工事区域にかかる周溝の一部のみの調査を行った。現状の測量図から見ると、1号墳より一回り大きい円墳又は3号墳と同様に前方部が短く張り出した前方後円墳の可能性が考えられる。周溝に接するように、中世の溝（S D01）と切り合っている。周溝内に主体部と考えられる遺構が1基、墳裾には土坑が1基確認されている。

一部分のみの調査のため墳丘、周溝覆土からの出土遺物は少なく、4号墳の時期を決定しうるような遺物は出土しなかった。

周溝（第100図）

形状は、なだらかな皿状を呈し、深さは現表土面から1.0m、幅2.0m～3.0mである。覆土は、自然堆積であると考えられる。

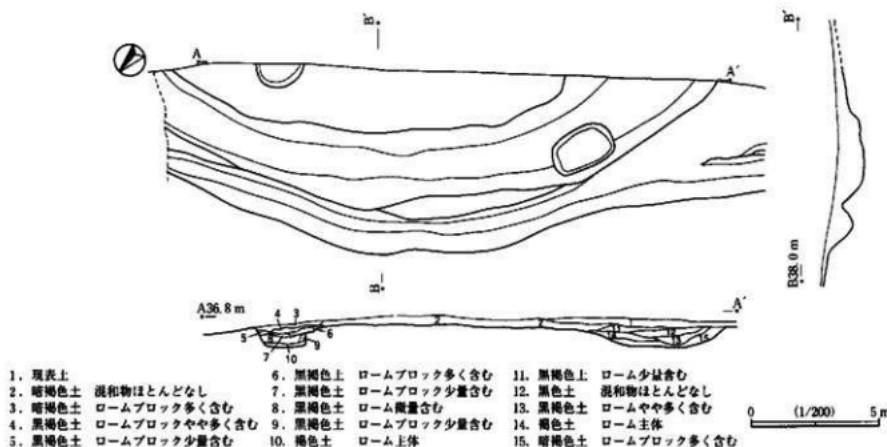
2 主体部

周溝内主体部（第102図）

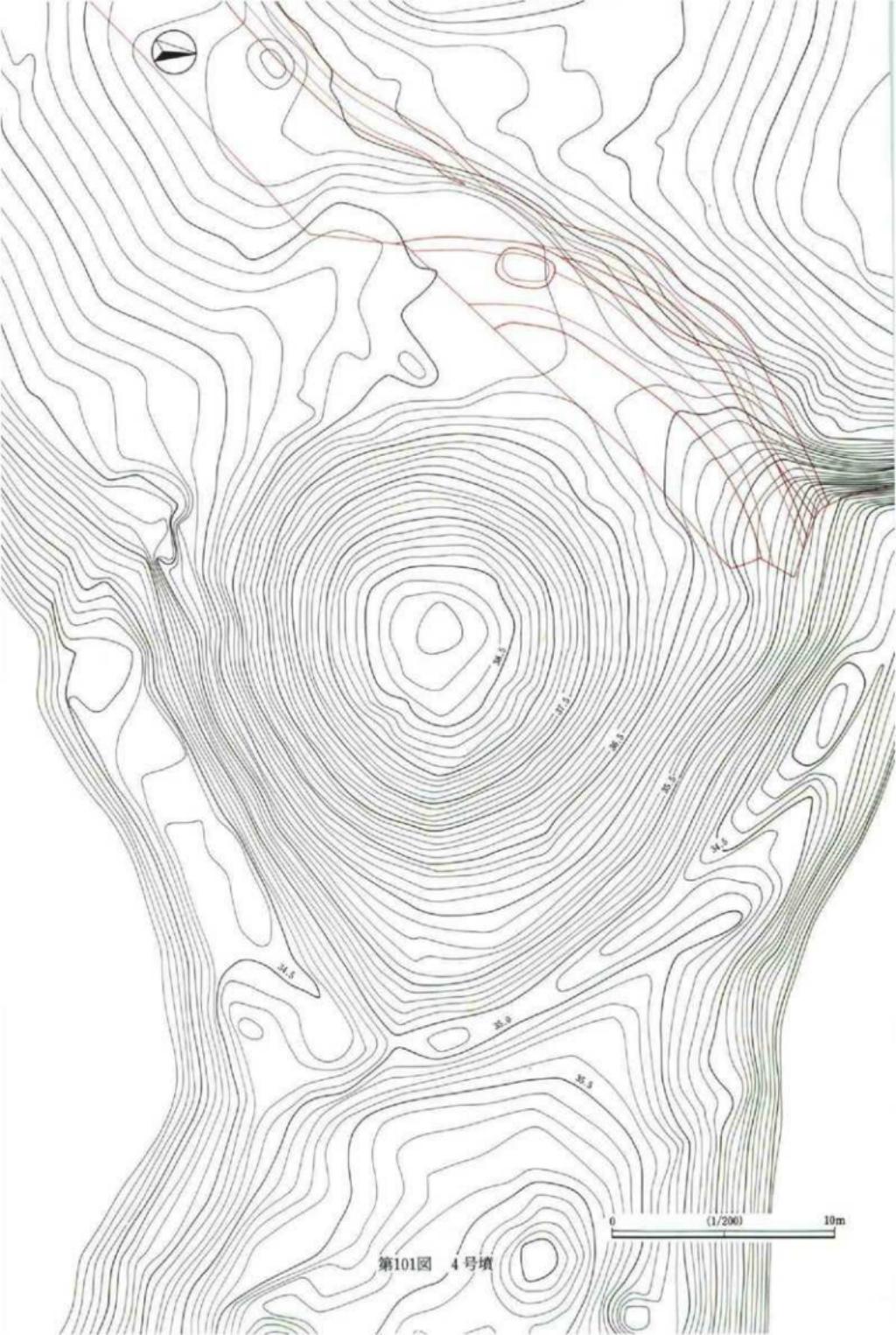
掘り方の規模は、縦2.4m、横1.6m、深さ確認面から1.0mである。覆土はしまりのない土がレンズ状に堆積している。木棺直葬が考えられるが、白色粘土などを使った裏込めの痕跡はない。遺物の出土も見られない。

墳丘内土坑（第100図）

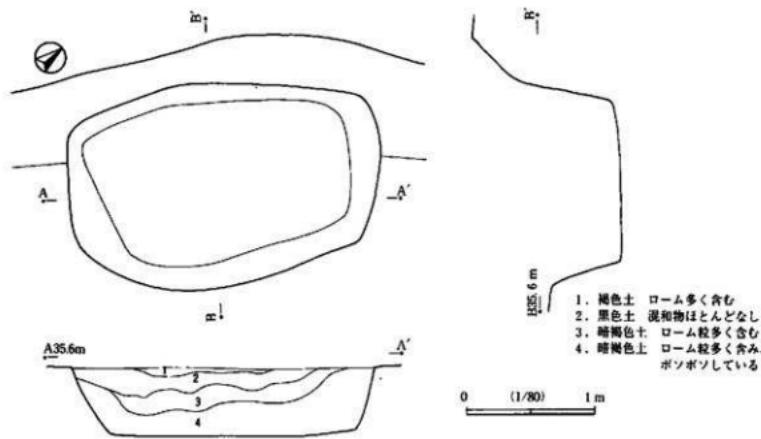
墳裾に位置する。遺物もなく、プランも確定できないことから性格が特定できない。堆積は、不規則で、ロームブロックがほとんどの層中に認められることから人為的に埋めたものである可能性がある。深さは、確認面から0.8mである。



第100図 4号墳平面図・断面図



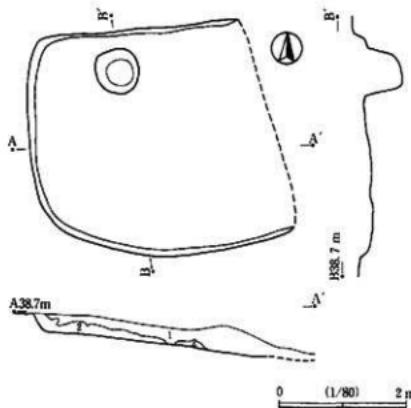
第101図 4号墳



第102図 4号墳周溝内主体部

第6節 積穴住居跡（第103図、図版14）

2号墳の東、台地の縁辺部に位置する。積穴住居跡は、今回の調査区ではこの1軒だけが検出された。東壁は、斜面のため確認することができなかった。規模は、南北3.5m、深さ確認面から0.3mである。北壁側に直径0.7m、深さ床から0.4mの貯蔵穴と考えられるピットが1基付設されている。斜面に沿って床面がやや傾斜している。覆土は、台地の高い側から流れ込んだように堆積している。遺物は土師器の破片が数点のみで、ほとんど出土していない。時期は、プランが方形を呈する点とカマドがない点から古墳時代の中期以前と考えられる。



第103図 S101



第104図 南側斜面遺構配置図

第6章 中・近世

第1節 遺構（第104図、図版3）

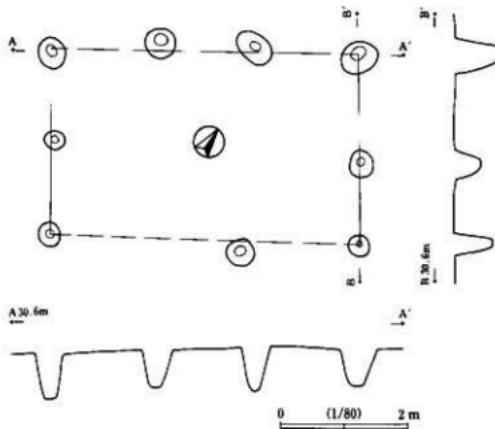
調査区南側斜面には、古墳は存在せず、溝と土坑が多数検出された。中世から近世の所産と考えられる遺物が調査区の全体から出土している。確実に伴う遺物が特定できなかつたが、検出された遺構はほとんどが中世のものと考えられる。

1 台地整形

調査区南側 S D01とS D05に接する斜面部分を人為的に削り、平場を形成している。掘立柱建物跡やピット群を確認することができた。

2 掘立柱建物跡 S B01（第105図）

台地整形部分のほぼ中央で整形部分の形に合わせたように2間×3間の掘立柱建物跡が検出された。南北行柱穴を一つ欠く。建物方位はN-55°-Eである。桁行柱間寸法は、北側柱列で西から1.7m、1.5m、1.6mである。梁行柱間寸法は、東側柱列で北から1.7m、1.3mと不揃いである。柱穴掘り方は、0.3m～0.5mの橢円形を呈し、深さは、検出面から0.4m～0.7mである。遺構近くからは、陶器や鉄製品、古錢、磁石が出土しているが、ピット群との切り合いもあり、確実に掘立柱建物跡に伴うものかどうかは断定できない。



第105図 S B01

3 ピット

台地整形部分には、大小さまざまなピットが80基以上検出された。おそらく1基で機能していたとは、考えられないが、S B01のほかには建物として組み合わせられるものは見出せなかった。

4 土坑（第106図、図版12・13）

土坑のほとんどが南斜面に位置する。

S K10 台地整形部分の南側に位置する。平面形は、ややいびつな正方形を呈する。規模は、一辺1.2m、

確認面からの深さ0.2mである。底面は平らである。覆土は、自然堆積と考えられ、炭化物粒を多く含む。
S K11 台地整形部分の東側に位置する。平面形は、長軸をN-52°-W方向にもつ、ややいびつな長方形を呈する。規模は、長軸1.4m、短軸1.2m、確認面からの深さ0.2mである。底面はやや波打つ。覆土は、自然堆積と考えられ、炭化物粒を多く含む。

S K12 調査区西端に位置するため、完掘することはできなかった。平面形は、長軸をN-65°-W方向にもつ、ややいびつな長方形を呈すると考えられる。規模は、短軸1.5m、確認面からの深さ0.6mである。底面はほぼ平らである。覆土は、自然堆積と考えられる。宝永火山灰を含む層が底面近くに堆積している。

S K13 S D03とS D04の間に位置する。平面形は、ややいびつな円形を呈する。規模は、径1.0m、確認面からの深さ0.3mである。底面はやや波打つ。黄白色の粘土を壁面に貼っており、覆土にも粘土粒が含まれる。

S K14 S D02内に位置する。平面形は、ややいびつな正方形を呈する。規模は、一辺1.0m、確認面からの深さ0.2mである。底面はほぼ平らである。

S K15 S D01の西端付近に位置する。平面形は、長軸をN-79°-E方向にもつ、ややいびつな長方形を呈する。規模は、長軸1.6m、短軸1.2m、確認面からの深さ0.2mである。底面はやや波打つ。

S K16 S D07の北東に位置する。平面形は、長軸をN-22°-W方向にもつ、長方形を呈する。規模は、長軸1.7m、短軸1.1m、確認面からの深さ0.2mである。底面はほぼ平らである。

S K17 地山整形部分の東端に位置する。平面形は、いびつな円形を呈する。規模は、径0.9m、確認面からの深さ0.3mである。底面はほぼ平らである。覆土は、ロームが主体である。

S K18 S D03の西側に位置する。平面形は、円形を呈する。規模は、径0.7m、確認面からの深さ0.1mである。底面は皿状を呈する。覆土には、炭化物・焼土粒が含まれる。

S K19 S D02内でS K20と並んで位置する。平面形は、長軸を東西方向にもつ、いびつな長方形である。規模は、長軸1.0m、短軸0.5m、確認面からの深さ0.2mである。底面は波打つ。覆土には、炭化物粒が含まれる。

S K20 S D02内でS K19と並んで位置する。平面形は、長軸を東西方向にもつ、いびつな長方形である。規模は、長軸1.8m、短軸1.2m、確認面からの深さ0.1mである。底面は波打つ。覆土には、炭化物粒が含まれる。

S K21 S D02・03の南側に位置する。平面形は、長軸をN-26°-E方向にもつ、ややいびつな卵形を呈する。規模は、長軸3.1m、短軸2.6m、確認面からの深さ1.4mである。底面はいびつである。

S K22 S D02内でS K14と並んで位置する。平面形は、長軸をN-17°-W方向にもつ、長方形を呈する。規模は、長軸1.7m、短軸1.3m、確認面からの深さ0.3mである。底面はほぼ平らである。

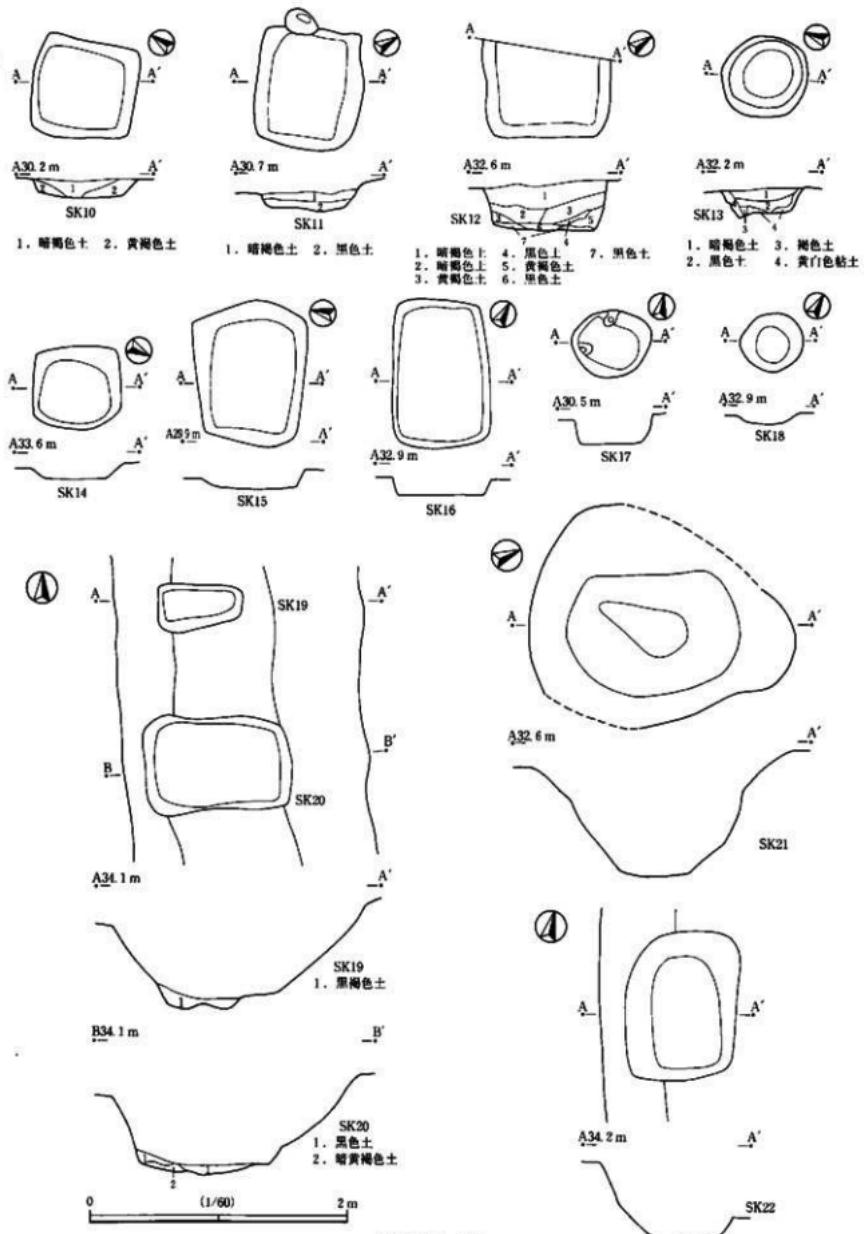
5 溝・土壙（第107・108図、図版14）

7条の溝が確認されている。溝に伴い2条の土壙状の高まりも認められる。

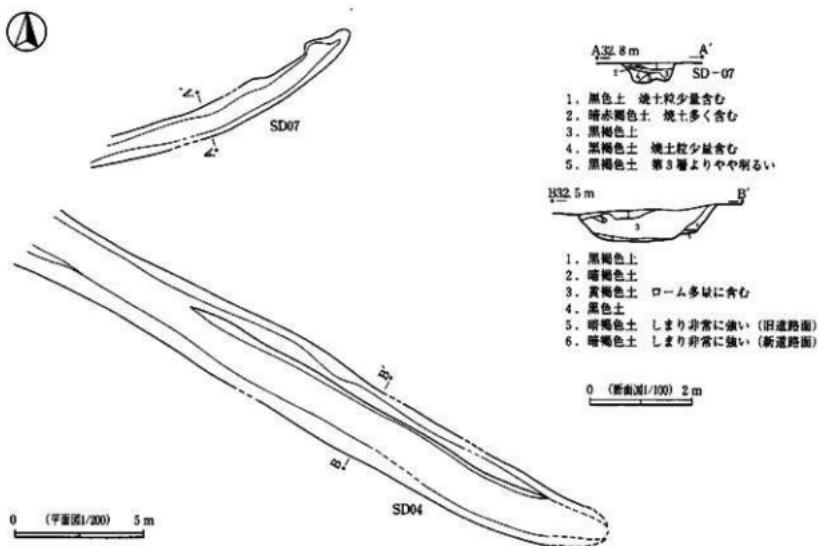
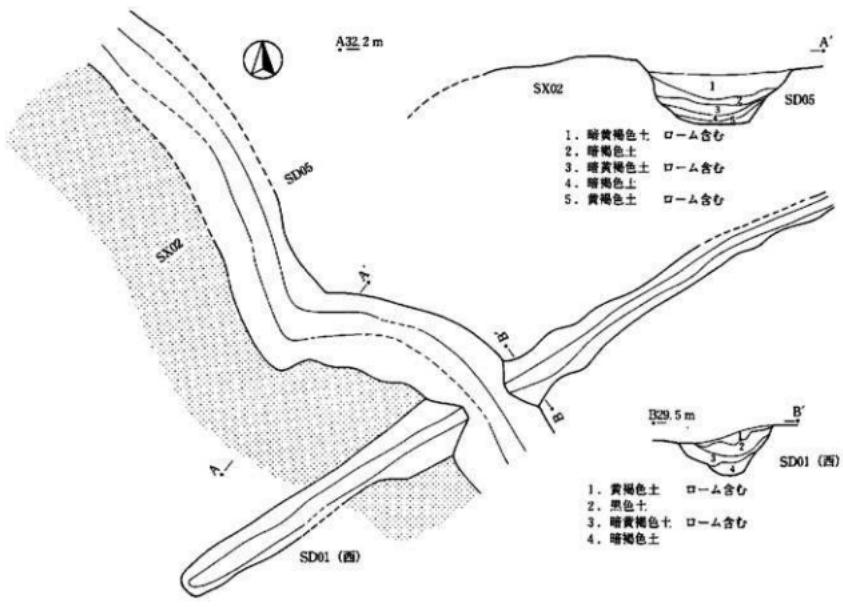
S D01 調査区を東西に横断する。直線的に延びる。東側では、3・4号墳の周溝を切っている。規模は、平均で幅2m、確認面からの深さ0.7mである。

S D02 S D03と平行して調査区を南北に縦断する。S D03との間には、土壙状の高まりが見られるため、それぞれ同時に機能していたものと考えられる。規模は、平均で幅3.0m、確認面からの深さ0.7mである。

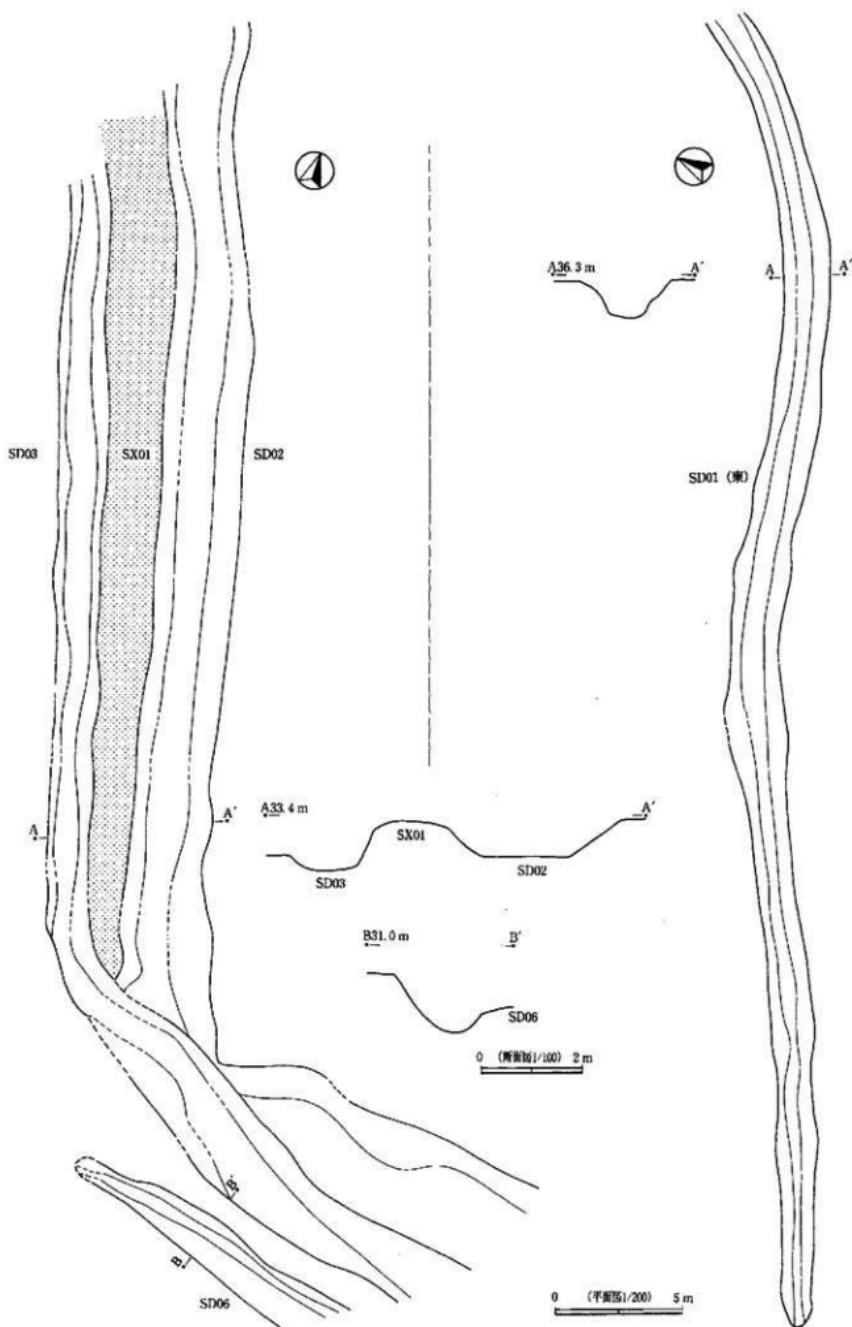
S D03 S D02と平行して調査区を南北に縦断する。底面には硬化面が見られるため道路として機能して



第106図 SK



第107図 SD・SX (1)



第108図 SD・SX (2)

いた可能性がある。規模は、平均で幅2.0m、確認面からの深さ0.8mである。

S D04 S D07の南側に位置する。底面には硬化面が見られるため道路として機能していた可能性がある。等高線からも分かるようにS D03との間は、傾斜が緩やかで、ピットなどの遺構も存在するため、平場として使われていたようである。規模は、平均で幅3.0m、確認面からの深さ0.7mである。最低一回は作り替えられている。

S D05 調査区南端に位置する。クランク状にくびれる部分がある。南側には土壘状の高まりがあり、土壘に伴う溝であると考えられる。規模は、平均で幅3.0m、確認面からの深さ1.1mである。覆土は自然堆積であると考えられる。

S D06 S D03の南側に位置する。規模は、平均で幅2.0m、確認面からの深さ1.1mである。

S D07 S D04の北側に位置する。規模は、平均で幅1.2m、確認面からの深さ0.4mである。覆土には焼土が多く含まれる。

S X01 S D02・03の間に位置する。

S X02 S D05の南側に位置する。

第2節 遺物

1 陶磁器¹⁾ (第109図、図版52・53)

中世の陶磁器類の出土点数は、総数30点と極めて少ないが、そのうち貿易陶磁(青磁・白磁)が9点(30%)を占める。古瀬戸類は出土していない。

1は、S D05から出土した白磁皿VII類の口縁部破片である。胎土は灰色で硬質である。釉薬も灰色に発色している。

2は、B4-01から出土した白磁皿IX類の底部破片である。口縁端は口ハゲになると考えられる。胎土は、やや白みがかった灰色を呈する。釉薬は白色に発色するが、底部では一部ぬぐい取られているようである。底部外面は、回転ヘラケズリ調整を施す。

3は、B3-62から出土した青白磁梅瓶の肩部の破片である。胎土は、やや灰色がかった白色を呈する。釉薬の色調は、非常に薄い青色である。外面には買入が、内面には釉ダレが見られる。

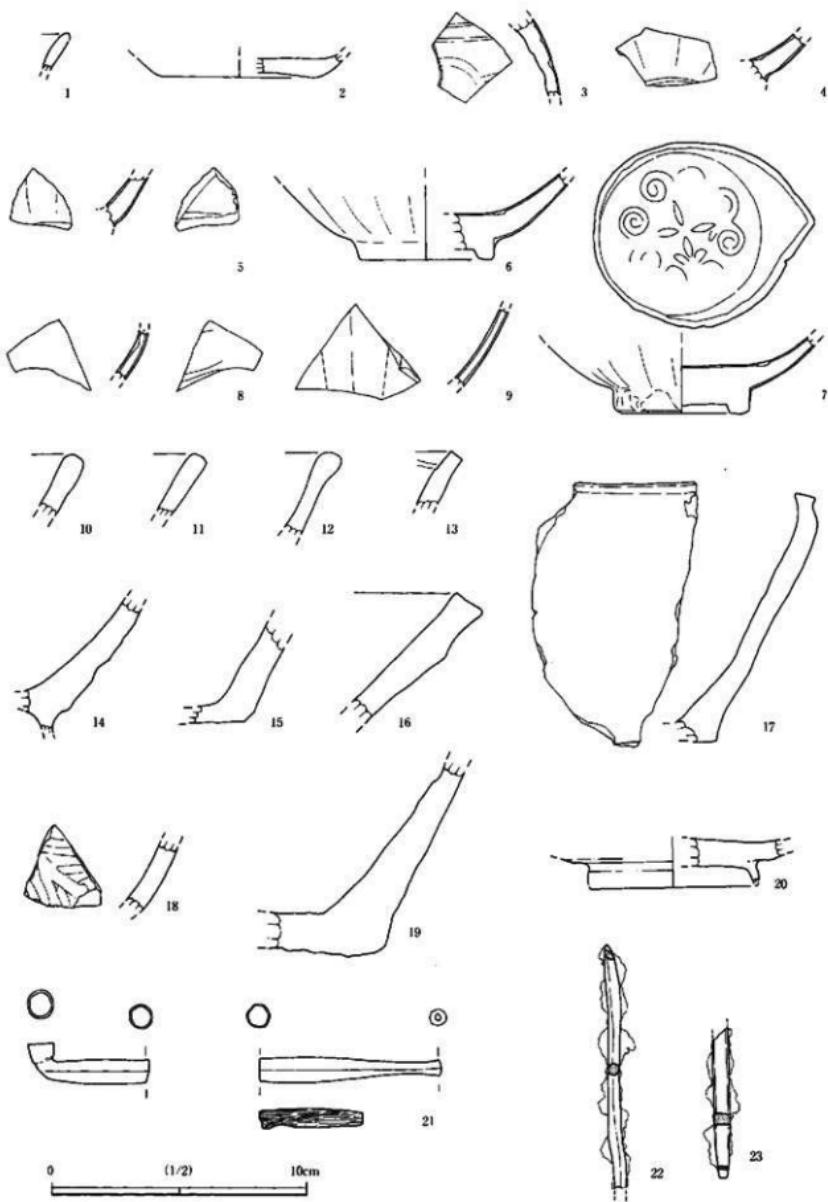
4は、S D03から出土した龍泉窯系青磁連弁文碗I-5類の体部立上がり部分の破片である。胎土は、灰色で砂粒を含まず、堅密である。内外面ともに比較的厚い釉薬を掛けた。

5は、S D05から出土した龍泉窯系青磁連弁文碗I-5類の体部立上がり部分の破片である。胎土は緻密で、やや褐色かかった灰色を呈する。内外面ともに比較的厚く釉薬を掛けた。

6は、S D01から出土した龍泉窯系連弁文碗I-5類の破片である。胎土は灰色を呈し、砂粒を含まず、非常に緻密である。釉薬の色調はオリーブ色である。高台裏は無釉で、焼成がやや甘いためか疊付けが少々磨滅している。

7は、A3-98から出土した龍泉窯系青磁連弁文碗I-5類の破片である。胎土は、やや灰色がかった白色を呈する。釉薬の色調は、やや明るい青色である。底部内面に草花文の印刻がなされている。削り出し高台で、端部を面取りする。高台裏は無釉だが、胎土からの鉄分のしみ出しにより鉄錆色を呈する。疊付けは回転ヘラケズリ後軽くナデ調整が施された。

8は、S D02から出土した龍泉窯系青磁蓮弁文皿III類の破片である。釉薬は内外面ともに厚く掛かる。



第109圖 中・近世遺物

胎土は硬質で、薄い灰白色を呈する。

9は、S D05から出土した龍泉窯系青磁連弁文皿III類の立上がり付近の破片である。胎土は、灰色である。内外面に厚く釉薬を掛ける。

10は、3号墳から出土した常滑産壺鉢の口縁部破片である。胎土は、白色砂粒を少量含む。色調は、灰白色である。やや焼きが甘く須恵質である。

11は、S D02から出土した常滑産壺鉢の口縁部破片である。胎土は灰色を呈し、ほとんど砂粒を含まない。色調は、にぶい赤褐色である。内面にゴマふり状の自然釉が付着する。焼成は良好で硬質である。

12は、B3-83から出土した常滑産壺鉢の口縁部破片である。胎土はやや砂っぽく、白色砂粒を多量に含み、直径3mm程度の砂礫も見られる。外面には、ゴマふり状に自然釉が付着する。色調は灰色で、須恵質である。

13は、C3-51から出土した常滑産片口の口縁部破片である。胎土には白色砂粒を多量に含む。色調は薄い灰褐色で、やや焼成不良である。内面に2本の細い沈線が施される。

14は、S D04から出土した常滑産付高台壺鉢の体部立上がり付近の破片である。胎土は白色砂粒を多量に含み、粗悪である。内面は、使用により磨滅し、外面にはヘラケズリ痕が残る。灰色に発色し、須恵質である。

15は、A4-18から出土した常滑産片口の底部破片である。胎土は白色砂粒を多量に含む。色調は黒褐色である。内外面ともナデ調整で、外面にはかすかにハケ目状の調整痕跡が見られる。底部外面は、無調整でザラザラしている。焼成は良好で硬質である。17と同タイプと考えられる。

16は、B3-80から出土した常滑産壺鉢の口縁部破片である。胎土は、直径1mm～3mmの白・灰色砂粒を多量に含む。色調は灰褐色である。内面は平滑だが、磨滅はしていない。口縁部は、内外面ともヨコナデ調整が施されている。

17は、S D01-05から出土した常滑産片口の破片である。胎土には直径0.5mm～5mmの白色砂粒を多く含む。色調は黒褐色である。口縁部上面と内面底部付近にゴマふり状に自然釉が付着している。内面は、ナデ調整、外面もナデ調整であるが上部にヘラ状工具痕、下部にかすかにハケ目状の調整痕跡が見られる。

18は、確認トレンチから出土した常滑産壺の体部小片で、外面に杉文のタタキ目が残る。

19は、S D01から出土した渥美産窯の底部付近の破片である。胎土はやや砂粒を多く含み、緻密ではない。色調は薄い灰色である。内面はナデで、底部の一部に自然釉が付着している。外面調整は雑で粘土紐接合痕が明瞭に残っている。外面底部は、ザラザラして、植物纖維の痕跡が残る。

20は、B2-94から出土した近世瀬戸美濃産の付高台の皿類の底部破片である。胎土には気泡が多く、粗悪である。底部外面は回転ヘラケズリ調整である。内面全体と体部外面に鉄釉が掛かる。底部内面には重ね焼きの痕跡が見られる。

1、19が12世紀代、3が13世紀代、4～7が13世紀後半から14世紀前半、8、9が14世紀前半から中葉、10～12、14が12世紀後半から13世紀代、16が14世紀前半、13、15、17が13世紀中葉と考えられる。

2 銅製品（第109図、図版53）

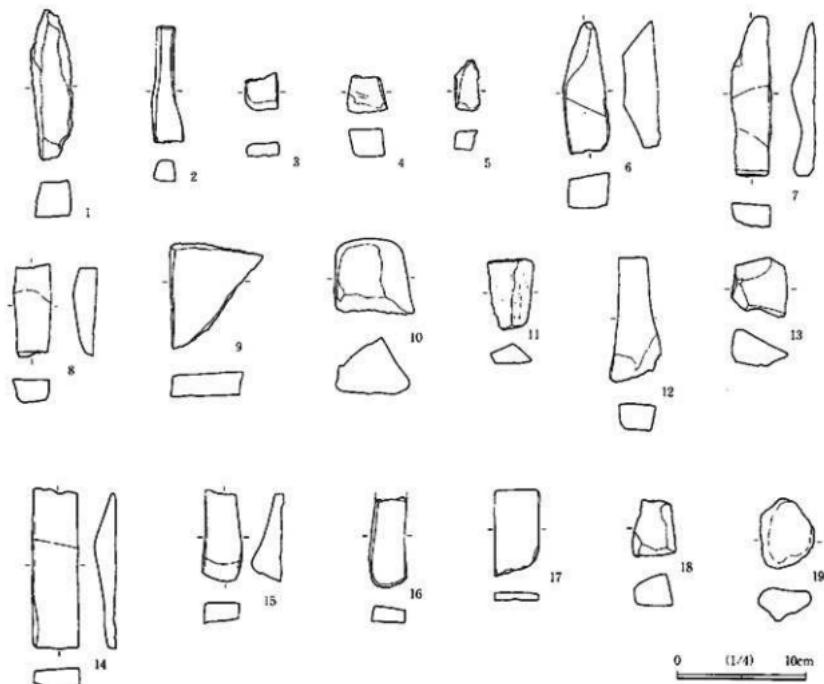
21は、銅製の煙管である。雁首、吸口そして吸口内にはラウが残存している。雁首長48mm、吸口長72mm、ラウとの接合部の直径は9mm、重量はそれぞれ6.56g、4.98gである。

3 鉄製品（第109図）

S D04から棒状鉄製品が2点出土している。22は、断面丸みを帯び、先端はやや薄くなる。23は、断面やや横広の長方形、先端は非常に薄くなる。断面が合わないため、同一個体とは考えられない。用途は、紡錘車の柄の可能性があるが断定できない。重量は、22が37.43g、23が4.4gである。

4 石製品（第110図、第25表、図版22）

調査区から火打ち石が1点、砥石が18点出土している。



第110図 石製品

第25表 石製品計測表

番号	出土地点	種別	石材	重量(g)	現存長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	備考
1	3号墳	火打ち石	石英斑岩	145.8	11.6	3.1	2.9	先端に敲打痕有り
2	2号墳	砥石	凝灰岩	44.0	9.0	2.5	1.6	
3	2号墳	砥石	砂岩	10.6	2.4	2.6	1.1	
4	3号墳	砥石	凝灰岩	26.6	2.8	3.1	2.3	
5	3号墳	砥石	凝灰岩	14.3	3.9	1.9	1.5	
6	3号墳	砥石	凝灰岩	106.8	10.0	3.4	2.5	
7	3号墳	砥石	凝灰岩	81.0	12.3	3.0	1.8	
8	3号墳	砥石	凝灰岩	51.6	7.2	2.9	1.9	
9	3号墳	砥石	凝灰岩	137.1	8.1	7.1	1.8	
10	3号墳	砥石	安山岩	186.0	5.9	6.2	4.4	
11	4号墳	砥石	凝灰岩	32.8	5.5	3.5	1.6	
12	4号墳	砥石	凝灰岩	117.3	9.6	3.9	3.2	
13	S D01	砥石	砂岩	42.8	4.5	4.3	2.7	
14	表探	砥石	凝灰岩	93.0	12.5	3.6	1.6	
15	表探	砥石	凝灰岩	50.1	7.2	3.1	2.3	
16	3B90	砥石	凝灰岩	36.0	7.1	2.9	1.3	
17	3A97	砥石	凝灰岩	23.8	6.6	3.5	0.6	
18	3B70	砥石	凝灰岩	42.9	4.4	3.4	2.8	
19	3B85	砥石?	凝灰岩	40.6	5.5	4.1	2.5	

5 古銭 (第111図、第26表、図版111)

輸入錢貨はすべて北宋錢で、永楽通寶などの明錢を含まない。調査区から15点出土している。

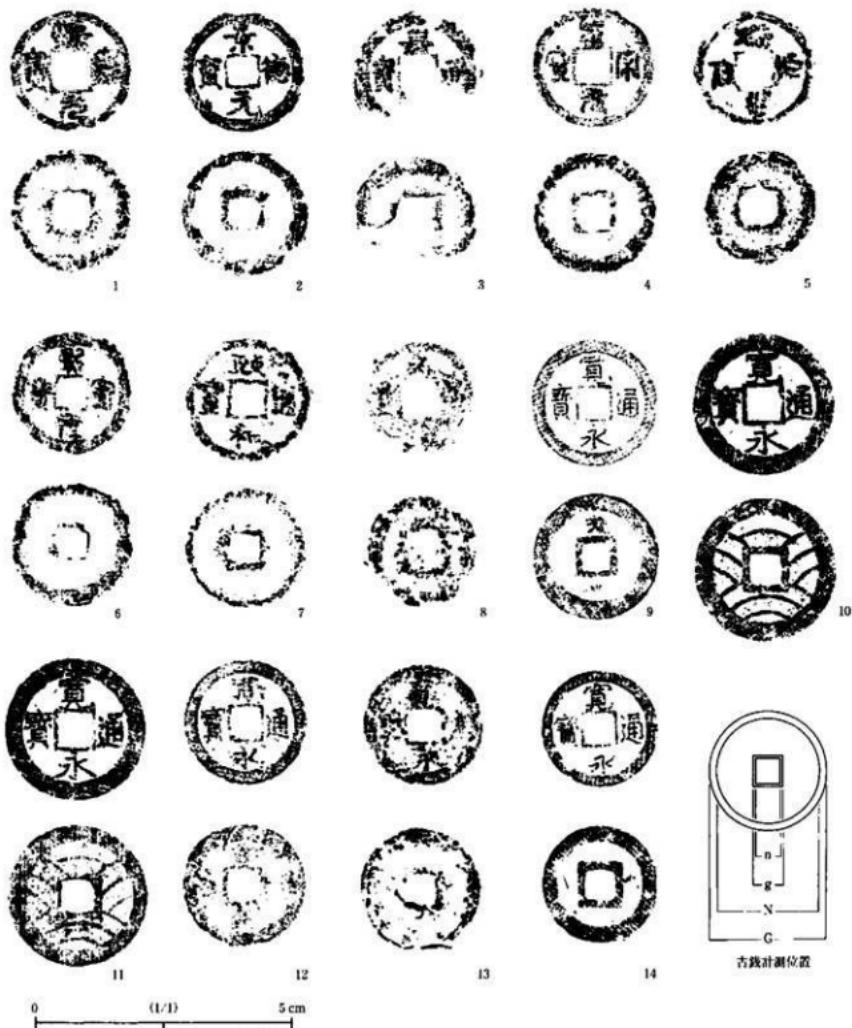
第26表 古銭計測表

番号	出土地点	銭貨名	重量W(g)	外側内径G(cm)		外側内径N(cm)		内側外径E(cm)		内側内径n(cm)		外側厚T(cm)	内側厚t(cm)	備考
				縦	横	縦	横	縦	横	縦	横			
1	A3-96	〇〇元寶	3.19	24.10	24.00	20.30	20.50	8.80	8.95	7.15	7.30	1.05~1.30	0.90~1.00	北宋?
2	B4-02	景祐元宝	2.29	24.45	24.50	19.10	18.80	7.00	7.00	5.80	5.95	1.10~1.25	0.50~0.60	北宋1064
3	S D04	嘉祐通宝	2.42	24.00	24.80	19.70	18.00	8.60	8.80	6.80	6.70	1.10~1.50	0.90~1.20	北宋1056
4	A3-96	聖宋元宝	3.51	24.10	24.20	20.05	20.10	7.95	7.60	6.00	6.50	1.35~1.45	0.90~1.20	北宋1011
5	A3-99	至和通宝	1.84	22.10	22.10	19.50	19.60	8.30	7.50	7.30	7.05	0.85~1.10	0.70~1.05	北宋1054
6	A4-08	熙寧重宝	3.83	24.20	24.00	19.20	18.45	7.10	7.00	5.50	5.95	1.30~1.60	1.15~1.35	北宋1068
7	2号墳	貞和通宝	2.45	23.30	23.60	20.60	20.50	8.25	8.30	5.90	6.00	1.15~1.30	0.80~0.90	北宋1111
8	表探	不明	1.58	22.00	21.30	18.40	18.80	8.90	8.50	7.30	6.40	0.45~0.90	0.50~0.90	?
9	C80	寛永通宝	4.08	25.10	25.10	19.80	19.80	7.10	6.80	5.70	5.60	1.25~1.32	0.90~1.00	新寛永
10	4号墳	寛永通宝	4.49	28.10	28.10	21.10	21.10	7.90	8.20	6.50	6.20	1.05~1.10	0.80~0.90	新寛永
11	表探	寛永通宝	4.23	28.00	28.10	20.90	21.00	8.20	8.20	6.45	6.50	0.95~1.15	0.80~1.10	新寛永
12	C3-00	寛永通宝	2.73	24.30	24.30	19.30	19.50	7.10	6.90	6.10	6.10	1.05~1.25	0.75~0.90	新寛永?
13	1号墳	寛永通宝?	4.57	24.60	24.10	-	-	-	-	-	-	-	-	拓本不能
14	1号墳	寛永通宝	2.85	24.00	24.00	18.70	19.00	7.50	7.70	5.70	5.50	1.00~1.30	0.80~1.20	?
15	3号墳	寛永通宝	2.27	22.90	22.90	18.30	18.30	6.90	6.85	5.90	6.00	0.90~1.00	0.50~0.60	新寛永

注1 貿易陶磁器の分類は横田・森田分類(1978)、常滑窯製品については赤羽・中野編年(1994)によった。

横田賢次郎・森田勉 1978 「太宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』4

シンポジウム「中世常滑焼きをおとつて」資料集 1994



第111図 古銭

第7章 まとめ

第1節 旧石器時代

本遺跡から検出された旧石器時代の石器集中地点は4地点に及ぶが、いずれも小規模なものである。調査区の南西側の斜面に石器分布が確認された石器集中1と石器集中2では出土石器の合計は5点以下であり、単独出土に近い状況である。石器集中3と石器集中4はいずれもVI層～VII層中から検出され、一部、同一母岩も確認されている。両石器集中は1号墳と2号墳の墳丘・周溝直下から検出されており、石器集中の一部が古墳建築時に壊されていることも想定され、本来的には、一つの石器集中として捉えられる可能性も指摘できる。石器集中3では楔形石器や楔形石器剝片（削片）が主体的にあることから、遺跡内での石器利用活動は両極剝離作業を中心であったことがわかる。同一母岩の存在やそれらの剝片・碎片類の状況等から、遺跡内で、ある程度素材剝片の剝片剝離が行われたと思われるが、石核は遺跡外へ持ち出されたものと理解される。

下総台地北東部の周辺地域において、出土層位の中心が立川ロームVI層～VII層（第2黒色帯上部）にある多くの石器群に、楔形石器が顕著に組成する。時期的には前段階からそのような傾向があるが、この時期になって急激に楔形石器の組成率が高まってくるようである。各遺跡の様相は様々であり、それらの関連性も未だ明らかにされていないのが現状である。本遺跡のように両極剝離に伴う石器類以外に、主要なツールを伴わない石器群がどのように位置付けられるのか、今後の課題として挙げておきたい。

第2節 繩文時代

縄文時代の遺構として陥穴を9基検出することができた。SK01からSK07が一般的な陥穴の形態を呈している。遺構に確実に伴う遺物は出土せず、時期を決定することはできない。遺構の調査区における配置をみると、SK01、SK02、SK03が群在するのみで、他の陥穴は散在し、あまり地形を意識した配置とは考えられない。それぞれの陥穴の機能していた時期差を示しているのかもしれない。

遺物は土器片が実測可能なもので3点と極めて少ない。いずれも加曾利B式の粗製土器の破片と考えられる。一方、石器は9点と比較的多い。この地域は、居住地域として利用されていたというよりは、専ら狩猟を行っていた地域と考える方が妥当であろう。

第3節 弥生時代

弥生時代の遺構は確認することができなかった。それにもかかわらず弥生時代後期の壺形土器片が比較的多く出土した。古墳の墳丘盛土内から出土した破片があるため、古墳が築造された際に弥生時代後期の遺構が破壊されてしまった可能性が高い。土器は、いわゆる北関東系の土器、特に十王台式の影響を強く受けたと考えられるものが含まれている。また、結節文を施し、南関東との折衷型ともいべき系統のものも見られる。これらの土器群は、東金市の道庭遺跡とともに、北関東系の弥生土器波及の南東端として、弥生時代の資料の希薄なこの地域における貴重な基礎資料の一部となりうるだろう。

第4節 古墳時代

古墳時代後期になり、この付近は古墳群が形成されるようになる。同台地には、全部で7基の古墳が営まれている。内訳は前方後円墳が2基と円墳が5基である。今回の調査区では4基の古墳の発掘を行ったが、4号墳に関しては周溝の一部のみの調査であり遺物もほとんど出土せず、内容を明らかにすることはできなかった。そのため、ここでは主に1号墳から3号墳を中心に考察する。まず、それぞれの古墳の発掘の成果の概要と特徴をふりかえり、年代を想定することの可能な副葬品を中心に遺物の分析を行うこととする。

1 1号墳（第112図）

概要と特徴 径17m～19mの円墳である。主体部は1基検出することができた。副葬品は、鉄製の直刀が1振と鉄鎌が多数出土した。1号墳で特筆すべきこととして、墳丘盛土下の旧表土面から的一般的に見られる土師器杯とは形態・調整が若干異なる土器の一括出土と焼土、炭化物の出土がある。古墳築造前の儀式が墳丘の築造される位置で行われていたと考えられる。出土遺物は、旧表土面から出土した土器と主体部から出土した副葬品（鉄刀・鉄鎌）が主なものであり、周溝からはあまり遺存のよい遺物はなかった。

旧表土面出土土師器 ほとんどの土師器が口縁部が内湾するものであるが、須恵器の身の模倣である内傾した口縁部をもち口縁部と体部の間に稜を作り出している個体も混じっている。稜をしっかり作り、器高が高めのものと稜が弱く体部高の比較的低いものが共存している。赤彩が施されるものも存在し、年代としては6世紀中葉前後が想定できる。

副葬品 鉄刀は1号墳から3号墳でそれぞれ出土しており、本古墳群の変遷を考える上で重要な遺物である。しかし、それぞれの鉄刀は、装着される刀装具の遺存が悪く、また、装饰性に乏しいものがほとんどであるため、年代を推定するのが困難である。しかし、近年このような鉄刀の研究も進みつつあり、主に菊池芳郎氏の分析¹¹⁾を参考にすると1号墳出土の鉄刀は、茎が刀身に対してほとんど偏らない両側の直刀であること、鉄製の鐔・鍔が装着され、鐔平面形は、刃側がやや尖り気味の梢円を呈していること、また、細身で刀身の長いことなどから6世紀後葉から末葉の年代が想定できる。

鉄鎌は鐵身部分を含む個体数から少なくとも11点は副葬されていたことが考えられる。複数の型式の鉄鎌があり、分類を行うと以下のようになる。ほとんどが集中して出土していることから、まとめて一か所に副葬されたことが考えられる。また、すべて鍔状突起を有していたと考えられる。

1. 五角形式	1点
2. 長三角形式（笠被なし）	1点
3. 長三角形式（笠被有り）	2点
4. 片刃箭式	6点
5. 積箭式	1点

五角形式の鉄鎌は類例が少ないため、形態の変遷をつかむことができず、年代を想定することは難しい。同型式と考えられるものは、市宿横穴群8号墓¹²⁾から出土している。年代は陶邑編年TK43に当てられている。

長三角形式の鉄鎌は身側が直線的で、腰抉になっていることからやや古相を呈する。6世紀後半と考えられる。同様な型式を出土した古墳として神明社裏古墳群1号墳が挙げられる。

片刃箭式の鉄鎌は身側が直角を呈するものとだらかなものが混在する。また、鐵身長が3cmに満たず、

退化傾向にあることから年代は6世紀末葉と考えられる。

鑿箭式の鉄鎌は鎌身部の先端のみの残存であり、検討することができなかつた³⁾。

小結 以上のように、鉄刀の年代観と鉄鎌の組成の年代観は、それぞれ6世紀後葉を前後する時期を考えることできる。しかし、旧表土面から出土した土師器の年代観とのズレが生じてしまう。土師器が特殊な目的で作られたため、一般的な土師器杯の編年観を当てはめることができないと考えるとすると、1号墳の築造年代は6世紀後葉とするのが妥当であろう。

注 1 菊池芳朗 1990 『大年寺山横穴群』

菊池芳朗 1993 「東北地方における横穴の出現年代」 『福島県立博物館紀要』第7号

2 小高幸男 1996 『市宿横穴墓群発掘調査報告書』君津都市文化財センター

3 それぞれの鉄鎌の年代観は下記の論文を参考にした。

a 杉山秀宏 1988 「古墳時代の鉄鎌について」 『権原考古学研究所論集』第8

b 白井久美子 1989 「東国後期古墳分析の一視点」 『千葉県文化財センター研究紀要10』

c 上野恵司ほか 1997 『多知波奈考古』第2号 橋考古学会

2 2号墳（第112図）

概要と特徴 径13mの円墳である。主体部が墳丘上に2基、周溝内に1基と、墳丘外に土坑が1基検出された。副葬品として玉類、鉄刀、鉄鎌などが出土した。

旧表土面出土土器 全形が判明するのは須恵器の提瓶1点と土師器杯2点である。

提瓶は、出土位置、出土レベルから1号主体部に副葬されていたと考えられる。肩部の釣り手がボタン状に退化していることから6世紀末から7世紀初頭まで下るものと考えられる。しかし、体部はほぼ円形であり、比較的古相の要素を残している。

土師器杯は共に赤彩が施された須恵器の模倣杯である。器形や体部高が比較的低くなっていることから、年代は6世紀中葉前後と考えられる。

副葬品 1号主体部の副葬品は鉄鎌が2点のみである。

1. 柳葉式無茎鎌 1点

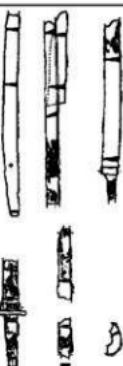
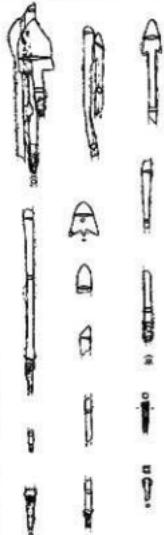
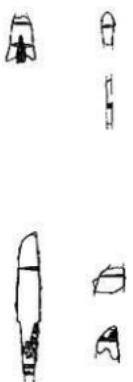
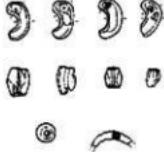
2. 鑿箭式 1点

無茎の柳葉式の鉄鎌は年代幅がかなりあり、形態の変遷を一定方向でおうことができず明らかではない。同様の鉄鎌を出土した古墳として池向11号墳第1施設¹⁾、馬ノ口8号墳²⁾を挙げることができる。これらの年代観に従うと7世紀初頭から前葉が考えられる。

鑿箭式の鉄鎌はなんだらかな無闇ではあるが、比較的鎌身と笠被部の境がはっきりしていることから7世紀初頭の年代が与えられる。茎関部は欠損して不明のため鎌身形だけからの判断であるが同様の鉄鎌を出土した古墳としては、天王船塚34号墳³⁾、椎名崎1号墳⁴⁾を挙げることができる。

2号主体部の鉄刀は、茎が刀身に対してほとんど偏らない両関の直刀である。関はあまり深くなく、鍔の可能性のある破片は出土したが鍔は出土していない。6世紀後葉以降の年代が考えられる。

鉄鎌は、鑿箭式の鉄鎌が5点副葬されていたことが考えられる。内訳は以下のようになる。第31図の6は、角が張るので五角形式ともとれるが、ここでは鑿箭式に含めて考えることとする。

	1号墳	2号墳		3号墳
		第1主体部	第2主体部	
鉄 刀 (1 /10)				
鉄鑓・刀子 (1 /4)				
玉類・その他 (1 /4)				

第112図 小川崎台1・2・3号墳の副葬品

1. 鎧箭式（両開） 2点

2. 鎧箭式（開無） 3点

両開としたものの1点は開が緩やかで、開無に変化していく中間の形態を示している。無開と有開が混在した組成をなしており、6世紀の末葉の年代が与えられる。このような鉄鎌の組成をもつ古墳として天王船塚8号墳⁴などを挙げることができる。

小結 以上のように、出土遺物から年代を当てはめると、1号主体部が7世紀初頭、2号主体部は6世紀末葉の造営を想定することができる。両方の主体部に共通する鎧箭式の鉄鎌の形態変遷の目安である鎌身長の短化、身闇の無開化傾向の点においても矛盾はない。

しかし、1号墳と同様に旧表土面出土土器との年代の開きが生じてしまっている。2号墳旧表土面出土土器は、1号墳とは異なり、築造前の行為と直接には結びつかない出土状況とも考えられるので、矛盾はないとも言える。

注1 谷 句ほか 1995 「佐倉市池向遺跡」 千葉県文化財センター

2 加藤正信ほか 1984 「千葉東南部ニュータウン15」 千葉県文化財センター

3 千葉県企業庁 1975 「公津原」

4 沼沢 豊ほか 1975 「千葉東南部ニュータウン1」 財団法人千葉県都市公社

5 注3と同じ

3 3号墳（第112図）

概要と特徴 墳丘長24.5mの前方後円墳であり、埴輪列が比較的良好に確認された。しかし、墳頂の主体部は中央に大きく攪乱を受け、原位置を留めた副葬品は出土しなかった。盗掘のため、副葬品の組成は1号墳・2号墳に比べ貧弱である。副葬品は、墳丘上で表採された鉄製の直刀を合わせて4振の直刀と2点の銅製耳環のみである。周溝内に2基土坑を検出した。遺物はほとんど出土しなかったが、位置・形態からいって3号墳に伴う周溝内主体部と考えられる。

出土土器 旧表土層中から出土した變形土器は胴部に丸みを有し、6世紀前葉に相当すると考えられるが、本古墳に直接は伴うとは考えられない。

周溝内にある2号主体部の覆土中層から出土した杯形土器は、黒色塗彩（漆処理）されており、また器高が高い。6世紀中葉～後葉の年代が考えられる。

副葬品 鉄刀が4振出土しているが完存するものがなく、全長などは不明である。両開のものが3振、片開のものが1振である。鐔が丸みの強い梢円を呈すること、茎尻が背側に寄るものが見られることから比較的古相を示す形態的特徴をうかがうことができるため、少なくとも6世紀代であると考えられる。

円筒埴輪の樹立数 3号墳からは、埴輪が多く出土した。ここでは、築造当初の埴輪列を復元してみたい。

まず円筒埴輪の樹立数の確定を行う。朝顔形埴輪は基部付近のみの出土では円筒埴輪との区別が難しいため、ここでは朝顔形埴輪も含めて考えることにする。

3号墳から出土した埴輪の総重量は、775.16kgである。3号墳は、全面発掘を行ったためこの総重量は、1古墳に供給される埴輪の總量を考える上で貴重な資料と考えられる。しかし、復元材を入れた後に計量

を行ったため、若干の誤差が生じている。内訳は、円筒埴輪重量651.76kg、形象埴輪重量123.40kgである。

まず、個体数を出すためにはこの数値を円筒埴輪の平均重量で割る方法が考えられる。残りが良好で大部分を復元できた円筒埴輪は、7, 29, 31, 40, 43, 44, 61, 108, 128である。それぞれ3kg~4kgを前後する重量である。2条3段、3条4段、朝顔形などという規格の違いも考慮して1本平均を3.5kgと想定することにする。円筒総重量651.76kg ÷ 1個体平均3.5kg = 約186個体となる。しかし、円筒埴輪と分類した中にお形象埴輪片が混ざっている可能性もあるためや多い数値と考えられる。

別の案としては、底部破片を抜き出し、基部の接合箇所を調べる方法がある。大木台古墳群¹¹を参考にした。小川崎台3号墳の埴輪基部の成形は、1本の粘土紐を巻くことから行っているため、1個体につき一つの接合箇所があることになる。このことを利用して、接合箇所の個数から個体数を想定する方法である。実測した底部のある円筒埴輪は、139本、非実測円筒埴輪の中で基部接合箇所を含む底部個体数は、26本分である。合計139本+26本=165本である。しかし、厳密に考えると形象埴輪の底部が含まれている可能性と、非実測の底部破片には実測した円筒埴輪と同一個体がある可能性があるため、若干の誤差は存在すると思われる。しかし、非実測と実測個体の同一個体の可能性は、極めて低いのでこの方法で求めた個体数の方が最初の案に比べ精度は高いと考えられる。

補完的な方法として原位置の埴輪列から他の部分を復元し、個体数を考えてみたい。北東部分の原位置の配置を後円部の墳頂角で見てみると約2度ずつ展開している。前方部前端部分は円筒埴輪の基部の出土分布が比較的希薄なため少なめに復元してみると第113図のようになる。この図から数を導き出すと160本となる。発掘時の所見として、明らかに墳丘の上部から転げ落ちた様子を呈した円筒埴輪が数個体あったため、墳頂部を囲むように埴輪列が存在した可能性がある。原位置で出土したものがないため、確定はできないが、10~20本の追加となるだろう。

以上、3つの方法で円筒埴輪の個体数を考えてみたわけだが、どの方法でも大差がないことから170本を前後する円筒埴輪の樹立を考えて差し支えないことが分かる。

3条4段円筒埴輪と朝顔形埴輪の配置(第113図) 本古墳の円筒埴輪には、2条3段と3条4段の2種類が存在する。主体を占めるのは2条3段である。3条4段と考えられる実測個体数は、37・43・94・95・119・126・138・141・150・156の10本である。底径は、ほとんど2条3段と変わらないため、1段のみ遺存している円筒埴輪の中に3条4段が含まれている可能性は高い。しかし、上に挙げた10本の中で原位置を確定できるものは37の1本のみである。3条4段の破片の出土状況を考えると、後円部の北東部分と南東のくびれ部に集中し、他の地点からは出土がほとんど見られない。このことから、2条3段の円筒埴輪列の中に規則的に組み込まれて配置されたというよりは、その2か所に3条4段円筒埴輪がブロックとして數本ずつ配置されていた可能性が高い。

次に、朝顔形埴輪の配置について考えてみたい。朝顔形埴輪の実測個体数は、朝1~朝17の17本であり、そのうち基部を含む個体数は5本である。実測した個体を縦密に観察した結果、いずれの個体にも接合箇所は全くなく、色調、胎土、形態の各点でも整合性が見当たらないため、17本は少なくとも確実にあったことが確認された。原位置で出土したものは朝6と朝8である。後円部墳丘の中心角で見てみると約45度の位置で検出されている。また、そのほかの後円部の朝顔形埴輪破片の出土もほぼ同様の間隔で見られ、そのほとんどが2本セットと考えられるように近くで出土している。前方部前端の角周辺にも同様に出土している。このように位置から考えると16本となる。そのほかに墳頂部付近の埴輪列にも樹立されていた

可能性があり、数量はほぼ整合する。

形象埴輪の配列（第113図）

形象埴輪で原位置を留めていたものは、人物1、人物3、人物5、人物7、人物8、人物9、馬形埴輪A、馬形埴輪B、家形埴輪A、家形埴輪Bである。原位置ではないが馬形埴輪Cは、破片出土状況から馬形埴輪A・Bと並んでいたことは、ほぼ間違ないと考えられる。原位置出土形象埴輪の配置を見る限り、形象埴輪列は人物9、鳥形埴輪を除いて1列で円筒埴輪に続くように配置されていたと考えられる。人物9は、事実記載でも述べたとおり、他の人物埴輪に比べ大きさ、作りとともに異質であることから、何らかの別の意味をもたらす埴輪列から外されたものと考えられる。鳥形埴輪は、出土位置が人物埴輪群からやや離れているものが多いため、大きさなどの関係もあり、人物埴輪列に並んでいたと考えるよりはその前の周溝寄りに配置されていたとみる方が自然である。形象埴輪の総数は、人物埴輪が14体、馬は3体、家は2軒、鳥は7体である。人物埴輪は原位置出土が少なく、ほぼ配置が判明したものは人物A～Iまでである。J～Nは、不確定要素が極めて多い。しかし、間隔的に14体ぴったり収まるため、人物埴輪の個体数は、ほぼ当を得ていると考えられる。

形象埴輪列復元でほぼ確定できたことは、以下のとおりである。

①くびれ部から形象埴輪列が始まり、その先頭として人物Aが採用されている。人物Aは、本古墳の中で最も器高が高く、脚部も他の人物埴輪に比べ具象化しており、意識的に人物Aを特別に製作し、樹立位置にも意味をもたらしていたものと考えられる。

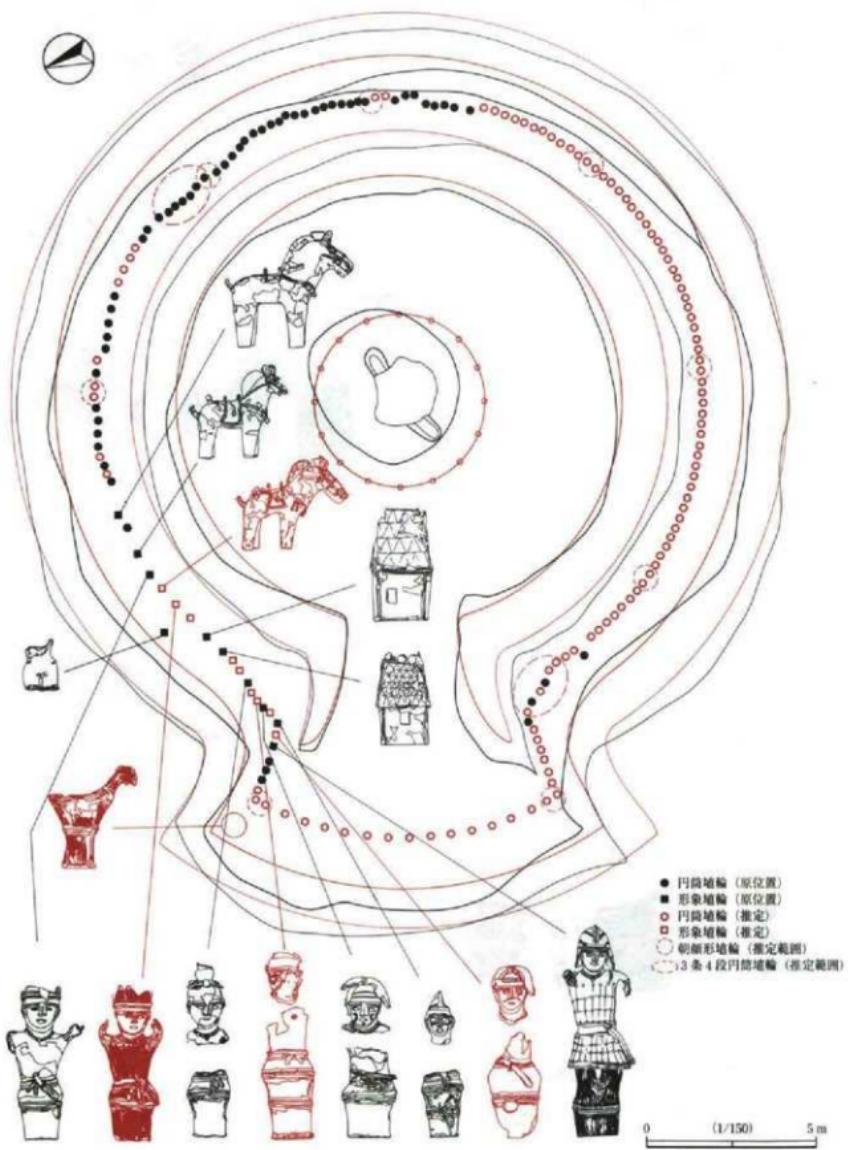
②馬形埴輪は3体並んで配置され、その間に埴輪を一個体ずつ配置している。馬A・馬Bは原位置で出土したため、脚部の出土位置から互いに背を向けて樹立されたことが判明している。馬Aが前方部に頭を向けている。馬Aに対応する人物埴輪は人物Cである。馬とセットであり、右手を後ろの回す仕草をしているため、馬曳きとも考えられるが、事実記載でも述べたとおり、一般的な馬曳きとは異なるようである。人物Cと同様な規格で作られた人物Bが馬Cのやや前方部寄りから出土しているため、馬Cに対応するものと考えられる。馬Cは、馬Aと同様に前方部に頭を向けていたと考えるのが自然である。残った馬Bに対応する埴輪は、位置的に円筒15である。しかし、馬Bの背側になり、馬A・Cとの対応と異なる。また、恐らく円筒15は人物埴輪の基部の可能性は低く、馬Bと人物埴輪はセットにはならない。念のため馬Bの顔側で出土した埴輪を検討してみると、外面にヘラケズリの施された円筒16であり、やや離れており、こちらも人物埴輪の基部とは考えられない。

③馬Bが他の馬とは反対方向を向いていることにより、人物Aを先頭とした方向性のある列を再現したという復元案は成り立たないことが判明した。

④人物Iは形象埴輪列のほぼ中央の周溝寄りにはずれて樹立されている。

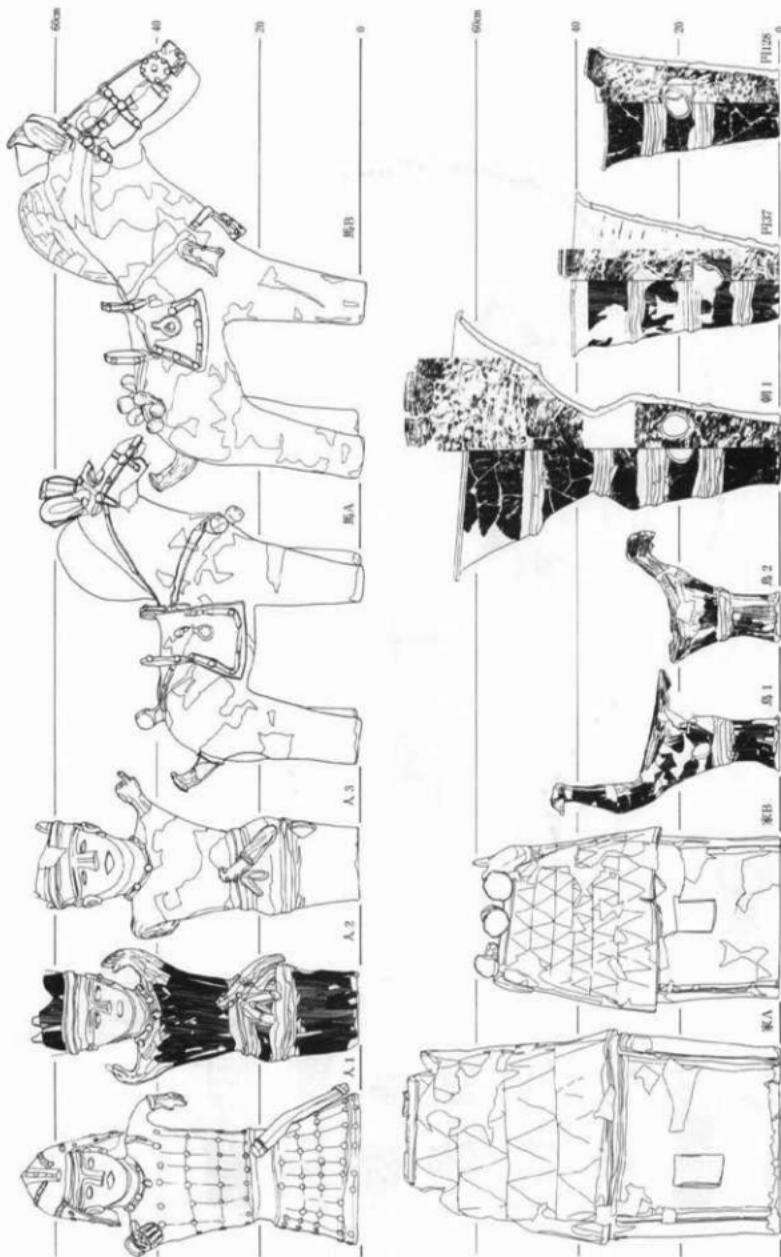
⑤家形埴輪は並んで配置され、それぞれ大窓のある壁を墳丘側に、小窓のある壁、屋根の赤彩三角文は周溝側に向けてあり、墳丘外からの視線を意識した配置であるとともに、製作段階からの意図をよみとることができる。

⑥形象埴輪の集中部分にも円筒埴輪片、朝顔形埴輪片が他の部分と同様に見られることから、いくつかは形象埴輪列内にも樹立されていた可能性はあるが、そうなると、やや窮屈な配置となる。墳頂部付近の埴輪列から落ちてきたものとも考えられ、また、基部がこの部分のみ存在していないことからもその可能性の方が多いと考えられる。



第113図 3号墳復元図

第114図 墓輪の高さの比較 (1/20)



⑦鳥形埴輪は原位置で出土したものが一体も存在しないが、くびれ部よりも前方部寄りに多く出土の傾向が見られる。その部分は形象埴輪列の前方部側のはじまりの位置に近いことから、人物Aの周りにある程度のまとまりをもって樹立されていたと考えられる。

⑧埴輪の高さは第114図を見ても分かるように、大きく2群に分かれる。低いものとして鳥形埴輪・円筒埴輪、高いものとして鳥形埴輪を除く形象埴輪・朝顔形埴輪である。ただし、人物1は脚部を復元した場合、突出した高さを有する。

円筒埴輪の分類（第115図、第28表）円筒埴輪の分類を各要素ごとに行い、工人の人数を推定していく。近年とみに工人推定のための方法論が深化し、成果を上げており、それらの方法を参考にし、分類を行いたい²⁾。

対象の円筒埴輪はある程度の分類要素を有するものとし、基本的に基部から第1突帯、透孔の残存するものとする。その結果、2条3段の円筒埴輪は94本を分類対象とする。

分類項目は、成形方法から調整技法に至る製作の行程上の各要素に求めることができ、多くの項目数になる。しかし、それらの項目ごとに得られた分類をすべて網羅すると、分類のための分類となり、ほとんど1個体1類型に近い細分となってしまう。このことを回避するためには、分類の各要素に工人推定に有効な項目であるかどうかの度合いを加味した上で、レベルの設定を行うことが重要である。

まず、その前提作業として、分類の各要素の検討を行い、同一工人の特徴を導き出すことのできる分類要素を割り出していきたい。

①ハケ目 本来ならばハケ目原体を復元し、同定を行うべきであるが、入念に観察を行ったものの、原体を確実に捉えることができなかった。ハケ目原体に関しては、原体のどの部分が器面に接していたのか、原体の摩耗によるハケ目の変化、強さや器面に当てる角度による違いなど、いろいろな障害が多い。特に本古墳のハケ原体の配列パターンは酷似しており、分類は困難である。最低分類として、大まかに2cm幅中13本～14本、15本～16本、17本～20本の3分類することが可能である。

②突帯 突帯は、丁寧か雑かという点だけでも工人の性格上のくせが表れやすく、分類に大きく寄与するものと考えられる。突帯断面形には、凡例にも示したとおりM形・台形・三角形・丸形・平形の5形態が存在する。しかし、1個体につき1形態をとると限らないため、安定度を重視して考えるべきである。

③法量 突帯間の距離、器高、器壁の厚さ、底径など各項目が考えられる。規格的に同じである2条3段の円筒埴輪を作っているわけであるから、粘土紐の幅や、底径、突帯を貼付する位置などは、同一工人ならば、極めて近い値を示すであろう。特に、底部から第1突帯までの数値は、ほとんどの個体で測定可能であり、分類の基準として有効である。

④基部接合 基部の接合の仕方で2種類に分類が可能である。

⑤透孔 平面形による分類が考えられるが、基本的に円形をめざして穿孔を行っているため、あまり、形態差が表れにくく、また、上からの重みによってゆがみが生じるため、工人のくせを明確に表しているのかの判断が困難である。そのため、ここでは穿孔方向による2種類の分類のみに留めた。透孔の穿孔方向と基部接合は連動して、工人の利き腕の差を示す可能性が高いと考えた。しかし、「逆の」とLRの相關関係は確実なものに限っていと、「逆の」接合24個体に

対しR20個体、L4個体、「の」接合4個体に対しR3個体、L1個体であり、はっきりした傾向は表れない。また、穿孔方向のはっきりしたものは少なく、基部接合に比べ分類要素として弱い。

⑥外面調整 基本的にはハケ目を縦方向に施すが、一部の埴輪にケズリを施すもの、斜め方向のハケ目を組み合わせるものなどがある。また、全般に外面の調整が難なものがあり、これなどは工人の性格が癖となって表れたものと考えられ、同一工人の同定の一つの目安となりうる。

⑦内面調整 基本的には斜めユビナデを施すが、一部のものに難なもの、工具を使ったと思われる直線的なものが見られる。方向も、縦に近いものが存在する。

⑧口縁部 口縁まで残存するものは少なく、主体の要素にはなり得ない。また、大きな技法も看取されなかつた。

⑨色調 5色に分類が可能である。しかし、これらは焼成の際の火の回り方に左右される可能性が高く、補助的な要素にしかなり得ない。

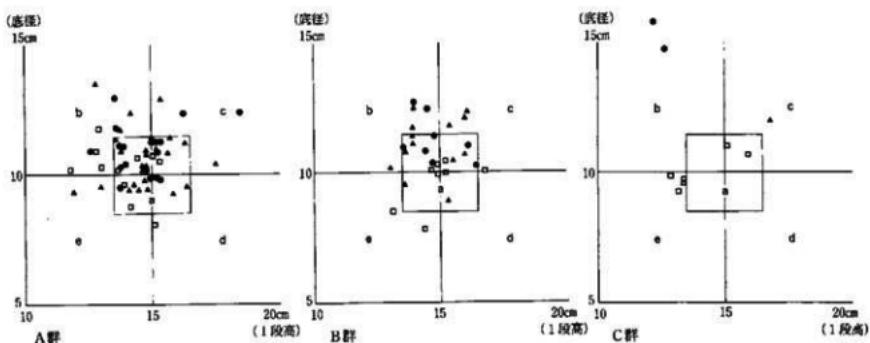
⑩胎土 肉眼観察によって確認することのできた含有砂粒の多少を基準に分類が可能と思われる。しかし、破損した断面からの部分的観察のため、あくまで目安にしかならないと考えられる。

以上、10の各要素を考えてみたわけであるが、ハケ目を第1分類要素とし、突帯が第2分類要素、法量、基部接合が第3分類要素、要素⑤～⑩は補完的に取り合わせることで、ある程度の精度で工人を特定できるような分類となり得るのではないのだろうか。

第1分類要素 ハケ目の2cm幅中の本数によって3分類し、13本～14本をA群、15本～16本をB群、17本～20本をC群とした。A群が56個体で分類個体全体の60%を占め、B群が29個体で31%、C群が9個体で9%となる。

第2分類要素 A群～C群それぞれに突帯の安定度の高（高～やや高）・中・低（やや低～低）を組み合わせ9つに中分類を行うことができる。

第3分類要素 第3分類要素の中でも法量は、同じ円筒埴輪を目指して作っているため、別工人でも同じ値を取りうる。図115でも明らかなようにほぼ底径10cm、第1段高が15cmという値が埴輪工人に与えられた



第115図 円筒埴輪の底径と1段高

● 高
▲ 中
□ 低

規制と考えることができる。その値に集中が見られるものの、ばらつきもあるためこれらのばらつきを工人差と捉えることも可能であろう。しかし、底径と第1段高のグラフを作成した結果、ほとんどまとまって分布し、確実に工人差と判明するものは少なく、積極的に分類の基準とするのは難しいことがわかった。そのため、まず基部接合によって2分類（「の」、「逆の」）を行い、底径と第1段高の分布域を図のようにa、b、c、d、eに大きく分け、細分することにする。

分類の結果は第27表のとおりである。法量分類まで行うとかなりの数に細分されてしまうが、細分類された一つ一つに工人一人を対応させるのではなく、1人が製作しうる埴輪の個体差として捉えるべきものが多く含まれているはずである。工人差を対応させることができるのは、第1、第2分類要素による9分類である。このことから、やや根拠は薄弱であるが、円筒埴輪製作に9人程度の工人が関わっていた可能性を、ここでは想定しておきたい。

殿部田1号墳との比較（第116図、第28表） 3号墳から出土した埴輪は、殿部田1号墳³⁾と共にした特

第27表 円筒埴輪分類表

大分類	ハケ目	突堤	底部接合	法量	円筒埴輪番号	備考
A	13~14	高	逆の	a	10, 13, 16, 17, 21, 31, 41, 50, 52, 69, 100	
				b	20, 123	
			の	a	18, 88	
				c	19, 77	
		中	逆の	a	1, 15, 29, 52, 53, 58, 73, 76, 102, 110	
				b	3, 35, 129	
				c	57	
				d	68	
			の	e	79	
		低		a	67, 99, 127	
				c	25	
			-	a	33, 34, 54, 56, 105	L
				e	65	
			逆の	a	6, 9, 14, 51, 63	
		B		b	59, 60, 122	
			の	a	24, 39, 75	
			-	b	46	
				d	93	
			逆の	a	103, 125	
		15~16		b	74, 128	
			の	a	5, 48	
			-	a	27, 36	
			逆の	a	2, 44, 98, 131	
				b	106	
		C		c	30	
			の	b	61	R
			-	c	11	
			逆の	a	4, 22, 89	
				b	8	
		17~20		c	108	
			逆の	a	71	
			-	e	47	R
			の	e	83	
			-	a	12, 42, 49, 120	
		高		c	109	
			逆の	b	111	R
			-	b	90	R
			-	c	55	R
			逆の	e	40, 114, 117	
		中		a	66	R
				a	38	L
				e	45	

(- は底部接合不明)

微をもつものが多く、特に、人物Aは、成形・表現方法が同じであり、同一工人の作であることが明白である。つまり、同じ工人集団が2つの古墳築造に伴い、埴輪の製作に関わったことを示す。そこで、ここでは殿部田1号墳と直接比較を行うことにより、時期差の有無と埴輪製作工人集団のあり方について考察を行いたい。

殿部田1号墳は、山武郡芝山町大字殿部田に位置し、本古墳群と直線距離で約9.4km離れている。墳形は前方後円墳であり、規模は推定墳丘長約36m、前方部幅20.9m、後円部径20.6mである。埴輪は形象埴輪、円筒埴輪が出土している。主体部は検出されておらず、副葬品は出土していない。埴輪の特徴などから現在のところ6世紀の前半に位置付けられている⁴⁾。

埴輪列は墳丘中段と上段から検出されている。トレンチによる確認で埴輪列は全周せずに墳丘西側のみの片側二重配列であることが判明している。上段は円筒埴輪のみの配置と考えられているが、小川崎台遺跡と同様に原位置の出土がないため不明である。中段は前方部からくびれ部にかけて形象埴輪列が配置され、その後に円筒埴輪列が後円部途中まで続いている。形象埴輪列の中にも円筒埴輪が2本配置されている。形象埴輪は、殿部田1号墳では少なくとも13体を確認することができる。小川崎台3号墳出土のものと比べ、一目で同一工人の手によるものと考えられるものが挂甲武人（小川崎台3号墳の人物A）と琴弾き（小川崎台3号墳の人物E）である。細部がやや異なるが、ほぼ同じ作りを示すのが、家形埴輪である。

工人の同一という点だけでなく、形象埴輪の組成（挂甲武人、琴弾き、帽子をかぶる人物、壺を頭に乗せる人物、家形埴輪大・小、馬形埴輪）がほぼ一致していることは、一定地域内の埴輪祭式と埴輪工人集団との関連を知る上で極めて興味深い。

一方、円筒埴輪については、小川崎台遺跡が2条3段を主体とするのに対し、殿部田1号墳は3条4段を基調とし、2条3段の円筒埴輪はわずか1本しか検出されていない。それぞれ小川崎台3号墳との計測値の比較（第28表）からも明らかなように、ほとんどの部位の測定値はかけ離れた値を示している。小川崎台3号墳の円筒埴輪に比べ、全体的に器高が高いため、それに伴うようにそれぞれの数値が上回り、実際よりも違いが大きくなっていることも考えられる。そこで、それぞれの形態の差異を考えてみることにする。殿部田1号墳の3条4段の特徴は、突堤間の比率がほぼ1:1:1:1を基本とするものが多い。また、3段までは比較的直立的に立ち上がり、最上段で大きく開く形態をとるものが多く、細身である。反対に小川崎台3号墳の3条4段の円筒埴輪は、各突堤間の幅が一定しておらず、基部からやや開きながら口縁部に至っている。これらの諸特徴を比較する限り、円筒埴輪に関しては同一工人の所作であると認定することは困難と言わざるを得ない⁵⁾。

殿部田1号墳ではハケ目の種類として2種想定され、円筒埴輪製作に関わった工人の少なさが考えられ

第28表 殿部田1号墳・小川崎台3号墳出土円筒埴輪計測表

	種類	器高	口径	底部	基厚	透孔位置		突堤位置			備考
						2段	3段	底から1	底から2	底から3	
殿部田1号墳	3条4段(平均)	46.8	29.6	13.5	1.2	15.9	28.2	12.9	24.4	26.1	25個体
	2条3段	(42.0)		14	1.5	18.7	—	12	26.5	—	1個体
小川崎台3号墳	3条4段(平均)	38.7	31.5	12.1	1	13.6	24.4	12.4	21.7	30.4	10個体
	2条3段(平均)	36.4	27.3	10.7	1	16.8	—	14.6	26.1	—	113個体

	殿部田1号墳	小川崎台3号墳
埴丘 (1 800)		
形象埴輪 (1 16)		
円筒埴輪 (1 16)		

第116図 殿部田1号墳と小川崎台3号墳の比較（報文から転載）

ている。逆に、先の検討により、小川崎台3号墳では9人程度の工人の関わりがあったことが想定される。しかし、これらの違いは、円筒埴輪の樹立数の違い（殿部田1号墳推定40本、小川崎台3号墳170本）から派生したものとも考えることができるため、すぐに工人集団の構成員数に結びつけることは危険である。

以上、殿部田1号墳と小川崎台3号墳出土埴輪について比較を行ってきたが、同一の工人を含む工人集団が両古墳の埴輪の製作に関わっていた可能性は高い。円筒埴輪に関しては、樹立数の違いもあり、関わった工人の数が異なるようであり、形態の差も明瞭である。両古墳の埴輪の製作に関わった工人集団の構成と変化などを考える好資料であり、2基の古墳の時期差を物語る資料と言えるかもしれない。個々の埴輪の特徴以外にも形象埴輪の組成やくびれ部に形象埴輪列を有する点など、類似点が存在し、工人集団と両古墳に埋葬された人物の属する集団との関係、ひいては当時の周辺地域の埴輪祭式を復元する上で貴重な資料である。

小結 以上3号墳の出土遺物を分析してきたが、土器では6世紀中葉から後葉、鉄刀では6世紀代、埴輪では6世紀前半との年代を想定することが可能である。土器は、2号主体部の覆土中層からの出土であり、積極的に利用することはできないが、3号墳の築造とそれほどかけ離れたものとは考えられない。したがって、埴輪は既存の年代観を参考にしたが、前半でも中葉に近いものとするのが妥当であると考えられ、3号墳の築造年代もそれと同時期と考えたい。

- 注1 糸原 清 1996 「一般国道464号県単道路改良事業埋蔵文化財調査報告書」 千葉県文化財センター
2 横田 誠 1992 『矢田野エジリ古墳』 石川県小松市教育委員会
3 犬木 努 1995 「下總型埴輪基礎考—埴輪同品論序説—」 『埴輪研究会誌』 第1号
4 渡名徳永 1980 『上総殿部田古墳 宝馬古墳』 芝山はにわ博物館
5 萩原恭一 1994 「房総における埴輪の変遷と分布」 『研究紀要15』 千葉県文化財センター
6 突帯の調整には共通するものが見られるため断言はできない。

4 4号墳・S I 01

4号墳は、前述したとおり周溝のみの調査であるため発掘によって明らかになったことは少ない。遺構に確実に伴う遺物も出土しておらず年代を確定することはできなかった。

発掘前の埴丘測量の等高線を見ると3号墳と対称に前方部をもつ同規模の前方後円墳の可能性が強い。覆土からは埴輪片が出土したが、3号墳周溝内の出土状況に比べ極めて少量であるため、3号墳からの流れ込みであると考えられる。

今回の調査区で竪穴住居はS I 01の検出のみにとどまった。台地先端に孤立的に位置し、遺物がほとんど出土することがなく、柱穴も確認できなかったため一般的な住居ではない可能性が高い。各時代を通して言えることでもあるが、この台地上では集落は營まれず、古墳時代にはほとんど墓域としてのみ機能していたと考えられる。この古墳群を築造した集団の居住域は、台地の付け根の平坦部分であろう。その平坦部の一部である里守・向畠遺跡では、今回の道路建設に伴う工事用道路敷設のための事前調査を行った際に古墳時代土師器が出土している。墓域に対応する集落の有機的な関係をつかむ上で今後の周辺の調査に期待したい。

第5節 中・近世

調査区南側斜面を中心に中世の所産と考えられる遺構群を検出することができた。台地成形による平場やそこにおさまる掘立柱建物跡や多くのピット群、周囲には土壘状の高まり、直線的にのびる溝状遺構があることから中世城の一部であったとする想定も可能である。遺物も比較的狭い範囲の遺構群の中からではあるが、貿易陶磁器（青磁・白磁）、輸入銭貨（北宋錢）など貴重な資料が出土した。

これら出土陶磁器及び輸入銭貨の年代観から12世紀から14世紀中葉ころを中心とした時期に南側斜面の遺構群が機能していたと考えることができる。

また、遺構には伴わないが、近世と考えられる遺物（寛永通宝、砥石など）がわずかながら出土していることから、近世に至ってもこの地に人の出入りがあったことが分かる。

写 真 図 版



周辺航空写真(1/10,000)

図版2



遺跡遠景
東から



調査区全景
北から



調査区北地区
南から



調査区南地区
北から



台地整形部分
北から



台地整形部分
南から



石器集中3
東から



石器集中4：左
南から
石器集中2：右
南から



石器集中1
東から



1号墳
南から



1号墳
東西セクション



1号墳 旧表土面
遺物出土状況
北西から



1号墳 主体部
南西から



1号墳 主体部
南東から



1号墳 主体部：左
掘り方 南東から
2号墳墳丘外土坑：右
西から



2号墳
南北セクション



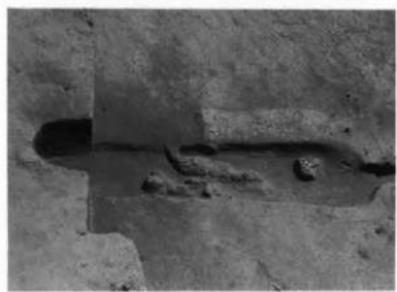
2号墳 旧表土面
炭化物出土状況
北から



2号墳
1号主体部
北から：左
アップ：右



2号墳
2号主体部
西から：左
アップ：右





3号墳 全景
北東から



3号墳 全景
手前 前方部



3号墳 セクション
手前 前方部



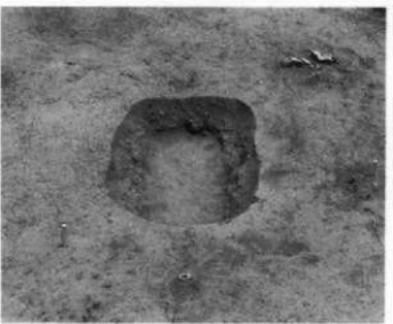
3号墳 後円部：左
東から
くびれ部：右
南西から



3号墳
埴輪出土状況
西から

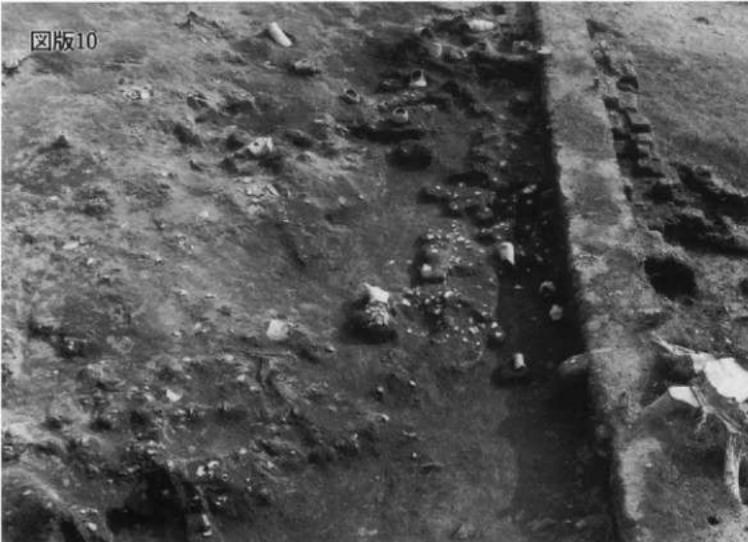


3号墳 1号主体部
南から：左
アップ；右



3号墳
2号主体部：左
北西から
3号主体部：右
西から





3号墳
埴輪出土状況
くびれ部 北から



3号墳 くびれ部：左
南から
馬形埴輪出土状況：右
北東から



3号墳
人物埴輪出土状況
南から：左
東から：右



3号墳
家形埴輪出土状況
南東から：左
旧表土面
焼土・炭化材分布状況
北東から：右



4号墳
北西から



4号墳
南北セクション



SK01(下)
02(右上)
03(左上)
北東から



S K04 : 左
南東から
S K05 : 右
南東から



S K06 : 左
東から
S K07 : 右
東から



S K08 : 左
西から
S K09 : 右
西から



S K10 : 左
南から
S K11 : 右
南東から



S K12 : 左
東から
S K13 : 右
西から

S K15 : 左
西から



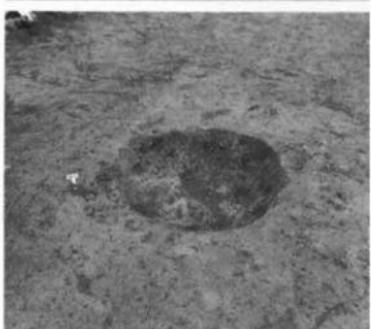
S K16 : 右
南から



S K17 : 左
西から



S K18 : 右
南から



S K19 : 右
SK20 : 左
東から



S K21 : 左
南東から



S K22 : 右
東から





S I 01 : 左

南西から

S D 01 : 右

南東から

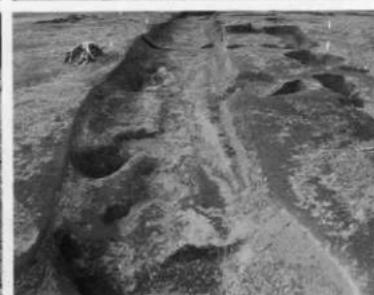


S D 02 (右) 03 (左) : 左

南から

S D 02 (左) 03 (右) : 右

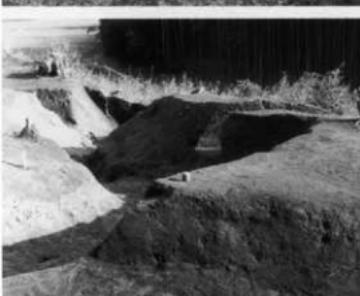
北から



S D 04

北西から : 左

南東から : 右



S D 05

北西から : 左

南東から : 右

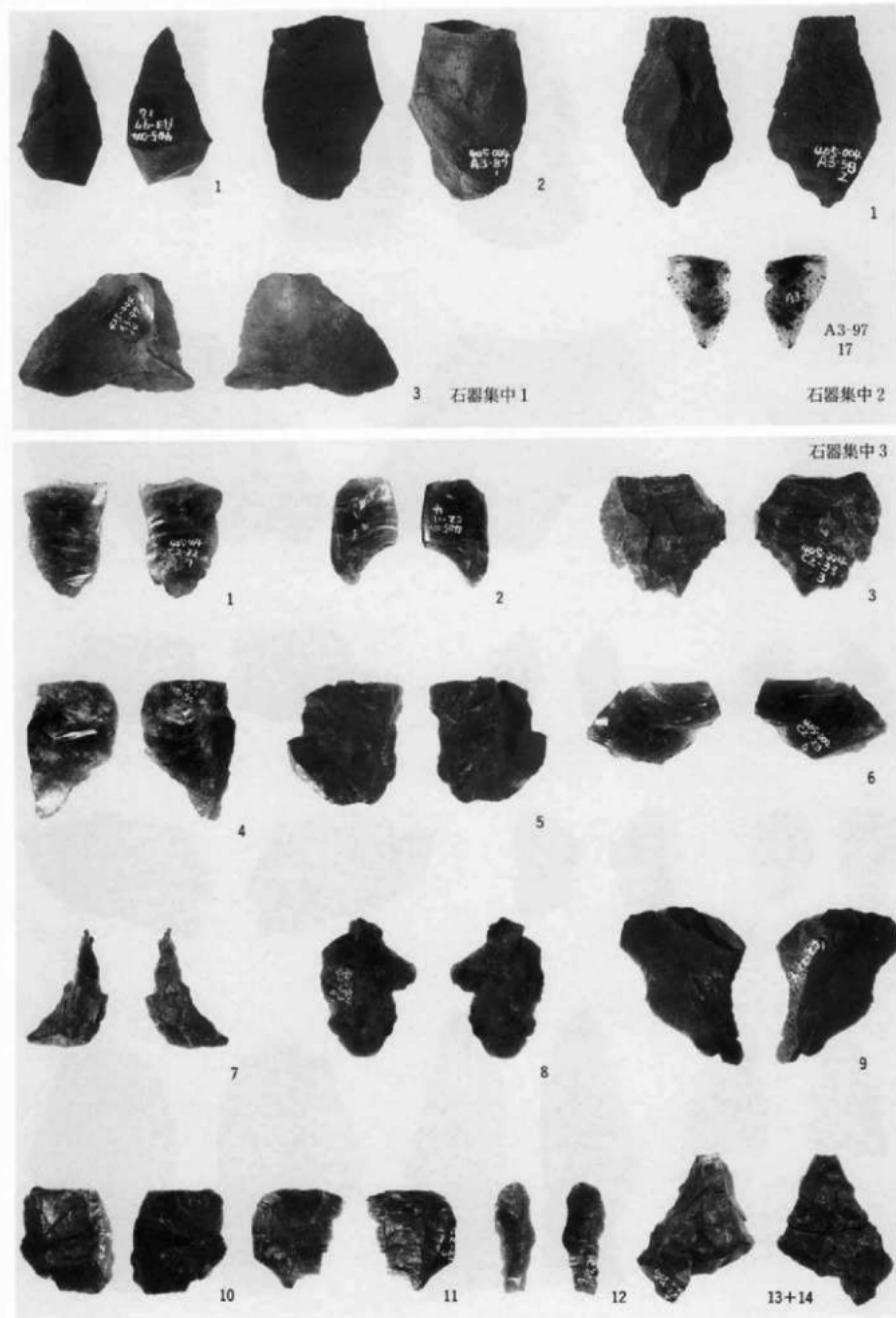


S D 06 : 左

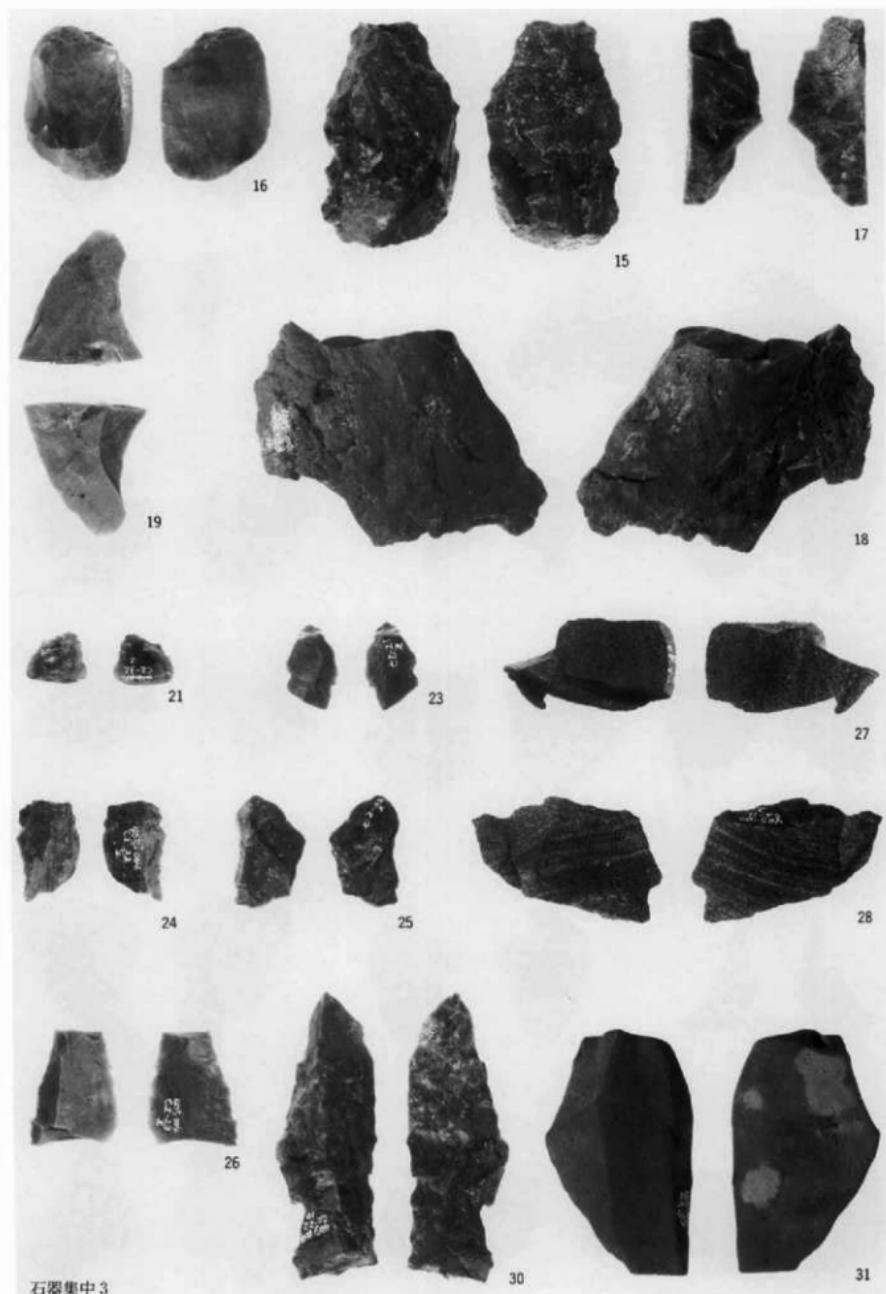
北西から

S D 07 : 右

東から

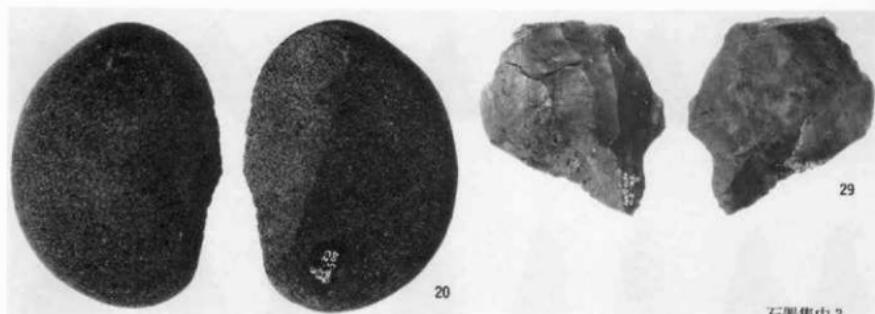


旧石器（1）

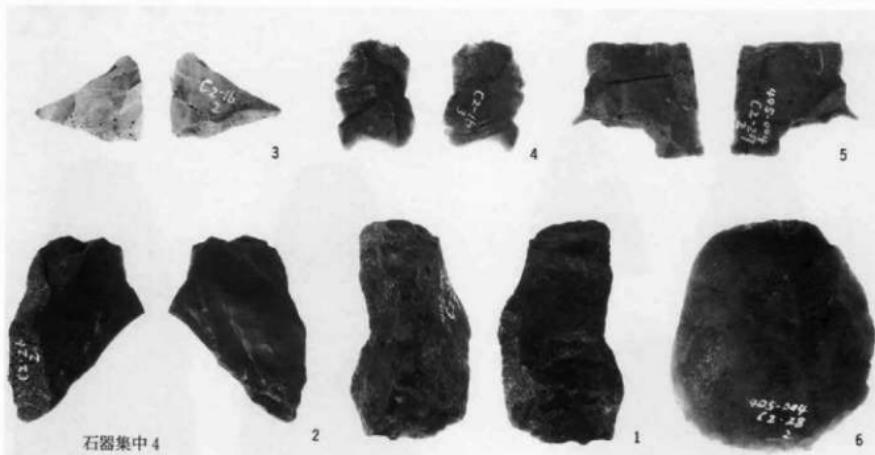


石器集中 3

旧石器 (2)



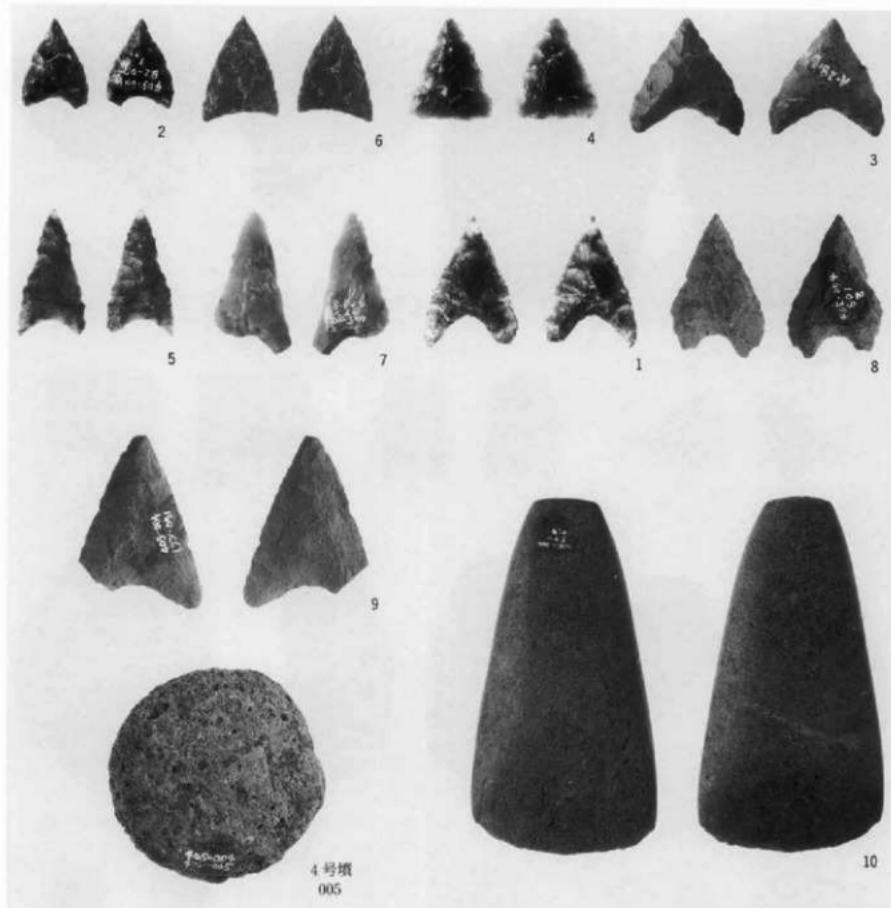
石器集中 3



石器集中地点外



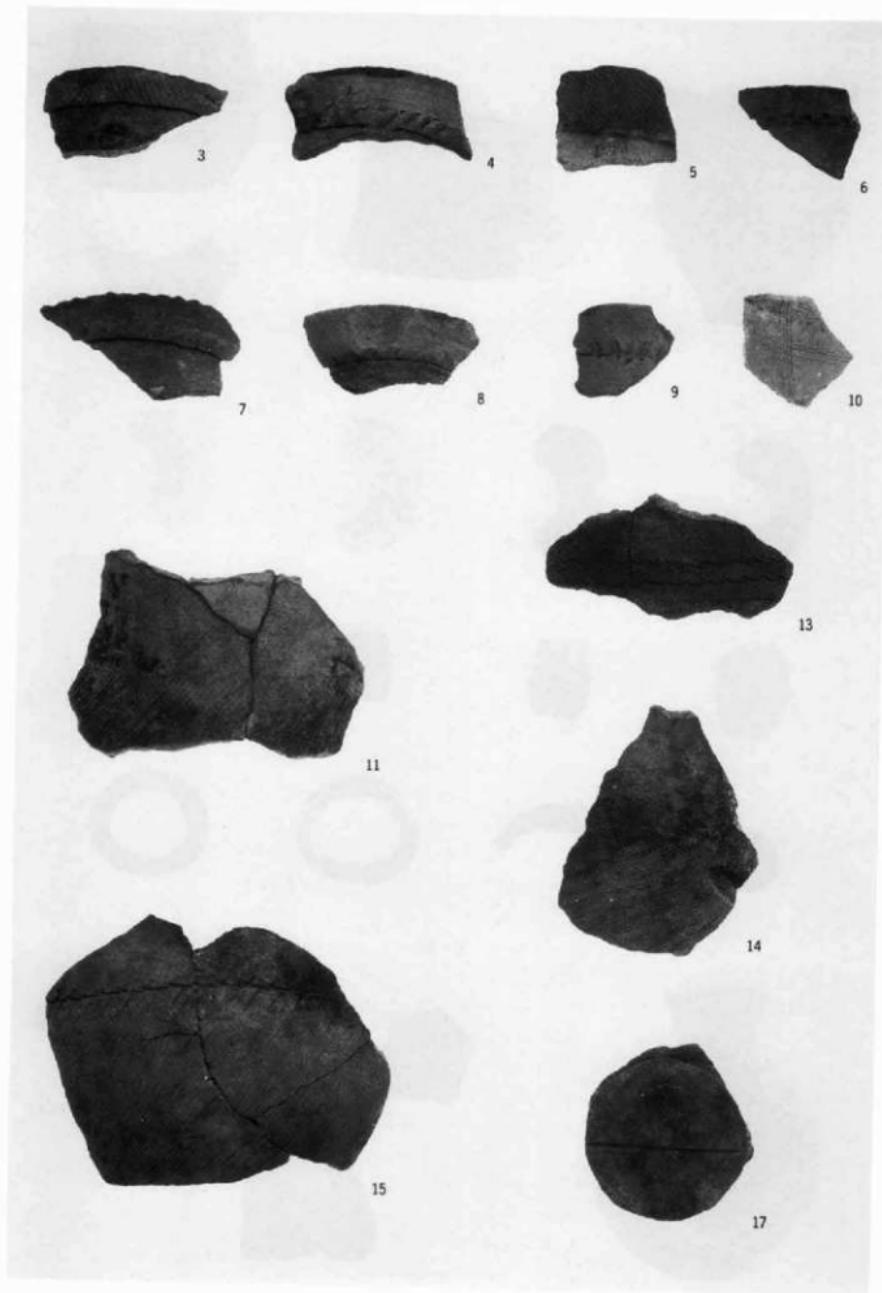
旧石器（3）



縄文石器



縄文土器



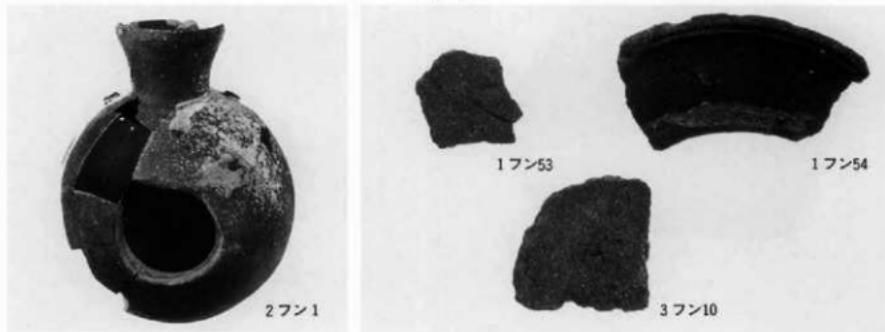
弥生土器（1）



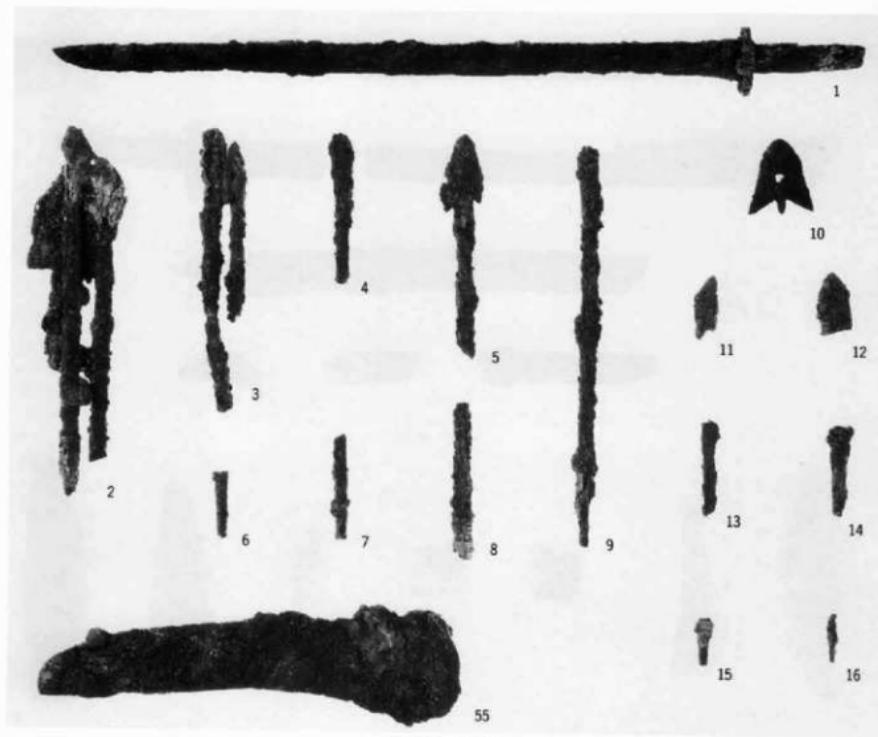
弥生土器 (2)



玉類



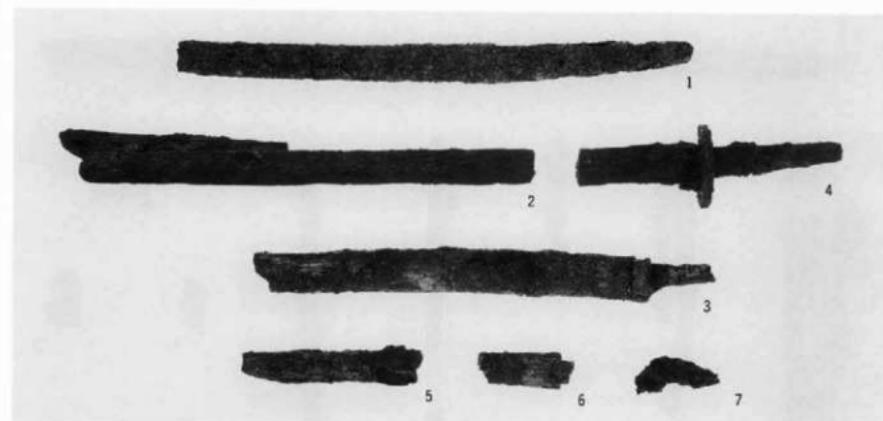
須恵器



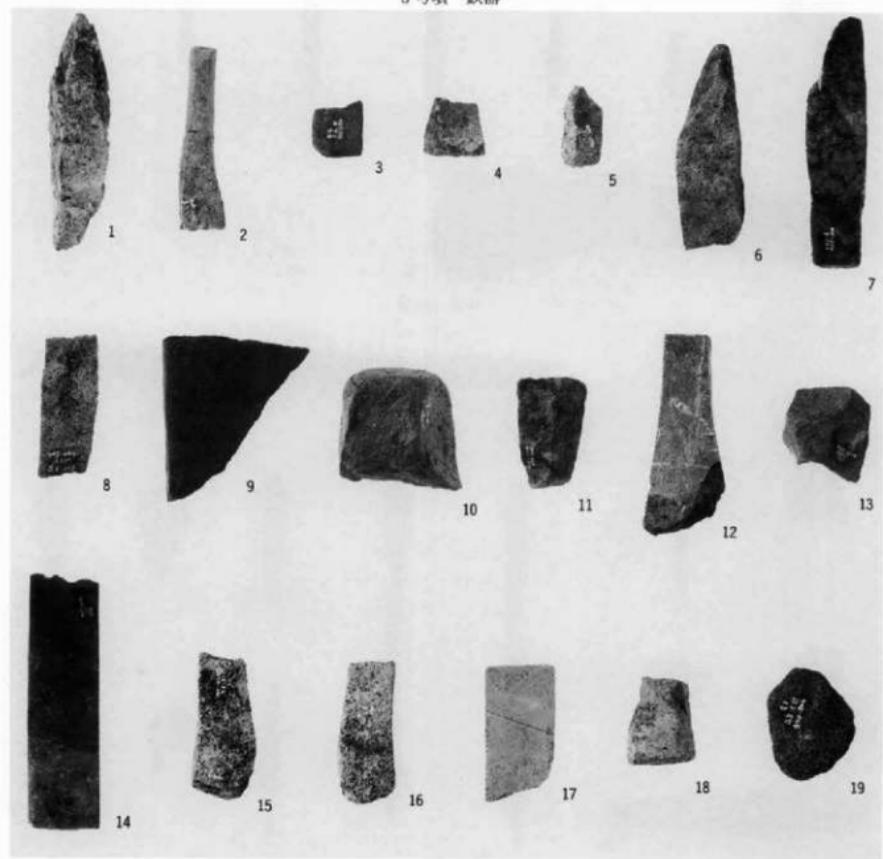
1号墳 鉄器



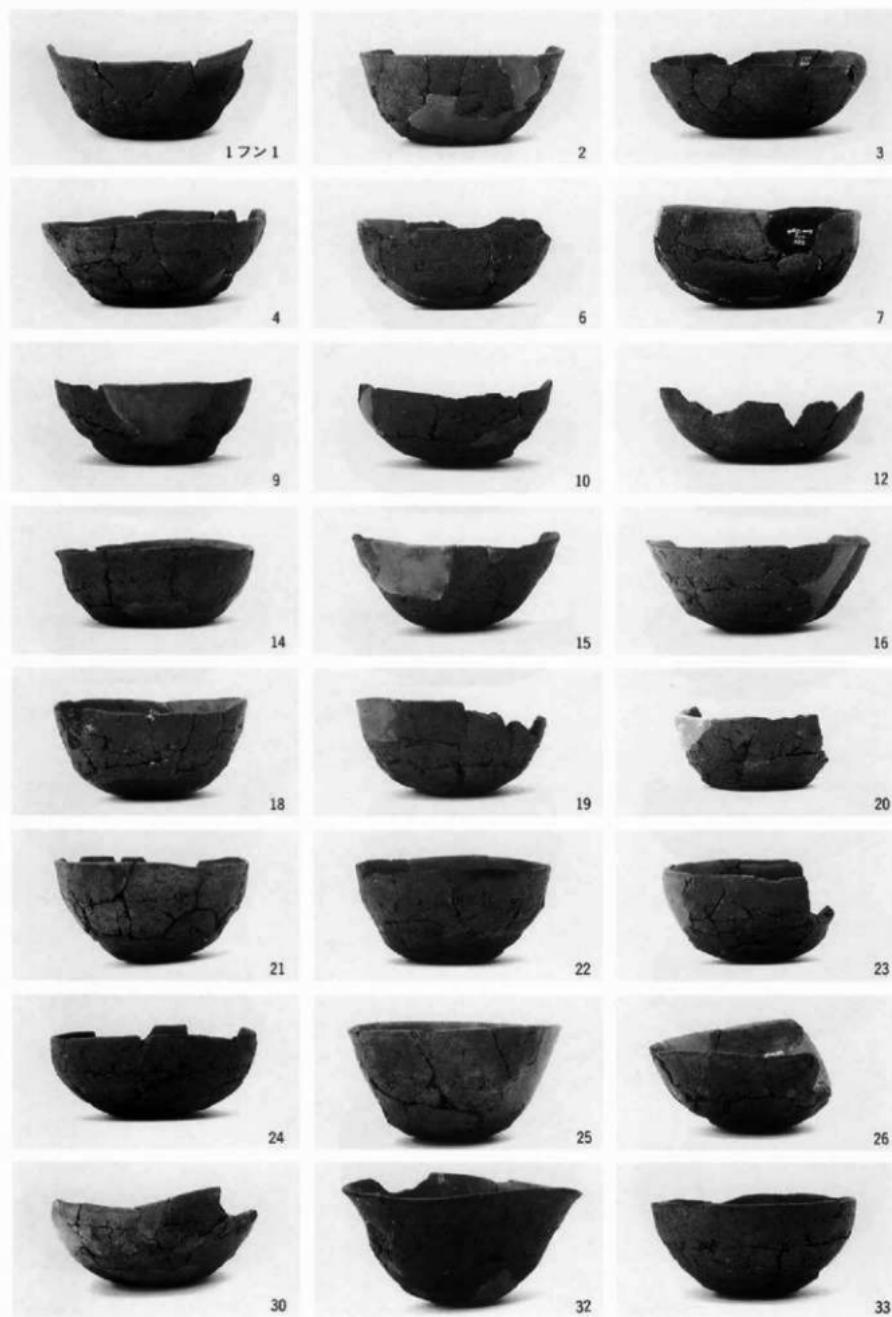
2号墳 鉄器



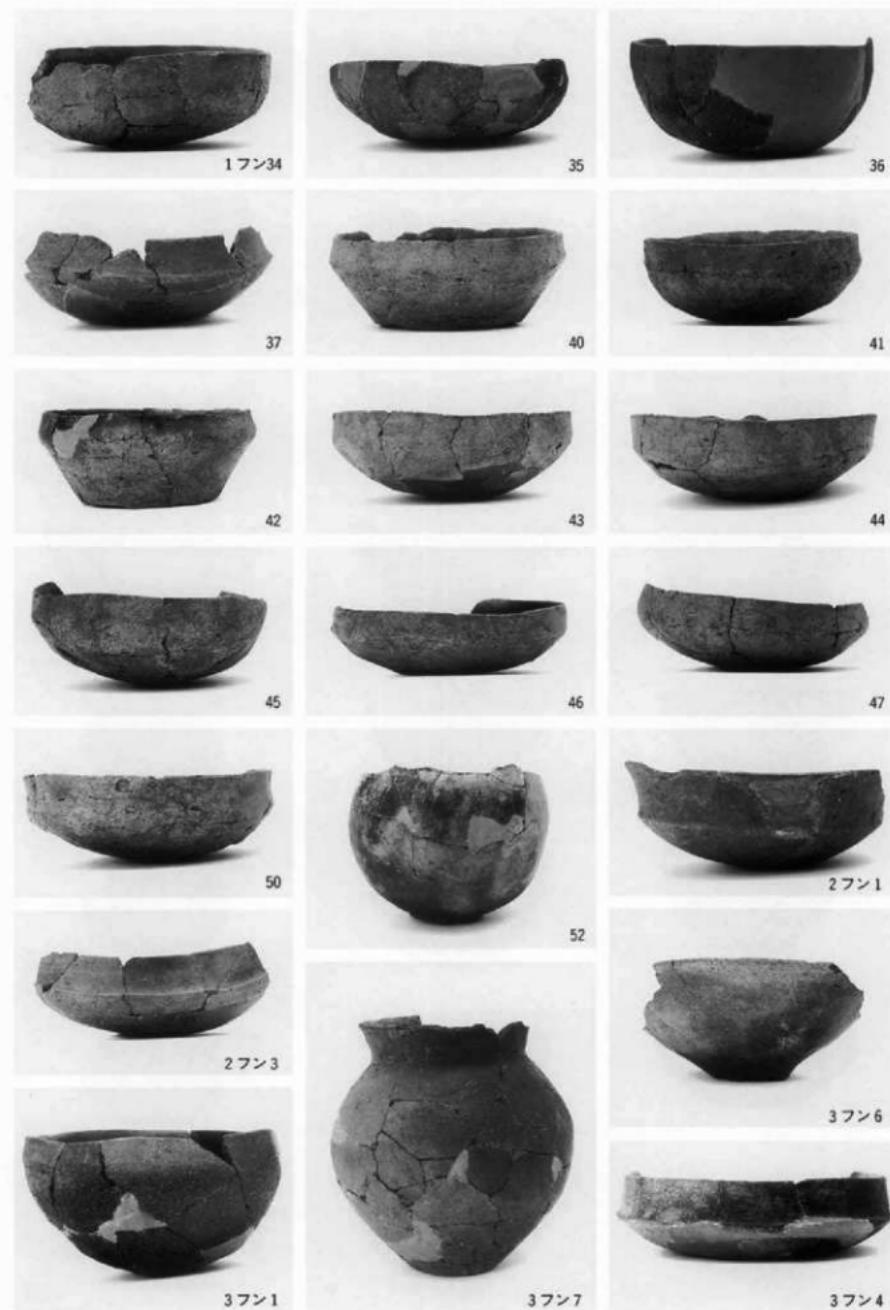
3号墳 鉄器



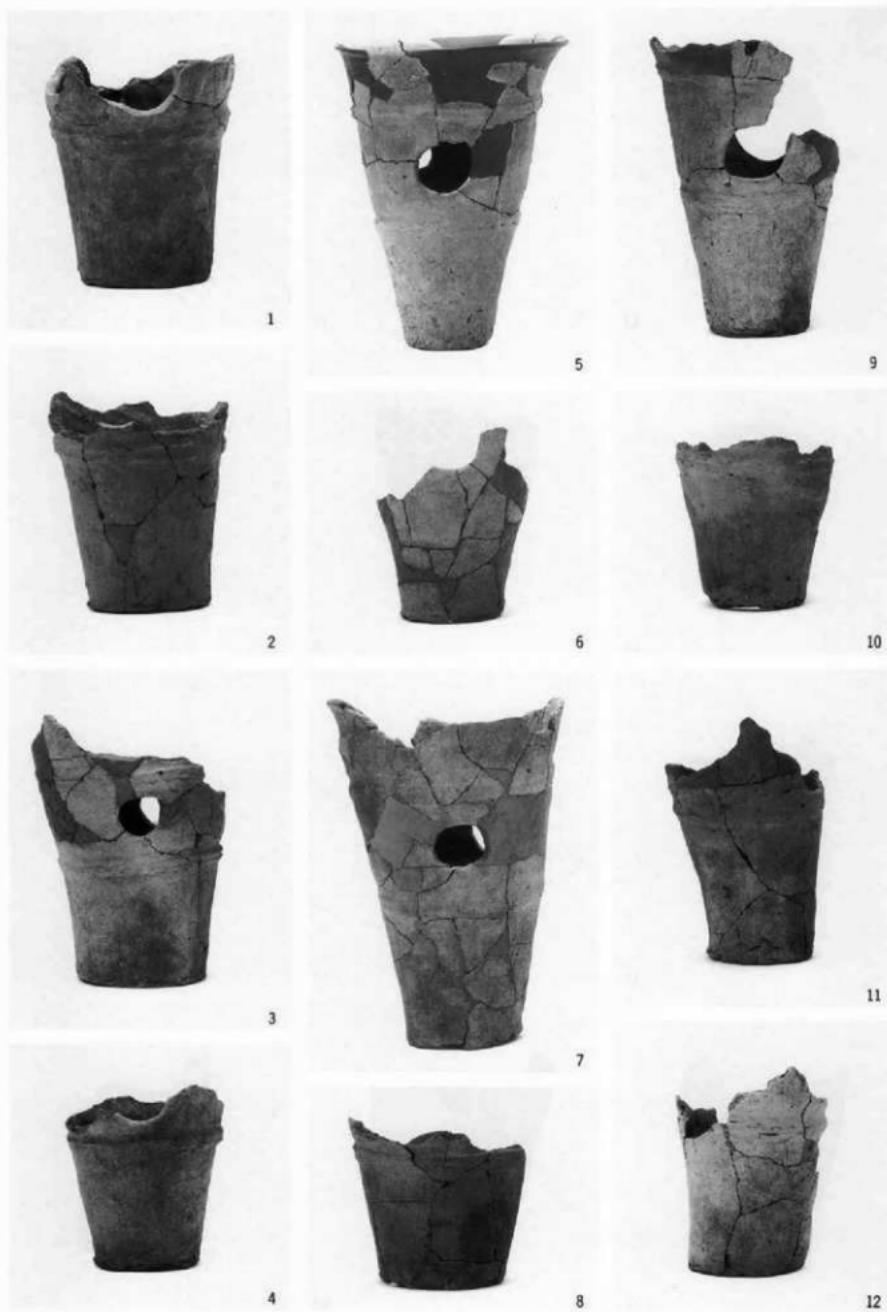
石製品



土師器（1）



土器 (2)



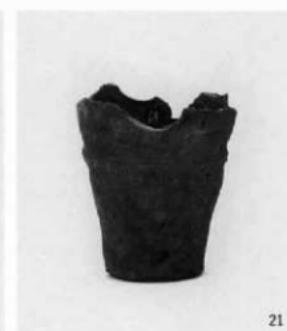
円筒埴輪（1）



13



17



21



14



18



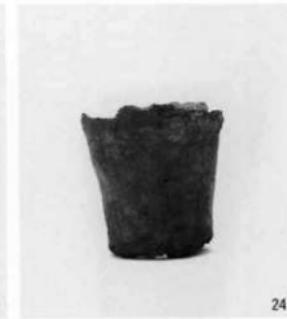
22



15



19



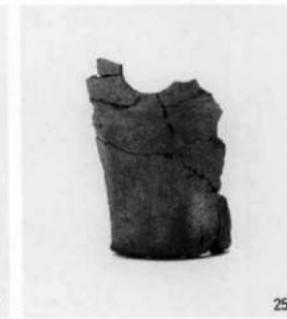
24



16



20



25

円筒埴輪（2）



26



30



36



27



31



37



29



34



33



35



37

円筒埴輪（3）



円筒埴輪 (4)



49



53



56



50



54



58



51



55



59



52

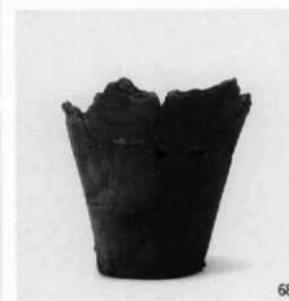
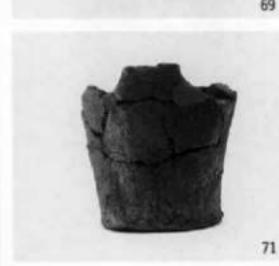


57

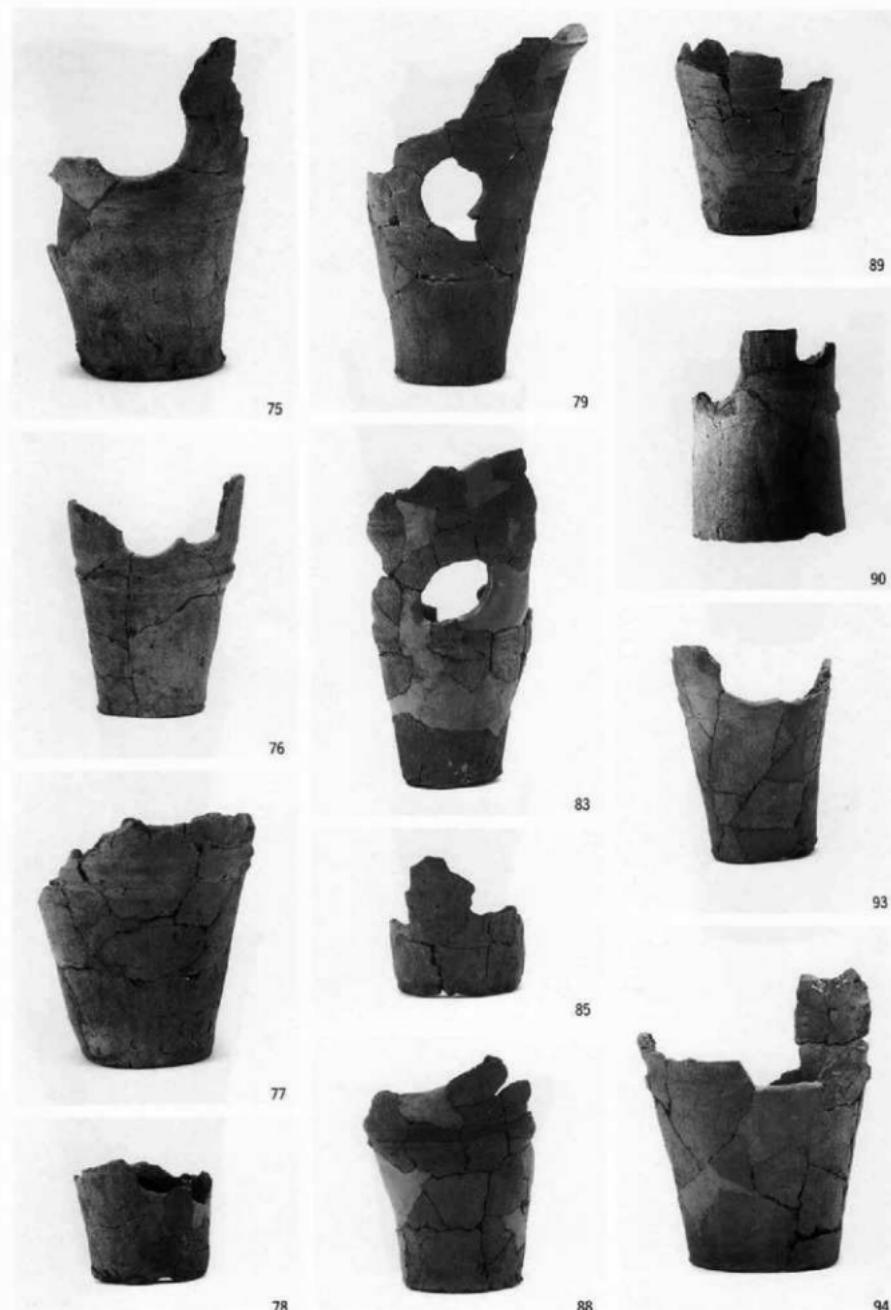


60

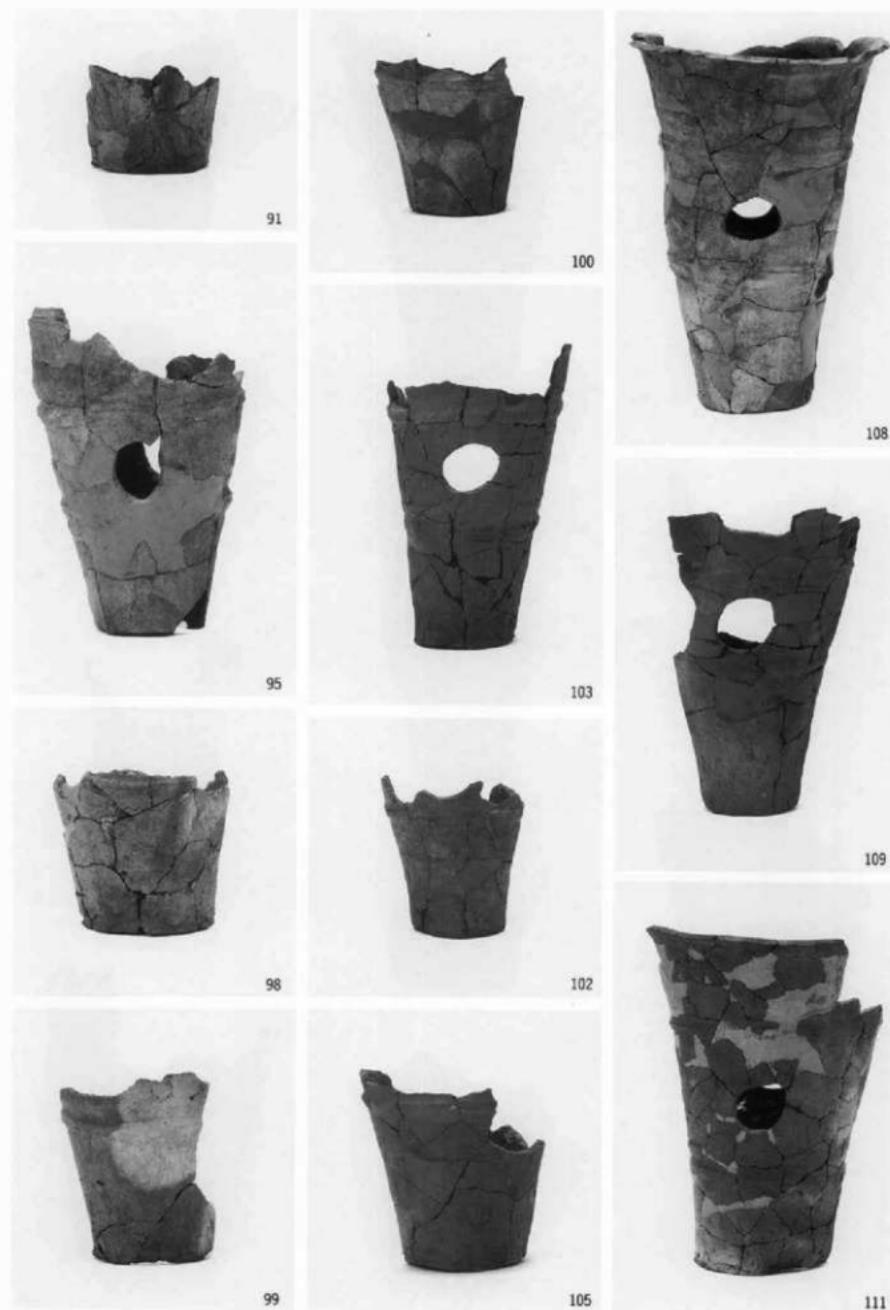
円筒埴輪（5）



円筒埴輪（6）



円筒埴輪（7）



円筒埴輪 (8)



114



122



127



117



123



128



119



125



129



119



126



131



138



146



142



朝4



143



朝5



145

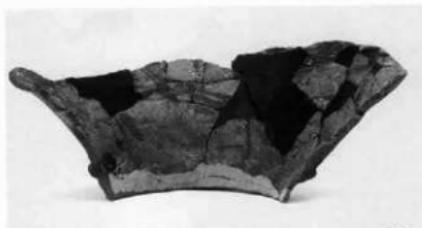


朝17

円筒埴輪 (10) • 朝顔形埴輪 (1)



朝1



朝2



朝2



朝16



朝6



朝7



朝16

朝顔形埴輪（2）



ヘラ記号 17



ヘラ記号 47



ヘラ記号 155



外面ケズリ 16



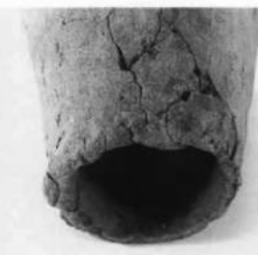
底外面ケズリ 11



底部圧痕 78



底内面ケズリ 8



底部つまみ 38



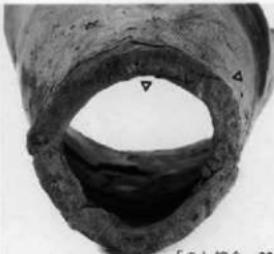
底部つまみ 56



底部 90



「逆の」接合 29



「の」接合 30

円筒埴輪各部分

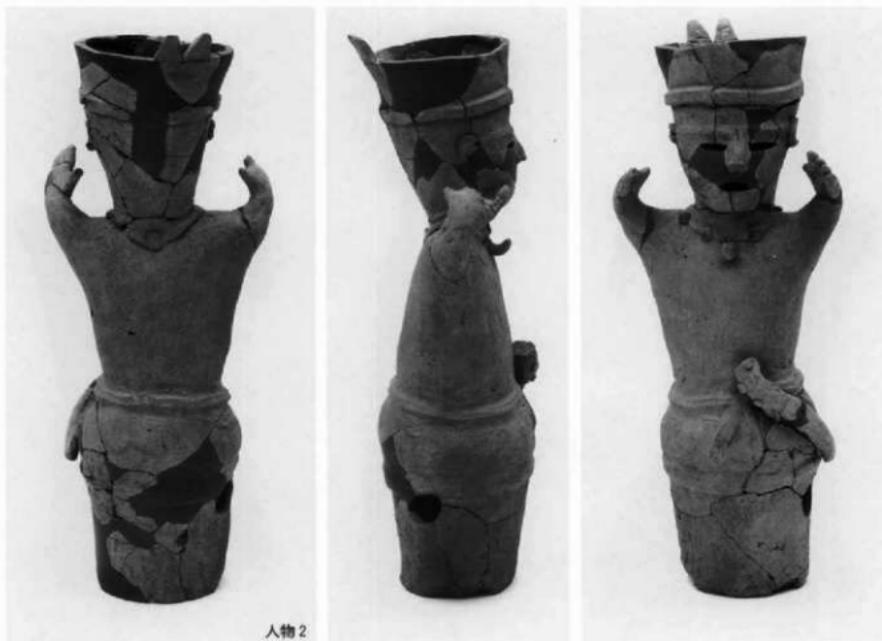


人物1



人物5

人物埴輪 (1)



人物2



人物3

人物埴輪（2）



人物9



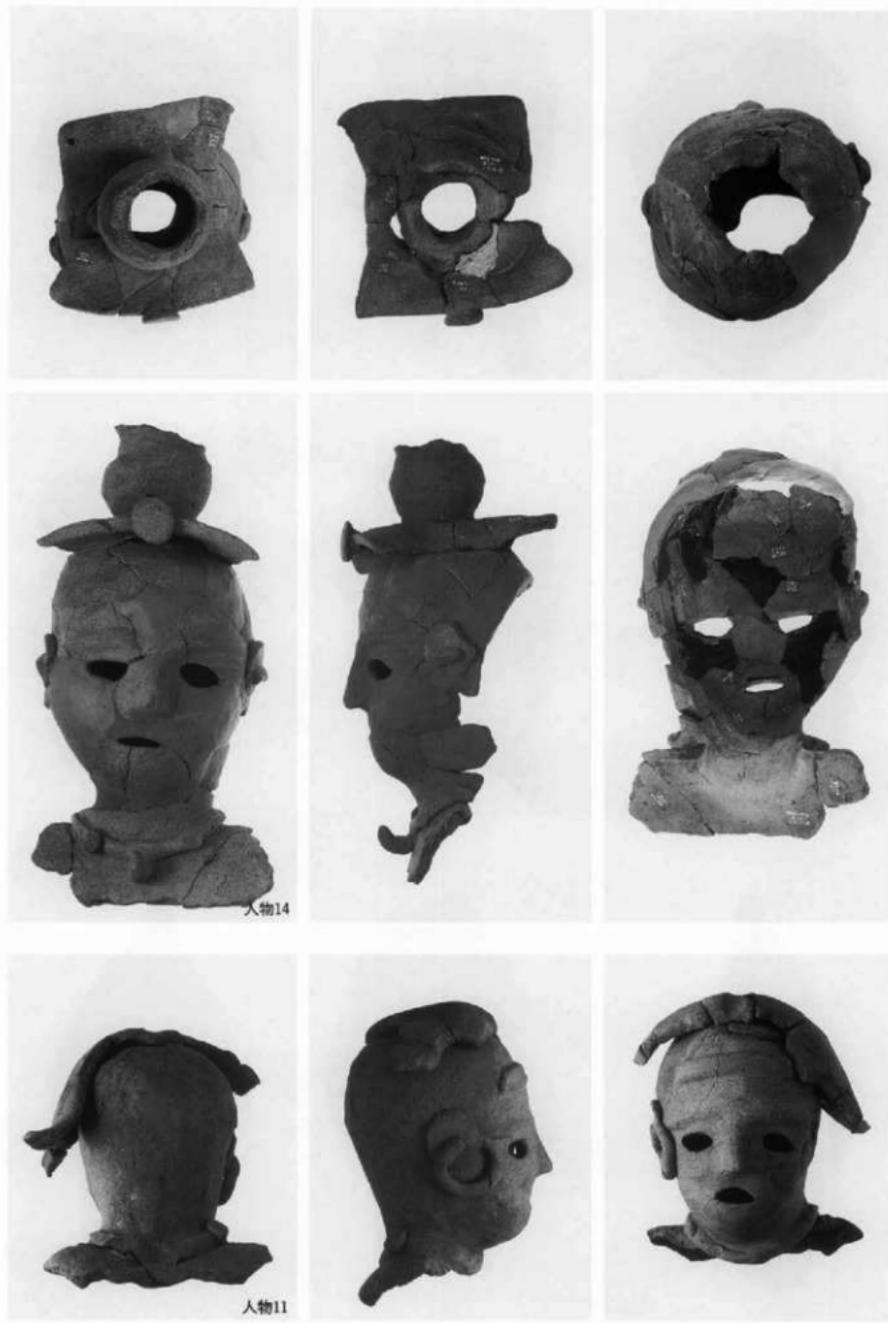
人物12



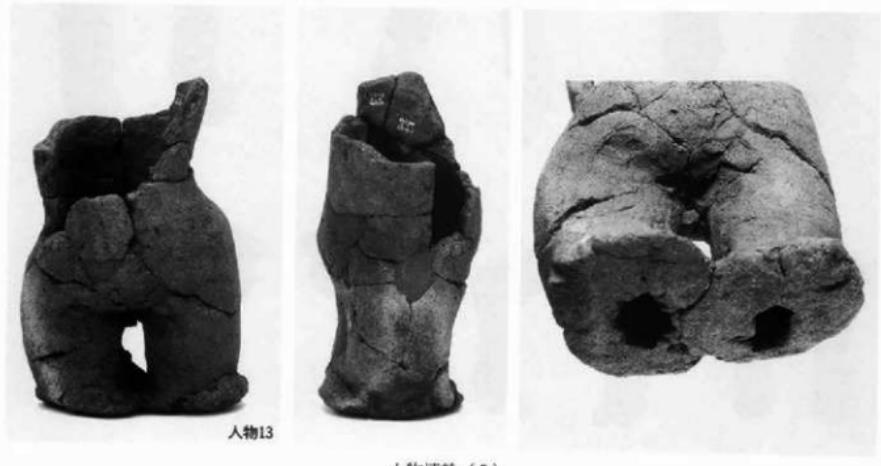
人物10

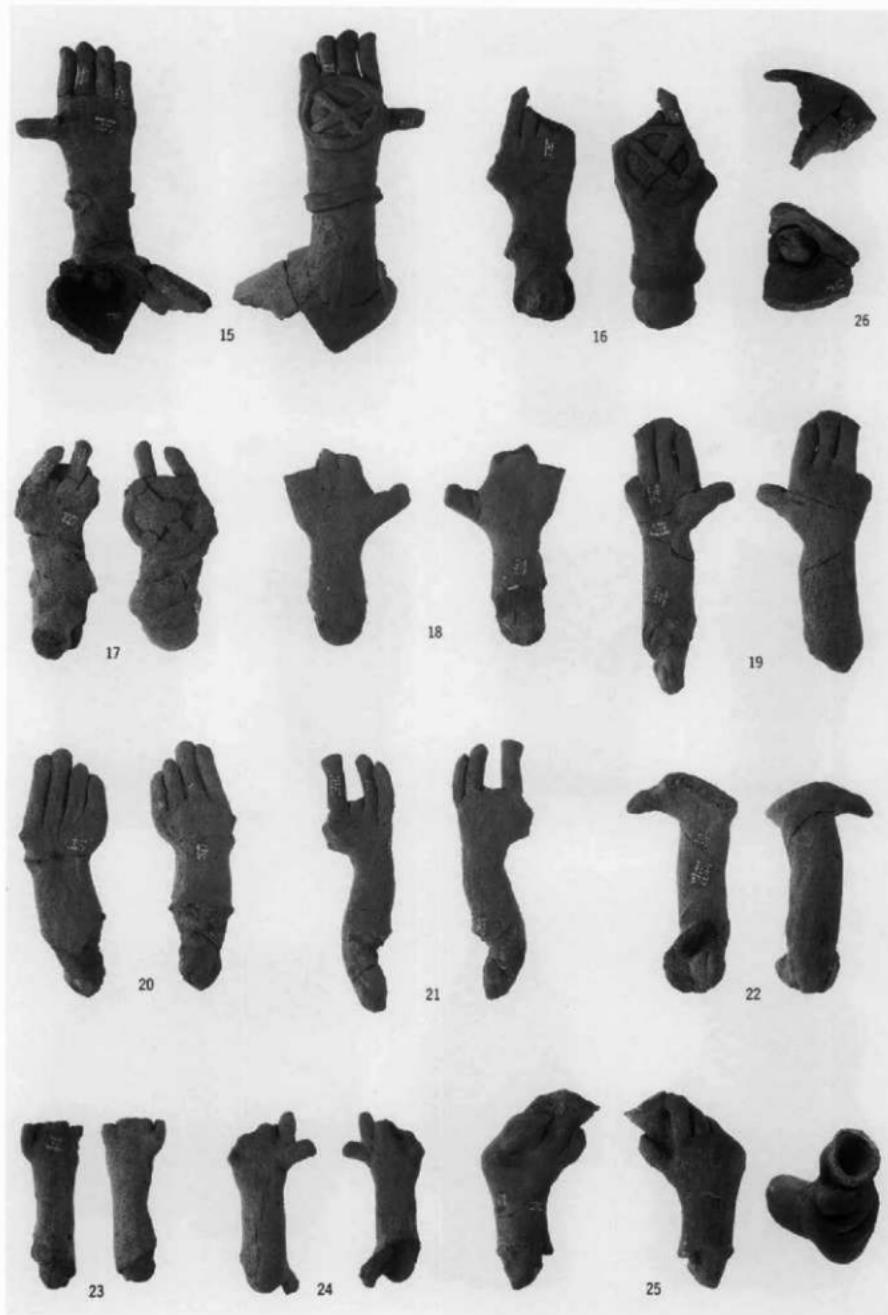


人物埴輪(3)



人物埴輪（4）





人物埴輪破片（1）



10 内面



14 内面



27



29



28



30



31



32



33



34



35



36

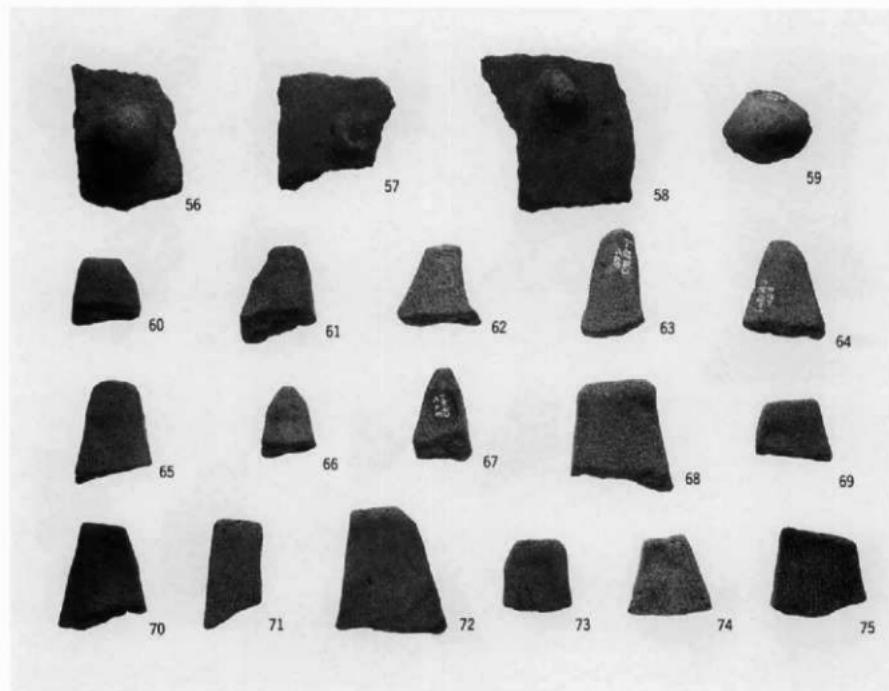
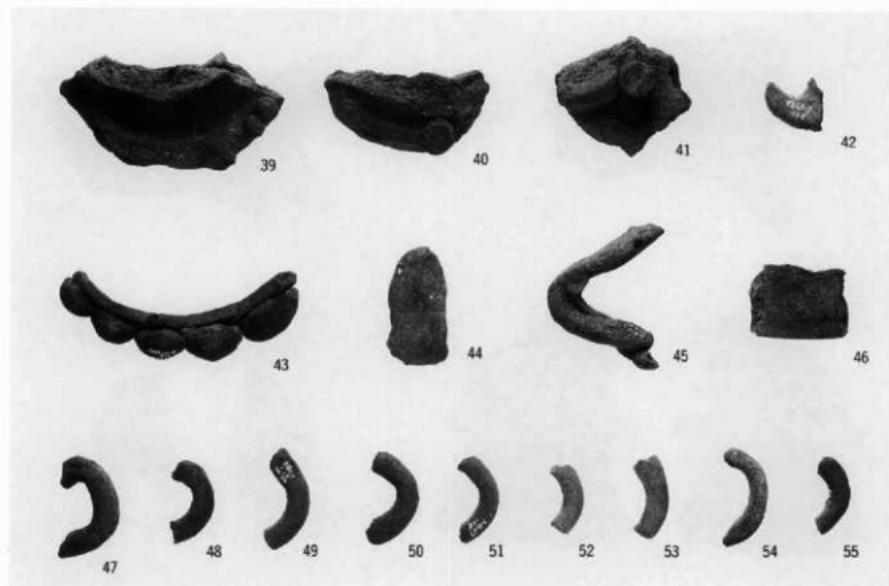


37



38

人物埴輪破片 (2)



人物埴輪破片（3）



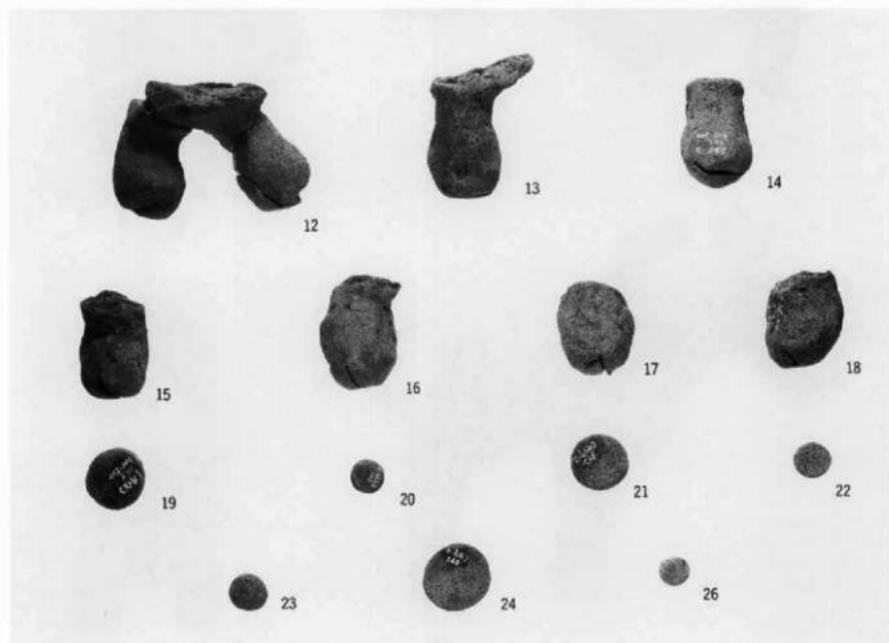
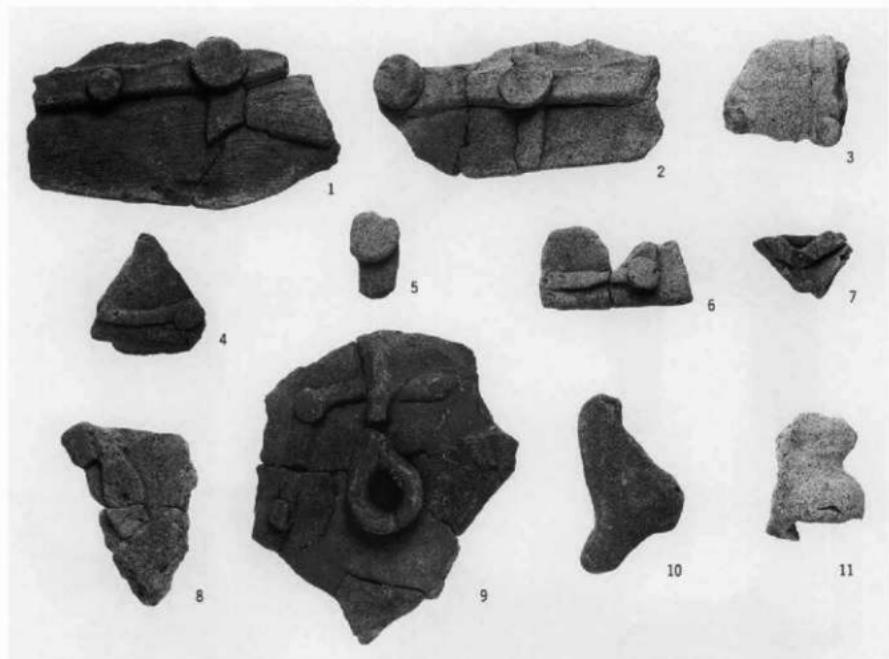
馬形埴輪A



馬形埴輪B

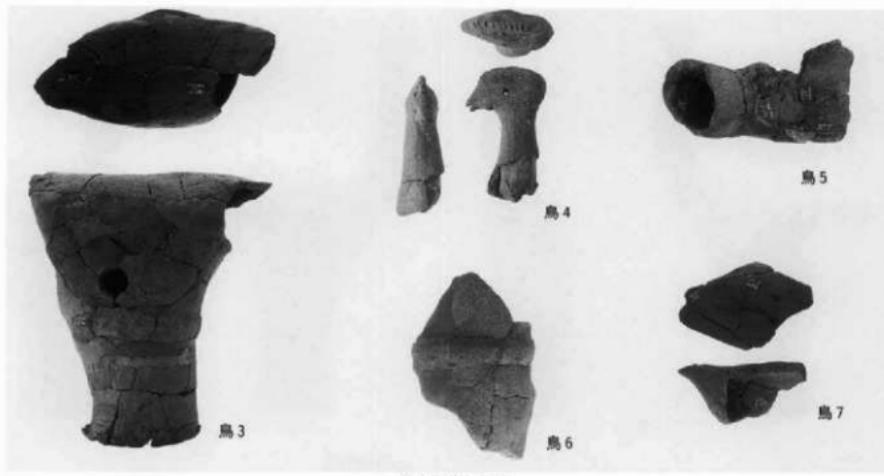


馬形埴輪C

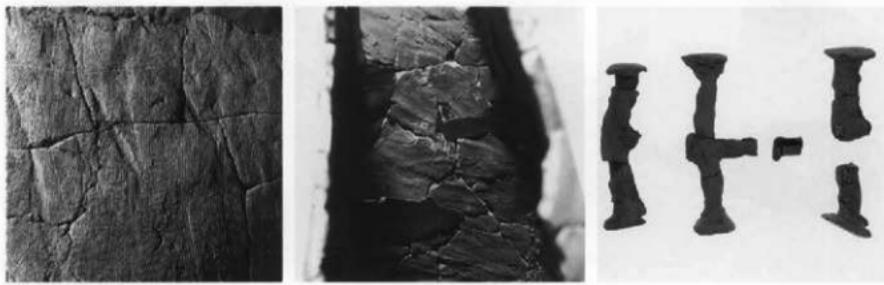


馬形埴輪破片

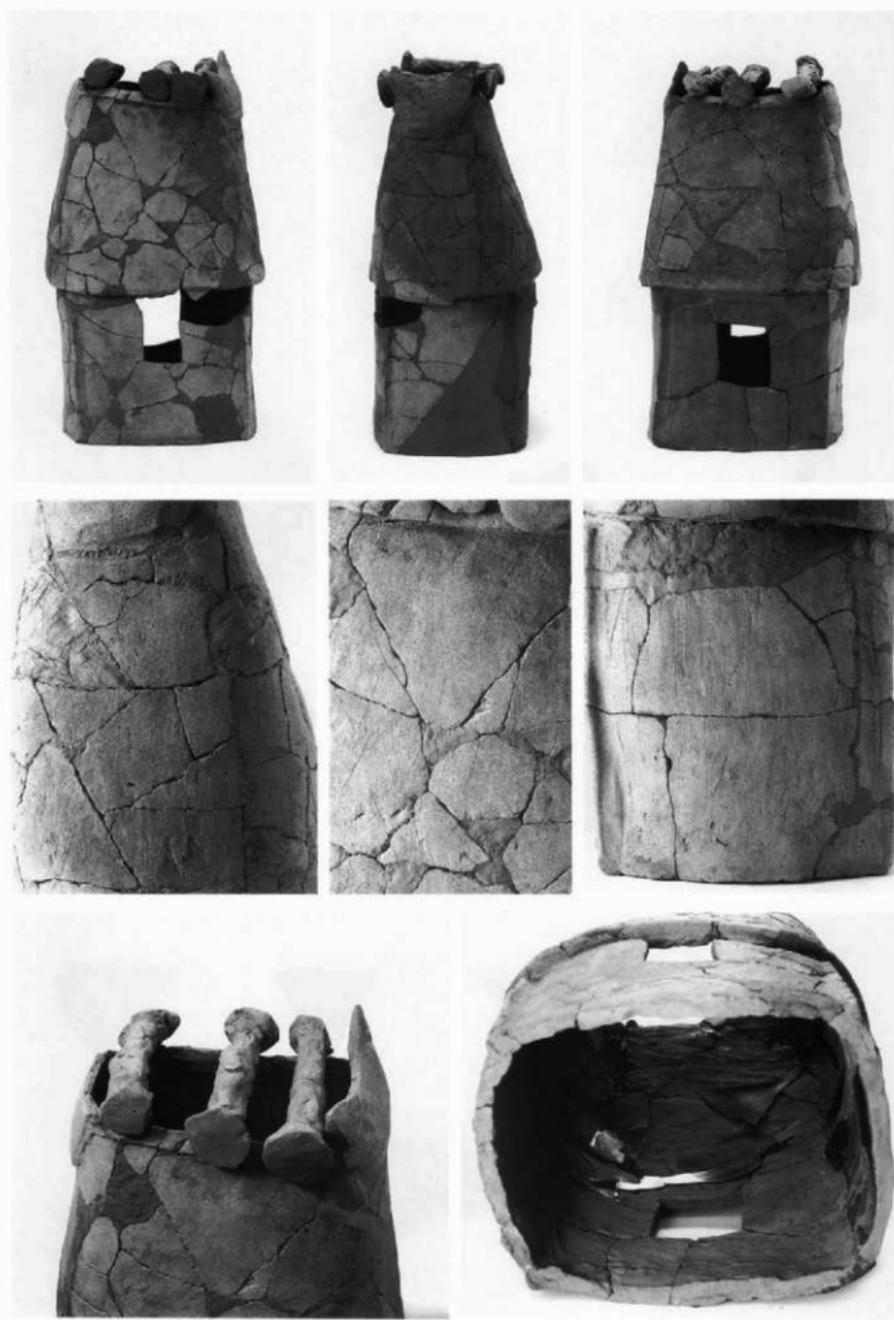




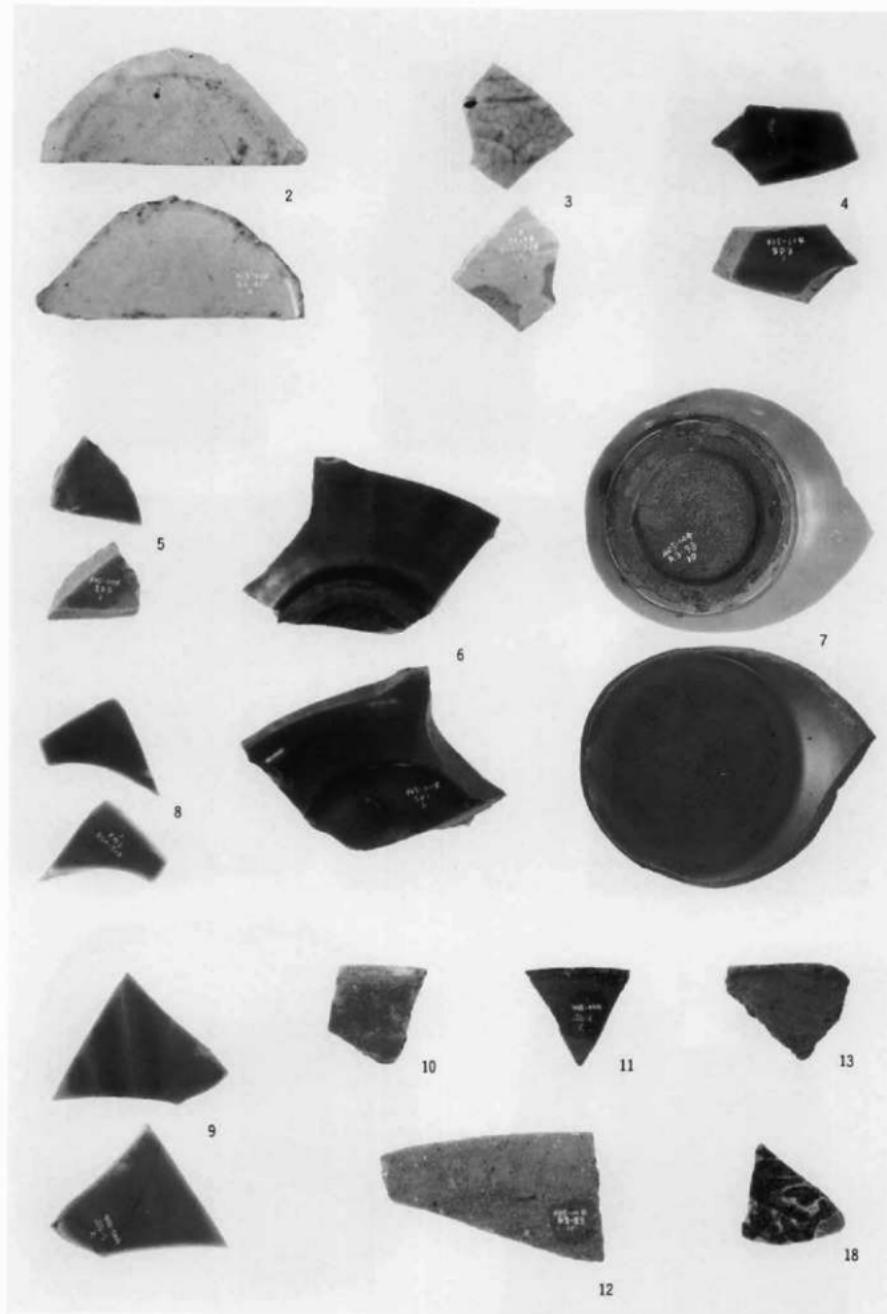
鳥形埴輪（2）



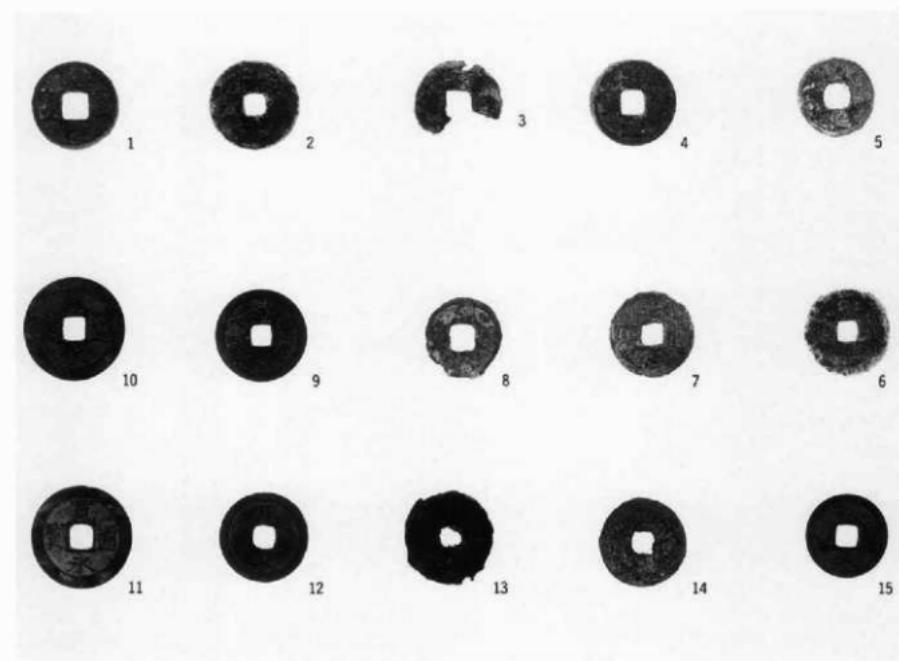
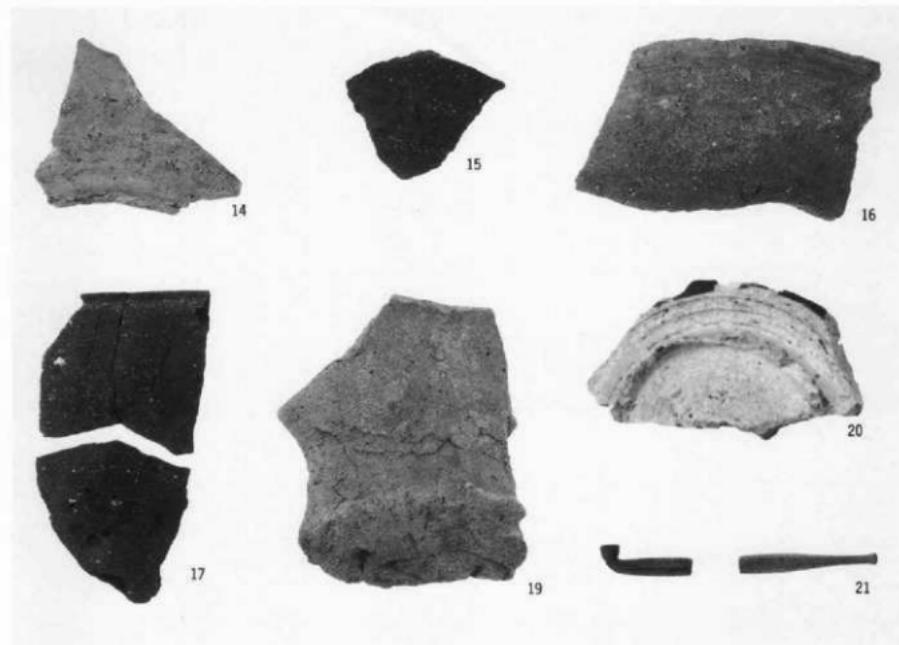
家形埴輪 A



家形埴輪B



中・近世遺物（1）



中・近世遺物（2）

報告書抄録

ふりがな	ちばとうがねどうろにきまいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょ						
書名	千葉東金道路(二期)埋蔵文化財調査報告書3						
副書名	山武町小川崎台遺跡						
卷次	3						
シリーズ名	財団法人千葉県文化財センター調査報告						
シリーズ番号	第362集						
編著者名	黒沢 崇 永塚俊司						
編集機関	財団法人千葉県文化財センター						
所在地	〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡809-2				Tel043-422-8811		
発行年月日	西暦 1999年 3月 31日						

所収遺跡名	所 在 地	コ ー ド	北 緯	東 經	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
	市町村 遺跡番号		° °'	° °"			
小川崎台	千葉県 山武郡山武町 田字小川崎台 851	12405	004 35度 37分 48秒	140度 24分 02秒	1993.07.01～ 1994.03.31	6,500	千葉東金 道路(二 期)の建 設に伴う 事前調査
所収遺跡名	種 別	主な時代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項		
小川崎台	集 落 古 墳	旧石器時代 縄文時代 弥生時代 古墳時代 中・近世	石器集中地点 陷穴 前方後円墳 円墳 住居跡 台地整形部 掘立柱建物跡 土坑 溝 土壙	4 地点 9 基 1 基 3 基 1 軒 1 か所 1 棟 13基 7 条 2 条	ナイフ形石器・尖頭器・楔形石器 縄文時代後期土器・石鐵 弥生時代後期土器 円筒埴輪・形象埴輪・須恵器 土師器・玉・鉄器 陶磁器・鉄製品・古錢・砾石		埴輪列が良好に検出された

千葉県文化財センター調査報告第362集

千葉東金道路（二期）埋蔵文化財調査報告書 3
—山武町小川崎台遺跡—

平成11年3月31日発行

編 集 財団法人 千葉県文化財センター
発 行 日 本 道 路 公 団
東京第一建設局 千葉工事事務所
千葉市若葉区みづわ台二丁目34番1号
財団法人 千葉県文化財センター
四街道市鹿渡809番地2
印 刷 株式会社 太陽堂印刷所
千葉市中央区末広1-4-27
